静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第22集

北　垣　遺　跡

第二東名№113地点Ⅱ期

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森町－７

２０１２

中日本高速道路株式会社東京支社

静 岡 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

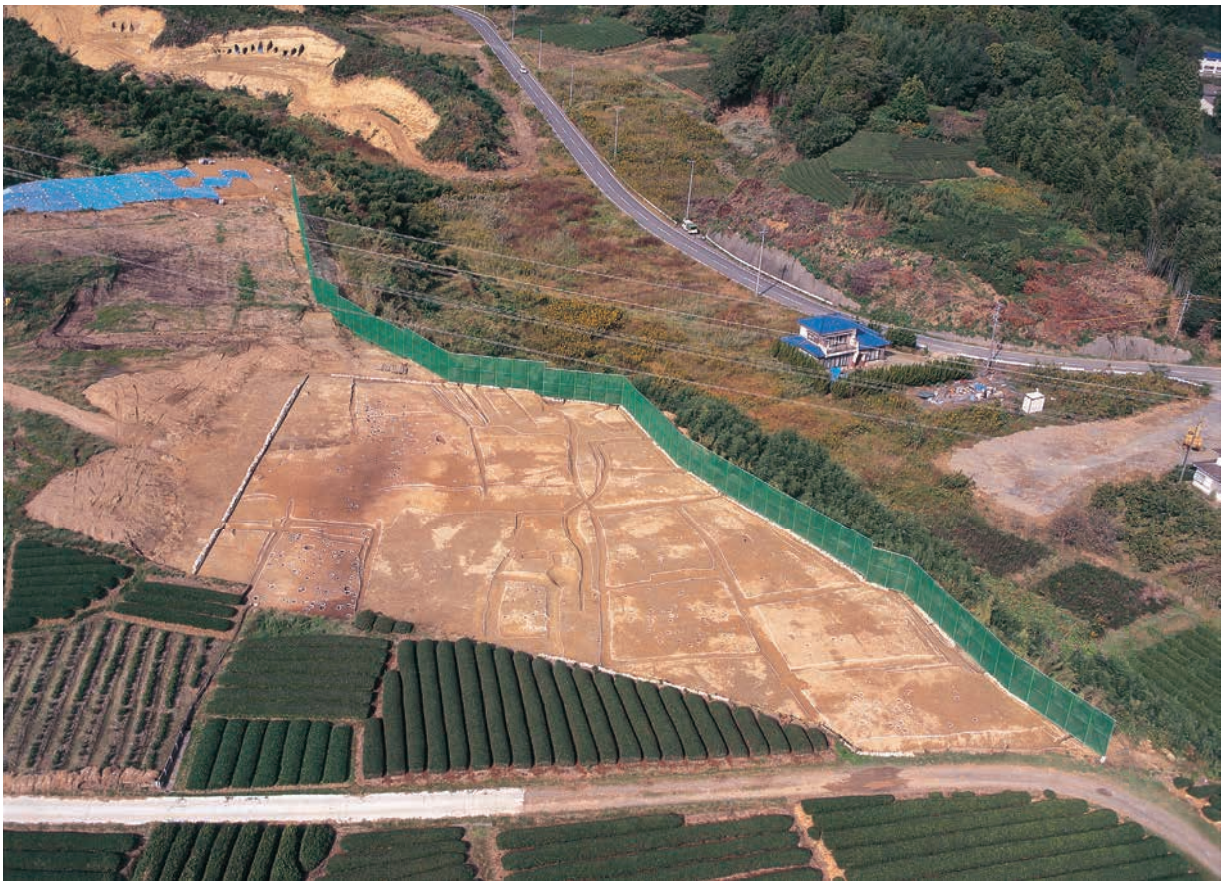
▲の交点が調査区の位置

▲ 北垣遺跡　遠景（南から）

▲ 北垣遺跡１区や文殊堂古墳群、天王ヶ谷横穴墓群など調査中

巻頭図版２

１.北垣遺跡１区　完掘状況（西から）



２.北垣遺跡１区　完掘状況（南から）

１.北垣遺跡２区　完掘状況（南東から）

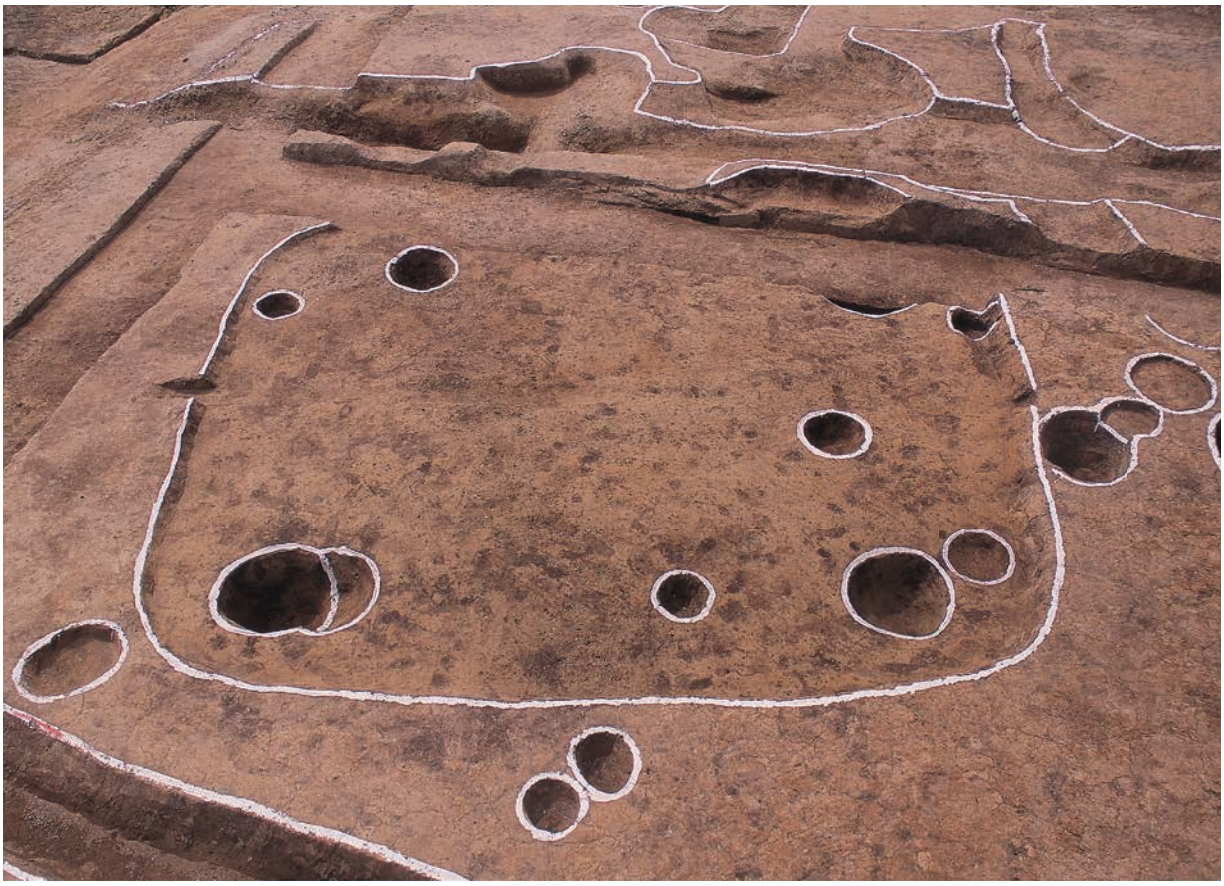
２.北垣遺跡２区　完掘状況（東から）

巻頭図版４

１.北垣遺跡３区東側　完掘状況（西から）

２.北垣遺跡３区西側　完掘状況（東から）

１.SH14　完掘状況（北から）



２.SH15　完掘状況（東から）

巻頭図版６

１.SB01　完掘状況（南から）

２.SB26　完掘状況（北から）

１.SB61・62　完掘状況（東から）

２.SE01　断ち割り状況（西から）

巻頭図版８

１.SK31　完掘状況（西から）

２.SK22　完掘状況（東から）

３.SK07　完掘状況（西から）

４.SH21　完掘状況（西から）

５.SK50　検出状況（北から）

６.SK09　完掘状況（南から）

７.SK06　検出状況（南から）

主な須恵器・土師器・縁細陶器（古墳時代～平安時代）

遺物番号は付図１参照

巻頭図版10

SK28出土遺物

遺物番号は付図２参照

主な灰釉陶器・山茶碗・渥美

遺物番号は付図１参照

巻頭図版12

1.主な貿易陶磁・肥前青磁　　遺物番号は付図1参照

2.主な中世陶器　　遺物番号は付図1参照

1.SK04出土遺物　遺物番号は付図１参照

2.SK09出土遺物　遺物番号は付図１参照

3.銅錘

4.銅碗

5.緑釉陶器（外面）

6.緑釉陶器（内面）

巻頭図版14

一石五輪塔・宝篋印塔

遺物番号は付図１参照

主な瀬戸美濃（登窯期，近世）

遺物番号は付図１参照

巻頭図版16

主な近世陶磁器

遺物番号は付図１参照

序

北垣遺跡は、静岡県周智郡森町円田に位置し、太田川が形成した平地部を見渡すことができる丘陵上に営まれた遺跡です。今回の調査によって縄文時代から近世まで続く遺跡であることがわかりました。

北垣遺跡では今から5000年ほど前の縄文時代中期に人間の活動が始まったことがわかります。遺物量が少ないことから、長期的に居住したのではないことが想定できますが、森町域に遺跡数が増加する時期と重なり、この時期に私たちの祖先の活動が活発化したことがうかがえます。

縄文時代後期以降遺跡にはしばらく人の活動の痕跡は確認できませんでしたが、弥生時代後期に再び集落が形成されます。遺物数が少ないことから小規模な集落であった可能性が高いですが、遺跡の北側の尾根上には多数の墓が築造されており、こうした墓を築いた集団であった可能性が高いことがわかりました。

古墳時代後期に再び集落が形成され、この集落は鎌倉時代まで継続して繁栄することがわかりました。竪穴建物や掘立柱建物の規則的な配置や、墨書土器や硯などの出土がほとんどないことから役所（官衙）的な遺跡ではなく、一般的な集落であった可能性が高いことがわかりました。また、出土した「托」と呼ばれる土器（仏器）からこの集落内には小規模な仏堂が存在していた可能性が高いことがわかりました。

一方で室町時代（14世紀）以降、急激に遺物の出土数が減少することから古墳時代から続いた集落が衰退した可能性が高いこともわかりました。この時期以降北垣遺跡周辺では主体的な遺跡が香勝寺遺跡を中心とする草ヶ谷地区に移った可能性があり、北垣遺跡の衰退は、鎌倉時代から室町時代にかけての地域の支配者（清原氏や中村氏から武藤氏へ）の変化と関連している可能性が高いことを想定しました。また、戦国時代には主に墓地であった可能性が高いことも判明しました。

江戸時代では、小規模な鍛冶を行う家がある集落であることがわかりました。また、残された絵図と今回確認した建物の配置などから判断して、北垣遺跡は10軒ぐらいで構成される集落であった可能性が高いこともわかりました。

今後は、これらの資料を基にした集落研究や、集落と墓域の関係、地域内での遺跡の消長についての研究が一層進展することを期待します。また本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年12月

静岡県埋蔵文化財センター所長
勝　田　順　也

例　　言

1　本書は、静岡県周智郡森町円田地区に所在する北垣遺跡の発掘調査報告書である。
　北垣遺跡　　静岡県周智郡森町円田字北垣710-１・715・717・843・883-１・885・884-１ほか

2　調査は第二東名高速自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、日本道路公団静岡建設局（当時）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課（調査当時）の指導のもと財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成22年度まで資料整理を実施した。平成23・24年度は、静岡県埋蔵文化財センターが業務を引き継いで資料整理を実施した。

3　北垣遺跡（第二東名No.113地点Ⅱ期）の確認調査・本調査及び資料整理（報告書印刷製本・収納作業を含む）の期間は以下のとおりである。

確認調査	平成10年８月17日～平成10年８月25日	調査対象面積約14,000㎡	
本調査	平成11年７月２日～平成12年３月28日	対象面積8,200㎡	実掘面積8,200㎡
	平成12年４月１日～平成13年３月29日	対象面積4,000㎡	実掘面積4,000㎡
資料整理	平成13年４月１日～平成19年３月31日		
	平成22年４月１日～平成24年９月30日		

4　調査体制は以下のとおりである。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（平成11～19・22年度）

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制については別表１に示した。

静岡県埋蔵文化財センター（平成23・24年度）

平成23年度（資料整理）

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　村松弘文　　総務係長　瀧みやこ
主幹兼調査第１係長　富樫孝志　　第１係主査　大谷宏治（資料整理担当）
調査第２係長　溝口彰啓　　第２係主査　大森信宏（保存処理担当）

平成24年度（資料整理）

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　調査課長　中鉢賢治
主幹兼事業係長　前田雅人　　総務係長　瀧みやこ
主幹兼調査第１係長　富樫孝志　　第１係主査　大谷宏治　常勤嘱託員　大竹弘高
調査第２係長　溝口彰啓　　第２係主査　大森信宏（保存処理担当）

5　本書の執筆は大谷宏治・大竹弘高・柴田亮平・片山一道・日鐵テクノリサーチ株式会社が行った。執筆分担は以下のとおりである。

大谷宏治　第１～３章、４章第２節３（２）以外、第５章第２節、第６章第３・４・６節、第６章第５節１・２、附編
柴田亮平　第４章第２節３（２）
大竹弘高　第６章第１・２節、第６章第５節３、第７章
片山一道　第５章第２節
日鐵テクノリサーチ株式会社　第５章第１節

6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　外部委託については下記のとおりである。
基準点測量及びグリッド杭設置業務　玉野総合コンサルタント株式会社

別表１　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制（掛川工区　No.113地点担当）

役職名			平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成22年度
所　　長			斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	石田　彰
副　所　長				山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫				
常務理事												清水　哲	石田　彰
事務局長												清水　哲	石田　彰
（事務局）次長												大場正夫 佐野五十三 及川　司 稲葉保幸	松村 亨
総務部（総務課）	常務理事兼総務部長		伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫		
	次　　長							鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎		松村　亨
	総務課長		杉木敏雄	杉木敏雄	杉木敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鎌田英巳	鎌田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	松村　亨
	担当	経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸			
		総務係長	田中雅代						芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	瀧みやこ
		会計係長	杉田　智								杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝
		会計担当		鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秀幸	鈴木秋博	鈴木秋博	中鉢京子	中鉢京子			中鉢京子
調査研究部（調査課）	部　　長		石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久	石川素久		
	次　　長			佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	佐野五十三 及川　司 稲葉保幸		
	次長心得		佐野五十三										
	担当課長		遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司	篠原修二	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	中鉢賢治
	事業係長												
	会計担当										稲葉保幸	稲葉保幸 中鉢京子	
	担当係長										富樫孝志	富樫孝志	富樫孝志
	工区主任		平野　徹	篠原修二	加藤理文	加藤理文							
	主任調査研究員		篠原修二		長尾一男	長尾一男	松井文孝						
	調査研究員（調査員）		竹原一人 長尾一男 富樫孝志 梶葉良久 大谷宏治 西田光男 丸杉俊一郎	竹原一人 長尾一男 西田光男 深田雅一 児玉卓 佐藤　淳	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	田村隆太郎	大谷宏治
	保存処理	室　　長				西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
		主任調査研究員	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二								
		調査研究員	青木　修									大森信宏	大森信宏
事業内容			確認調査	本調査		基礎整理		試料整理					

測量業務委託　株式会社フジヤマ

鉄滓分析業務委託　日鐵テクノリサーチ株式会社

石塔実測業務委託　東京航業株式会社

石器実測業務委託　株式会社アルカ

整理作業・保存処理業務委託　株式会社パソナ

8　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる（五十音順・敬称略）。

中日本高速道路株式会社東京支社　森町教育委員会　森町円田地区自治会

池谷信之　伊藤美鈴　岩名建太郎　片山一道　加藤理文　河合　修　北島恵介　小崎　晋　清水　尚　柴田　稔　篠原修二　澁谷昌彦　白澤　崇　鈴木一有　竹内直文　竹原一人　田村隆太郎　永井義博　長尾一男　原田雄紀　広川達麻　藤澤良祐　松井一明　松本一男　向坂鋼二　山本智子

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書で用いる国土座標は日本測地系（旧測地系）を使用している。特に記載のない場合は、日本測地系による位置である。

一方、世界測地系による位置を示す場合には、世界測地系であることを明記した。

2　本書で用いる竪穴建物と掘立柱建物の計測位置については第２章第１節７（本書８頁）のとおりとする。また、土器・陶磁器の名称についても第２章第１節８に示したとおりとする。

3　本書で使用した遺構の表記は以下のとおりである。

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ 土坑　　ＳＨ　竪穴建物

ＳＰ　小穴　　ＳＸ　用途不明遺構

Ｐ　竪穴建物の主柱穴・掘立柱建物を構成する柱穴

4　本書で使用した土器類の断面および塗布された釉薬の網掛け表示

須恵器（黒塗）　土師器・土師質土器・かわらけ（白抜き）　灰釉陶器・山茶碗・陶磁器（灰色）

5　参考文献については、第７章末にまとめて記入した。

6　巻頭図版の遺物集合写真に掲載した遺物番号と、図版の遺物集合写真に掲載した遺物番号については付図１・２に示す。

目　　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
挿図目次・挿表目次・写真目次・巻頭図版・図版目次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　調査の方法と経過
第１節　調査の方法 …… 3
1　確認調査の方法 …… 3
2　本調査の方法 …… 3
3　資料整理および報告書作成の方法 …… 3
4　グリッドの配置について …… 4
5　調査区について …… 6
6　遺構番号について …… 6
7　本書で用いる竪穴建物・掘立柱建物の名称と計測位置 …… 8
8　本書で用いる土器・陶磁器・石塔等の名称について …… 8
9　本書で用いる時期区分について …… 10
第２節　確認調査および本調査の経過 …… 12
1　確認調査の経過 …… 12
2　本調査の経過 …… 12
第３節　資料整理および報告書作成、保存処理の経過 …… 15
1　資料整理および報告書作成等の経過 …… 15

第３章　地理的環境・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 17
第２節　歴史的環境 …… 18

第４章　調査成果
第１節　北垣遺跡の概要 …… 22
1　北垣遺跡の位置 …… 22
2　北垣遺跡の調査歴 …… 22
3　北垣遺跡の調査の概要 …… 24
4　北垣遺跡の基本土層 …… 29
第２節　縄文時代 …… 30
1　縄文時代の概要 …… 30
2　遺構 …… 30
3　遺物 …… 30
第３節　弥生時代後期～古墳時代前期 …… 36
1　弥生時代後期～古墳時代前期の概要 …… 36
2　遺構 …… 36
3　遺構外出土の弥生土器 …… 40
第４節　古墳時代後期～平安時代 …… 43
1　古墳時代後期～平安時代の概要 …… 43
2　竪穴建物 …… 43

3　掘立柱建物 …… 50
4　土坑 …… 70
5　性格不明遺構 …… 78
6　遺構外出土遺物 …… 82
第5節　中世 …… 91
1　中世の概要 …… 91
2　中世墓 …… 91
3　土坑 …… 110
4　性格不明遺構 …… 113
5　遺構外出土遺物 …… 114
第6節　近世以降 …… 125
1　近世以降の概要 …… 125
2　掘立柱建物 …… 125
3　井戸 …… 166
4　近世墓 …… 167
5　土坑 …… 172
6　性格不明遺構 …… 181
7　溝状遺構 …… 183
8　小穴および遺構外出土遺物 …… 208
第7節　遺構観察表 …… 219
1　竪穴建物の概要 …… 219
2　掘立柱建物の概要 …… 219
3　土坑の概要 …… 220
4　井戸の概要 …… 222
5　溝状遺構の概要 …… 222
6　性格不明遺構の概要 …… 223
第8節　遺物観察表 …… 224
1　土器・陶磁器・瓦観察表 …… 224
2　石器観察表 …… 232
3　金属製品観察表 …… 232
4　鉄滓観察表 …… 233
5　銭貨観察表 …… 233
6　石塔観察表 …… 234

第5章　自然科学分析・人骨鑑定の成果

第1節　鉄滓の自然科学分析の成果 …… 235
1　はじめに …… 235
2　調査資料 …… 235
3　調査項目および試料調製法 …… 235
4　調査結果と考察 …… 236
5　まとめ …… 239
第2節　北垣遺跡出土人骨について …… 246
1　２区北側出土人骨について …… 246
2　表面採取人骨について① …… 246
3　表面採取人骨について② …… 246
4　SK22出土人骨について …… 246

第6章　北垣遺跡の評価

第1節　北垣遺跡の変遷 …… 247
第2節　弥生時代後期～古墳時代前期の北垣遺跡 …… 253
1　森町域の弥生時代集落と北垣遺跡 …… 253
2　北垣遺跡と周辺の墓域との関係について …… 255
第3節　古墳時代後期～終末期の北垣集落と墓域との関係 …… 258
1　北垣遺跡の集落と円田丘陵の古墳群・横穴墓群の関係について …… 258
第4節　古墳時代後期～平安時代の北垣集落 …… 262
1　古墳時代後期～奈良・平安時代の集落 …… 262
2　灰釉陶器の流通について …… 267
第5節　中世の北垣遺跡 …… 268
1　中世土器・陶磁器について …… 268
2　銅錘について …… 273

3　墓域 …… 275　　4　北垣遺跡と周辺の中世遺跡 …… 281
第 6 節　近世の北垣遺跡 …… 284
1　北垣遺跡の掘立柱建物・井戸・近世墓 …… 284
2　北垣遺跡と鍛冶 …… 286　　3　「粟倉村」絵図と北垣遺跡 …… 287

第 7 章　結語 …… 290
註 …… 293
図の出典 …… 293
参考文献 …… 294

附編　第二東名確認調査出土遺物
第 1 節　No.94地点 …… 297
1　No.94地点の概要 …… 297　　2　No.94地点出土遺物 …… 297
第 2 節　平島 I 遺跡 …… 298
1　平島 I 遺跡（No.97地点）の概要 …… 298　　2　平島 I 遺跡出土遺物 …… 298
第 3 節　No.107地点 …… 299
1　No.107地点の概要 …… 299　　2　No.107地点出土と想定される遺物 …… 299
第 4 節　No.110地点 …… 300
1　No.110地点の概要 …… 300　　2　No.110地点採集遺物 …… 300
第 5 節　鴨ノ前遺跡 …… 301
1　鴨ノ前遺跡（No.111地点）の概要 …… 301　　2　鴨ノ前遺跡出土遺物 …… 301

参考文献（附編）…… 301

図版（付図含む）

抄録
奥付

挿図目次

【凡例】

【第１章　調査に至る経緯】

第１図　北垣遺跡の位置① …… 1
第２図　北垣遺跡の位置② …… 2

【第２章　調査の方法と経過】

第３図　北垣遺跡の位置とグリッド配置図 …… 5
第４図　北垣遺跡の調査区配置図 …… 6
第５図　竪穴建物・掘立柱建物の各部位の名称と計測位置　8
第６図　石塔（五輪塔と宝篋印塔）と銅錘の名称 …… 8
第７図　土器・陶磁器の器種分類 …… 9
第８図　北垣遺跡　確認調査試掘溝配置図 …… 12

【第３章　地理的環境・歴史的環境】

第９図　森町の地質 …… 17
第10図　北垣遺跡周辺の遺跡分布図 …… 19

【第４章　調査成果】

第11図　北垣遺跡の調査年次と調査範囲 …… 23
第12図　北垣遺跡の既往調査出土遺物 …… 24
第13図　北垣遺跡全体図 …… 25
第14図　北垣遺跡詳細図① …… 26
第15図　北垣遺跡詳細図② …… 27
第16図　北垣遺跡詳細図③ …… 28
第17図　北垣遺跡基本土層図 …… 29
第18図　SH14　実測図 …… 31
第19図　縄文土器実測図 …… 33
第20図　石器実測図 …… 34
第21図　SH01　実測図 …… 37
第22図　SH04・05実測図 …… 38
第23図　SH15　実測図 …… 39
第24図　SK46　実測図 …… 40
第25図　弥生土器実測図 …… 41
第26図　SH02・03　実測図 …… 44
第27図　SH06・07・09およびSD07　実測図 …… 45
第28図　SH06・07ほか出土遺物実測図 …… 46
第29図　SH10～12　実測図 …… 49
第30図　SH13およびSX01　実測図 …… 51
第31図　SB01　実測図 …… 52
第32図　SB03・04　実測図 …… 53
第33図　古墳時代後期～
　　平安時代の掘立柱建物出土遺物実測図 …… 54
第34図　SB05・06　実測図 …… 55
第35図　SB11・14　実測図 …… 57
第36図　SB19　実測図 …… 58
第37図　SB24　実測図 …… 59
第38図　SB28・SB31・SD18　実測図 …… 61
第39図　SB34～36　実測図 …… 63
第40図　SB40・42　実測図 …… 64
第41図　SB44・45　実測図 …… 66
第42図　SB50　実測図 …… 67
第43図　SB54　実測図 …… 68
第44図　SB66・67　実測図 …… 69
第45図　SK26～28　実測図① …… 71
第46図　SK26～28　実測図② …… 72
第47図　土坑出土遺物実測図① …… 73
第48図　SK42　実測図 …… 74
第49図　SK51・54　実測図 …… 74
第50図　SK49　実測図 …… 75
第51図　SK60　実測図 …… 76
第52図　土坑出土遺物実測図② …… 77
第53図　SX02　実測図 …… 78
第54図　SX02出土遺物実測図 …… 78
第55図　SX07・08　実測図 …… 79
第56図　SX07出土遺物実測図 …… 81
第57図　SX08出土遺物実測図 …… 83
第58図　遺構外出土須恵器実測図① …… 84
第59図　遺構外出土須恵器実測図②および緑釉陶器実測図‥ 85
第60図　遺構外出土土師器実測図 …… 87
第61図　遺構外出土灰釉陶器実測図 …… 89
第62図　中世墓　分布図①（２区北側集中箇所）…… 92
第63図　中世墓　実測図① …… 93
第64図　中世墓出土遺物実測図① …… 95
第65図　中世墓出土遺物実測図② …… 96
第66図　中世墓　実測図② …… 97
第67図　中世墓　実測図③ …… 100
第68図　中世墓出土遺物実測図③ …… 101
第69図　中世墓　分布図②（２区北西側集中箇所）…… 103
第70図　中世墓　実測図④ …… 104
第71図　中世墓出土遺物実測図④ …… 105
第72図　中世墓　実測図⑤ …… 109
第73図　中世墓　実測図⑥ …… 109
第74図　中世土坑　実測図① …… 110
第75図　中世土坑出土遺物実測図 …… 111
第76図　中世土坑　実測図② …… 111
第77図　中世土坑　実測図③ …… 112
第78図　中世性格不明遺構　実測図 …… 113

第79図　中世性格不明遺構出土遺物実測図 …… 114
第80図　托参考例 …… 115
第81図　遺構外出土山茶碗実測図① …… 116
第82図　遺構外出土山茶碗実測図② …… 117
第83図　遺構外出土貿易陶磁・古瀬戸・瀬戸美濃
　　ほか実測図 …… 117
第84図　遺構外出土渥美実測図 …… 118
第85図　遺構外出土常滑実測図① …… 119
第86図　遺構外出土常滑実測図② …… 120
第87図　遺構外出土土師質甕・鍋実測図 …… 121
第88図　遺構外出土石塔実測図① …… 122
第89図　遺構外出土石塔実測図② …… 123
第90図　中世墓と石塔出土遺物の関係 …… 124
第91図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図① …… 125
第92図　近世の掘立柱建物出土遺物実測図① …… 126
第93図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図② …… 127
第94図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図③ …… 129
第95図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図④ …… 131
第96図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑤ …… 133
第97図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑥ …… 134
第98図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑦ …… 135
第99図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑧ …… 137
第100図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑨ …… 139
第101図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑩ …… 141
第102図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑪ …… 143
第103図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑫ …… 144
第104図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑬ …… 146
第105図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑭ …… 147
第106図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑮ …… 148
第107図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑯ …… 150
第108図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑰ …… 153
第109図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑱ …… 154
第110図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑲ …… 155
第111図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図⑳ …… 157
第112図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉑ …… 159
第113図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉒ …… 163
第114図　近世および時期不明の掘立柱建物　実測図㉓ …… 165
第115図　井戸　実測図 …… 166
第116図　井戸出土遺物実測図 …… 166
第117図　近世墓　実測図① …… 167
第118図　近世墓出土遺物実測図① …… 168
第119図　近世墓　実測図② …… 170
第120図　近世墓出土遺物②および土坑出土遺物実測図 …… 171
第121図　近世および時期不明の土坑　実測図① …… 173
第122図　近世および時期不明の土坑　実測図② …… 175
第123図　近世および時期不明の土坑　実測図③ …… 177
第124図　近世および時期不明の土坑　実測図④ …… 179
第125図　近世および時期不明の土坑　実測図⑤ …… 180
第126図　近世および時期不明の土坑　実測図⑥ …… 181
第127図　近世および時期不明の性格不明遺構　実測図 …… 182
第128図　溝状遺構　実測図① …… 184
第129図　溝状遺構出土遺物実測図① …… 185
第130図　溝状遺構　実測図② …… 186
第131図　溝状遺構　実測図③ …… 187
第132図　溝状遺構　実測図④ …… 189
第133図　溝状遺構　実測図⑤ …… 191
第134図　溝状遺構　実測図⑥ …… 192
第135図　溝状遺構　実測図⑦ …… 193
第136図　溝状遺構　実測図⑧ …… 195
第137図　溝状遺構　実測図⑨ …… 196
第138図　溝状遺構　実測図⑩ …… 197
第139図　溝状遺構　実測図⑪ …… 198
第140図　溝状遺構　実測図⑫ …… 199
第141図　溝状遺構出土遺物実測図② …… 201
第142図　溝状遺構　実測図⑬ …… 202
第143図　溝状遺構出土遺物実測図③ …… 203
第144図　溝状遺構　実測図⑭ …… 204
第145図　溝状遺構　実測図⑮ …… 206
第146図　小穴出土遺物実測図① …… 207
第147図　小穴出土遺物実測図② …… 209
第148図　近世以降の遺構外出土遺物実測図① …… 210
第149図　近世以降の遺構外出土遺物実測図② …… 211
第150図　近世以降の遺構外出土遺物実測図③ …… 212
第151図　近世以降の遺構外出土遺物実測図④ …… 214
第152図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑤ …… 215
第153図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑥ …… 217
第154図　近世以降の遺構外出土遺物実測図⑦ …… 218

【第５章　自然科学分析・人骨鑑定の成果】

第155図　試料No. 1（遺物番号736）鉄滓　鉱物相の
　　EPMA分析結果 …… 243
第156図　試料No. 2（遺物番号735）鉄滓　鉱物相の
　　EPMA分析結果 …… 243
第157図　試料No. 3（遺物番号737）鉄滓　鉱物相の
　　EPMA分析結果 …… 244
第158図　試料No. 4（遺物番号741）鉄滓　鉱物相の
　　EPMA分析結果 …… 244
第159図　試料No. 5（遺物番号739）鉄滓　鉱物相の
　　EPMA分析結果 …… 245

【第６章　北垣遺跡の評価】

第160図　縄文土器グリッド別分布図 …… 247
第161図　北垣遺跡の時期別遺構変遷図① …… 248
第162図　北垣遺跡の時期別遺構変遷図② …… 249

第163図　北垣遺跡の主な遺構と遺物の変遷 …… 251
第164図　北垣遺跡と森町域の竪穴建物跡の比較図 …… 254
第165図　円田丘陵の遺跡群と北垣遺跡の変遷図 …… 255
第166図　弥生時代後期中葉の円田丘陵 …… 256
第167図　北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群との関係 …… 258
第168図　北垣遺跡と円田丘陵の古墳群・横穴墓群の時期的変遷 …… 260
第169図　太田川中流域の古墳時代後期～平安時代の竪穴建物 …… 262
第170図　北垣遺跡の掘立柱建物（古墳時代後期～平安時代）…… 263
第171図　北垣遺跡の掘立柱建物の規模（古墳時代後期～平安時代）…… 263
第172図　太田川中流域における古墳時代後期～平安時代の主な遺跡の位置 …… 265
第173図　太田川中流域における古墳時代後期～平安時代の主な遺跡の盛衰 …… 266
第174図　北垣遺跡出土中世土器・陶磁器の時期別出土数 …… 270
第175図　中屋敷遺跡出土中世土器・陶磁器の時期別出土数 …… 271
第176図　北垣遺跡周辺の中世の遺跡分布図 …… 271
第177図　北垣遺跡周辺の遺跡の盛衰（古墳時代終末期～中世）…… 271
第178図　静岡県における托出土遺跡分布図 …… 272
第179図　静岡県内出土の托 …… 273
第180図　静岡県内出土銅錘編年図 …… 274
第181図　主な土壙墓と副葬品 …… 276
第182図　北垣遺跡周辺の中世墓と副葬品 …… 277
第183図　土壙墓の配置 …… 278
第184図　掛川市峯遺跡出土の石塔 …… 280
第185図　円田丘陵で出土した石塔 …… 281
第186図　中世における北垣遺跡周辺の変遷図 …… 283
第187図　北垣遺跡の掘立柱建物（中世～近世）…… 284
第188図　北垣遺跡の掘立柱建物（時期不明）…… 285
第189図　北垣遺跡の掘立柱建物の規模（中世～近世および時期不明）…… 285
第190図　北垣遺跡における鉄滓出土位置 …… 286
第191図　北垣遺跡グリッド別鉄滓出土数 …… 286
第192図　北垣遺跡出土鉄滓の重量別出土数 …… 287
第193図　「粟倉村溜池絵図」と北垣遺跡 …… 288
第194図　「粟倉村絵図」と北垣遺跡 …… 289

【附編　第二東名確認調査出土遺物】

第195図　No.94地点の位置 …… 297
第196図　No.94地点出土遺物実測図 …… 297
第197図　平島Ⅰ遺跡の位置 …… 298
第198図　平島Ⅰ遺跡出土遺物実測図 …… 298
第199図　No.107地点の位置 …… 299
第200図　No.107地点出土遺物実測図 …… 299
第201図　No.110地点の位置 …… 300
第202図　No.110地点出土遺物実測図 …… 300
第203図　鴨ノ前遺跡の位置 …… 301
第204図　鴨ノ前遺跡出土遺物実測図 …… 301

【図版】

付図１　北垣遺跡出土遺物図版集合写真掲載遺物番号①
付図２　北垣遺跡出土遺物図版集合写真掲載遺物番号②

挿表目次

【例言】

別表１　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の調査体制（掛川工区，No.113地点担当）…… iii

【第２章　調査の方法と経過】

第１表　北垣遺跡　グリッド番号新旧対応表 …… 4
第２表　北垣遺跡　遺構番号新旧対応表 …… 7
第３表　本書で使用する土器・陶磁器編年のおおよその時期対応表①（古墳～奈良時代）…… 10
第４表　本書で使用する土器・陶磁器編年のおおよその時期対応表②（平安～江戸時代）…… 11

【第３章　地理的環境・歴史的環境】

第５表　北垣遺跡周辺の遺跡地名表 …… 20

【第４章　調査の成果】

第６表　北垣遺跡の調査歴と主な遺構・遺物 …… 22
第７表　北垣遺跡の調査成果の概要 …… 24
第８表　北垣遺跡検出竪穴建物一覧表 …… 219
第９表　北垣遺跡検出掘立柱建物一覧表 …… 219
第10表　北垣遺跡検出土坑一覧表 …… 220
第11表　北垣遺跡検出井戸一覧表 …… 222
第12表　北垣遺跡検出溝状遺構一覧表 …… 222
第13表　北垣遺跡検出性格不明遺構一覧表 …… 223
第14表　北垣遺跡出土土器・陶磁器・瓦観察表 …… 224
第15表　北垣遺跡出土石器観察表 …… 232
第16表　北垣遺跡出土金属製品観察表 …… 232
第17表　北垣遺跡出土鉄滓観察表 …… 233
第18表　北垣遺跡出土銭貨観察表 …… 233
第19表　北垣遺跡出土石塔観察表 …… 234

【第５章　自然科学分析・人骨鑑定の成果】

第20表　調査試料と資料項目 …… 235
第21表　鉱物相の成分分析結果と硬さ …… 236
第22表　鉄滓の平均化学組成①② …… 237
第23表　同時代の出土鉄滓の化学組成例 …… 239

【第６章　北垣遺跡の評価】

第24表　北垣遺跡出土中世土器・陶器の器種組成表・分類一覧表 …… 269
第25表　北垣遺跡出土中世瀬戸美濃系施釉陶器の構成 …… 270
第26表　静岡県内の托出土遺跡一覧表 …… 272
第27表　静岡県内出土の銅錘一覧表 …… 273
第28表　土壙墓の分類 …… 280

【附編　第二東名確認調査出土遺物】

第29表　No.94地点出土遺物観察表 …… 297
第30表　平島Ｉ遺跡出土遺物観察表 …… 298
第31表　No.107地点出土遺物観察表 …… 299
第32表　No110地点出土遺物観察表 …… 300
第33表　鴨ノ前遺跡出土遺物観察表 …… 301

写真目次

写真１　重機による表土除去作業 …… 13
写真２　発掘作業員による遺構検出作業 …… 13
写真３　発掘作業員による遺構掘削作業 …… 13
写真４　調査補助員による遺構実測作業 …… 13
写真５　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影作業 …… 13
写真６　土器接合作業 …… 15
写真７　遺物実測作業 …… 15
写真８　遺物版組作業 …… 15
写真９　遺物トレース作業 …… 15
写真10　遺構図版組作業 …… 16
写真11　遺構図トレース作業 …… 16
写真12　遺物写真撮影作業 …… 16
写真13　報告書編集作業 …… 16
写真14　試料No.１（遺物番号736）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 …… 240
写真15　試料No.２（遺物番号735）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 …… 240
写真16　試料No.３（遺物番号737）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 …… 241
写真17　試料No.５（遺物番号739）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 …… 241
写真18　試料No.４（遺物番号741）鉄滓の外観と断面マクロ・ミクロ組織 …… 242

巻頭図版・図版目次

【巻頭図版】

巻頭図版１　北垣遺跡　遠景（南から）
巻頭図版２　１.北垣遺跡１区　完掘状況（西から）
　２.北垣遺跡１区　完掘状況（南から）
巻頭図版３　１.北垣遺跡２区　完掘状況（南東から）
　２.北垣遺跡２区　完掘状況（東から）
巻頭図版４　１.北垣遺跡３区東側　完掘状況（西から）
　２.北垣遺跡３区西側　完掘状況（東から）
巻頭図版５　１.SH14　完掘状況（北から）
　２.SH15　完掘状況（東から）
巻頭図版６　１.SB01　完掘状況（南東から）
　２.SB26　完掘状況（北から）
巻頭図版７　１.SB61・62　完掘状況（東から）
　２.SE01　断ち割り状況（西から）
巻頭図版８　１.SK31　完掘状況（西から）
　２.SK22　完掘状況（東から）
　３.SK07　完掘状況（西から）
　４.SK21　完掘状況（西から）
　５.SK50　検出状況（北から）
　６.SK09　完掘状況（南から）
　７.SK06　検出状況（南から）
巻頭図版９　主な須恵器・土師器・緑釉陶器
　（古墳時代～平安時代）
巻頭図版10　SK28出土遺物
巻頭図版11　主な灰釉陶器・山茶碗・渥美
巻頭図版12　１.主な貿易陶磁・肥前青磁
　２.主な中世陶器
巻頭図版13　１.SK04出土遺物
　２.SK09出土遺物
　３.銅錘
　４.銅碗
　５.緑釉陶器（外面）
　６.緑釉陶器（内面）
巻頭図版14　一石五輪塔・宝篋印塔
巻頭図版15　主な瀬戸美濃（登窯期，近世）
巻頭図版16　主な近世陶磁器

【図版】

図版１　１.北垣遺跡　遠景（南から）
　２.北垣遺跡　調査区全景（南東から）
図版２　１.北垣遺跡１区　完掘状況全景（南から）
　２.北垣遺跡１区　完掘状況全景（西から）
図版３　１.北垣遺跡２区　完掘状況全景（南東から）
　２.北垣遺跡３区　完掘状況全景（南東から）
図版４　１.北垣遺跡３区東側　完掘状況全景（南から）
　２.北垣遺跡３区西側　完掘状況全景（東から）
図版５　北垣遺跡　空中写真（上空から）
図版６　１.SH14　完掘状況（北から）
　２.SH01　完掘状況（北から）
図版７　１.SH05　完掘状況（西から）
　２.SH14　炉（北から）
　３.SH01　炉（北から）
　４.SH05　炉（西から）
　５.SH15　炉（東から）
図版８　１.SH04　完掘状況（南から）
　２.SH15　完掘状況（東から）
図版９　１.SH06　完掘状況（南から）
　２.SH13　完掘状況（北から）
図版10　１.SH12　完掘状況（南西から）
　２.SH06　竈（南から）
　３.SH12　遺物出土状況（南から）
　４.SH13　竈（南から）
　５.SH13　貯蔵穴遺物出土状況　（南から）
図版11　１.SH07　完掘状況（南から）
　２.SH11　完掘状況（北東から）
図版12　１.SH03　完掘状況（北から）
　２.SB01　完掘状況（南東から）
図版13　１.SB03　完掘状況（南東から）
　２.SB66　完掘状況（南から）
図版14　１.SB03-P３　遺物出土状況（北から）
　２.SK49　遺物出土状況（北から）
　３.SK60　遺物出土状況（南から）
　４.SK60　完掘状況（南から）
　５.SK28　完掘状況（北東から）
　６.SK28　遺物出土状況①（北から）
　７.SK28　遺物出土状況②（北から）
図版15　１.SK26・28・29　完掘状況（南東から）
　２.SX07・08　完掘状況（北から）
図版16　１.SK50　検出状況（北から）
　２.SK06　検出状況（南から）
　３.SK06　完掘状況（西から）
　４.SK07　検出状況（西から）
　５.SK09　検出状況（南から）
　６.SK02　完掘状況（南東から）
図版17　１.SK03　完掘状況（西から）
　２.SK03　遺物出土状況（北西から）
　３.SK04　完掘状況（南から）
　４.SK04　遺物出土状況（南から）

5.SK05　完掘状況（東から）
6.SK08　完掘状況（西から）
7.SK10　遺物出土状況（南東から）
8.SK12　完掘状況（東から）
図版18　1.SK11　完掘状況（南東から）
2.SK11　遺物出土状況（南から）
3.SK13　完掘状況（南東から）
4.SK14　完掘状況（南東から）
5.SK18　完掘状況（南から）
6.SK21　検出状況（北から）
7.SK21　完掘状況（西から）
図版19　1.SK22　完掘状況（東から）
2.SK23　完掘状況（北西から）
3.SK24　完掘状況（北から）
4.SK25　完掘状況（南から）
5.SK30　遺物出土状況（南東から）
6.SK31　完掘状況（西から）
7.SK31　遺物出土状況（南西から）
8.SK32　完掘状況（南東から）
図版20　1．2区中央掘立柱建物群　完掘状況
（SB14ほか，北西から）
2.SB14周辺掘立柱建物　完掘状況（北から）
図版21　1.SB26　完掘状況（北から）
2.SB39　完掘状況（北から）
図版22　1.SB41　完掘状況（東から）
2.SB43　完掘状況（西から）
図版23　1.SB49　完掘状況（南東から）
2.SB54周辺掘立柱建物群　完掘状況（南西から）
図版24　1.SB53　完掘状況（東から）
2.SB57～60　完掘状況（北から）
図版25　1.SB57～60　完掘状況（北から）
2.SB61・62周辺掘立柱建物群　完掘状況（西から）
図版26　1.SB61・62　完掘状況（東から）
2.SB64　完掘状況（西から）
図版27　1.SB69　完掘状況（北から）
2.SB49-P4　遺物出土状況（東から）
3.SB62-P11　完掘状況（南から）
4.SK72　検出状況（東から）
5.SK70　遺物出土状況（南から）
図版28　1.SK70　完掘状況（北から）
2.近世墓（SK37）　完掘状況（東から）
3.SD10～12　完掘状況（南西から）
4.SD13・14　完掘状況（西から）
図版29　1.SD31　完掘状況（西から）
2.SD36　完掘状況（北から）
3.SD41　完掘状況（西から）
4.SK19　完掘状況（北から）
図版30　1.SE01　完掘状況（北から）
2.SE01　断ち割り状況（西から）
図版31　1.SP92　完掘状況（北西から）
2.SP363　完掘状況（西から）
3.SP398　完掘状況（南から）
4.SP402　完掘状況（南東から）
5.SP635　完掘状況（南から）
6.SP702　完掘状況（東から）
図版32　縄文土器①
図版33　1.縄文土器②
2.石器①
3.石器②
図版34　弥生土器（古式土師器）
図版35　1.SH06出土　土師器
2.SH07出土　土師器
3.SH11出土　灰釉陶器
4.SH13出土　土師器
5.SH12-P1出土　土師器
6.SH12-P4出土　土師器
7.SH12出土　土師器
図版36　1.SB03-P3・P4出土　須恵器
2.SB34-P3出土　土師器
3.SB36-P8出土　須恵器
4.SB45出土　須恵器
5.SK51出土　須恵器
6.SK26出土　須恵器・灰釉陶器
7.SK49出土　土師器①
8.SK49出土　土師器②
図版37　SK28出土　須恵器・土師器（集合）
図版38　1.SK28出土　須恵器・土師器
2.SK60出土　灰釉陶器
図版39　1.SK60出土　遺物（集合）
2.SX08出土　須恵器
図版40　SX08出土　須恵器・土師器
図版41　SX07出土　須恵器・土師器
図版42　1.SX07出土　須恵器
2.遺構外出土　土師器①
3.遺構外出土　須恵器①
4.溝・遺構外出土　緑釉陶器
図版43　遺構外出土　須恵器②
図版44　1.遺構外出土　土師器②
2.遺構外出土　土師器③
図版45　遺構外出土　灰釉陶器①
図版46　1.遺構外出土　灰釉陶器②
2.SK04出土　遺物①
図版47　1.SK04出土　遺物（集合）
2.SK04出土　遺物②

3.SK09出土　遺物（集合）
4.SK09出土　遺物①
図版48　1.SK09出土　遺物②
2.SK12出土　かわらけ
3.SK43出土　遺物
4.SK70・71出土　遺物
5.SK29出土　遺物
図版49　中世墓出土　銅銭①
図版50　中世墓出土　銅銭②
図版51　中世墓出土　銅銭③
図版52　1.SX06出土　遺物
2.遺構外出土　山茶碗①
図版53　遺構外出土　山茶碗②
図版54　1.遺構外出土　青磁・白磁
2.遺構外出土　瀬戸美濃（古瀬戸）
3.遺構外出土　瀬戸美濃（大窯）
4.遺構外出土　初山
図版55　1.遺構外出土　青磁
2.遺構外出土　渥美①・知多
3.遺構外出土　渥美②
4.遺構外出土　常滑①
図版56　遺構外出土　渥美③
図版57　遺構外出土　常滑②
図版58　1.遺構外および溝出土　土師質鍋
2.SB26-P12出土　須恵器
3.SB07-P 8 出土　土師器
4.SB26-P 4 出土　土師器
5.SB37-P 3 出土　土師器
6.SB38-P 2 出土　須恵器
7.SB43-P 4 出土　かわらけ
図版59　遺構外出土　宝篋印塔・一石五輪塔（集合）
図版60　遺構外出土　宝篋印塔
図版61　遺構外出土　一石五輪塔①
図版62　遺構外出土　一石五輪塔②
図版63　1.近世墓SK37出土　銅銭
2.SE01出土　かわらけ
3.SK19出土　灰釉陶器
4.SK55出土　山茶碗
5.SD13出土　陶器
図版64　1.SD15出土　遺物
2.SD34出土　遺物
3.SD35出土　遺物
4.SD42出土　遺物
5.SP387出土　山茶碗
図版65　1.SD44出土　遺物
2.小穴出土　遺物
3.遺構外出土　かわらけ
図版66　遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）①
図版67　遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）②
図版68　遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）③
図版69　遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）④
図版70　1.遺構外出土　瀬戸美濃（登窯）⑤
2.遺構外出土　志戸呂（近世）①
図版71　1.遺構外出土　古志戸呂・志戸呂（近世）②
2.遺構外出土　肥前①
図版72　1.遺構外出土　肥前②
2.遺構外出土　陶器
図版73　遺構外出土　瓦
図版74　遺構外出土　銅製品・銭貨・煙管
図版75　1.遺構外出土　鉄製品①
2.溝・遺構外出土　鉄製品②
3.掘立柱建物・遺構外出土　鉄滓
図版76　1.第二東名No.94地点出土遺物
2.平島Ⅰ遺跡出土遺物
3.第二東名No.107地点出土遺物
4.第二東名No.110地点出土遺物
5.鴨ノ前遺跡出土遺物

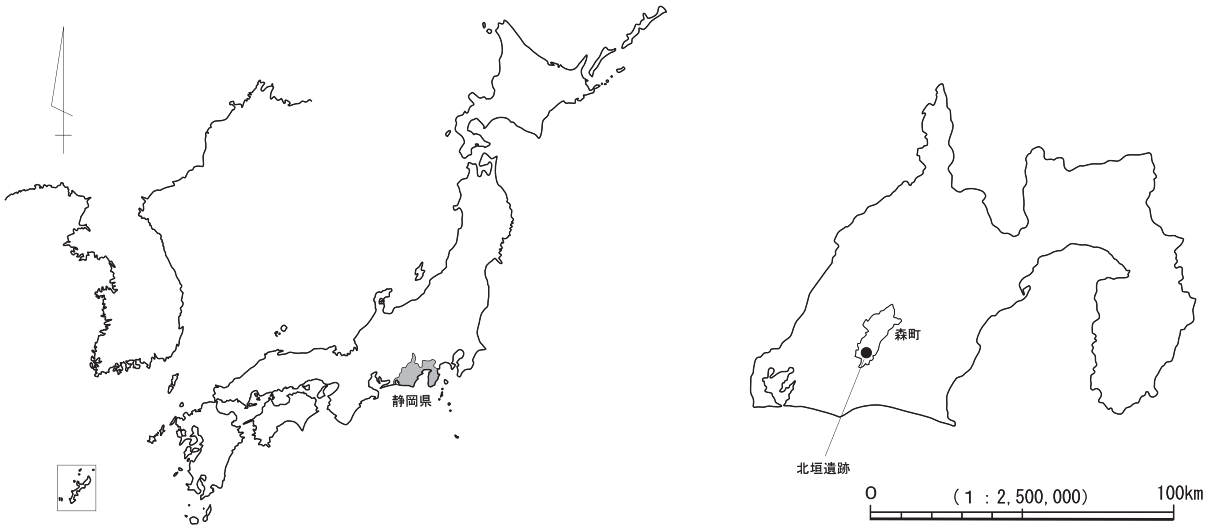
第１章　調査に至る経緯

東名高速道路は昭和44年の全線開通以来、日本の大動脈として大きな役割を果たしている。しかし、経済発展に伴って交通量が激増し混雑が激しくなり、高速性・定時性を伴う交通需要に対応することが困難になると予想されるようになった。この問題に対する抜本対策として第二東名高速道路が計画された。このうち静岡県内においては、東西に貫く形で延長約170kmの路線が策定された。

この計画に伴い、静岡県教育委員会は日本道路公団から埋蔵文化財分布調査の手続きの依頼、埋蔵文化財包蔵地の所在の有無についての照会を受けた。埋蔵文化財の所在の有無についての回答は、関係市町村教育委員会へ照会した結果を基に協議し、静岡県教育委員会が取りまとめて行った。調査対象となる地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地を中心に県内130箇所以上に及ぶこととなった。

その後、日本道路公団に第二東名建設の施行命令が出されたことに伴って、日本道路公団、静岡県土木部、静岡県教育委員会が埋蔵文化財調査の進め方等について協議した。また、発掘調査の実施については、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下，財団法人を除いて記す）へ委託することが確認された。平成８年度には埋蔵文化財調査の実施が具体化し、日本道路公団静岡建設局と静岡県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した。さらに、静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等を定めた協定書を締結した。この年度から、静岡県における第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が始まっている。なお、平成17年度の日本道路公団の民営化に伴って、日本道路公団静岡建設局による埋蔵文化財発掘調査の委託は、中日本高速道路株式会社東京支社に引き継がれている。

上記したように森町域においても調査が開始された。森町域には、延長約７kmの路線とパーキングエリア、インターチェンジ取付道路が計画されており、総数21地点に対し確認調査を実施した。調査の結果、21地点で16遺跡（同一箇所の古墳群と遺跡は一つとしてカウント）の存在が認められた。この結果にもとづいて、各遺跡の発掘調査を順次実施することとなった。確認調査と現地調査、整理作業、報告書刊行作業は、静岡県教育委員会の指導のもと静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成22年度まで行い、平成23・24年度は静岡県埋蔵文化財センターが実施した。なお、上記の経緯の詳細や確認調査の内容に



第１図　北垣遺跡の位置①

国土地理院発刊1：200,000の地形図「豊橋」「伊良湖岬」を複写して加筆

第２図　北垣遺跡の位置②

ついては、既に報告している（静岡埋文研2004b）。

森町域のパーキングエリア建設予定地で周知の埋蔵文化財包蔵地と第二東名路線の計画範囲を対照すると、文殊堂古墳群・遺跡、林古墳群・遺跡、フケ遺跡、宇藤蓮台遺跡、宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群、中屋敷遺跡、北垣遺跡、弥勒平遺跡で遺構が確認され、本調査を実施した。このうち北垣遺跡を除く他の遺跡については既に報告済（静岡県埋文センター2012, 静岡埋文研2006a・2008・2011）であり、北垣遺跡が森町域の最終報告書である。

参考文献

参考文献は第７章末（294～296頁）に一括して記載している。

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法

１　確認調査の方法

確認調査は、対象地点内に試掘溝（試掘坑）を設定し、基本的に重機で表土等除去（以下，表土除去）を行い、重機の進入が困難な箇所については、人力にて表土除去を行う。表土除去終了後、人力にて遺構・遺物の確認を行い、試掘溝配置図や遺構簡略図、土層図の作成、写真撮影（35mmカラーネガフィルム）を行い、埋め戻す方法を採用した。

２　本調査の方法

本調査（現地調査）については、『発掘調査の手びき』（文化財保護委1966）などを参考に実施した。

表土等除去・遺構掘削　表土等除去は重機で実施し、それが終了した段階で包含層掘削、遺構の検出を行った。検出できた遺構から順次遺物や炭化物などに留意しながら十字あるいは一文字に土層帯を残して土層を観察しながら掘削した。

遺構実測　遺構実測のうち、３・４級基準点、座標杭の設置は、委託作業として実施し、国土座標（日本測地系）に準拠して設置した。個々の遺構の実測については、調査担当者などがトータルステーション（以下，ＴＳとする）等を用いて手実測で設置した。

地形測量は、測量業者に委託してラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。遺構実測については調査担当者の指示のもと、調査補助員等が実測した。

写真撮影　遺構の写真撮影は、中型カメラ（６×７判白黒フィルム）を主体に撮影し、補助的に小型カメラ（35mmポジフィルム・カラーネガフィルム）を用いて撮影した。

空中写真撮影については、中型カメラ（６×4.5判ポジフィルム・白黒フィルム）を用いてラジコンヘリコプターにて実施した。

３　資料整理および報告書作成の方法

基礎整理～報告書刊行までの作業は、静岡県教育委員会通知『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した。

基礎整理　土器・石塔については取上げ後、台帳を作成し、遺物を傷つけないように慎重に洗浄・注記し、整理作業に備えた。金属製品については、現地にて劣化遅延処置を実施後、取り上げを行い、台帳作成し、保存処理に備えた。

記録類は現地で実測した図面の整合性を合わせるとともに、台帳を作成した。

整理作業・報告書刊行作業　出土品の分類、仕分け、接合、復原を行うとともに、それが終了した遺物から順次実測を行い、版組を行った後でトレースした。また、実測が終了したものから写真撮影を行った。金属製品は、保存処理（クリーニング）を行った後で実測、版組、トレースを行うとともに、写真撮影を実施した。写真撮影は、個別写真については中型カメラ（６×７判ポジフィルム・白黒ネガフィルム）、集合写真については大型カメラ（４×５判ポジフィルム・白黒ネガフィルム）を用いて撮影した。

記録類は図面整理を行い、時期別、遺構の種別ごとに図面・図版の版組を行い、遺構図のトレース（デ

ジタル・アナログ併用）を行った。

これらが終了した段階で、文章の執筆、編集、校正を行い、本書を刊行した。

保存処理　出土した金属製品について、現地調査終了後平成22年度に静岡県埋蔵文化財調査研究所保存処理室においてクリーニングを進め、平成23・24年度に静岡県埋蔵文化財センターにおいて脱塩処理などの保存処理を行った。

４　グリッドの配置について（第３・４図，第１表）

森町域の遺跡の本調査では、それぞれの遺跡で国土座標（日本測地系）に基づき、独自にグリッド番号（Ａ１から）を設定したが、資料整理にあたり第二東名高速道路森パーキングエリア予定地内の遺跡については、報告書を纏めて作成することとなり、同じグリッド番号が同一報告書の中で複数出てくることになった。このため資料整理および読者の混乱を避け、また遺跡の位置を把握しやすくするため、森パーキングエリア予定地で本調査した遺跡についてグリッド番号を設定し直し、統一した標記に変更した。

また、グリッド杭の設置は東西方向にアルファベット、南北方向に数字で番号を付加し、その交点をグリッド杭の名称とした。調査区のグリッドの呼び方については、各グリッドの南西隅のグリッド杭を基準としている。例えば、南西にＡ１のグリッド杭がある場合は、そのグリッド名はＡ１グリッドとなる。

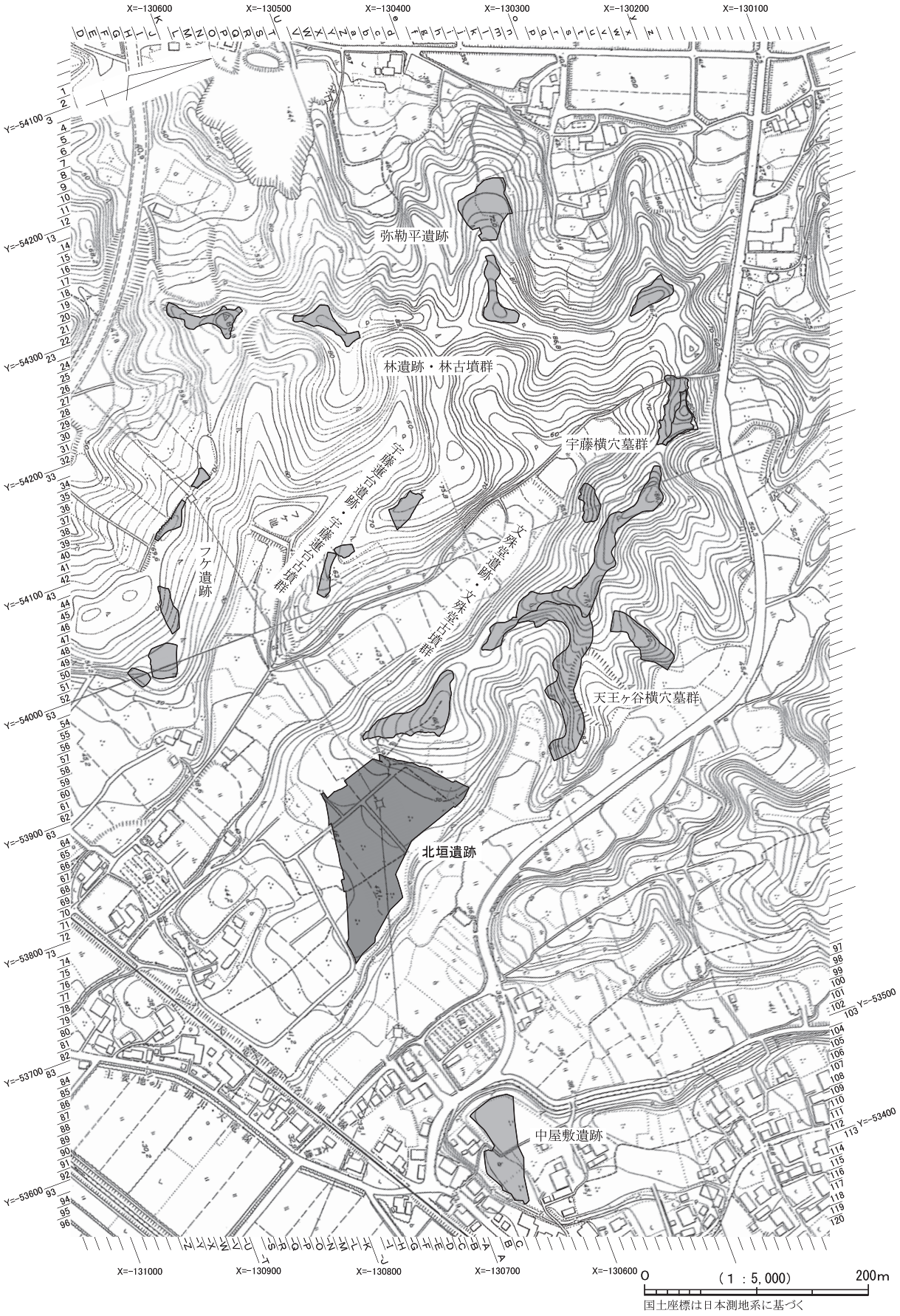
なお、グリッド杭は世界測地系適用前に本調査を実施したため、日本測地系（旧測地系）の国土座標に基づき設定していることを明記しておきたい。

したがって、以後の挿図の表記も、基本的には日本測地系で作成している。世界測地系の表記の場合

第１表　北垣遺跡　グリッド番号新旧対応表

旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
S17	M83	S16	L83	S15	K83	S14	J83	S13	I83	S12	H83	S11	G83	S10	F83
R17	M82	R16	L82	R15	K82	R14	J82	R13	I82	R12	H82	R11	G82	R10	F82
Q17	M81	Q16	L81	Q15	K81	Q14	J81	Q13	I81	Q12	H81	Q11	G81	Q10	F81
P17	M80	P16	L80	P15	K80	P14	J80	P13	I80	P12	H80	P11	G80	P10	F80
O17	M79	O16	L79	O15	K79	O14	J79	O13	I79	O12	H79	O11	G79	O10	F79
N17	M78	N16	L78	N15	K78	N14	J78	N13	I78	N12	H78	N11	G78	N10	F78
M17	M77	M16	L77	M15	K77	M14	J77	M13	I77	M12	H77	M11	G77	M10	F77
L17	M76	L16	L76	L15	K76	L14	J76	L13	I76	L12	H76	L11	G76	L10	F76
K17	M75	K16	L75	K15	K75	K14	J75	K13	I75	K12	H75	K11	G75	K10	F75
J17	M74	J16	L74	J15	K74	J14	J74	J13	I74	J12	H74	J11	G74	J10	F74
I17	M73	I16	L73	I15	K73	I14	J73	I13	I73	I12	H73	I11	G73	I10	F73
H17	M72	H16	L72	H15	K72	H14	J72	H13	I72	H12	H72	H11	G72	H10	F72
G17	M71	G16	L71	G15	K71	G14	J71	G13	I71	G12	H71	G11	G71	G10	F71
F17	M70	F16	L70	F15	K70	F14	J70	F13	I70	F12	H70	F11	G70	F10	F70
E17	M69	E16	L69	E15	K69	E14	J69	E13	I69	E12	H69	E11	G69	E10	F69
D17	M68	D16	L68	D15	K68	D14	J68	D13	I68	D12	H68	D11	G68	D10	F68
C17	M67	C16	L67	C15	K67	C14	J67	C13	I67	C12	H67	C11	G67	C10	F67

旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新	旧	新
S9	E83	S8	D83	S7	C83	S6	B83	S5	A83	S4	−A83	S3	−B83	S2	−C83
R9	E82	R8	D82	R7	C82	R6	B82	R5	A82	R4	−A82	R3	−B82	R2	−C82
Q9	E81	Q8	D81	Q7	C81	Q6	B81	Q5	A81	Q4	−A81	Q3	−B81	Q2	−C81
P9	E80	P8	D80	P7	C80	P6	B80	P5	A80	P4	−A80	P3	−B80	P2	−C80
O9	E79	O8	D79	O7	C79	O6	B79	O5	A79	O4	−A79	O3	−B79	O2	−C79
N9	E78	N8	D78	N7	C78	N6	B78	N5	A78	N4	−A78	N3	−B78	N2	−C78
M9	E77	M8	D77	M7	C77	M6	B77	M5	A77	M4	−A77	M3	−B77	M2	−C77
L9	E76	L8	D76	L7	C76	L6	B76	L5	A76	L4	−A76	L3	−B76	L2	−C76
K9	E75	K8	D75	K7	C75	K6	B75	K5	A75	K4	−A75	K3	−B75	K2	−C75
J9	E74	J8	D74	J7	C74	J6	B74	J5	A74	J4	−A74	J3	−B74	J2	−C74
I9	E73	I8	D73	I7	C73	I6	B73	I5	A73	I4	−A73	I3	−B73	I2	−C73
H9	E72	H8	D72	H7	C72	H6	B72	H5	A72	H4	−A72	H3	−B72	H2	−C72
G9	E71	G8	D71	G7	C71	G6	B71	G5	A71	G4	−A71	G3	−B71	G2	−C71
F9	E70	F8	D70	F7	C70	F6	B70	F5	A70	F4	−A70	F3	−B70	F2	−C70
E9	E69	E8	D69	E7	C69	E6	B69	E5	A69	E4	−A69	E3	−B69	E2	−C69
D9	E68	D8	D68	D7	C68	D6	B68	D5	A68	D4	−A68	D3	−B68	D2	−C68
C9	E67	C8	D67	C7	C67	C6	B67	C5	A67	C4	−A67	C3	−B67	C2	−C67

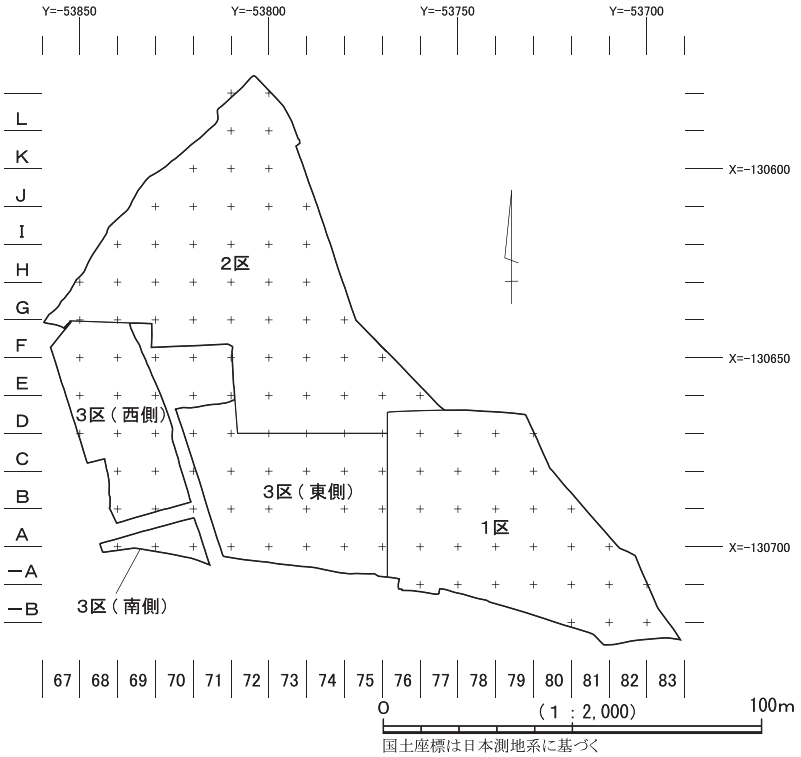


第３図　北垣遺跡の位置とグリッド配置図

にはその旨本文中・挿図に明記する。

5　調査区について（第４図）

北垣遺跡の調査対象面積は12,200㎡に及ぶことから、調査対象範囲を１～３区に区分した。さらに調査にあたっては、３区を東側、西側、南側に区分して調査を実施した。この調査区区分については、第４図に示した。



第４図　北垣遺跡の調査区配置図

6　遺構番号について（第２表）

遺構番号について、発掘調査段階では遺構の種別に関係なく、１番から順番に付加したが、報告書を作成するにあたり、遺構の種別ごとに番号を振り直した。

遺構番号の調査段階の番号（旧遺構番号）と新しく振り直した番号（新遺構番号）の対応表は第２表に示した。

なお、小穴のうち資料整理段階で竪穴建物や掘立柱建物を構成する柱穴にならなかったものは、番号を変更せず、そのまま現地調査段階で付加した遺構番号のままとした。また、新遺構名に「※」印を記入したものは、調査当初遺構と考えて遺構番号を付加したが調査が進行するにつれて遺構ではないことが判明したものであり、新遺構名は付加していない。さらに、調査段階では単独の掘立柱建物と考えていたもの（例えばSH305）が資料整理段階で認定した掘立柱建物と完全に一致しないと認定したものについては掘立柱建物の一部（例えばSB57-Pと表現）と表記した。

また、現地調査段階と資料整理段階で、遺構の略号の変更があったため、その対応も示す。

竪穴建物　（旧）ＳＢ　→　（本書）ＳＨ
掘立柱建物　（旧）ＳＨ　→　（本書）ＳＢ
土坑　（旧）ＳＦ　→　（本書）ＳＫ

第２表　北垣遺跡　遺構番号新旧対応表

旧遺構	新遺構名
SD01	SD47
SP04	SB70-P3
SP05	SB70-P4
SP06	SB70-P2
SP08	SB69-P5
SP11	SB69-P6
SP14	SB68-P4
SF20	SK69
SP21	SB66-P2
SP24	SB64-P5
SP25	SB64-P6
SP26	SB64-P7
SP27	SB64-P8
SP29	SB64-P4
SP30	SB65-P10
SP31	SB64-P3
SP33	SB64-P2
SP35	SB63-P4
SP36	SB63-P5
SP39	SB63-P6
SP43	SB60-P16
SP44	SB60-P15
SP45	SB59-P10
SP51	SB59-P11
SP52	SB60-P17
SP59	SB59-P12
SP65	SB60-P14
SP66	SB59-P9
SP67	SB58-P4
SP71	SB59-P8
SP72	SB60-P13
SP74	SB59-P7
SP75	SB58-P5
SP78	SB58-P3
SP79	SB57-P5
SP81	SB57-P6
SP82	SB57-P7
SP83	SB58-P6
SP86	SB57-P8
SP89	SB58-P2
SP90	SB57-P4
SP93	SB57-P11
SP96	SB57-P3
SP102	SB57-P10
SP104	SB57-P2
SP110	SB57-P9
SF114	SK64
SP115	SB57-P1
SD119 東側溝	攪乱
SD119	SD43
SD121	攪乱
SD122 西北溝	SD45
SD122	SD44
SD123	攪乱
SP124	SB70-P5
SP125	SB70-P1
SP126	SB69-P3
SD133	攪乱
SD134	攪乱
SD135	攪乱
SD136	攪乱
SD137	攪乱
SD138	※
SD139	※
SF140	攪乱
SD141	攪乱
SD142	攪乱
SP148	SB65-P13
SP152	SB65-P2
SP164	SB65-P14
SP166	SB65-P11
SP170	SB65-P15
SP179	SB65-P16
SP180	SB65-P9
SD185	SD36

旧遺構	新遺構名
SP193	SB63-P3
SP197	SB63-P2
SP199	SB63-P1
SP208	SB69-P4
SP209	SB69-P2
SP212	SB69-P1
SP221	SB68-P3
SP232	SB68-P2
SP234	SB68-P1
SF241	攪乱
SP242	SB67-P3
SP245	SB67-P4
SP247	SB66-P4
SP248	SB66-P5
SP249	SB66-P6
SD252	攪乱
SD253	攪乱
SP259	SB66-P1
SP260	SB66-P3
SP264	SB67-P1
SP268	SB67-P2
SD273	SK68
SD275	SK67
SD289	SD33
SD298	SD34
SD299	SD31
SD300	攪乱
SH301	SB69
SH302	SB66
SH303	SB64
SH304	SB63
SH305	SB57-P
SH306	※
SH307	SB62
SH308	SB61-P
SH309	※
SP316	SB62-P11
SP318	SB61-P4
SP321	SB62-P12
SP323	SB62-P13
SP324	SB61-P5
SP325	SB62-P10
SP327	SB61-P3
SP329	SB62-P15
SP330	SB61-P6
SP331	SB62-P14
SP332	SB62-P9
SP333	SB61-P2
SP336	SB62-P8
SP338	SB61-P1
SP339	SB62-P7
SP340	SB64-P1
SD340	攪乱
SD341	攪乱
SD342	SD41
SF343	SK65
SD344	SD42
SF345	SK66
SD346	SD35
SD347	SD32
SP352	SB50-P7
SP354	SB51-P7
SP360	SB53-P4
SP361	SB51-P4
SP362	SB50-P4
SP365	SB50-P9
SP367	SB49-P4
SP371	SB53-P2
SP372	SB52-P6
SP376	SB54-P2
SD379	攪乱
SP386	SB55-P8
SP389	SB53-P1
SP390	SB49-P3
SD391	攪乱
SP393	SB52-P1
SD401	攪乱

旧遺構	新遺構名
SD405	攪乱
SF409	SK63
SP415	SB48-P6
SD420	SD46
SD421	攪乱
SD422	攪乱
SD423	攪乱
SH424	SB49
SH425	※
SH426	SB53/ SB50-P
SD427	SD37
SD428	SD38
SD429	SD39
SD430	SD40
SF451	SK02
SF452	SK03
SF453	SK04
SF454	SK06・ SB01-P3
SF455	SK07
SF456	SK09
SB457	SH04
SB458	SH05
SB459	SH06
SB460	SK70
SX461	※
SF462	SK05
SF463	SK12
SF464	SK11
SF465	SK10
SF466	SB01-P2
SF467	SK08
SD468	SD07
SF469	SK17
SD470	SD01
SF471	SK15
SD472	SD02
SD473	SD03
SF474	SK14
SF475	SK37
SB476	SH07
SF477	SK18
SF478	SK30
SX479	SK13
SD481	SD04
SF481	SK23
SF482	SK24
SF483	SK21
SF484	SK32
SF485	SK22
SF486	SK19
SD487	攪乱
SD488	SD08
SF489	SK31
SF490	SK16
SF491	SK16
SF492	SK20
SX497	SP497
SB498	SH09
SF500	SK33
SF501	SK25
SP502	SB03-P4
SP503	SB03-P3
SF505	SK35
SB506	SH12
SD507	SD05
SD508	SD06
SF509	SK34
SB510	SH10
SB511	SH11
SF512	SK36
SX514	SK27
SX515	SK26
SX516	SK28
SP517	SB03-P2
SP518	SB03-P1

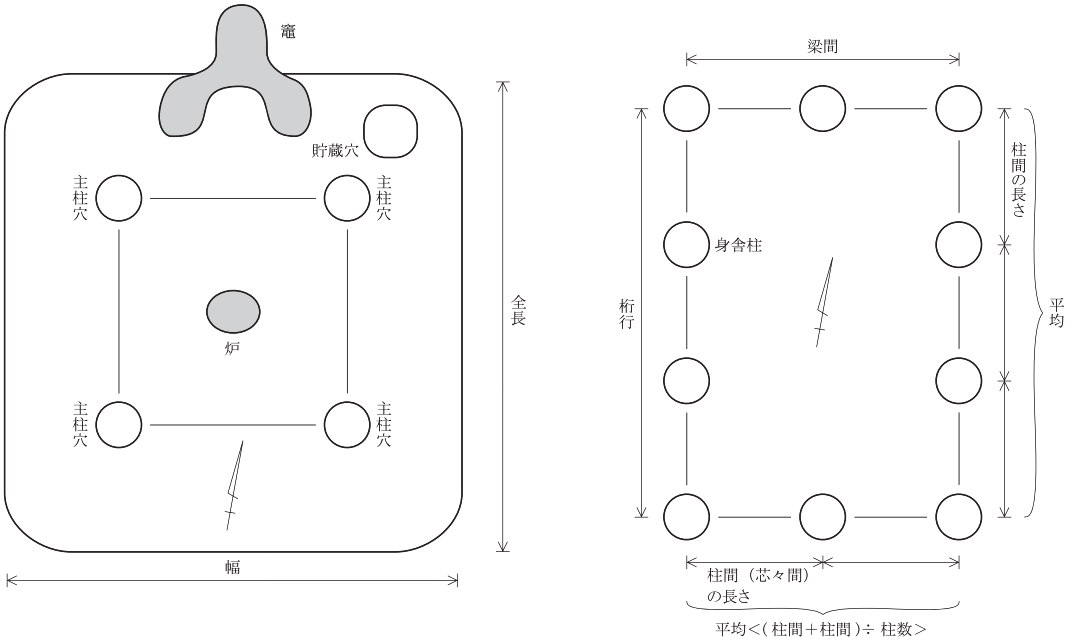
旧遺構	新遺構名
SX519	SK29
SF520	SK01
SX521	SK49
SD522	SD16
SX523	SX02
SX524	SK51・ SB28-P4
SP528	SB31-P2
SD529	攪乱
SX530	※
SP531	SB26-P3
SP534	SB26-P4
SP536	SB25-P4
SX538	SK50
SP539	SB26-P5
SP541	SB24-P3
SP544	SB25-P1
SP549	SB26-P1
SP550	SB10-P15
SP556	SB34-P3
SF558	SK62
SD559	攪乱
SP560	SP560/ SP697
SP561	SB30-P6/ SP698
SP562	SB30-P7/ SP699
SP563	SP563/ SP694
SP564	SB30-P8/ SP695
SD566	SD17・ SB30-P1
SP568	SB30-P3/ SP693
SF569	SK52
SP570	SB26-P8
SP575	SB26-P12
SD576	攪乱
SD578	攪乱
SP579	SB26-P11
SP581	SB26-P7
SP582	SB26-P9
SP583	SB26-P6
SP585	SB28-P3
SP587	SB24-P5
SP593	SB14-P3
SP595	SB07-P8
SP596	SB06-P11
SP597	SB10-P10
SP602	SB10-P12
SP605	SB10-P11
SP606	SB08-P13
SP609	SB06-P7
SD610	攪乱
SD612	※
SD613	攪乱
SF614	SK47
SD615	SD18
SF616	SK48
SP618	SB32-P3
SF620	SK53
SD621	攪乱
SX622	SX01
SF626	SK46
SP628	SB11-P2
SP630	SB15-P5
SL631	SH01-炉
SF632	SK45
SD633	SD15
SF634	SK44
SD636	SD14
SP637	SH01-P4
SL640	SH13-炉
SP644	SH01-P2
SP645	SH01内

旧遺構	新遺構名
SD647	攪乱
SD649	攪乱
SD651	攪乱
SB652	SH01
SB653	SH13
SD654	攪乱
SD655	攪乱
SD656	攪乱
SD659	SD11
SD660	攪乱
SD661	SD09
SP662	SH13内
SX663	SH13 貯蔵穴
SP664	SH13-P1
SP665	SH13-P2
SX666	SK42
SF667	SK43
SH668	SB26
SL669	SK72
SD670	SD13
SF671	SK38
SF672	SK39
SF673	SK40
SB674	SH03
SF675	SK37
SP678	SB19-P14
SF679	SK41
SP680	SB04-P2
SD682	SD12
SD683	SD10
SD684	攪乱
SP685	SB04-P5
SP686	SB04-P4
SP687	SH13貯蔵穴
SD690	攪乱
SH691	SB01
SP693	SB16-P7
SL693	SH05-炉
SP694	SB24-P1
SL694	SH06-炉
SL695	※
SP697	SB26-P10
SP699	SB26-P13
SP567	SB31-P3 /SP567
702	SP702
SH703	SB03
SP721	SB44-P1
SP722	SB45-P7
SP723	SB44-P2
SP724	SB45-P9
SP725	SB45-P8
SX727	SK60
SF728	SK55
SF729	SK54
SE730	SE01
SD731	SD25
SD732	SD29
SD733	SD27
SX734	SK59
SX735	SK58
SX736	SX05
SD737	SD26
SP738	SB44-P5・ SB45-P10/ SP738
SX739	攪乱
SD742	攪乱
SX743	SX06
SP744	SB43-P2/ SP744
SX745	SX07
SP745	SB43-P11
SX746	SX08
SP747	SB43-P4 /SP747

旧遺構	新遺構名
SP748	SB43-P10 /SP748
SP749	SB43-P9/ SB47-P7
SP750	SB47-P6 /SP750
SD751	SD30
SP751	SB47-P4
SP753	SB43-P12
SX753	SK57
SP754	SB43-P5
SD754	攪乱
SD755	攪乱
SD761	攪乱
SD762	攪乱
SD762	SD28
SP763	SB36-P5
SP765	SB36-P4
SP767	SB35-P7
SP768	SB35-P12
SP769	SB36-P9
SP771	SB36-P8
SP784	SB39-P8
SP786	SB37-P4 ・SB39-P9
SD787	攪乱
SP788	SB41-P1
SP790	SB41-P5/ SP790
SF791	SK61
SP792	SB41-P2
SD792	攪乱
SP793	SB41-P3
SP794	SB41-P4
SD799	攪乱
SP800	SB37-P3
SP801	SB37-P1
SP802	SB38-P3
SP804	SB39-P10
SP805	SB39-P7
SP807	SB38-P2
SP810	SB38-P1
SP811	SB40-P4
SP812	SB42-P1
SX814	攪乱
SB815	SH14
SD816	攪乱
SH818	SB41
SD820	SD21
SB822	SH15
SD825	SD24
SD826	SD20
SP827	SB29-P8
SP828	SB29-P9
SP837	SB29-P2
SP839	SB29-P1
SD844	攪乱
SX845	SK56・ SB22-P1
SP846	SB23-P3
SD847	SD22
SP848	SB29-P6
SP849	SB29-P4
SD851	攪乱
SX853	SX04
SX854	SX03
SD854	SD19
SD855	SD23
SH856	SB39
SH857	SB44
SH858	SB45
SH859	SB43
SH860	SB36
SH861	SB29
SH862	SB23
SB460 内土抗	SK71

7　本書で用いる竪穴建物・掘立柱建物の名称と計測位置（第５図）

報告にあたり本書で用いる竪穴建物および掘立柱建物の部位名称と計測位置については、第５図のとおりとする。



表記　全長 × 幅　3m×2m
　　長軸 × 短軸（主柱穴間　1.5m×1.5m）
長軸の向き　N-10°-W
※竈と炉は同時に存在しないが、図の表現上同一図で示した。

竪穴建物の名称と計測位置

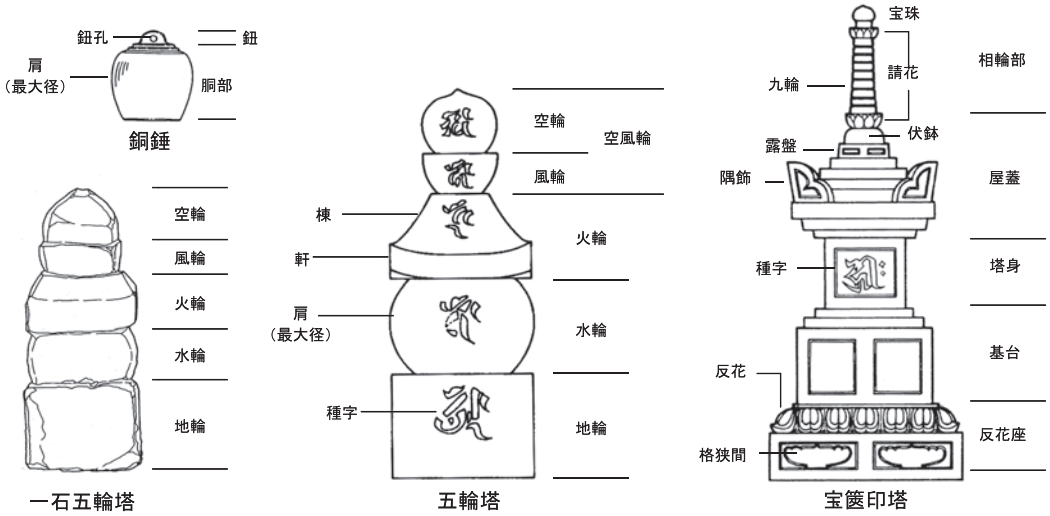
表記　梁間 × 桁行
　　2間 ×3間
棟の方向　N-10°-W

掘立柱建物の名称と計測位置

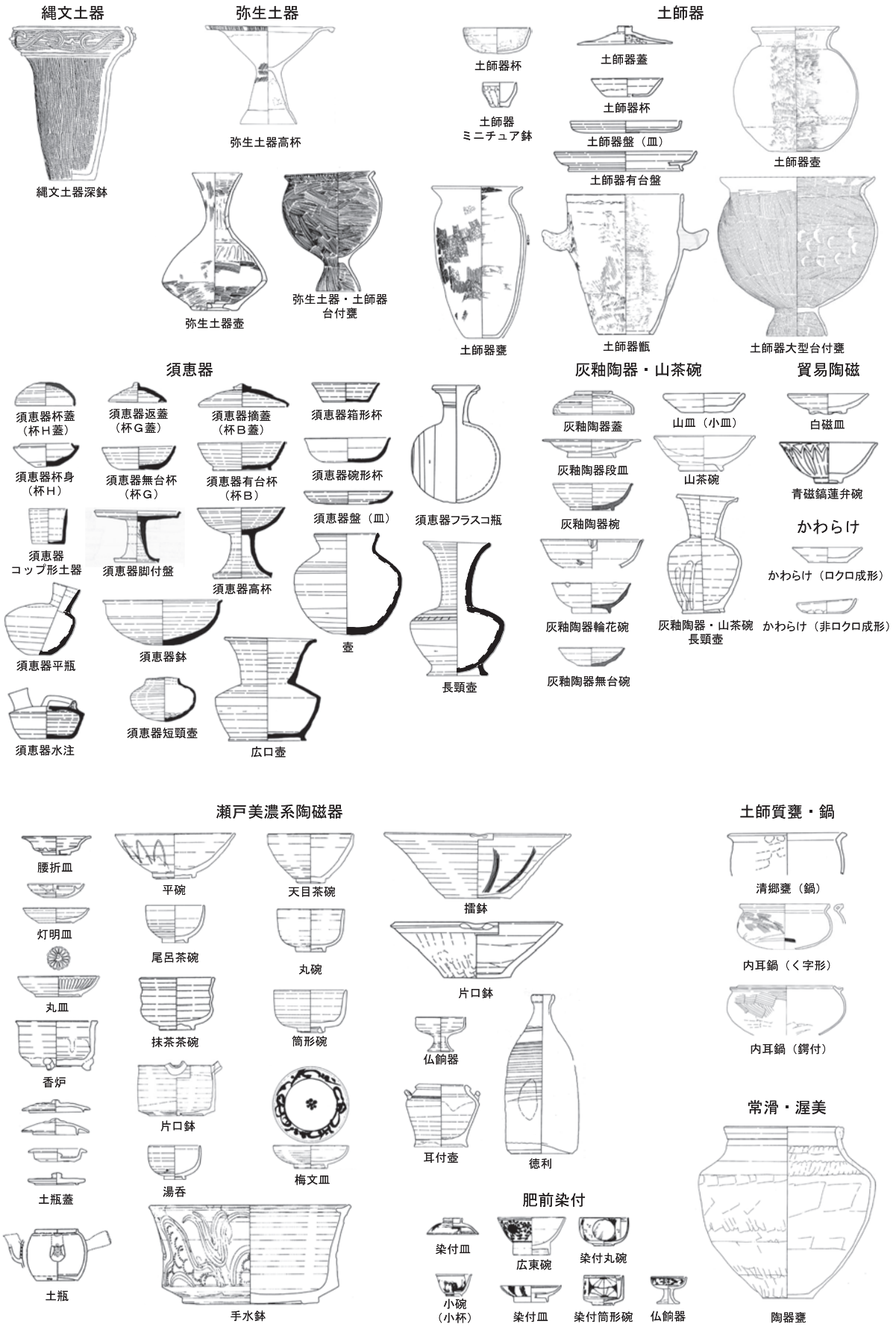
第５図　竪穴建物・掘立柱建物の各部位の名称と計測位置

8　本書で用いる土器・陶磁器・石塔等の名称について（第６・７図）

本書で用いる土器・陶磁器の器種（第７図）と石塔等の名称（第６図）については第６・７図に示す。



第６図　石塔（五輪塔と宝篋印塔）と銅鍾の名称



第７図　土器・陶磁器の器種分類

9　本書で用いる時期区分について（第３・４表）

報告するにあたり本書で用いる土器・陶磁器の編年についての、おおよその対応関係を示す。

須恵器　遠江編年（鈴木敏1998・2001・2004）、陶邑編年（田辺1981）、飛鳥編年（菱田2011）
灰釉陶器　猿投編年（齊藤1989，山下1995）、宮口編年・清ヶ谷編年（松井1989）
山茶碗・渥美　渥美湖西（松井1989）　渥美・常滑（中野1995・2005，赤羽・中野1994）
瀬戸美濃　古瀬戸（藤澤1991・1995b・2005）・大窯（藤澤1995a・2002・2005）・登窯（藤澤1987）

第３表　本書で使用する土器・陶磁器編年のおおよその対応表②（古墳～奈良時代）

世紀	西暦	須恵器			緑釉・灰釉陶器			清郷甕
		遠江編年	陶邑編年	飛鳥・平城編年	猿投	宮口	清ヶ谷	
		鈴木2004	田辺1981			松井1989	松井1989	
6世紀		Ⅰ期末	TK47					
		Ⅱ期	MT15					
	550	Ⅲ期前葉	TK10					
		Ⅲ期中葉	TK43					
	600	Ⅲ期後葉	TK209					
7世紀		Ⅲ期末葉	TK217	飛鳥Ⅰ				
	650	Ⅳ期前半		飛鳥Ⅱ				
		Ⅳ期後半	TK46	飛鳥Ⅲ				
		Ⅳ期末	TK48	飛鳥Ⅳ				
	700			平城Ⅰ				
8世紀		Ⅴ期前半	MT21	平城Ⅱ				
				平城Ⅲ				
	750	Ⅴ期後半		平城Ⅲ				
				平城Ⅳ・Ⅴ				
		Ⅴ期末		平城Ⅵ				
	800	Ⅵ期		平城Ⅶ	黒笹14窯式			
9世紀	850				黒笹90窯式	宮口Ⅱ期	清ヶ谷Ⅱ期	
	900				折戸53窯式	宮口Ⅲ-1期	清ヶ谷Ⅲ-1期	
10世紀						宮口Ⅲ-2期	清ヶ谷Ⅲ-2期	
	950				東山72号窯式	宮口Ⅳ-1期	清ヶ谷Ⅳ-1期	
	1000							
11世紀					百大寺窯式	宮口Ⅳ-2・3期	清ヶ谷Ⅳ-2期	
	1050				（尾張1）		清ヶ谷Ⅳ-3期	
					（尾張2）		清ヶ谷Ⅳ-4期	
	1100				（尾張3）	山茶碗Ⅰ	山茶碗Ⅰ	
12世紀								

第４表　本書で使用する土器・陶磁器編年のおおよその対応表②（平安～江戸時代）

世紀	西暦	灰釉・山茶碗		山茶碗		国産施釉陶器			
		宮口	清ヶ谷	渥美湖西	瀬戸	知多・常滑	瀬戸美濃	初山	志戸呂
10世紀	950	宮口Ⅲ-1期	清ヶ谷Ⅲ-1期						
		宮口Ⅲ-2期	清ヶ谷Ⅲ-2期						
	1000	宮口Ⅳ-1期	清ヶ谷Ⅳ-1期						
11世紀	1050	宮口Ⅳ-2期	清ヶ谷Ⅳ-2期						
			清ヶ谷Ⅳ-3期						
			清ヶ谷Ⅳ-4期						
12世紀	1100	山茶碗 宮口Ⅰ期	山茶碗 清ヶ谷Ⅰ期	Ⅰ-1期	瀬戸3型式	1a型式			
				Ⅰ-2期	瀬戸4型式	1b型式			
	1150	山茶碗 宮口Ⅱ期	山茶碗 清ヶ谷Ⅱ期	Ⅱ期	瀬戸5型式	2型式			
						3型式			
13世紀	1200			Ⅲ-1期	瀬戸6型式	4型式	古瀬戸前Ⅰ期		
						5型式	古瀬戸前Ⅱ期		
	1250			Ⅲ-2期	瀬戸7型式	6a型式	古瀬戸前Ⅲ期		
						6b型式	古瀬戸前Ⅳ期		
					瀬戸8型式		古瀬戸中Ⅰ期		
14世紀	1300					7型式	古瀬戸中Ⅱ期		
							古瀬戸中Ⅲ期		
	1350				瀬戸9型式	8型式	古瀬戸中Ⅳ期		
							古瀬戸後Ⅰ期		
	1400						古瀬戸後Ⅱ期		
15世紀						9型式	古瀬戸後Ⅲ期		
							古瀬戸後Ⅳ期古		古志戸呂（後Ⅳ期）
	1450					10型式	古瀬戸後Ⅳ期新		
	1500						大窯1期		
16世紀						11型式	大窯2期		
	1550					12型式	大窯3期	初山	志戸呂（大窯期）
	1600						大窯4期		
17世紀						13型式	登窯1小期		志戸呂（近世）
							登窯2小期		
	1650					14型式	登窯3小期		
							登窯4小期		
	1700					16型式	登窯5小期		
18世紀							登窯6小期		
	1750					17型式	登窯7小期		
							登窯8小期		
	1800					18型式	登窯9小期		
19世紀							登窯10小期		
	1850					19型式	登窯11小期		

※登窯については、この表では若干時期幅が異なるが、各小期がほぼ四半期で時期区分されている（藤澤1987）。

第２節　確認調査および本調査の経過

１　確認調査の経過

確認調査は、113地点その２として実施した。対象地内にはＡ１～Ｌ２までの25箇所の試掘溝を設定した。

確認調査は、平成10年８月17日から開始した。８月17日に対象箇所までの進入路の作成を行い、試掘溝を設定した。８月18日～８月25日まで25箇所の試掘溝の調査を実施し、試掘溝配置図や土層図の実測、写真撮影を行った後、写真撮影が終了した試掘溝から埋め戻しを行い、８月25日に確認調査を終了した。

第８図　北垣遺跡　確認調査試掘溝配置図

２　本調査の経過

本調査は、平成11・12年度に実施した（写真１～５）。調査対象地を３区に区分し、平成11年度に１・２区および３区の一部、平成12年度に３区の調査を実施した。

１区　１区の本調査は、平成11年７月２日から重機による表土等除去を開始し、７月16日までに発掘

写真１　重機による表土除去作業

写真２　発掘作業員による遺構検出作業

写真３　発掘作業員による遺構掘削作業

写真４　調査補助員による遺構実測作業

作業員が作業できる範囲の表土等除去を終え、７月19日から遺構検出を開始し、８月２日に検出した遺構から土層や出土遺物に留意しながら遺構掘削を進めた。９月17・21日に、玉野総合コンサルタント株式会社に委託して、遺構図作成のために基準点測量及び座標杭（グリッド杭）の設置を行った。掘削した遺構から写真撮影、遺物出土状況の実測を行い、遺物を取り上げた。遺構掘削が終了した後、空中写真撮影および空中写真測量について、株式会社フジヤマに委託し、10月29日に実施し、10月29日～11月５日まで写真測量の補測を実施し、１区の本調査を終了した。

２区　２区の本調査は、１区の表土等除去が終了した８月９日から表土除去を開始し、８月７日まで実施した。１区の遺構掘削作業を実施している間調査を休止し、１区の遺構調査がほぼ終了した10月22日に調査を再開した。10月22日から遺構検出を開始し、検出した遺構から掘削を開始し、写真撮影、実測図の作図等を行った。それらが終了後、遺物の取上げ、補足実測を行い、２区北側の遺構調査が終了した平成12年２月９・10日に株式会社フジヤマに委託し、空中写真撮影・空中写真測量を実施した。同じく２区南側の調査が終了した３月８・11日に空中写真撮影・空中写真測量を行い、３月13日まで補測を実施した。２区北側・南側ともに空中写真測量後に竪穴建物の貼床や炉の解体調査などを実施し、３月14日に２区の本調査を終了した。

写真５　ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影作業

３区　３区の本調査は、南側、西側、東側の３

箇所に区分して調査を実施した。

３区南側の本調査は、２区の本調査と並行して、平成11年11月８・９日に一部について実施した。２区の本調査が終了に近づいた平成12年３月８日から表土等除去を再開し、断続的に３月27日まで実施した。それに並行して３区南側の発掘作業員による包含層掘削、遺構検出を実施し、検出した遺構から３月15日まで土層や遺物に留意しながら発掘を進めた。３月15日に３区南側部分の調査を終了し、３月28日に機材等の片づけを行い、平成11年度分の調査を終了し、一旦調査を休止した。

平成12年度に入り、調査を再開した。平成12年４月６日から３区西側部分の包含層掘削、遺構検出を実施し、検出した遺構から遺構の精査を開始した。３区西側の遺構の調査が終了した４月25日に株式会社フジヤマに空中写真測量を委託し、翌26日に実施した。その後、５月８日まで井戸や遺構の補足実測等を行い、井戸の解体など一部の調査を残して３区西側の調査を終了した。

３区東側の本調査は、平成12年12月11日に開始した。12月11日から重機による表土等除去を行い、20日に終了した。遺構の検出は平成13年１月19日から開始し、検出した遺構から精査を行った。空中写真撮影については株式会社フジヤマに委託して３月８日に実施するとともに、１～３区の空中写真の合成作業を同じく株式会社フジヤマに委託して実施した。全体図の作成は株式会社フジヤマに委託し、測量機器（トータルステーション）を用いて、３月８日～12日まで実施した。全体図の作成後、竪穴建物の床面解体や井戸の解体調査を行い、３月14日に実測調査を終え、３月29日までに作業員棟などの撤去を行い、北垣遺跡のすべての現地調査を終了した。

第３節　資料整理および報告書作成、保存処理の経過

１　資料整理および報告書作成等の経過

基礎整理　基礎整理作業は平成11・12年度に本調査と並行して、出土遺物の洗浄・注記、劣化遅延措置を行った上で、遺物台帳の作成を行った。

資料整理および報告書刊行　資料整理は、静岡県教育委員会通知『静岡県埋蔵文化財発掘調査の作業標準・積算基準』に基づき実施した（写真６～13）。

はじめに平成13～16年度に断続的に土器の接合・復原を、平成17～19・22～23年度に出土品の実測・拓本採取、版組、トレース、写真撮影、出土品観察表作成、記録類の編集、版組、トレース、遺構観察表作成を行った。また、平成24年度に報告書の編集、校正を行い、刊行に至った。

また、平成16年度に株式会社アルカに委託して石器実測を、平成17年度に東京航業株式会社に委託して石塔実測を実施した。また、平成22年度に出土した鉄滓の成分分析調査について株式会社日鐵テクノリサーチに委託して実施した。

さらに、縄文土器について平成21年度に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所評議員（当時）の向坂鋼二先生、人骨について平成22年度に京都大学名誉教授　片山一道先生、中近世陶磁器について愛知学院大学教授　藤澤良祐先生に調査指導を受けた。また、片山一道先生には、人骨鑑定についての玉稿（第５章第２節）を賜った。

保存処理　北垣遺跡出土金属製品について、平成22・23年度に保存処理を実施した。22年度に処理前記録の作成、クリーニング作業、平成23・24年度に脱塩処理、修復作業、補強作業、処理後の記録を作

写真６　土器接合作業

写真７　遺物実測作業

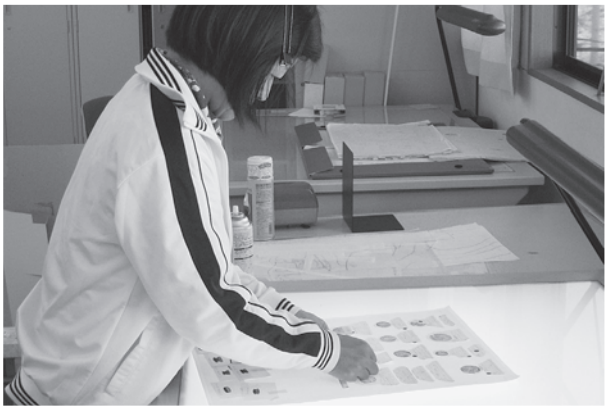


写真８　遺物版組作業

写真９　遺物トレース作業

写真10　遺構図版組作業

写真11　遺構図トレース作業

写真12　遺物写真撮影作業

写真13　報告書編集作業

成した。

収納作業　報告書刊行作業と並行して、収納作業を行うとともに事務所の撤収作業を行った。この作業終了により平成９～24年度の都合16年次に亘る第二東名掛川工区（掛川～豊岡地区）の記録保存のための本発掘調査をすべて終了した。

第３章　地理的環境・歴史的環境

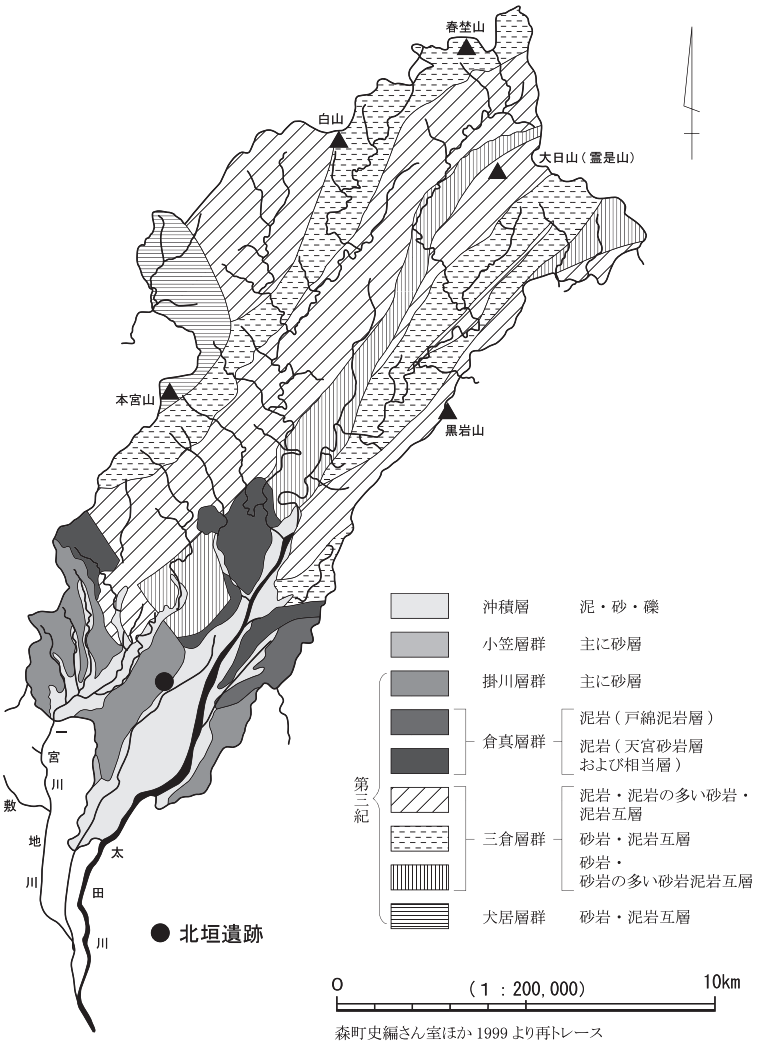
第１節　地理的環境

北垣遺跡が所在する静岡県周智郡森町は、静岡県の西部に位置する。行政区として北～北西は浜松市天竜区（旧天竜市・春野町）、北東は島田市、南東は掛川市、南は袋井市、南西は磐田市と接している。森町は、現在総面積133.84㎢である。北垣遺跡は森町域の南西側に位置する（第１・２図）。

森町の地形をみると、赤石山脈から伸びる山地とそれに囲まれた太田川や一宮川が開析した袋井市や磐田市域へと広がる沖積平野で形成されており、非常に自然豊かな地域である（第10図）。

森町の地理的環境を細かくみると、北東にある大日霊是山（吉川）を起点とし、太田川が南流する。太田川の流路は古くは本宮山（国見山）に起源し、森町天方付近で大きく西側に流れを変え、「園田丘陵」すぐ南側、現在の小藪川を流れていた（森町史編さん室ほか1999）。また、太田川は静岡県内では比較的大きな河川であり、森町域を流れる河川の大部分が最終的にこの太田川と合流する。この太田川は森町域を東西に大きく隔てる自然の境界となる。さらに、太田川などが形成した水田地帯を見渡すように丘陵が取り囲む。この丘陵により袋井市、磐田市、掛川市と隔てられ、やや閉塞的な感じを受けるが、原野谷川や太田川が形成した大規模な平野と隔てられる地形は森町の歴史・文化形成に大きな影響を与えている。

ここで報告する北垣遺跡は、太田川の北岸の「園田丘陵」の、ほぼ中央に位置する「円田丘陵」の、南側に向かって伸びる小尾根の南側平坦面に立地しており、遺跡からは太田川が形成した平野部や、対岸にある飯田丘陵を眺望することができる。



第９図　森町の地質

第２節　歴史的環境

１　北垣遺跡周辺の遺跡について（第10図・第５表）

ここでは北垣遺跡周辺の歴史的環境をみておきたい。

（１）旧石器時代

太田川が森町の水田域から、磐田市・袋井市の中下流域に出る磐田原台地東縁辺部上では、袋井市山田原遺跡群などが確認され、礫群などとともにナイフ形石器・スクレイパーなどが出土している（袋井市教委1994）。また、磐田原台地上は旧石器時代の遺跡が複数確認され、磐田市匂坂中遺跡、高見丘遺跡群、寺谷遺跡などで礫群をはじめとする遺構、角錐状石器やナイフ形石器をはじめとする石器など貴重な資料が多数出土している（磐田市史編さん委1992，静岡埋文研1998b）。

（２）縄文時代

森町域では、これまで竪穴建物が確認された例は少ないが、縄文時代の遺物はかなり多くの遺跡で採取されている。どれも断片資料が多い。森町円田・草ヶ谷地区では、本書で報告する北垣遺跡（45）が挙げられる。北垣遺跡は古くから周知されており、石冠などが出土したとされている（静岡縣1930，大橋1980，本書第４章第１節参照）。また、第二東名建設事業に伴う調査で竪穴建物とともに縄文土器（曽利式、加曽利Ｅ式、船元式など）や石器が出土している（本書第４章第２節参照）。

飯田地区に位置する森町坂田北遺跡（85）では、赤漆片やドングリの貯蔵跡が出土している（森町史編さん委1998）。一宮川流域では、森町綱掛山遺跡（18）で、竪穴建物４軒が確認されている。

（３）弥生時代

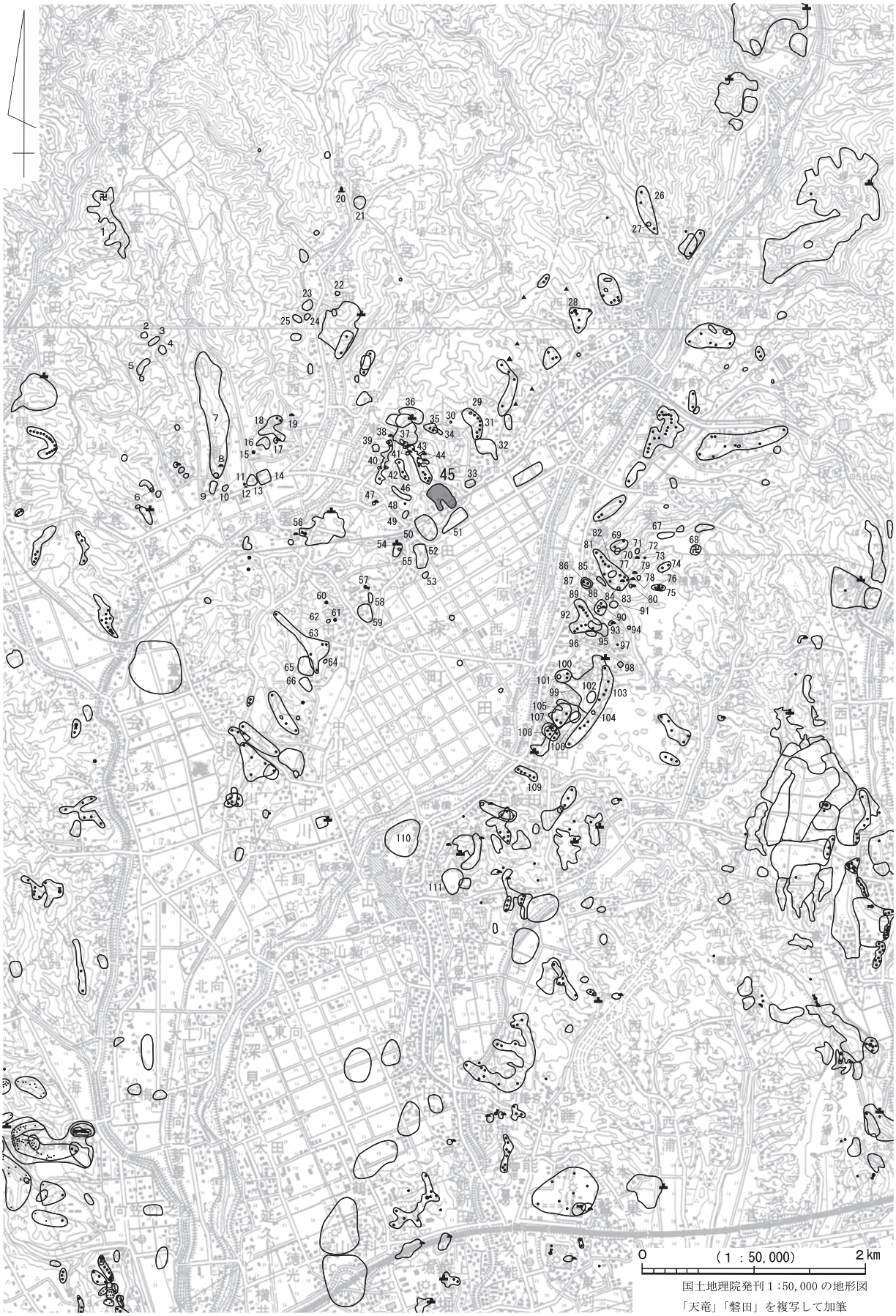
飯田丘陵の森町西平子遺跡（67）で弥生後期～古墳前期の竪穴建物23軒が確認された（森町教委1996）。円田丘陵の北垣遺跡（45）では弥生時代の竪穴建物数軒が確認された。太田川支流の一宮川流域では、森町片瀬遺跡（７）で第二東名高速道路建設に先立つ調査で弥生時代中期後半～後期の竪穴建物29軒や区画溝などが確認され、丘陵上に溝で区画された集落が営まれたことが明らかとなった（静岡埋文研2009）。片瀬遺跡は後期後半～古墳時代前期には集落は廃絶し、墓域へと移り変わる。片瀬遺跡の東側の尾根上にある綱掛山古墳群（綱掛山遺跡，18）では、同時期の竪穴建物21軒が確認された（静岡埋文研2009）。奥谷田Ⅰ遺跡（65）では建物が数軒確認された（森町教委1998）が大規模な集落遺跡は少ない。

一方、墓域は多数確認されている。森町フケ遺跡（46）、文殊堂遺跡（43）、林遺跡（40）のほか、森町善千鳥遺跡（36）、片瀬遺跡（７）、崇信寺遺跡（103）、如仲庵遺跡（96）など多数の遺跡で多数の方形周溝墓や土器棺墓が確認されている（森町史編さん委1998，静岡埋文研2006a・2009など）。

なお、生産域である水田跡は森町域では現状で確認されていない。太田川の流路変更により既に消失したか、あるいは地中深くに埋蔵されている可能性が高い。

（４）古墳時代

古墳時代前期（３世紀中頃～４世紀）は弥生時代から続く方形周溝墓や集落が確認されるが、古墳時代前期後半から中期前半の様相はよくわからない。古墳時代中期中葉（５世紀中頃）以降になると古墳の築造が活発化し、綱掛山古墳群（18）、文殊堂古墳群（43）、林古墳群（40）、宇藤蓮台古墳群（42）、崇信寺古墳群（103）などで20m以下の小規模な古墳が築造される（森町教委1996，静岡埋文研2008・



第10図　北垣遺跡周辺の遺跡分布図

第５表　北垣遺跡周辺の遺跡地名表

1	岩室廃寺	29	菖蒲ケ谷Ⅰ遺跡	57	東国古墳	85	坂田北遺跡
2	西峠水戸ヶ谷東峠Ⅰ遺跡	30	菖蒲ケ谷Ⅱ遺跡	58	岳進遺跡	86	鴨谷二本松古墳群
3	西峠水戸ヶ谷東峠Ⅱ遺跡	31	菖蒲ケ谷古墳群	59	北浦遺跡	87	鴨谷二本松遺跡
4	朝日平遺跡	32	香勝寺遺跡	60	谷中二本松古墳	88	梶ヶ谷古墳群
5	涼松遺跡	33	中屋敷遺跡	61	丸山古墳	89	梶ヶ谷遺跡
6	カワラケ屋遺跡	34	走り谷田遺跡	62	寺ノ谷遺跡	90	梶ヶ谷横穴墓群
7	片瀬遺跡・片瀬城跡	35	走り谷田古墳群	63	雲林寺古墳群	91	三反田遺跡
8	七軒町横穴墓群	36	善千鳥遺跡	64	山崎遺跡	92	院内古墳群
9	八面神社西遺跡	37	宇藤砦跡	65	奥谷田Ⅰ遺跡	93	院内横穴墓群
10	七軒町遺跡	38	善千鳥横穴墓群	66	奥谷田Ⅱ遺跡	94	院内遺跡
11	岡海戸古墳	39	弥勒平遺跡	67	西平子遺跡	95	修験道遺跡
12	岡海戸横穴墓群	40	林遺跡・林古墳群	68	平戸廃寺	96	如仲庵遺跡
13	岡海戸遺跡	41	宇藤横穴墓群	69	前ノ山古墳群	97	日当古墳
14	谷崎前遺跡	42	宇藤蓮台古墳群	70	前ノ山遺跡	98	五六ヶ谷遺跡
15	高雲寺古墳	43	文殊堂遺跡・文殊堂古墳群	71	平蔵遺跡	99	飯田城跡
16	谷沢遺跡	44	天王ヶ谷横穴墓群	72	平蔵横穴墓群	100	竹ヶ谷古墳群
17	谷沢横穴墓群	45	北垣遺跡	73	本堂1号墳	101	竹ヶ谷遺跡
18	綱掛山遺跡・綱掛山古墳群	46	フケ遺跡	74	北谷田古墳群	102	堂山遺跡
19	荒立横穴	47	久保ノ谷横穴墓群	75	比丘尼古墳群	103	崇信寺遺跡・崇信寺古墳群
20	小国神社経塚	48	岩名栗古墳	76	比丘尼経塚	104	峯山台状墓
21	小国神社遺跡	49	岩名栗遺跡	77	観音寺本堂横穴墓群	105	飯田大久保古墳群
22	御廟所遺跡	50	名栗遺跡	78	観音堂横穴墓群	106	峯山遺跡
23	宮代稲荷遺跡	51	円田大門遺跡	79	観音堂中世墓	107	岩ノ谷横穴墓群
24	宮代稲荷下遺跡	52	大城戸遺跡	80	薮内横穴墓群	108	岩ノ谷古墳群
25	真砂遺跡	53	大西遺跡	81	谷口古墳群	109	南ヶ谷古墳群
26	山郷古墳群	54	粟倉城跡	82	谷口遺跡	110	稲荷領家遺跡
27	山郷遺跡	55	峰垣遺跡	83	谷口横穴墓群	111	春岡遺跡
28	西脇古墳群・西脇古墳	56	堤田古墳	84	谷口中世墓		

2009など)。中期後半～末頃（５世紀後半～６世紀初頭）には、前方後円墳である堤田古墳（56)、東国古墳（57）が築造された（森町史編さん委1998)。後期前半～後半（６世紀前半～後半）になると、前方後円墳である西脇古墳（28，静岡県教委2000）が築造されるが、古墳築造数は多くはない。後期後半（６世紀後半）以降、古墳や横穴墓の築造が活発化し、奈良時代直前まで続く。森町域は横穴式石室築造地域（磐田原台地以東の西遠江）と横穴墓地帯（太田川以東の東遠江）の中間地帯にあたり、両者が混在する地域として注目できる（田村2001など)。

一方、この時代の集落の様相はほとんど確認されていない。北垣遺跡（45）は、文殊堂古墳群（43）や宇藤横穴墓群（41，静岡県埋文センター2012)、天王ヶ谷横穴墓群（44）に近接し、同時期の竪穴建物数軒が確認できることから集落と古墳・横穴墓との関係がわかる貴重な遺跡である。

（５）奈良時代・平安時代

『倭名類聚抄』によれば、周智郡には「小山郷」、「山田郷」、「依智郷」、「大田郷」、「田椀郷」の５郷が挙げられており、円田・草ヶ谷地域は「田椀郷」に比定されている（森町史編さん室ほか1999)。一宮川流域にあたる宮代地域については「田椀郷」に含まれるのかどうか明確ではない。

この時代では、袋井市春岡地区には「九周」や「知」などの墨書土器が出土し、周智郡衙の有力候補地である袋井市稲荷領家遺跡（110）や、それに近接し同じく周智郡衙候補地である春岡遺跡（111）などが所在している（森町史編さん室ほか1999)。また、森町飯田に所在する平戸廃寺（68）では平城宮系の文様をもつ単弁八葉軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦が出土している（森町史編さん委1998)。

また、円田地域は、官衙関連遺跡の可能性のある大城戸遺跡（52)、小国神社（21）の旧跡伝承地が存在している。また、北垣遺跡（45）では竪穴建物、掘立柱建物などが確認できる。

一宮川流域では、小国神社経塚（20）が特筆される。現在の小国神社本殿の北側に残る経塚（円形，

直径15～18m前後と推定されている）から、「仁安三年」（1168）銘の外容器とともに銅製経筒３点、和鏡３点、太刀２点などが出土している（森町史編さん委1998）。飯田地区に所在する比丘尼経塚（76）と併せて地方経塚のあり方を示す資料として注目できる（足立1998）。

また、一宮地域の北西には、古代から中世の山林寺院である磐田市岩室廃寺（１）が所在しており、森町側にはその南丘陵表参道が位置していたと考えられ、岩室廃寺近くに所在する森町涼松遺跡（５）、朝日平遺跡（４）、西峠水戸ヶ谷東峠Ⅰ・Ⅱ遺跡（２・３）では平安時代から鎌倉時代にかけての遺物が出土しており、岩室廃寺と関連する遺跡群と想定されている（森町教委1991）。岩室廃寺、小国神社、小国神社経塚からみれば宮代地域は非常に宗教色の強い遺跡が多いといえる。

なお、森町域の南西部には条里の痕跡が確認されている（森町史編さん室ほか1999）。

（６）中世（平安末期～江戸時代初期）

一宮川流域では、御廟所遺跡（22）で古瀬戸瓶子、宮代稲荷下遺跡（一宮末社稲荷社跡，24）からは同じく古瀬戸四耳壺（東京国立博物館蔵）が出土している。一宮川流域には小国神社や岩室廃寺（１）と関連してか、中世墓や経塚と考えられる遺構・遺物が確認されている（森町史編さん委1998）。

草ヶ谷地区の香勝寺遺跡（32）では、香勝寺本堂の建設に先立つ調査で、一宮荘の地頭武藤氏一族の供養塔と想定される五輪塔、宝篋印塔などが出土した。また、15世紀に人工的に埋め戻された堀が確認されたことから堀で囲まれていたと想定できる。また､12世紀後半から13世紀前半の遺物が主体であり、鎌倉時代初頭頃に盛期を迎えた遺跡である可能性が高い（広川2005ほか）。中屋敷遺跡では同時期の遺構・遺物が出土しており（静岡埋文研2011）、武藤氏と関係する香勝寺遺跡群として評価できる（大谷2011）。北垣遺跡（45）では掘立柱建物や井戸のほか、土壙墓・火葬墓や石塔・宝篋印塔が多数確認されている（森町史編さん委1998）。円田地域にある岩名栗遺跡（49）では中世の集石墓が確認され、宝篋印塔・五輪塔が発見されている。このほか森町域では、古墳時代の横穴墓を再利用とした中世墓が、観音堂横穴墓群（78，内藤・遠藤ほか1979）、谷口横穴墓群（83，森町教委1996）、天王ヶ谷横穴墓群（44，静岡県埋文センター2012）で確認されている。

一方、この時期の城館では、文献記録に天方本城、天方新城、飯田城（99）などが記録されており、今川方の天方氏、斯波氏、徳川氏、山内氏、武田氏による攻防が行われる（森町史編さん室ほか1999）。調査された遺跡は少なく、片瀬城跡（７）で堀切が確認されている（静岡埋文研2009）。

（７）近世（江戸前期以降）

森町域は豊臣政権下では大名山内氏の所領が置かれ、徳川政権下では大名山口氏や旗本土屋氏や掛川藩の所領となる。円田地域について江戸時代前期は大名山口氏が領主、江戸時代中期以降は旗本土屋氏の所領で、宮代地域は江戸時代前期には大名山口氏、旗本花房右近とともに小国神社の所領であった。また、森町域には遠江・駿河の鋳物師集団を統括した山田七郎左衛門家があり、梵鐘や雲板、鍋・鎌などを鋳造していたことが明らかになっている（森町史編さん室ほか1999）。

近世の遺跡は、草ヶ谷地区の中屋敷遺跡（33）や円田地区の北垣遺跡（45）で掘立柱建物が多数確認されている。また、両遺跡では、鉄滓や鞴羽口が出土しており、鍛冶屋が操業されていた可能性が高い。また、一宮川流域のカワラケ屋遺跡（６）は、江戸時代のかわらけ製造場所・販売所があったとされている。さらに、太田川支流の瀬入川左岸の丘陵上に位置する山郷遺跡（27）では、遺跡の最も標高の高い場所で石碑を樹立した遙拝所が確認された。この遙拝所は３段の壇と石碑で構成されており、近世初期の天台宗の作法に基づくものと考えられている。修験道遺跡（竹林山南閣院南光寺，95）では文化15（1818）年に森町旦那衆を勧進して構築された柴灯護摩壇が確認されている（森町史編さん委1998）。

第４章　調査成果

第１節　北垣遺跡の概要

１　北垣遺跡の位置（第１・２・９・10図，巻頭図版１，図版１）

北垣遺跡（粟倉北垣遺跡と称される場合もある）は、遠州浜名湖鉄道円田駅から北東約200ｍの、太田川が開析した平野部の北西側、森町円田の丘陵（いわゆる「園田丘陵」のうちの「円田丘陵」）の平坦地に位置している。

北垣遺跡（調査箇所の中心付近）の緯度経度は世界測地系（国土地理院ＨＰのweb版TKY２JGDを用いて日本測地系を世界測地系に変換した）で北緯34°49′26.6″、東経137°54′32.4″である。調査区は北で北緯34°49′28.9″、東経137°54′31.6″、西で北緯34°49′26.9″、東経137°54′29.2″、南西で北緯34°49′25.0″、東経137°54′29.8″、南東で北緯34°49′24.2″、東経137°54′35.9″であり、その範囲は北緯34°49′24.2～24.9″、東経137°54′31.6～35.9″の範囲である。

なお、図中の国土座標については、日本測地系であることを再度明示しておきたい。

２　北垣遺跡の調査歴（第11・12図，第６表）

北垣遺跡の調査歴　森町史によれば、『静岡縣史』第１巻（静岡縣1930）には当遺跡で打製石斧と石棒・石冠など縄文時代の遺物が採取されたことが記載されている（大橋1980）。また、遺跡の南端の土手から須恵器瑳が採取されている。このほか須恵器や灰釉陶器、山茶碗などが採集されている。

ようやく調査が実施されたのは1995年である（第１次調査）。この調査原因は個人住宅の建設であり、試掘溝調査が実施されたが遺構は検出されず、近世のかわらけが出土しただけであった。

したがって、北垣遺跡については遺跡であることは古くから認識されており、採集遺物から縄文時代、古墳時代～鎌倉時代、近世の複合遺跡であることは判明していたが、その性格については全く未知の状態であった。

このような状況の中、第二東名建設事業に伴い北垣遺跡の一部が工事対象範囲となったことから静岡県埋蔵文化財調査研究所が確認調査を実施したところ、縄文時代～近世にいたる複合遺跡であることが確認された。この結果にもとづき平成11年７月～13年３月まで静岡県埋蔵文化財調査研究所が本調査を

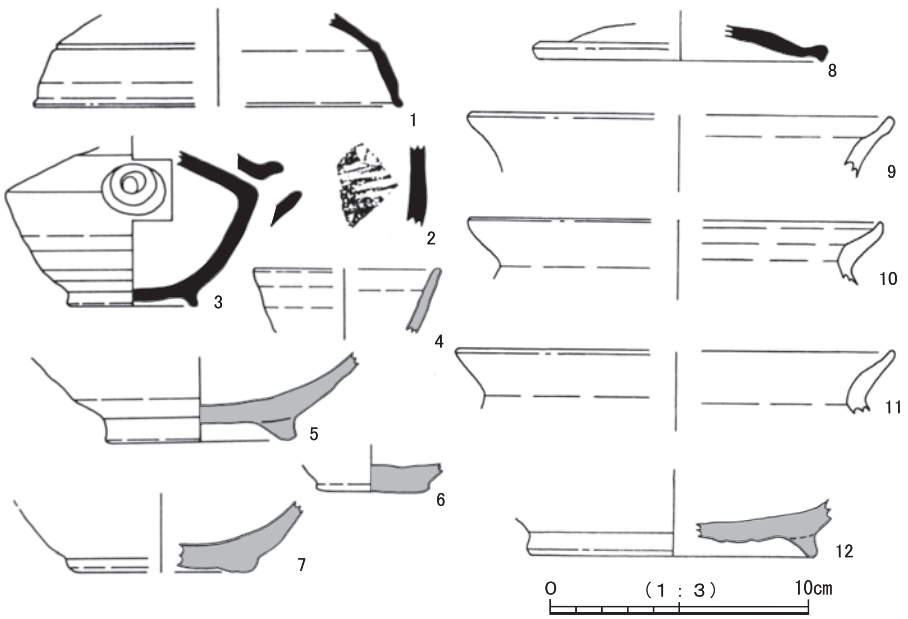
第６図　北垣遺跡の調査歴と主な遺構・遺物

調査次	調査年次	調査原因	実掘面積	時期	遺　構	遺　　物	備考・文献
第１次	1995	個人住宅建設	19㎡	縄文～近世	土坑？	土師器・山茶碗・かわらけなど	森町史編さん委1998・森町教委2007
第２次	1999	建物建設（第二東名建設に伴う移転）事業	24㎡	縄文～近世	小穴	陶磁器・かわらけ・瓦など	確認調査は1998年度。広川2005
第３次	1999–2000	第二東名建設事業	12,200㎡	縄文～近世	竪穴建物・掘立柱建物・中世墓・近世墓・土坑・溝状遺構・性格不明遺構など	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・緑釉土器・灰釉陶器・渥美・山茶碗・古瀬戸・瀬戸美濃（大窯・登窯）・志戸呂（古志戸呂・大窯・登窯）・かわらけ・肥前・銅碗・銅銭・銅錘・煙管・鉄滓など	本書

第11図　北垣遺跡の調査年次と調査範囲

実施した（第３次調査）。今回調査した範囲の西側は確認調査の結果、茶畑などの改植により遺構はすでに失われていることが判明した。調査区内では、掘立柱建物、竪穴建物、中世墓など多くの遺構・遺物が出土した。詳細については第２節以降で報告する。

これまでの３次の調査で遺跡の1/3程度の範囲で発掘調査が実施されたが、太田川に面する丘陵先端



第12図　北垣遺跡の既往調査出土遺物（森町教委2007・広川2005より抜粋・編集して掲載）

部分は畑地として残されており、遺跡の全体像をつかむためにはこの地域の調査を俟たねばならない。

北垣遺跡の既往の出土遺物（第12図）　上述したように発掘調査で出土したものや、これまでに遺跡内で出土した遺物について報告しておきたい。

『静岡縣史』第１巻（静岡縣1930）に報告される石冠は、大橋保夫氏による静岡県内の縄文時代の石冠の集成段階（大橋1980）では確認できなかったようであり、報告のみに留まっている。

第12図には、森町教育委員会が実施した第１・２次調査で出土した土器や表面採取された土器を掲載した。

１は須恵器杯蓋で６世紀中頃～後半、２は須恵器甕片、３は須恵器瑳、８は杯蓋で、８世紀代に位置づけられる。９～11は土師器甕で７世紀～８世紀に帰属する可能性が高い。４は灰釉陶器碗の口縁部で、11世紀前半ごろに位置づけられる。12も灰釉陶器碗で三角高台であることから10世紀頃に位置づけられる。５～７は山茶碗（５・７）・山皿（６）で、12～13世紀代に位置づけられる。この他報告によれば（森町教委2007，広川2005）、近世の遺物（肥前磁器・かわらけ等）も出土している。

これらの遺物は、今回報告する３次調査の遺物の傾向と合致している。

３　北垣遺跡の調査の概要（第13～16図，第７表，巻頭図版１～４，図版１～５）

これまでの採集遺物や既往調査および今回の発掘調査（第３次調査）で縄文時代～近世にいたる複合遺跡であることが判明したが、今回の調査成果の概要は第７表のとおりである。

第13図に全体図、第14～16図に調査区の詳細図を示した。

第７表　北垣遺跡の調査成果の概要

時期	遺　　構	遺　　物	備　考	本章
縄文時代	竪穴建物１軒	縄文土器・石器	竪穴建物は弥生時代の可能性あり。	第２節
弥生時代～古墳時代前期	竪穴建物・掘立柱建物・土坑	弥生土器		第３節
古墳時代終末期～奈良時代	竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝状遺構・性格不明遺構	須恵器・土師器		第４節
平安時代	掘立柱建物・土坑・溝状遺構	緑釉陶器・灰釉陶器・土師器・清郷甕		
中世	掘立柱建物・土壙墓・火葬墓・土坑・性格不明遺構	山茶碗・青磁（貿易陶磁）・古瀬戸・古志戸呂・瀬戸美濃（大窯）・初山・志戸呂（大窯）・常滑・渥美・清郷甕・かわらけ・土師質鍋・銅銭・銅碗・釘	銅錘は中世に遡る可能性あり。道具瓦・軒桟瓦は近代以降の可能性あり。	第５節
近世	掘立柱建物・土壙墓（近世墓）・土坑・溝状遺構・性格不明遺構	瀬戸美濃（登窯）・志戸呂（登窯）・常滑・肥前・かわらけ・土師質鍋・鉄滓・銅銭・煙管・鉄製品		第６節
近代以降	－	汽車徳利（遠州製陶産）・陶磁器・鉄製品		
時期不明	掘立柱建物・土坑・溝状遺構	銅錘・道具瓦・軒桟瓦・釘・鉄製品		

国土座標は日本測地系に基づく

第13図　北垣遺跡　全体図

国土座標は日本測地系に基づく

第14図　北垣遺跡　詳細図①

第15図　北垣遺跡　詳細図②

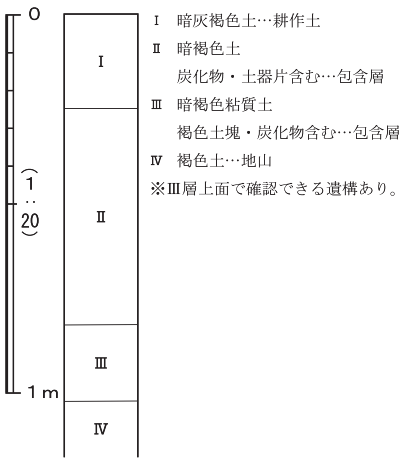
第16図　北垣遺跡　詳細図③

４　北垣遺跡の基本土層（第17図）

北垣遺跡は北西側が高く、南東側に向かって緩やかに下る地形であり、地山面は調査区北西側で標高約53m、東側～南東側で標高約45mであり、調査区の東西（約170m）で約８mの標高差がある。

基本土層は、基本的に同様であり、３～４層に区分することができる。以下のとおりである。

Ⅰ層　表土（耕作土）
Ⅱ層　包含層
Ⅲ層　包含層
Ⅳ層　地山



第17図　北垣遺跡　基本土層図

基本的にⅣ層上面（遺構面）で確認した遺構が大部分であるが、一部Ⅲ層上面で検出したものもあることから、Ⅲ層上面も遺構面である可能性がある。

Ⅰ～Ⅲ層は畑地になっていたことから、遺跡内で堆積の厚さが異なるが、遺跡内全体でおおよそ同様の層序を示している。

第２節　縄文時代

１　縄文時代の概要

縄文時代の遺構は、この時期に帰属する可能性がある竪穴建物（後述する弥生時代に帰属する可能性もある）１軒で、遺物は縄文土器、石器が出土した。

２　遺構

（１）14号竪穴建物（SH14，第18図，第８表，巻頭図版５，図版６・７）

位置　SH14は、３区東側D71グリッドに位置する。

特徴　SH14は平面円形（～楕円形）の竪穴建物で、壁溝は確認できない。壁近くに柱穴が４本分（P１～P４）確認でき、壁によっていることから、側柱による竪穴建物の可能性がある。この想定が正しければ、遠江の弥生時代の竪穴建物には確認されないことから縄文時代の炉を伴う竪穴建物と判断できる。一方で、単に壁際によっている４本の主柱穴と判断すれば、弥生時代の竪穴建物の可能性も残る。

SH14の平面形はP１西側の遺構と判断した部分がSH14の北西側の壁とすれば楕円形となるが、それが土坑などの一部とし、P２の北側の壁面を基準とすればやや楕円形に近い円形となる。現状では円形の建物と考えている。この場合の規模は南北5.7m前後、東西5.3m前後と想定できる。

P１～P４が主柱穴とした場合、P１-P２間（芯芯間距離，以下同じ）は約3.0m、P４-P３間は2.7m、P１-P４間は約4.5m、P２-P３間は約3.9mと一定しない。

炉は建物中央やや西よりで検出した。黒褐色土（第19図１層）を掘り込むように粘土を充填して地床炉として形成しており、その範囲は赤化している。検出できた炉の範囲は南北約0.20m、東西約0.35mである。炉が地山上にある黒褐色土（１層）を掘り込んで形成されていることから、この１・２層は貼床の可能性が高い。

なお、P３-P４間に確認できる小穴は竪穴建物内への出入りのための梯子等を据えた痕跡の可能性がある。直径約0.4mである。その底面に深くなっている部分が確認でき、梯子等の木材の痕跡の可能性がある。この想定が正しいとすれば、20cmほどの木材であった可能性がある。

出土遺物　SH14の出土遺物は曽利式土器（第19図７）が出土した（本節３で報告）。

時期　弥生時代の竪穴建物の可能性があるものの、柱穴が側柱だと想定すれば、遠江の弥生時代の竪穴建物には確認されないことから縄文時代に帰属する可能性がある。今後の調査や研究者の判断を俟って時期を特定する必要がある。縄文時代に帰属するとすれば、曽利式土器が出土していることから縄文時代中期後半～末葉に位置づけられる可能性が高い（一方、弥生時代とすれば後期以降であろう）。

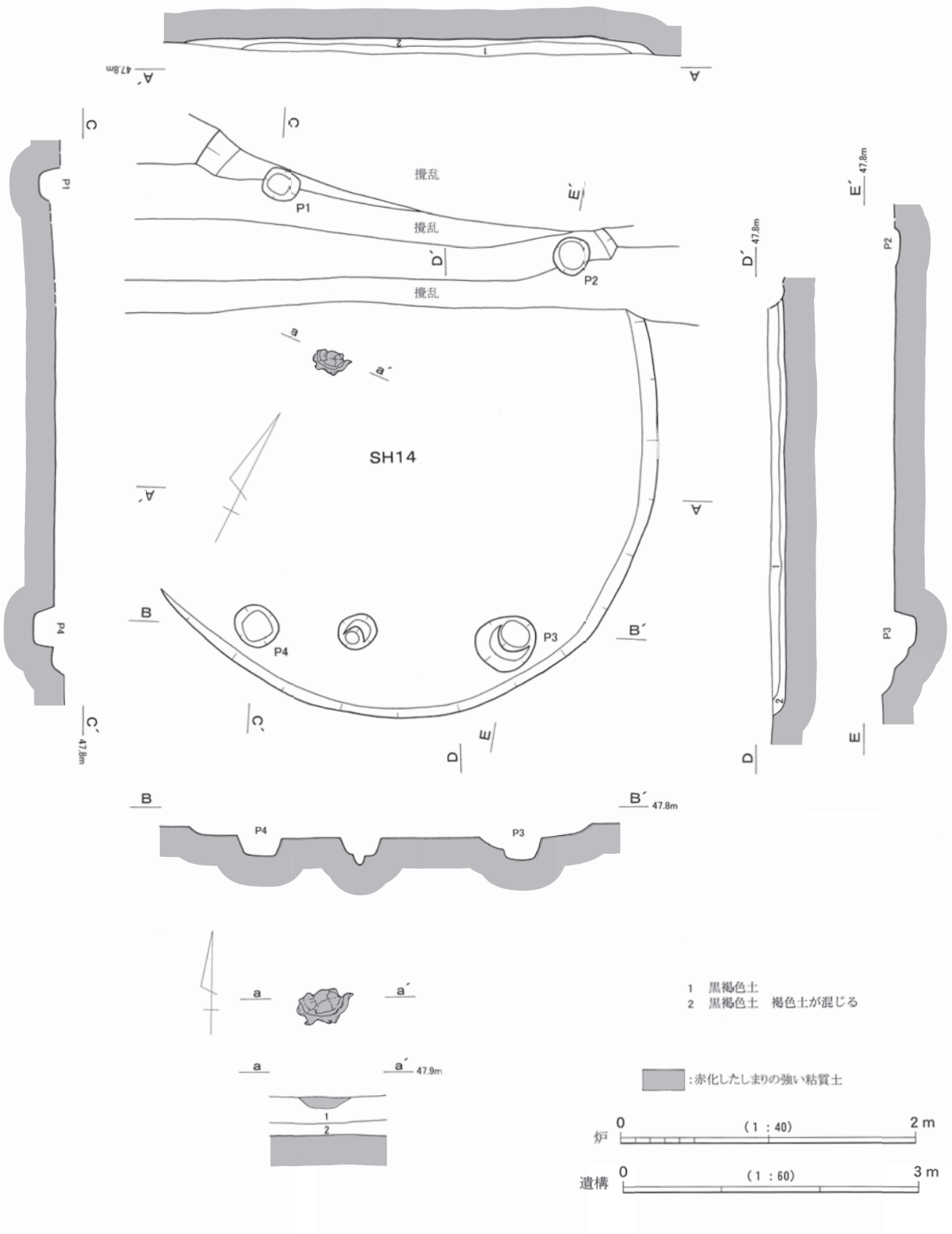
３　遺物

北垣遺跡では、縄文土器、石器が出土している。以下に、土器、石器の順で報告する。

（１）縄文土器（第19図，第14表，図版32・33）

縄文土器は、小片が少量出土しており、おおむね中期後半～末の土器群、後・晩期の可能性のある土器が出土している。いずれも深鉢の破片であり、残念ながら全形を復原できるような個体は出土していない。

以下、時期ごと、型式ごとに報告する（註１，註は第７章末に記載）。



第18図　SH14　実測図

ア　縄文時代中期の土器群

縄文時代中期後半～末葉に位置づけられる曽利式土器（１～13）　１はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、口縁部はやや内湾して立ち上がり、口縁内面に低い隆帯（粘土紐貼り付け）を施し、口縁端部は丸く仕上げられている。口縁部外面には、曽利式土器に特徴的な隆帯（粘土紐貼り付け）による渦巻文

が施されている。２・３はおなじく深鉢の破片である。外面には渦巻文の一部とみられる隆帯（粘土紐貼り付け）による文様の一部が確認できる。文様や口縁部の特徴から、曽利Ⅱ～Ⅲ式に位置づけられる可能性が高い。

５は胴部片であり、集合条線による綾杉文（矢羽文）を描き、その上に隆帯（粘土紐貼り付け）による垂下する懸垂文を描くものである。白色の砂粒が多く含まれており、北垣遺跡で出土する他の縄文土器とは胎土が異なることから搬入品の可能性がある。５は曽利Ⅱ式に位置づけられるものである。

６は口縁部片であり、外面にはタタキによる縄文が施されている。12は破片であるが、６と同様にタタキによる縄文が施されている。７は深鉢の口縁部付近の破片で、外面には半截竹管状工具による横線文が施されている。８・10・13は集合条線による綾杉文を施した後で、半截竹管状工具による垂下する懸垂文を施している。９は半截竹管状工具による垂下する直線文が確認できる。直線文を描く前に、13同様綾杉文を施していた可能性がある。11は集合条線による綾杉文（矢羽状文）を施している。これらは曽利Ⅲ式（～Ⅳ式）に位置づけられる可能性が高い。

４は曽利式と加曽利Ｅ式の中間的な型式である。深鉢の胴部破片である。外面には縄文地文を施した後、半截竹管状工具の腹を用いた垂下する直線、懸垂文を施している。加曽利Ｅ２式あるいは曽利式Ⅱ～Ⅲ式に位置づけられる可能性が高い。

縄文時代中期後半に位置づけられる加曽利Ｅ式土器（14～38）　14～16は口縁部片で、口縁直下でく字形に屈曲し、外反して立ち上がるものである。いずれも屈曲部分内面に明瞭な稜線が確認できる。14は外面にミガキ調整、15・16も表面が平滑であることから14と同様ミガキ調整が行われた可能性が高い。15は屈曲部やや下に半截竹管状工具を用いた弧線文が確認できる。16は屈曲部より下位に凹線による文様の間を埋める縄文地文が確認できる。20も口縁部片であるが、やや外反して立ち上がり、内側に粘土を折り返し（貼り付け）肥厚させている。口縁端部はやや内傾する平坦面をもつ。口縁部外面は平滑に仕上げられており、ミガキ調整が行われた可能性がある。

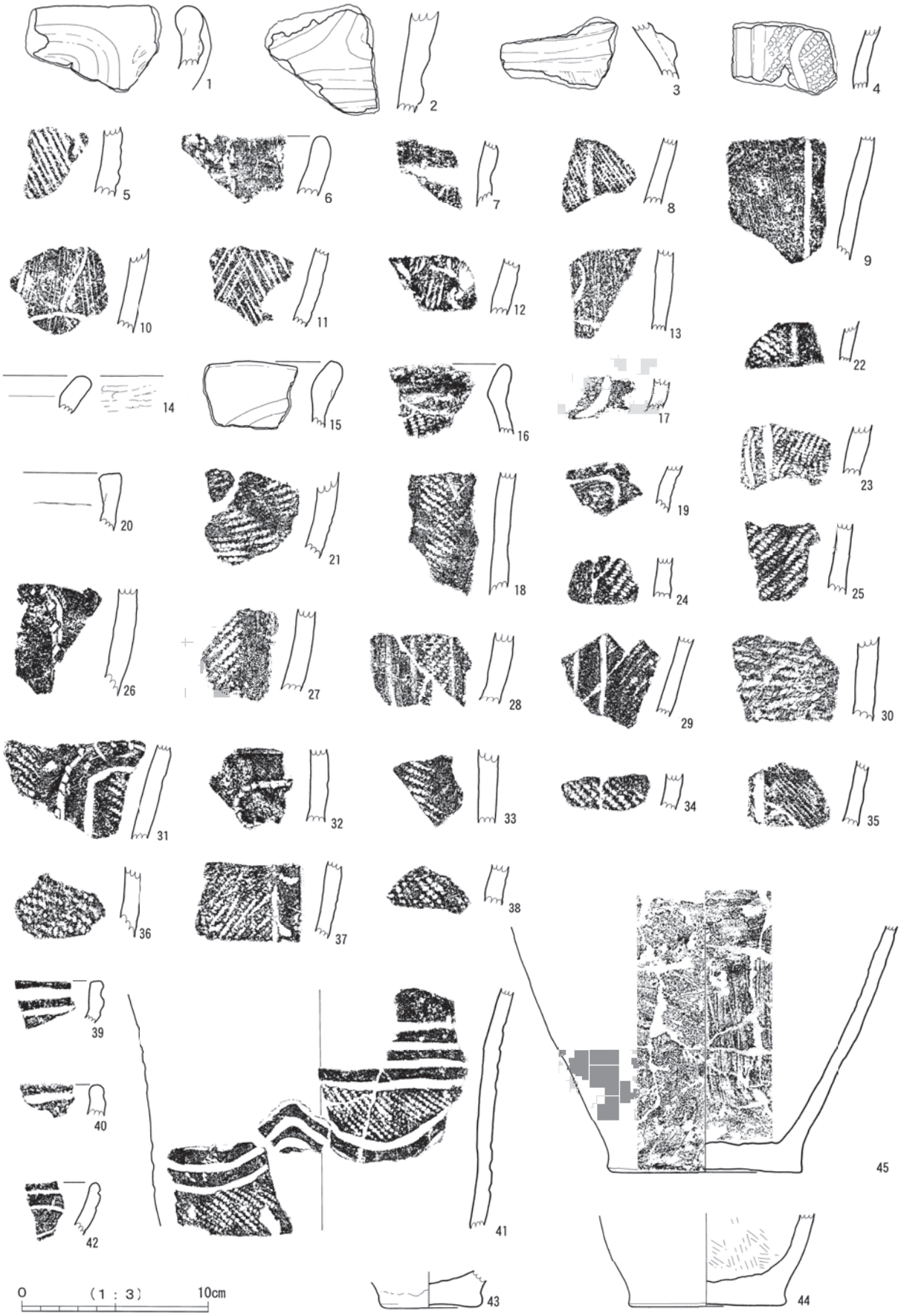
17・19・21は胴部片で縄文地文が施された上に半截竹管状工具による弧線文が描かれている。縄文がない部分は縄文地文が磨り消されている可能性が高い。18・22～24・27～29・33～38は縄文地文の一部を磨り消したもので、22・23・28・37については半截竹管状工具の腹を用いた垂下する直線文が描かれている。25・30は縄文地文の残る破片である。26・31・32は縄文地文を磨り消し、２条の弧線文を描くもので、外側の弧線文には加曽利Ｅ３式に特徴的な刺突文が施されている。

加曽利Ｅ式土器は、文様や調整の特徴から、26・31・32が加曽利Ｅ３式、それ以外が加曽利Ｅ２～３式に位置づけられる可能性が高い。

縄文時代中期後半に位置づけられる咲畑式（中富式）土器（39～41）　39・40は深鉢の口縁部片である。39はやや内湾して立ち上がる口縁部の破片で、口縁端部は平坦面をもつ。外面には半截竹管状工具の腹を用いた横線文が描かれている。40は39と同様の特徴を有するが、口縁端部が丸く仕上げられている。41は胴部破片で、半截竹管状工具をもちいた４条の横線文、その下位に波状文を施す。横線文と波状文の間には縄文を充填している。

縄文時代中期末以降の東海系土器（42）　42は深鉢の口縁部破片である。口縁部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。外面には、棒状工具による横線文と上向きの弧線文と下向きの弧線文が描かれている。弧線文は渦巻文の可能性もある。中期末以降の東海系土器である可能性が高く、場合によっては晩期まで降る可能性がある。

イ　後・晩期に帰属する可能性の高い深鉢（43～45）　43は粗製土器の底部片で、やや上底である。44は粗製土器の底部片で、やや上底である。成形時の敷物などの痕跡は確認できない。胴部は底部から外反して立ち上がり、底部から３cmほどで外反度を緩めて立ち上がる。内面にはハケ状の調整が確認



第19図　縄文土器実測図

できる。45は粗製土器の底部の破片で底部はやや上底である。底面はナデ調整により、平滑に仕上げられている。胴部は外反しながら立ち上がる。内面には44と同様縦～斜め方向のハケ状の調整痕が確認できる。外面にも同様の斜めのハケ状の調整痕が確認できる。44・45は加曽利Ｂ式土器や、堀之内式土器に類似するため、後期以降の粗製土器である可能性が高い。

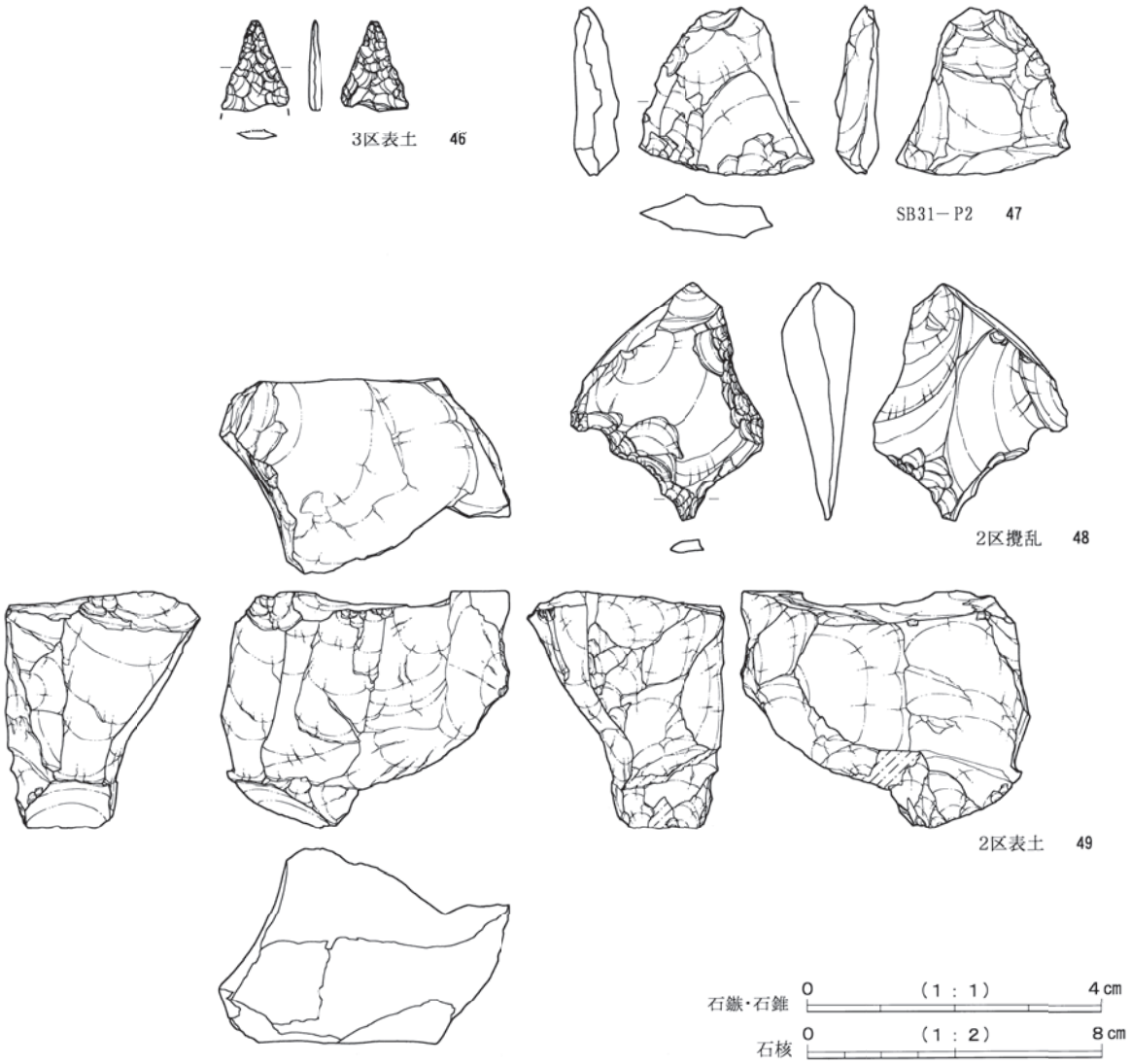
（大谷）

（２）石器（第20図，第15表，図版33）

石器は、石錐１点、石鏃１点、石鏃未製品１点、石核１点のほか、剥片が十数点出土している。以下に、種別ごとに報告する。

ア　石錐（48）

遺構外から１点（48）出土した。48は幅広な剥片の末端部に加工を施し尖端部を作出した石錐である。それぞれ、左縁辺は裏面側から、右縁辺は裏面側から加工を施しており、錯交剥離の様相を見せている。先端部縁辺を除いては加工が施されてなく、素材剥片の打点部が確認できる。石材はチャート（赤色）である。



第20図　石器実測図

イ　石鏃（46）

遺構外から１点（46）出土した。46は先端部のみ残存しており、脚部は折損している。そのため全体の形状は不明である。加工は精緻に行われている。石材は黒曜石である。透明度が高く、黒い部分が帯状に入り込んでいることから、信州産であることが推測される。

ウ　石鏃未製品（47）

後述する掘立柱建物の柱穴（SB31-P２）から１点（47）出土した。47は上下方向に両極剥離を施しており、側縁には微細な加工も確認できる。上下の縁辺に潰れが明確に確認できないこと、器体の厚さが一定なことから石鏃未製品であると判断した。石材は珪質頁岩（灰色）である。

エ　石核（49）

遺構外から１点（49）出土した。49は、打面転移を繰り返したサイコロ状の石核である。２～５cm程度の縦長剥片を剥離している。打面は１回の剥離で作出され、調整はあまり念入りに行われていない。石材はシルト岩である。

オ　石器のまとめ

北垣遺跡から出土した石器は僅少であり限定されていたため、時期が特定できるような資料は確認できなかった。各出土遺物に大幅な時期差がある可能性も考えられる。（柴田）

第３節　弥生時代後期～古墳時代前期

１　弥生時代後期～古墳時代前期の概要

北垣遺跡では、この時期に位置づけられる遺構は竪穴建物４軒と土坑１基である。北垣遺跡の周辺の丘陵尾根上には、文殊堂遺跡、林遺跡、フケ遺跡など、弥生時代中期中葉～古墳時代前期の方形周溝墓と土器棺墓が確認されており、これらとの関係が注目される遺構である。以下、遺構→遺物の順に報告する。

２　遺構

（１）竪穴建物

ア　１号竪穴建物（SH01，第19・21図，第８表，図版６・７・32）

位置　SH01は、２区H73グリッドに位置する。他の遺構との切合関係は確認できない

特徴　SH01は、主柱穴と炉のみの確認であり、建物の平面形態は不明である。主柱穴４本が確認でき、主柱穴はほぼ正方形に配置されている。主柱穴間の距離は、P１-P２間で約3.2m、P４-P３間で約3.3m、P１-P４間で約3.3m、P２-P３間で約3.2mである。P４の位置が若干ずれている可能性が高く、主柱穴は3.2mを基準に配置された可能性が高い。建物の主軸方位はN-31°-Wである。

炉は、主柱穴で囲まれた範囲のほぼ中央に位置している。地山を皿状に掘り窪めて粘土を持ち込んで地床炉としている。炉の周囲にある３層を掘り込んで１・２層が形成されていることから、炉の造り替えが行われた可能性が高い。炉の平面形はいずれもやや不整形な円形で、３層の炉は、東西約1.05m、南北約1.05m、深さ約0.1m、１・２層の炉は東西約0.9m、南北約0.9m、深さ約0.15mである。

なお、貼床が行われていたかどうかについては不明である。また、近接するSK45がSH01に伴う貯蔵穴の可能性がある。

遺物　SH01から出土した遺物は弥生土器（・古式土師器，以下弥生土器とした場合は「弥生土器か古式土師器」であることを示す）の小片であり図示できなかった。また、炉周辺から弥生土器とともに縄文土器片（第19図）が出土しており、縄文時代の竪穴建物を破壊して弥生時代後期の竪穴建物が構築された可能性がある。

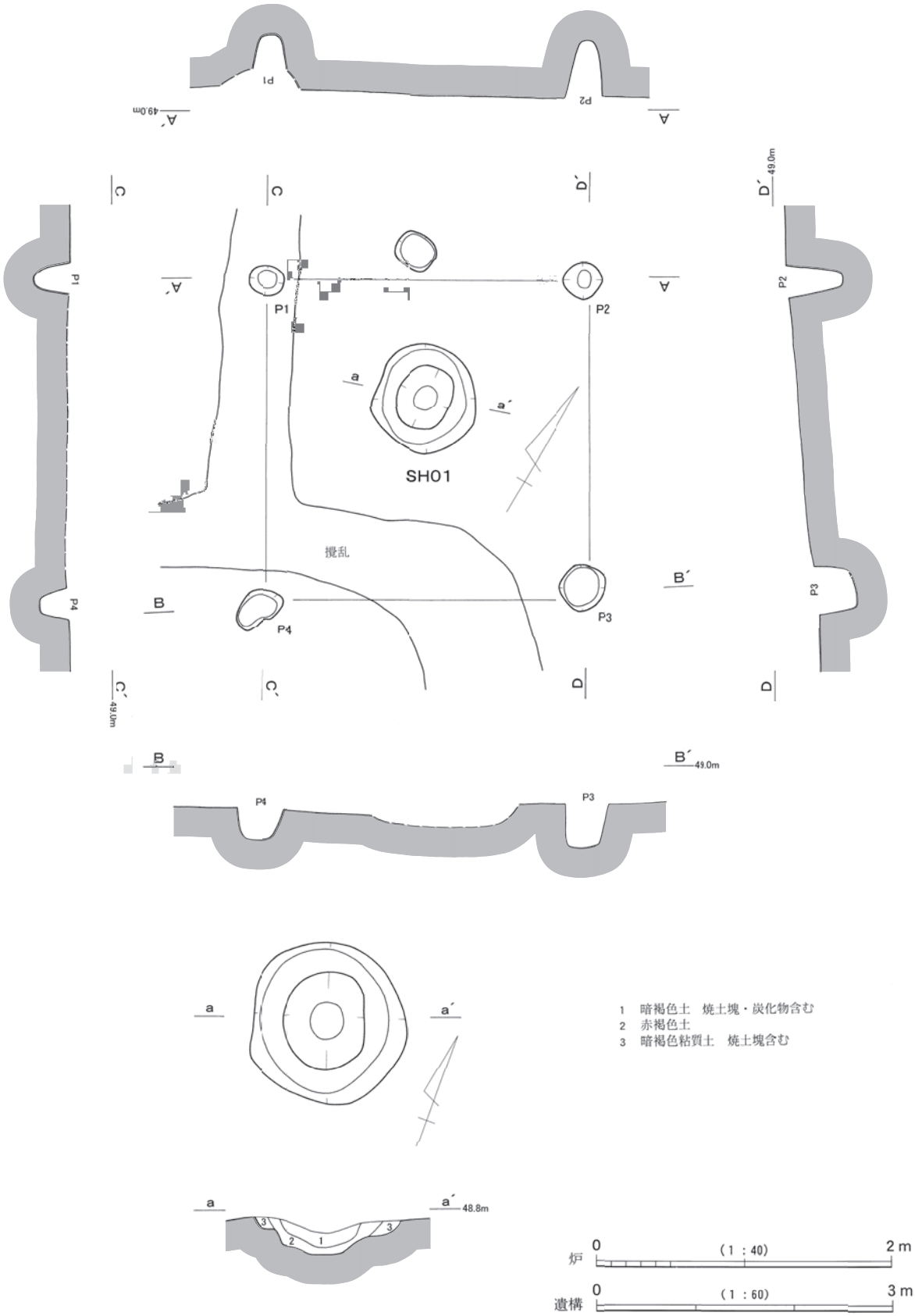
時期　SH01の出土遺物は、弥生土器小片であることから時期を特定するのは難しいが、炉を伴うこと、後述するSH15と主柱穴の間隔がほぼ同一であることから弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。また、炉周辺から縄文土器が出土していることから、上記の想定が正しければ、ほぼ同一箇所に縄文時代の竪穴建物が存在していた可能性がある。

イ　４号竪穴建物（SH04，第22図，第８表，図版８）

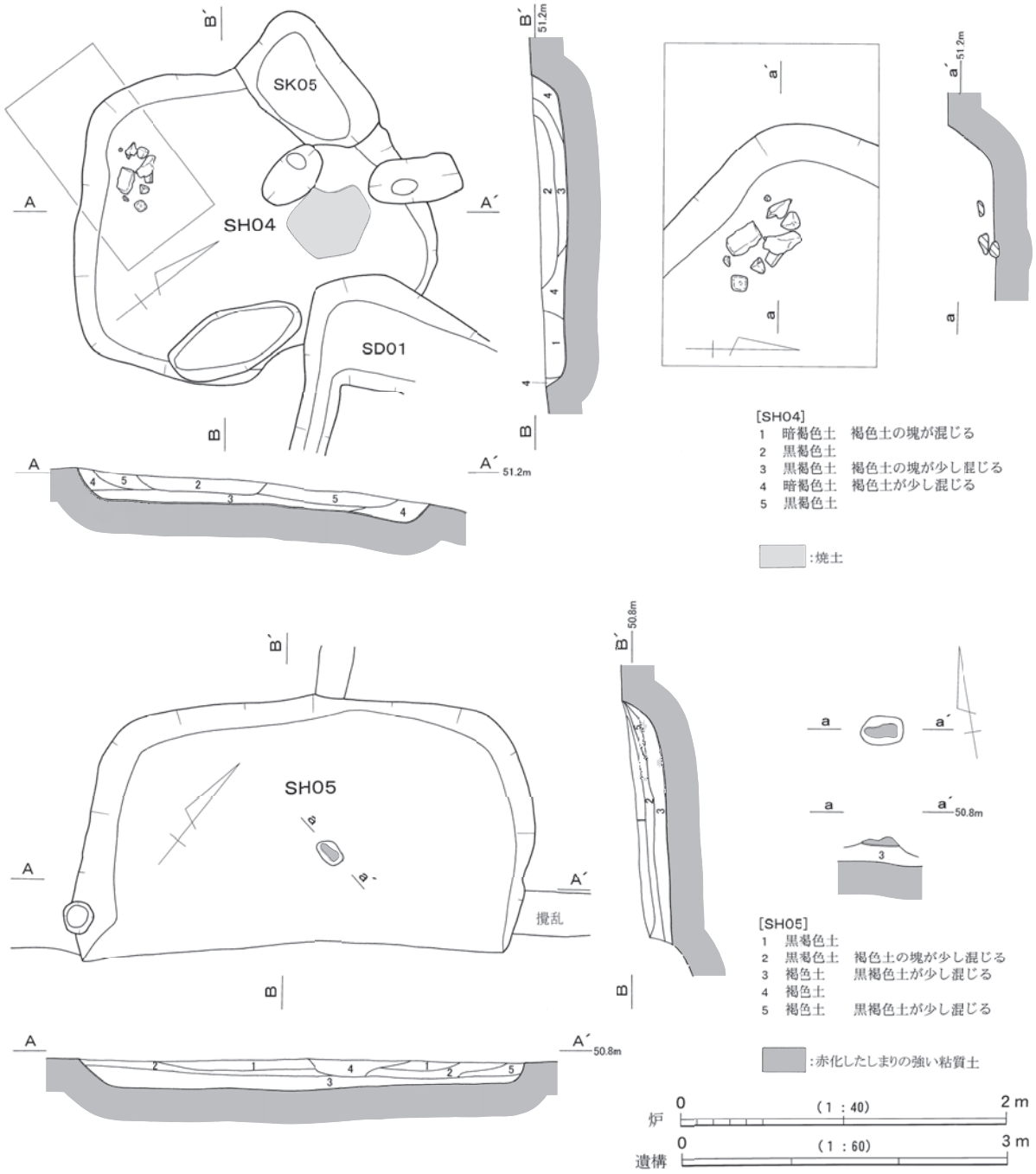
位置　SH04は、２区K72・L72グリッドに位置する。SD01、SK05などに破壊されており、それらより古い遺構であることが判明する。

特徴　SH04は、西側から南にかけての掘方が当初のものとすれば、隅丸方形の竪穴建物の可能性があるものの、北側から北東にかけては南西辺と対応しておらず、竪穴建物ではなく、大型の土坑などの可能性が残る。調査段階で焼土が確認されたことからそれを炉と判断し、竪穴建物と認定したが、別遺構である可能性も排除できない。

竪穴建物とした場合、南西辺を基準とすれば、建物の主軸はN-50°-Wにとり、南北（B-B′方向）で約2.8m、東西で（A-A′方向）で約3.3mである、主柱穴は確認できない。



第21図　SH01　実測図



第22図　SH04・05　実測図

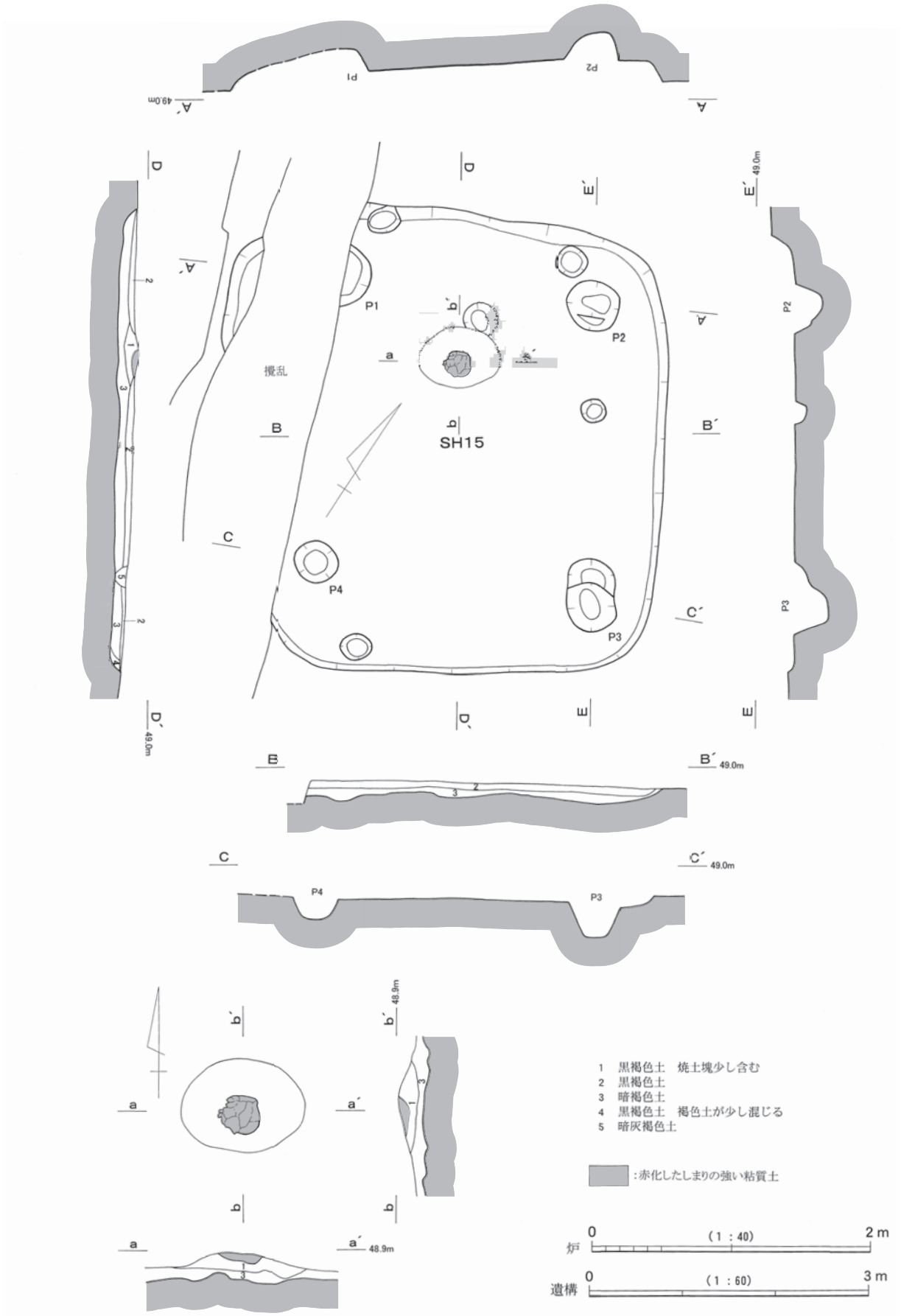
焼土は３層の下位で確認していることから、竪穴建物である場合は地山を床面とした直床式であった可能性がある。焼土（炉）の範囲は南北約0.7m、東西約0.7mの範囲である。

遺物　SH04からは弥生土器の小片が出土したが、図示できなかった。このほか上部から須恵器片が出土しているが、SH04は炉を伴う可能性が高いことから後世の混入遺物と判断した。

時期　SH04の出土遺物は弥生土器の小片であり、時期を特定することは難しい。竪穴建物として、焼土範囲を炉とすれば、SH15同様、弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる可能性が高い。

ウ　５号竪穴建物（SH05，第22図，第８表，図版７）

位置　SH05は、２区Ｊ72・Ｋ72グリッドに位置する。



第23図　SH15　実測図

特徴　SH05は南側部分が攪乱により破壊されているが、北～西側部分が残存しており、隅丸方形の竪穴建物であることが判明する。主柱穴は確認できない。建物の主軸は、N-36°-Wである。建物の規模は南北（B-B′方向）で2.3m以上、東西（A-A′方向）で約4.2mである。残存する東西の規模からすれば南北も4.2m前後であった可能性が高い。

床面には褐色土を用いた貼床が行われており、その上に炉が造られている。炉は建物のほぼ中央よりやや北西側に造られていた可能性が高い。粘土(粘質土)を用いて地床炉としている。炉は南北約0.1m、東西約0.2mのみ残存している。

遺物　SH05からは縄文土器、弥生土器片などが出土しているが小片のため図示できなかった。

時期　SH05の出土遺物は弥生土器小片であることから遺物から時期を特定することが難しいが、炉を伴い隅丸方形の竪穴建物であることから、弥生時代後期～古墳時代前期である可能性が高い。

エ　15号竪穴建物（SH15，第23・25図，第８表，巻頭図版５，図版７・８）

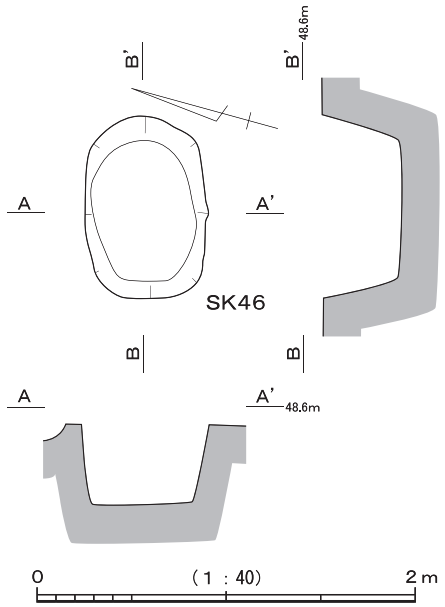
位置　SH15は、３区西側C68・69、D68・69グリッドに位置する。

特徴　SH15は隅丸方形の竪穴建物で、西側を攪乱で破壊されているが、北垣遺跡の竪穴建物の中では残存状況の良好な建物である。壁溝は確認できない。建物の主軸は、おおよそN-32°-Wである。当該期に位置づけるSH01・05とほぼ同一方位を示しており、この点でもSH01・05は同時期の竪穴建物である可能性が高い。建物の規模は南北（D-D′方向）で約5.0m、東西（B-B′方向）で約4.9mである。主柱穴は４本分確認でき、P１-P２間は2.8m、P３-P４間は約2.9mで、P２-P３間は約3.3m、P１-P４間は約3.2mである。南北が約3.2m、東西が約2.8～2.9mであり、規格的な建物である。南北の主柱穴間距離はSH01とほぼ同一である。床面には暗褐色土による貼床が行われ、その上位に炉が造り付けられている。

炉は建物中央やや北側で確認でき、貼床と１層を挟んでおり、炉を作るにあたり黒褐色土（１層）で炉部分をやや高くして、そこに粘土で炉を形成した可能性がある。炉（焼土）の範囲は東西約0.3m、南北約0.3mである。

遺物　SH15からは、弥生土器壺の肩部片（50）が出土した。外面には上位に横線文を巡らせ、その下位に羽状刺突文を施す。横線文が施された部分がやや突起していた可能性が高い。

時期　SH15は出土した土器が、本建物に伴うとした場合は、弥生時代後期中葉、菊川式中段階に位置づけられる可能性が高い。



第24図　SK46　実測図

（２）土坑

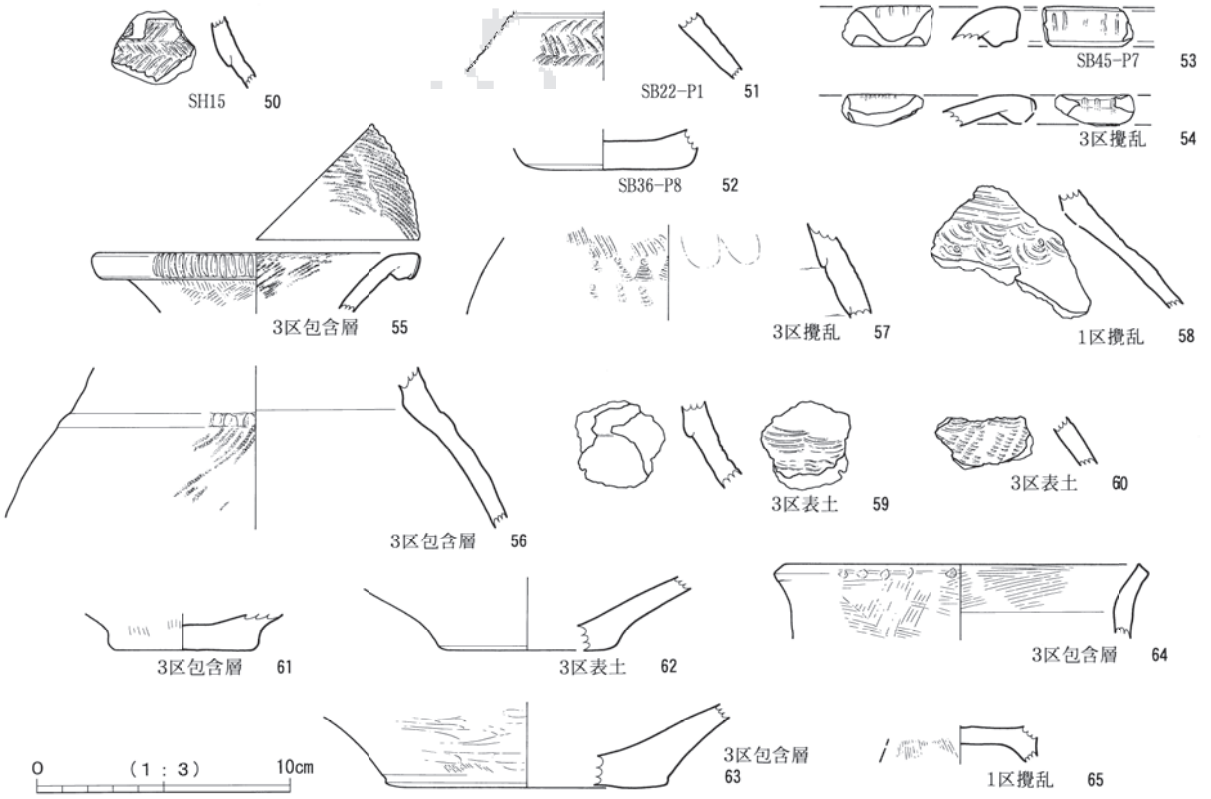
ア　SK46（第24図，第10表）

SK46は、２区G73グリッドに位置する。東西に長い隅丸長方形の土坑で、断面は逆台形である。南北約0.65m、東西約0.95m、深さ約0.4mである。

遺構内からは弥生土器小片が出土したのみであり、当該期に位置づけられる可能性が高い。

３　遺構外出土の弥生土器（第25図，第14表，図版34）

この時期に帰属しない遺構内や包含層や表土から出土したものなどについて報告する。壺と台付甕破片を図示した。



第25図　弥生土器実測図

いずれも菊川式土器の範疇に位置づけられるものである。

51～60は壺片である。51は肩部片で、上位にハケ刺突による横線文を巡らせ、その下位に羽状刺文を施す。SH15出土の土器（50）と特徴が類似しており、菊川式中段階に位置づけられようか。

53・54は折り返し口縁壺の口縁部片で、口縁部外面には垂直の面をもち、その外面には刻みが施されている。また、口縁部内面にも刻み状の文様が確認できる。菊川式新段階に位置づけられようか。

55は折り返し口縁壺の口縁部の破片で、口縁部は折り返され、外面にはほぼ垂直の面をもち、その面に縦位の刻みが施されている。外反しながら立ち上がり、口縁部内面にはＳ字状結節縄文を施す。

Ｓ字状結節文を巡らせるなどの特徴から菊川式新段階～最新段階に位置づけられる可能性が高い。

56は壺肩部片で貼り付けによる突帯を巡らせ、その上に刻みをいれる。突帯の下位にはスパンの長い縄文が施されている。胴部は球胴ではなく無花果形に近い形態であったと想定できる。縄文が施されている特徴、胴部の形状などから、菊川式古段階に位置づけられる可能性がある

57は壺肩部片で、上部に羽状刺突文を施し、その下位に扇形文を２段巡らせる。58は壺の肩部片で、頸部との境に複数（４条以上）の櫛描横線文を描き、その下位に扇形文を２段分巡らせる。57・58に施された扇形文は菊川式土器の中では一般的な文様ではないことから、天竜川遺跡（西遠江）の伊場式土器の影響を受けている可能性がある。文様が豊富である点などを考えれば、菊川式中段階に位置づけられようか。

59は壺肩部片で、櫛描による横線文とその下位に波状文を描くものである。60は波状文の下位に、さらに細かい波状文あるいは櫛による刺突文を施す。菊川式中段階に位置づけられようか。

壺底部52・61～63は、やや中央部が上がる63もあるが平底である。63は底部径が約11cmと大きいことからやや大型の壺であった可能性がある。61は底部付近の外面はハケ調整、63はミガキ調整が行われている。

64・65は台付甕の破片である。64は胴部から緩やかにく字形に屈曲して、外上方に直線的に立ち上がる口縁部片で、口縁端部は外傾する平坦面をもつ。この下位部分に刻みを行っている。口縁部外面には横ハケ調整、口縁部内面にも横ハケ調整が行われている。胴部は下部が膨らむ深鉢形態であった可能性がある。菊川式古段階に位置づけられる可能性がある。65は台基部片である。外面には縦・斜め方向のハケ調整が行われている。時期を特定することは難しい。

これらの土器は、菊川式土器古段階から新段階（最新段階）のものであり、弥生時代後期前半～古墳時代前期初頭に位置づけられる可能性が高い。

丘陵上に所在している文殊堂遺跡などの墓域の形成よりも集落の開始時期は遅れるものの、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物で構成される集落が確認された点は非常に興味深い。

第４節　古墳時代後期～平安時代

１　古墳時代後期～平安時代の概要

古墳時代終末期は、北側に宇藤横穴墓群、天王ヶ谷横穴墓群が造営されている時期にあたり、この時期の集落としてそれらとの関連が注目される遺構が確認できる。また、平安時代後期においても、天王ヶ谷横穴墓群の２基で横穴墓を再利用した墓が形成されており、その墓の被葬者と集落との関係が注目される。

古墳時代終末期～平安時代に位置づけられる遺構は、竪穴建物９軒、掘立柱建物21棟、土坑８基、性格不明遺構３基があり、遺物としては土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器がある。

２　竪穴建物

竪穴建物については基本的に竈を有する遺構から認定したが、このほか現地調査の段階で竪穴建物と認定された竈をもたない方形の遺構（竪穴状遺構）や壁溝を確認した遺構（竪穴状遺構）含めて報告する。したがって、竪穴建物でない遺構も一部含まれている可能性があることを断わっておきたい。

この条件に基づき認定した、古墳時代後期～平安時代に位置づけられる竪穴建物（竪穴状遺構を含む）は９軒である。

（１）２号竪穴建物（SH02，第26図，第８表）

位置　SH02は、２区H72グリッドに位置する。

特徴　SH02は主柱穴のみの確認であり、建物の平面形態は不明であるが、隅丸方形あるいは方形の建物で、竈を伴うものであった可能性が高い。床面の貼床の有無については不明である。

主柱穴は４本分確認でき、すべてやや不整形な円形である。主柱穴から想定する建物の主軸はN-34°-Wである。主柱穴間の距離は、Ｐ１-Ｐ２間で約1.75m、Ｐ４-Ｐ３間で約1.9m、Ｐ１-Ｐ４間で約2.0m、Ｐ２-Ｐ３間で約2.15mであり、一定していない。

出土遺物　SH02からの出土遺物はない。

時期　SH02は出土遺物がないことから時期を特定することは難しいが、炉が確認できないことから古墳時代後期後半（６世紀後半）～平安時代（12世紀）の一時期に位置づけられる可能性が高く、竪穴建物とすれば、古墳時代後期後半～奈良時代（８世紀）の可能性が高い。

（２）３号竪穴建物（SH03，第26図，第８表，図版12）

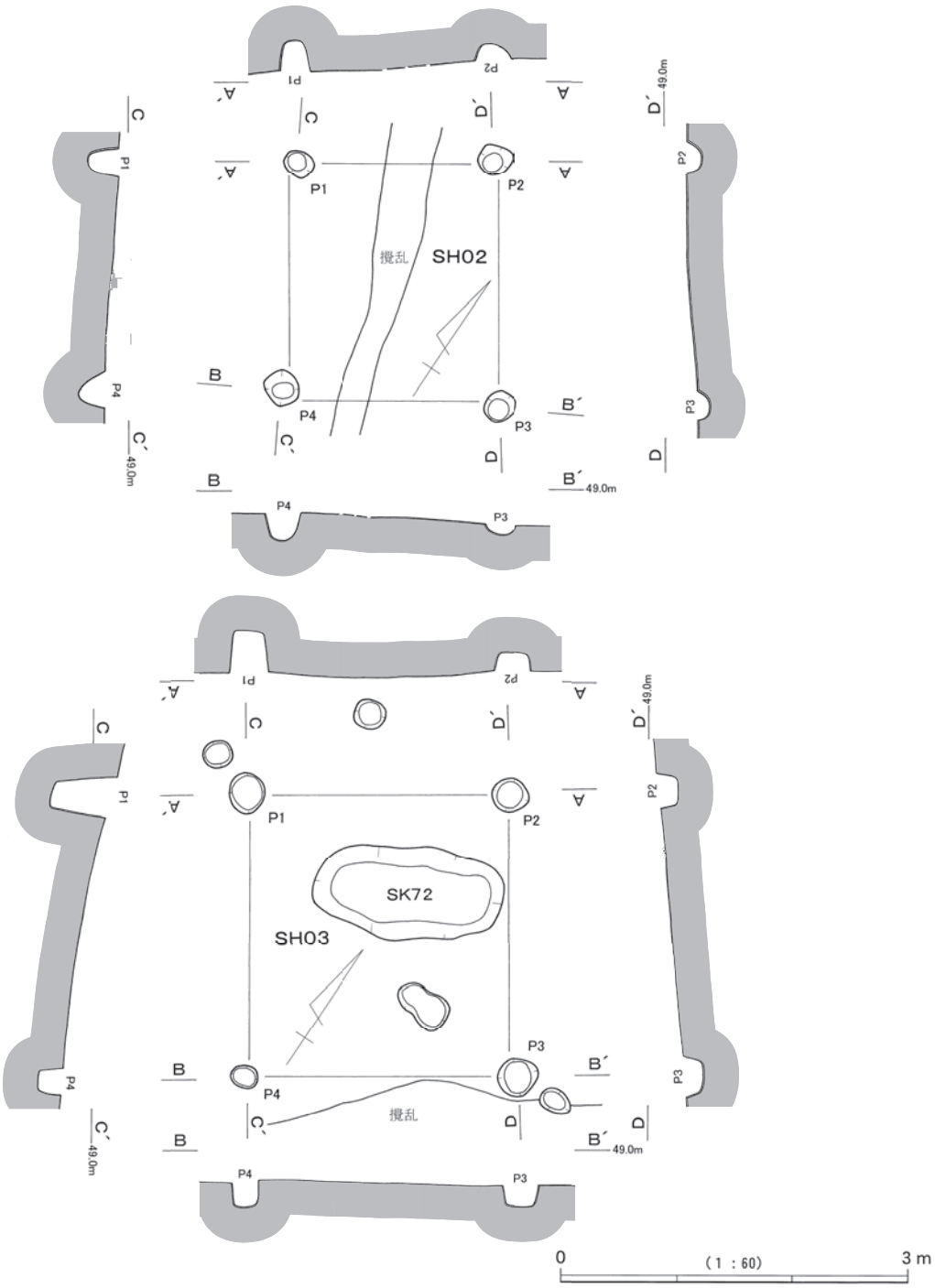
位置　SH03は、２区G71・H71グリッドに位置する。

特徴　SH03は主柱穴のみの確認であり、建物の平面形は不明であるが、隅丸方形あるいは方形の建物で、竈を伴うものであった可能性が高い。床面の貼床の有無については不明である。

主柱穴は４本分確認でき、すべてやや不整形な円形である。主柱穴から想定する建物の主軸はN-33°-Wである。主柱穴間の距離は、Ｐ１-Ｐ２間で約2.3m、Ｐ４-Ｐ３間で約2.3m、Ｐ１-Ｐ４間で約2.45m、Ｐ２-Ｐ３間で約2.45mであり、東西と南北で同距離となっており、規格性の高い建物であった可能性が高い。

出土遺物　SH03から出土遺物はない。

時期　SH03は出土遺物がなく時期を特定できないが、竪穴建物である可能性が高い点を重視すれば、炉を伴わない可能性が高いことからSH02同様古墳時代後期後半～奈良時代に位置づけられる可能性が高い。



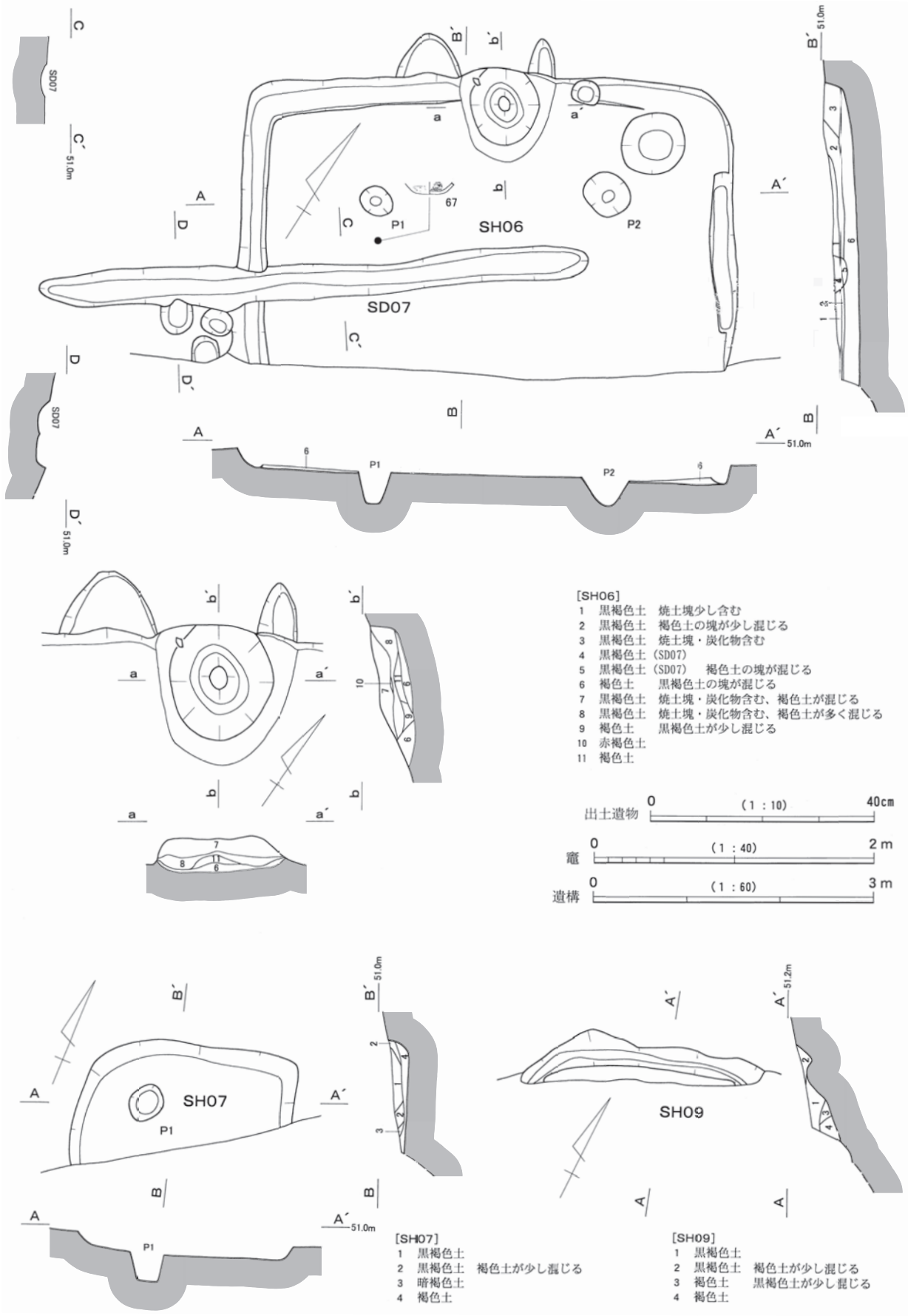
第26図　SH02・03　実測図

（３）６号竪穴建物（SH06，第27・28図，第８・14表，図版９・10・35）

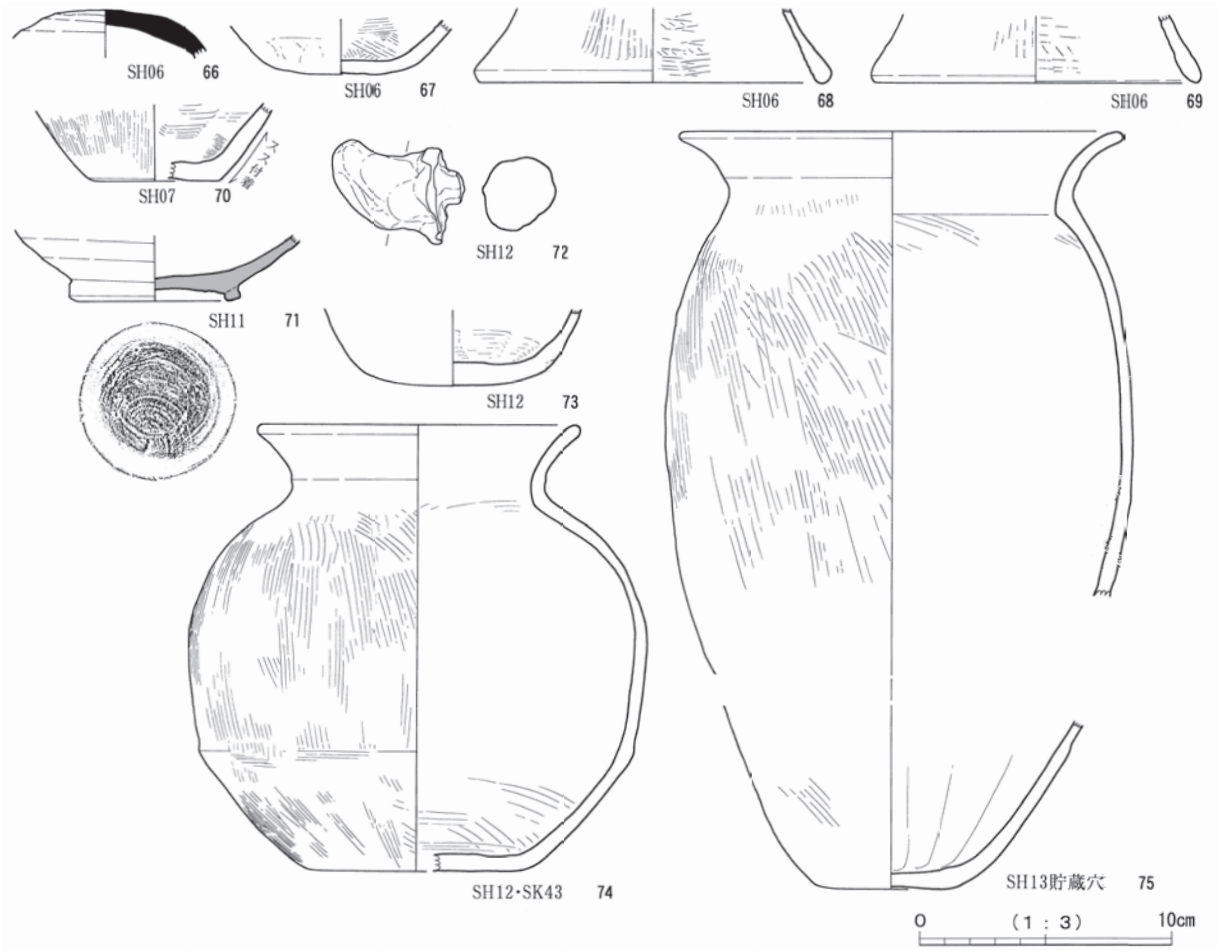
位置　SH06は２区Ｊ71・72グリッドに位置している。

特徴　SH06は南側ほぼ半分程度が失われているが、残存する北側部分から、竈を伴う竪穴建物であることが判明する。

SH06の平面形は方形で、壁際に壁溝を巡らせる。床面には貼床（６層）が行われている。建物の主軸は、N-32°-Wである。建物の規模は、東西（A-A′方向）で約5.3m、南北（B-B′方向）で3.2m以上である。主柱穴は２本分確認できる。Ｐ１-Ｐ２間距離は約2.5mである。壁溝の幅は最も広い箇所で約0.3mである。



第27図　SH06・07・09およびSD07　実測図



第28図　SH06・07ほか出土遺物実測図

竈は北辺の中央に造り付けられるもので、床面と同じ土砂を用いて袖としていた可能性が高い。竈の焚口中央はやや高く造られており（11層）、土製支脚等を用いず、土砂を柱状に高く積み上げて甕をかけるための支脚にしていた可能性がある。煙道は失われており不明である。竈の規模は、東西（a-a′方向）で約1.0m、南北（b-b′方向）で約1.0mである。

Ｐ２の北側の土坑がこの建物に伴う貯蔵穴の可能性が高く、この想定が正しければ北東隅角に貯蔵穴を持つ建物となる。平面形態は隅丸方形で、南北、東西ともに約0.65mである。

出土遺物　SH06からは、須恵器杯蓋（あるいは杯身）１点（66）、土師器甕１点（67）・大型台付甕の台部（あるいは鉢の口縁部）２点（68・69）が出土した。

須恵器杯蓋（あるいは杯身，66）は杯Ｈの天井部片である可能性が高い。土師器甕（67）は遠江形の甕の底部片で、底部は平底である。内面にはハケ調整、外面には指頭圧痕跡が残る。土師器大型台付甕２点（68・69）は、台端部を内側に折り返すもので、内面に斜め方向のハケ調整、外面には縦方向のナデ調整を行っている。この２点は小片のため、流入した可能性が高い。

時期　SH06は、出土した須恵器杯蓋が形態的特徴から鈴木敏則氏による遠江須恵器編年（鈴木敏2001・2004以下，遠江須恵器編年については当文献による）の遠江Ⅳ期前半（７世紀前半）に位置づけられる可能性が高く、古墳時代終末期前半に帰属する可能性が高い。

（４）７号竪穴建物（SH07，第27・28図，第８・14表，図版11・35）

位置　SH07は、２区Ｉ70・71グリッドに位置する。

特徴　SH07は、隅丸方形の竪穴建物（竪穴状遺構）である。竈を伴わない可能性が高い。規模が小さく、竈を伴わないという特徴から判断して、浜松市浜北区の東原遺跡（静岡埋文研2007a）などで検出されたような小型の竪穴建物の可能性が高い。

建物の主軸は、小穴（柱穴，Ｐ１）を確認したが、主柱穴の１本であると断定できない。床面には貼床（４層）が行われた可能性が高い。壁溝は確認できない。竪穴建物の主軸はN-11°-Wである。規模は南北で1.4m以上、東西で約2.35mである。

竈・貯蔵穴等は確認できない。

出土遺物　SH07の覆土中から土師器甕（70）が出土した。

70は遠江型甕の底部片で、平底である。外面には縦方向のハケ調整、内面には横方向のハケ調整が行われている。

時期　SH07は出土した土師器甕から古墳時代後期末（６世紀末）～平安時代（11世紀）に位置づけられる可能性が高い。

（５）９号竪穴建物（SH09，第27図，第８表）

位置　SH09は、２区Ｉ70グリッドに位置する。

特徴　SH09は竪穴建物の可能性のあるもので、竪穴建物とは断定できない。壁溝は通常床面と同一の高さから掘り込まれる、あるいは、貼床が行われない範囲で、床面よりも低い位置にあることが多いが、この溝状遺構（２層）は想定される床面（４層下面）よりは高い位置にあることから、別遺構の可能性がある。この想定が正しければ１・３・４層が堆積する掘方内部が竪穴建物の可能性がある。残存状況が良好ではないため、平面形態などは不明確であるが、隅丸方形であった可能性が高く、SH07のような竈を伴わない小型の建物の可能性もある。

建物とした場合の主軸はN-67°-Eで、他の建物（SH02・03・06・07）と主軸方位はほぼ同一である。規模は東西2.6m以上、南北0.9m以上である。

出土遺物　SH09からの出土遺物はない。

時期　SH09が竪穴建物とするならば、炉が確認できないことから竈が失われたと判断し、古墳時代後期～平安時代の一時期に位置づけられる可能性が高い。

（６）10号竪穴建物（SH10，第29図，第８表）

位置　SH10は２区Ｉ69グリッドに位置する。SH11と重複関係にあるが、先後関係を明らかにすることはできない。SH11とともに当該時期に位置づけられる可能性が高い。

特徴　SH10の平面形は方形あるいは隅丸方形の建物（竪穴状遺構）であった可能性が高い。貼床の有無については不明である。主軸はN-30°-Wであった可能性が高い。東西約2.55m、南北0.55m以上である。主柱穴・竈・貯蔵穴は確認できない

出土遺物　SH10から出土遺物はない。

時期　SH10は、SH11とほぼ同位置で同様の規模であることから、当該期の竪穴建物である可能性が高い。その仮定が正しいとすれば、古墳時代後期～平安時代の一時期の帰属する可能性が高い。

（７）11号竪穴建物（SH11，第28・29図，第８・14表，図版11・35）

位置　SH11は、２区Ｉ69グリッドに位置する。SH10と重複関係にあるが、先後関係は確認できなかった。

特徴　SH11は南側が失われている。規模は小さく、SH07同様小型の竪穴建物（竪穴状遺構）であっ

た可能性が高い。建物の平面形は隅丸方形であり、床面には貼床（３層）が行われた可能性が高い。建物の主軸は、N-32°-Wである。規模は南北（C-C′方向）で1.35m以上、東西（A-A′方向）で約2.2mである。

主柱穴と想定する柱２本分が確認できるが、この建物に伴わない可能性もある。Ｐ１-Ｐ２間距離は約1.0mであり、Ｐ２には柱痕が残る。柱は断面円形であった可能性が高い。

出土遺物　SH11からは主柱穴と想定する柱穴（Ｐ１）の上部から灰釉陶器碗（71）が出土した。

碗（71）は、潰れた三角高台で、底面には糸切痕を残す。胎土の特徴から、浜松市浜北区宮口地区で確認される宮口（浜北）古窯群産（以下，宮口産）で、底部の特徴から松井一明氏による宮口窯編年Ⅲ－２期（10世紀中頃）に位置づけられる可能性が高い（松井1989）。

時期　SH11は出土した灰釉陶器がこの建物に伴うとすれば、平安時代中期に位置づけられるが、建物の形状からすれば、奈良時代に帰属する可能性もある。

（８）12号竪穴建物（SH12，第28・29図，第８・14表，巻頭図版９，図版10・35）

位置　SH12は２区H68グリッドに位置する。SB03などと重複関係にあるが、SH12の大部分が失われており、前後関係は確認できなかった。

特徴　SH12は壁溝を検出したことで確認した建物（竪穴状遺構）である。竪穴建物との想定が正しければ、床面には貼床（４層）を行っていた可能性が高い。

建物とすれば、平面形は方形である。壁溝の幅が広く0.5mある部分もある。

なお、このほか西側隅角付近でU字形の焼土を確認した。竈としては小さいため、別の用途に使用されたものや、建物が焼失した際の焼土の可能性も残る。

遺物出土状況　壁溝と想定する溝内から土師器壺（74）と甕（73）が重なるように出土した。また、覆土中から土師器甑の把手（72）が出土した。

出土遺物　土師器甕１点（73）と壺１点（74）、甑１点（72）を図示した。

土師器甕（73）は平底に近い丸底で、胴部は内湾しながら立ち上がる。壺（74）はほぼ完形に復原できるく字形の単純口縁壺である。胴部は、肩部がやや張り、下半には製作段階での小休止と想定される稜線部分が確認できる。底部は平底である。外面には斜め・縦方向のハケ調整、内面にもハケ調整が行われている。口縁部は頸部から逆ハ字形に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられている。なお、この壺の底部が20m以上離れたSK43から出土しており、何らかの理由によりこの破片がSK43付近まで移動して混入した可能性が高い。

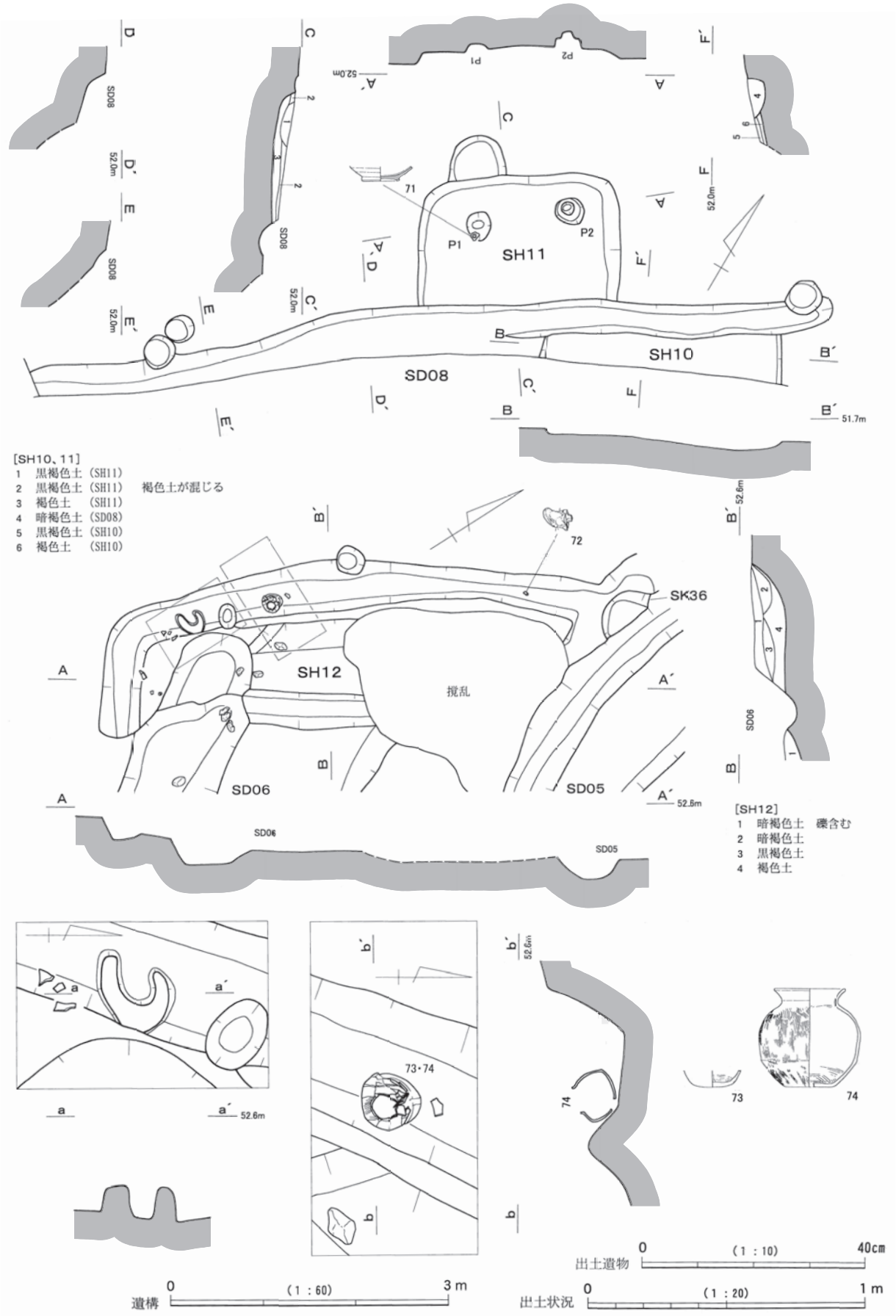
甑把手（72）は角状のものである。

時期　SH12は竪穴建物との想定が正しければ、出土した土師器は遠江Ⅴ期前半を前後する時期に位置づけられる可能性が高い（鈴木敏1998）ことから、古墳時代終末期～奈良時代に位置づけられる可能性が高い。

（９）13号竪穴建物（SH13，第28・30図，第８・14表，巻頭図版９，図版９・10・35）

位置　SH13は２区G72・H72グリッドに位置する。SB14などと重複関係にあるが、前後関係については明確にすることができなかった。

特徴　SH13は竈を持つ平面方形の竪穴建物である。建物の主軸は、N-33°-Wである。規模は南北（C-C′方向）で5.7m前後、東西（A-A′方向）約5.5mである。主柱穴は４本分確認でき、やや不整形な方形である。主柱穴間距離は、Ｐ１-Ｐ２間で約2.8m、Ｐ４-Ｐ３間で2.7m、Ｐ１-Ｐ４間で約2.75m、Ｐ２-Ｐ３間で約2.7mである。



第29図　SH10～12　実測図

竈は、建物の北辺の中央に造り付けられたもので、袖は粘土を用いて造られている。煙道は確認できない。竈の規模は東西で約1.3m、南北で約0.9mである。床面には貼床（５層）が行われている。

貯蔵穴は北東側隅角で確認できる。貯蔵穴の平面形は隅丸方形であり、東西約0.65m、南北約0.7m、深さ約0.35mである。貯蔵穴の位置はSH06と同様であり、北垣遺跡の古墳時代から平安時代にかけての竪穴建物では竈に向かって右側の隅角に貯蔵穴を配置する決まり（習慣）があった可能性がある。

貯蔵穴内には焼土が多く含まれる層序（10層）が確認できることから、火災などにより貯蔵穴内に焼土が入り込んだ可能性がある。

遺物出土状況　貯蔵穴内から土師器甕（75）が出土した。接合できない部分があるが、本来は完形で貯蔵穴に据えられていた可能性が高い。

出土遺物　土師器甕（75）を図示した。

75は遠江型の甕であり、底部は平底である。胴部は肩が張らず細長い胴部で、口縁部は逆ハ字形に外反しながら立ち上がる。外面は斜め方向のハケ調整、内面下部はケズリ調整、上部はハケ調整が行われている。

時期　時期を特定することは難しいが、土師器甕は肩が張らない細長い胴部であること、口縁部がく字形であることから判断して、遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前半頃に位置づけられる可能性が高く（鈴木敏1998）、７世紀前半を前後する時期に位置づけられよう。

この想定が正しければ、北側の丘陵上で横穴墓が盛んに形成されている時期であり、それらを直接見ることができる位置にあることから、横穴墓の築造集団との関係があった可能性がある。

３　掘立柱建物

掘立柱建物の時期を決定するのは難しいため、それぞれの掘立柱建物を構成する柱穴から出土した遺物の中に中世以降の遺物が存在せず、かつ土師器や須恵器が出土したものを古墳時代後期～平安時代の建物と認定した。この条件に基づき認定した、この時期の掘立柱建物は21棟である。

（１）１号掘立柱建物（SB01，第31図，第９表，巻頭図版６，図版12）

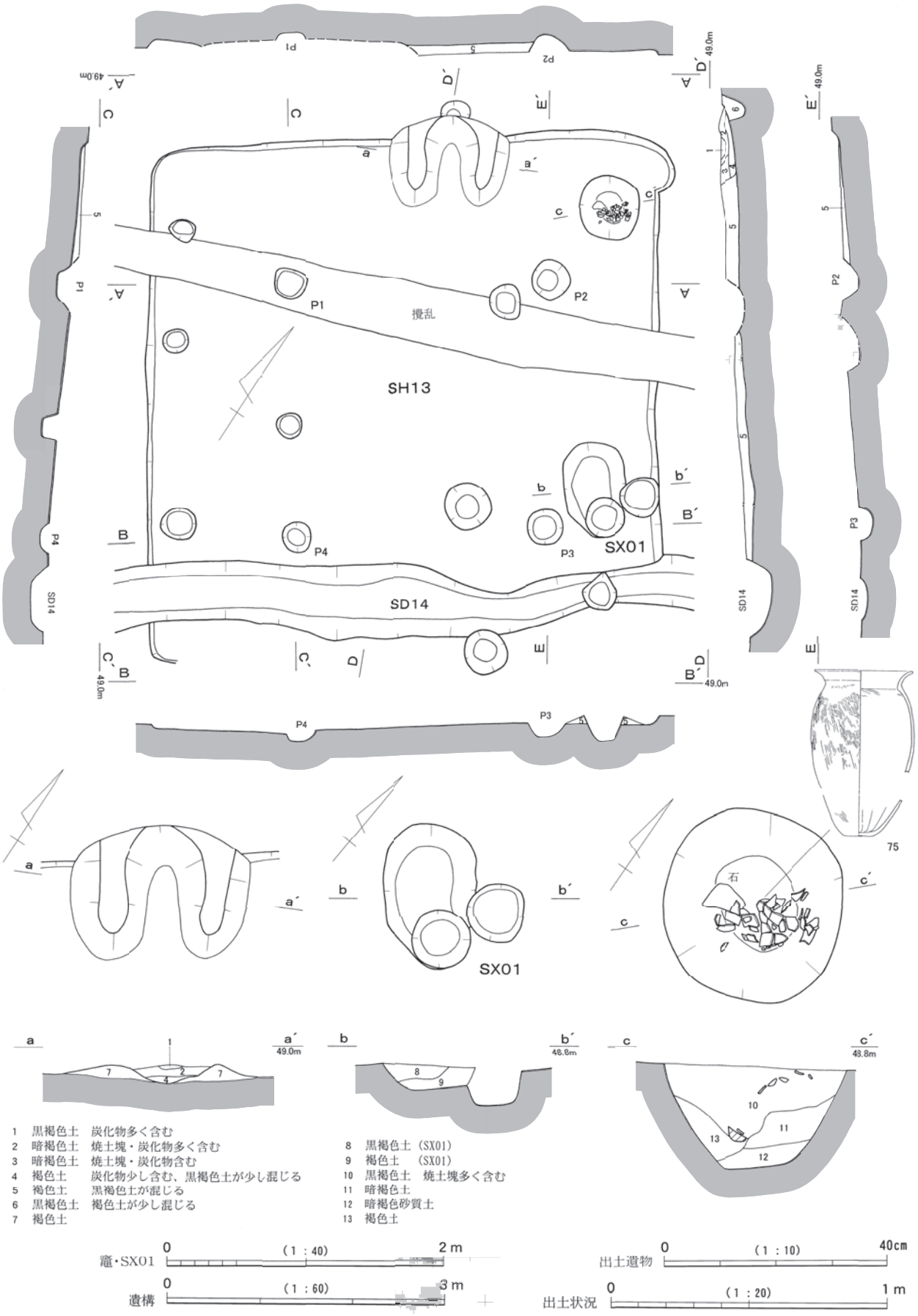
位置　SB01は２区K72グリッドに位置する。

特徴　SB01は梁間２間×桁行２間の、約3.8×3.8mのほぼ正方形の総柱建物（P１～P９で構成）であり、建物の主軸はN-41°-Wであり、棟の方向は不明確である。梁と桁はやや斜交する。梁間に対する桁行の比率はほぼ１：１である。梁と梁は直交し、梁、桁ともにやや柱筋が通らないものがあるが、ほぼ一直線に柱が配置され、各柱はほぼ正対している。柱間は南北（北西-南東）でP１-P７間は、北側から2.0m、1.7m、P２-P６間は2.0m、1.8m、P３-P５間は2.1m、1.7m、東西（南西-北東）でP１-P３間は、西側から2.0m、1.8m、P８-P４間で2.0m、1.8m、P７-P５間で2.0m、1.8mである。中央柱列がやや西側によっているが、ほぼ1.8～2.0mを基準に建てられたと想定できる。

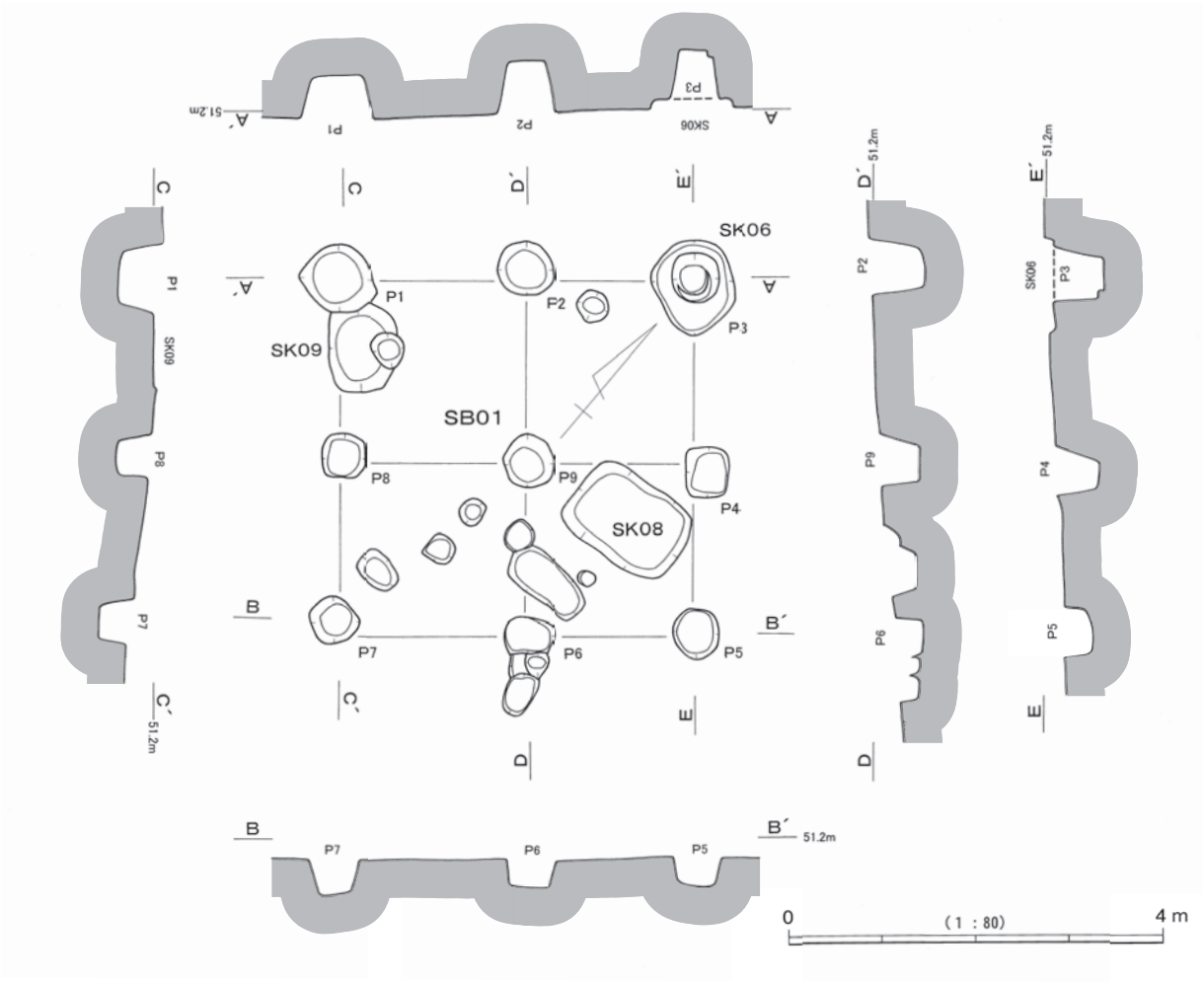
柱穴は方形、あるいは円形で、本来はP４・P８のように方形であった可能性が高い。大きさは0.4～0.8mで、深さはほぼ同標高まで掘削されており、一定している。柱穴内には根固め石は用いられていない。木柱は残存していないが、木柱の大きさはP３で推定でき、一辺0.3m程の角柱が使用されたと想定できる。SB01は規格性のある建物といえる。

出土遺物　SB01からは出土遺物はない。

時期　消極的な理由であるが、SB01は柱穴内から中世以降の遺物が出土していないことから、古墳時代後期～平安時代に位置づけられる可能性が高い。なお、SH06の主軸とほぼ一致していることから、この点でも同一時期である可能性を想定できる。



第30図　SH13およびSX01　実測図



第31図　SB01　実測図

（２）３号掘立柱建物（SB03，第32・33図，第９・14表，巻頭図版９，図版13・14・36）

位置　SB03は、２区H68・69、Ｉ69グリッドに位置する。

特徴　SB03は桁の一列を確認しただけで、南側の柱については攪乱で失われている。

建物の主軸はN-41°-Eであり、棟は北東-南西へ向ける。桁は３間であり、約5.6mである。

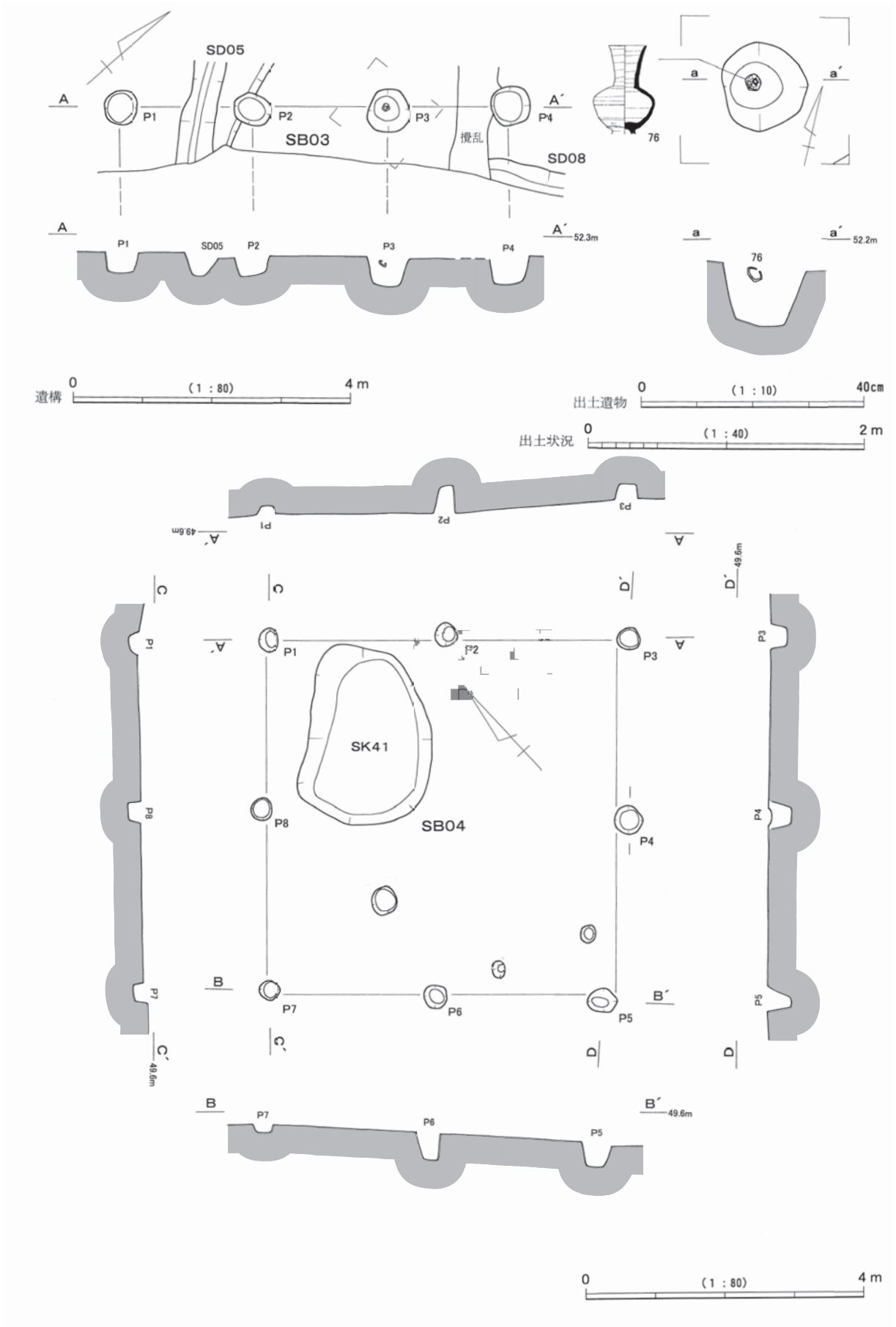
柱穴はやや不整形な隅丸方形あるいは円形で、直径約0.4～0.6mであり、深さはほぼ一定である。柱間は南西から南東で2.0m、1.9m、1.8mでほぼ一定である。根固め石は用いられていない。木柱は残存していないが、柱穴の形状から判断して角柱が使用されたと想定できる。

SB03は柱間や、柱の掘削深度（根入れの深さ）が一定であることから、規格性の高い掘立柱建物といえる。なお、SB01同様総柱建物であった可能性がある。

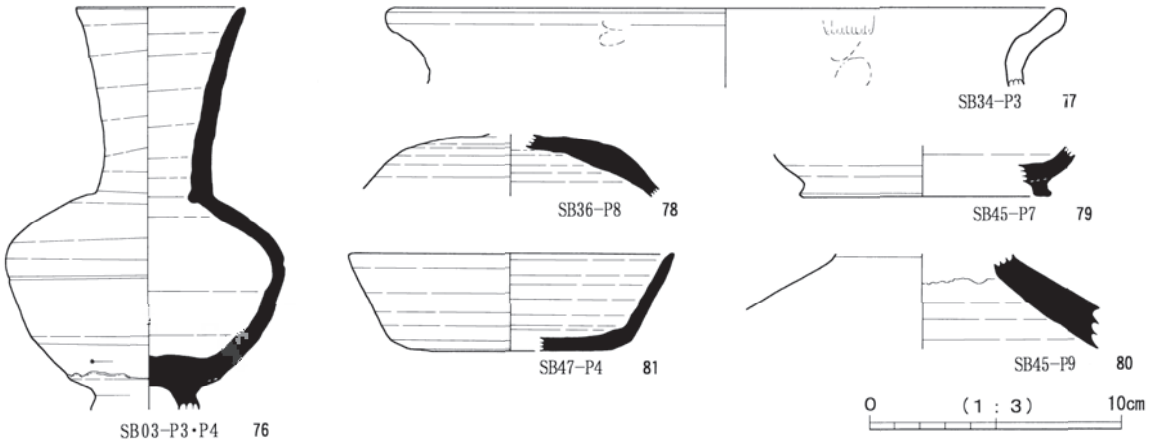
出土遺物　SB03-Ｐ３で須恵器台付長頸壺（76）が出土した。この須恵器はＰ４から出土した破片とも接合されており柱を抜いた時に紛れ込んだ可能性がある。この他、土師器小片が出土した。

76は台付長頸壺の胴部～口縁部である。頸部～口縁部は胴部から逆ハ字形に立ち上がり、口縁部は丸く仕上げられる。胴部は肩の張る扁平な球胴で、肩部直下に凹線を巡らせる。台部は高台状ではなく、ハ字形に垂下するやや高い台部が取り付けられていた可能性が高い。胎土から判断して、湖西産である可能性が高い。

時期　SB03は出土した須恵器（76）が建設時期を示しているとすれば、遠江編年Ⅳ期前半～末葉、古墳時代終末期に位置づけられる可能性があるが、柱の抜き取り時の混入とすれば、若干時期が下り、



第32図　SB03・04　実測図



第33図　古墳時代後期～平安時代の掘立柱建物出土遺物実測図

奈良時代～平安時代の可能性がある。報告者は古墳時代終末期の可能性が高いと想定している。

（３）４号掘立柱建物（SB04，第32図，第９表）

位置　SB04は、２区G70・H70グリッドに位置する。

特徴　SB04は２×２間の、約4.8×5.1mのほぼ正方形の建物（P１～P８で構成）で、主軸をN-42°-Eに向け、棟は北東-南西に向けていた可能性が高い。梁の桁に対する割合は、１：1.1である。梁と桁はやや斜交する。身舎柱はほぼ正対する位置に配置されるが、ややずれている。桁、梁ともに柱筋はややずれる。柱間距離は梁の北側で西側から2.6m、2.6m、南側で2.4m、2.4mであり、桁の西側で北から2.4m、2.6m、東側で2.6m、2.6mである。梁・桁ともに柱筋は通らない。身舎柱は正対しない。

柱穴はやや不整形な円形で、直径0.3～0.4mであり、深さについて桁はほぼ一定であるが、梁は東側が深くなっている。いずれも根固め石は用いられていない。木柱は残存していないが、柱穴の形状から丸太が使用されたと想定できる。

SB04は柱間の距離や柱筋が通らないことから判断して、規格性の低い建物である。

出土遺物　SB04からは土師器小片が出土したのみである。図化していない。

時期　SB04は、消極的な理由であるが、出土した遺物に中世以降の遺物が含まれないことから、古墳時代後期～平安時代の一時期に帰属する可能性が高い。

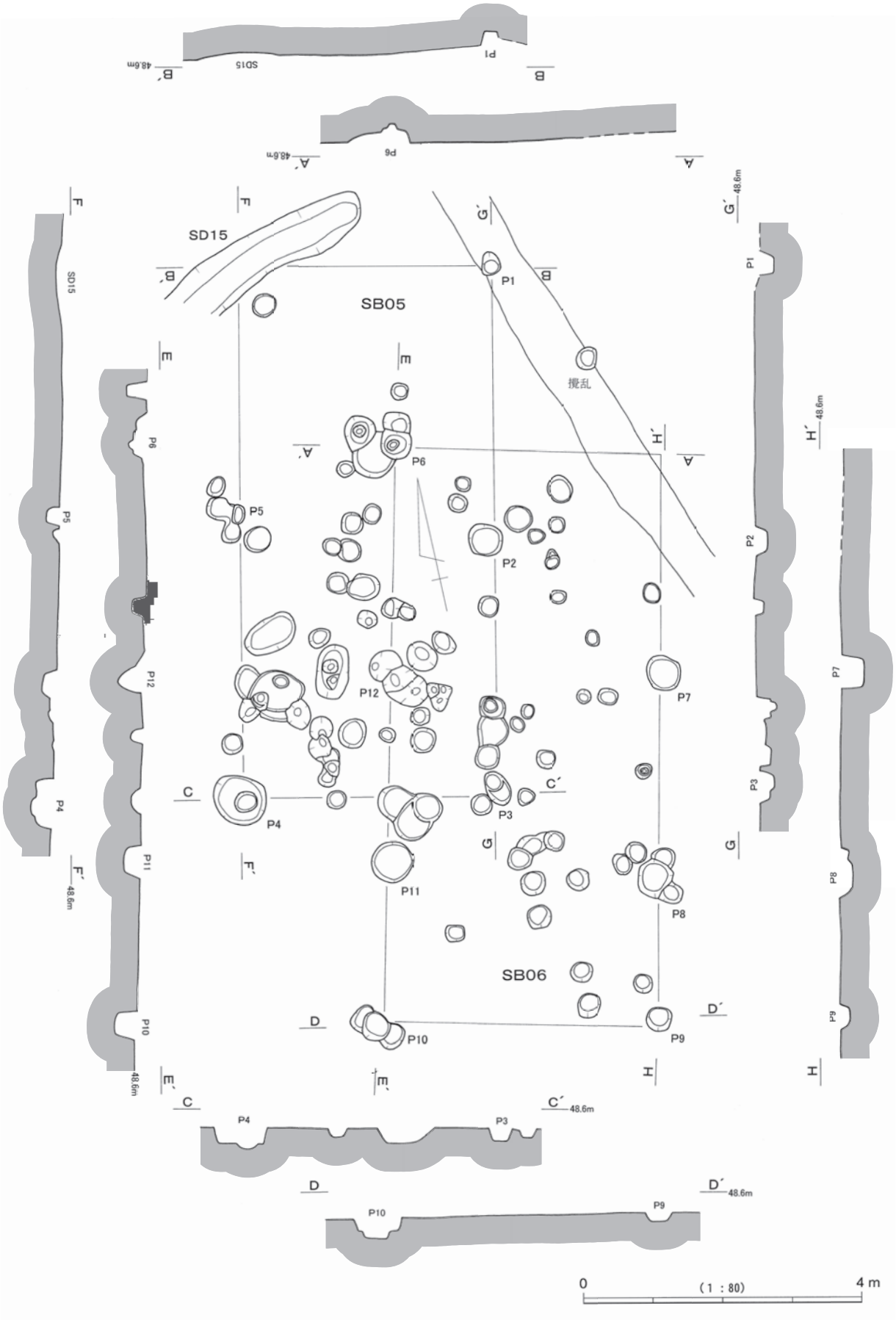
（４）６号掘立柱建物（SB06，第34図，第９表）

位置　SB06は２区F73、G73・74グリッドに位置する。

特徴　SB06は１×３間、約4.0×8.6mの南北に長い長方形の建物（P６～P12で構成）で、主軸をN-13°-Eに向け、棟は南北に向けていた可能性が高い。梁と桁は直交していた可能性が高い。桁の柱筋はややずれている。梁間に対する桁行の割合は１：2.2である。梁と桁はやや斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から3.4m、2.6m、2.6mで、東側で3.2m、3.0m、2.0mであり、梁の北側で3.8m、南側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.6m、深さ0.2～0.3mでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P６には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB06は建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。



第34図　SB05・06　実測図

出土遺物　SB06の柱穴からは灰釉陶器片などが出土しているが、図化できない小片である。

時期　SB06は、灰釉陶器が出土しているため、平安時代中期以降の建物である可能性が高い。消極的ではあるが、柱穴からは灰釉陶器以降の遺物が出土していないことから平安時代中期～後期の建物と想定しておきたい。

なお、SB05については時期不明であるため、本章第６節２（49)、164頁で報告する。

（５）11号掘立柱建物（SB11，第35図，第９表）

位置　SB11は２区Ｇ73グリッドに位置し、SB06・SB05と切合関係にあり、SB05は中世以降の建物の可能性が高いことからSB05よりは先行する。SB06との先後関係は柱穴の切合関係がなく不明である。

特徴　SB11は１×２間、約3.8×4.0ｍのほぼ正方形に近い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-28°-Eに向け、棟はほぼ南北（北北西-南南東）に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。梁と桁は斜交する。桁の柱筋はややずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から1.8ｍ、2.2ｍで、東側で1.8ｍ、2.4ｍであり、梁の北側で3.8ｍ、南側で3.7ｍであり、桁、梁でほぼ同一である。身舎柱はほぼ正対する位置に配置されている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、柱穴の形状から丸太が使用されたと想定できる。

SB11は建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB11の柱穴から土師器小片が出土しているが、図化できない。

時期　消極的な理由であるが、中世以降に下る可能性があるものの、SB11からは土師器小片以外は出土していないことから、古墳時代終末期～平安時代の一時期の可能性が高い。

（６）14号掘立柱建物（SB14，第35図，第９表，図版20）

位置　SB14は２区Ｇ72グリッドに位置し、SH13・SB15などの重複関係にある。SH13との前後関係は不明であるが、SB15は中世以降の建物である可能性が高いことから、SB15よりは先行する可能性が高い。

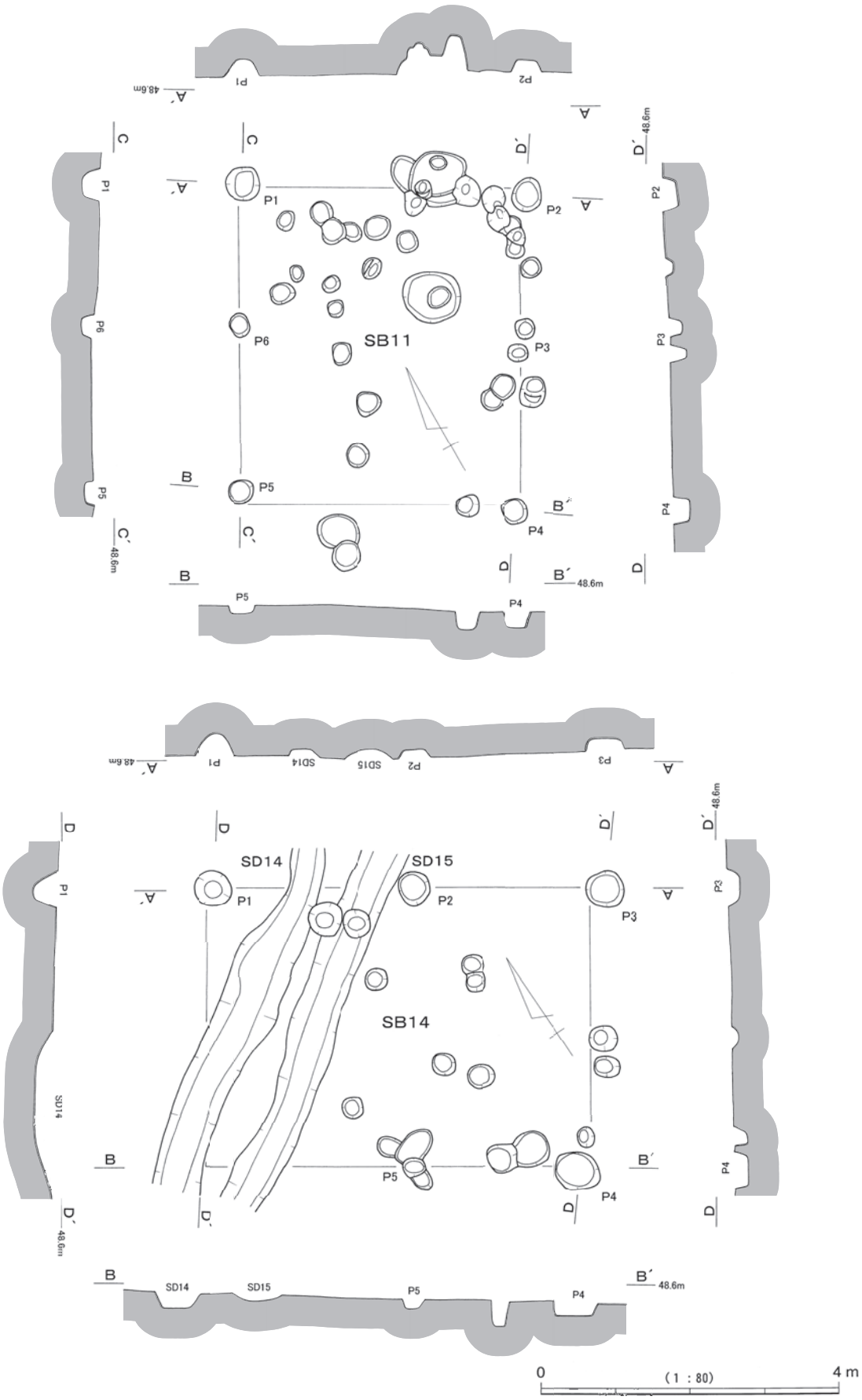
特徴　SB14は１×２間、約3.8×5.4ｍの東西に長い長方形の建物（Ｐ１～Ｐ５で構成）で、主軸をN-56°-Wに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4である。梁と桁は斜交する。桁の柱筋は一直線であった可能性が高い。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.8ｍ、2.6ｍで、南側で2.8ｍ、2.2ｍであり、梁の西側で3.7ｍ前後（推定)、東側で3.8ｍである。身舎柱はほぼ正対位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は約0.3～0.6ｍ、深さ0.1～0.3ｍである。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、柱穴の形状から丸太が使用されたと想定できる。

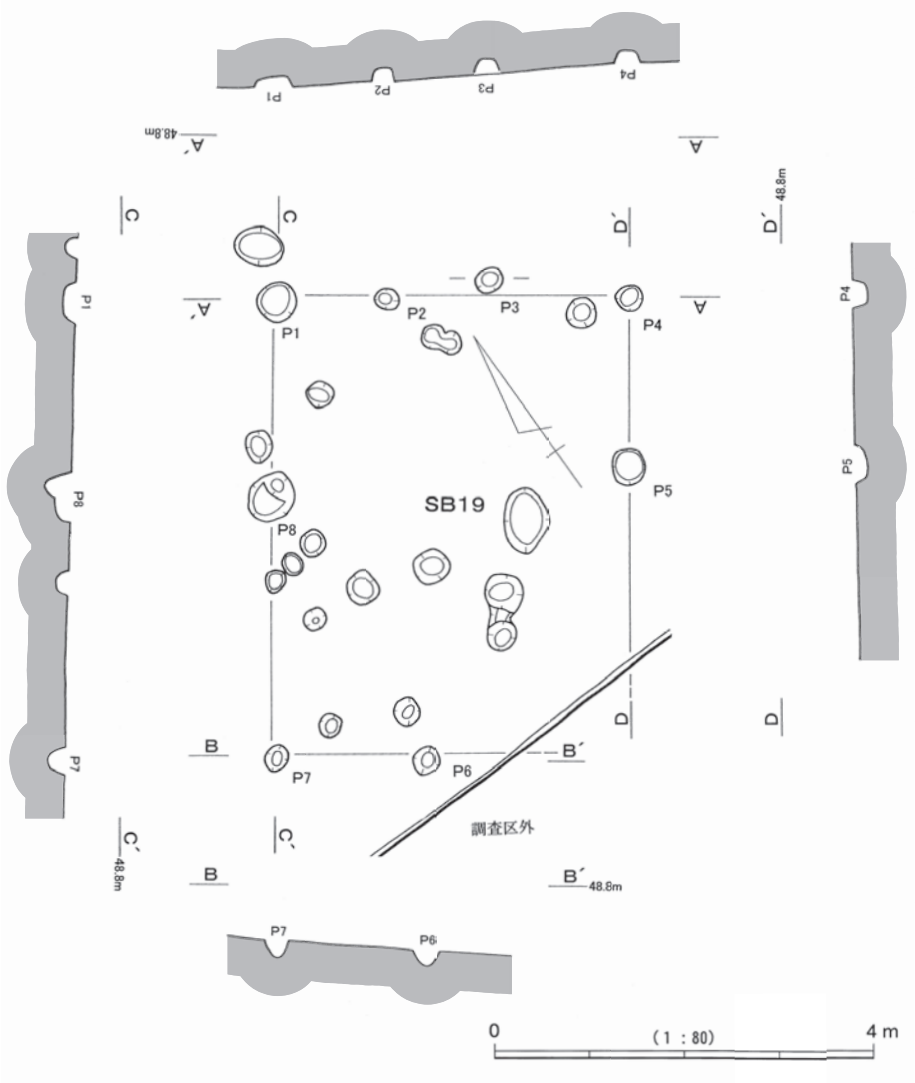
SB14は建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB14からは灰釉陶器小片が出土したのみである。小片のため図化できない。

時期　SB14は中世以降に下る可能性があるものの、消極的な理由であるが、灰釉陶器以外の遺物が出土していないことから、平安時代に位置づけられる可能性が高い。



第35図　SB11・14　実測図



第36図　SB19　実測図

（７）19号掘立柱建物（SB19，第36図，第９表）

位置　SB19は、２区Ｆ71グリッドに位置する。SB18と重複関係にあり、SB18が中世以降に位置づけられることからSB18より遡る可能性が高い。

特徴　SB19は２×３間、約3.8×4.8mのやや南北に長い建物（P１～P８で構成）で、主軸をN-35°-Eに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.3である。梁と桁はやや斜交する。柱筋は桁、梁ともにずれている。柱間の距離は、梁の北側で、西側から1.1m、1.1m、1.5mで、南側で1.6m、2.2m前後であり、桁の西側で北側から2.2m、2.6m、東側で1.8m、3.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できず、ややずれた位置に配置されている。梁の南側が２間であることから、南側に出入口が設けられていた可能性が想定できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.6m、深さ0.1～0.2mでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、柱穴の形状から丸太が使用されたと想定できる。

SB19は建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

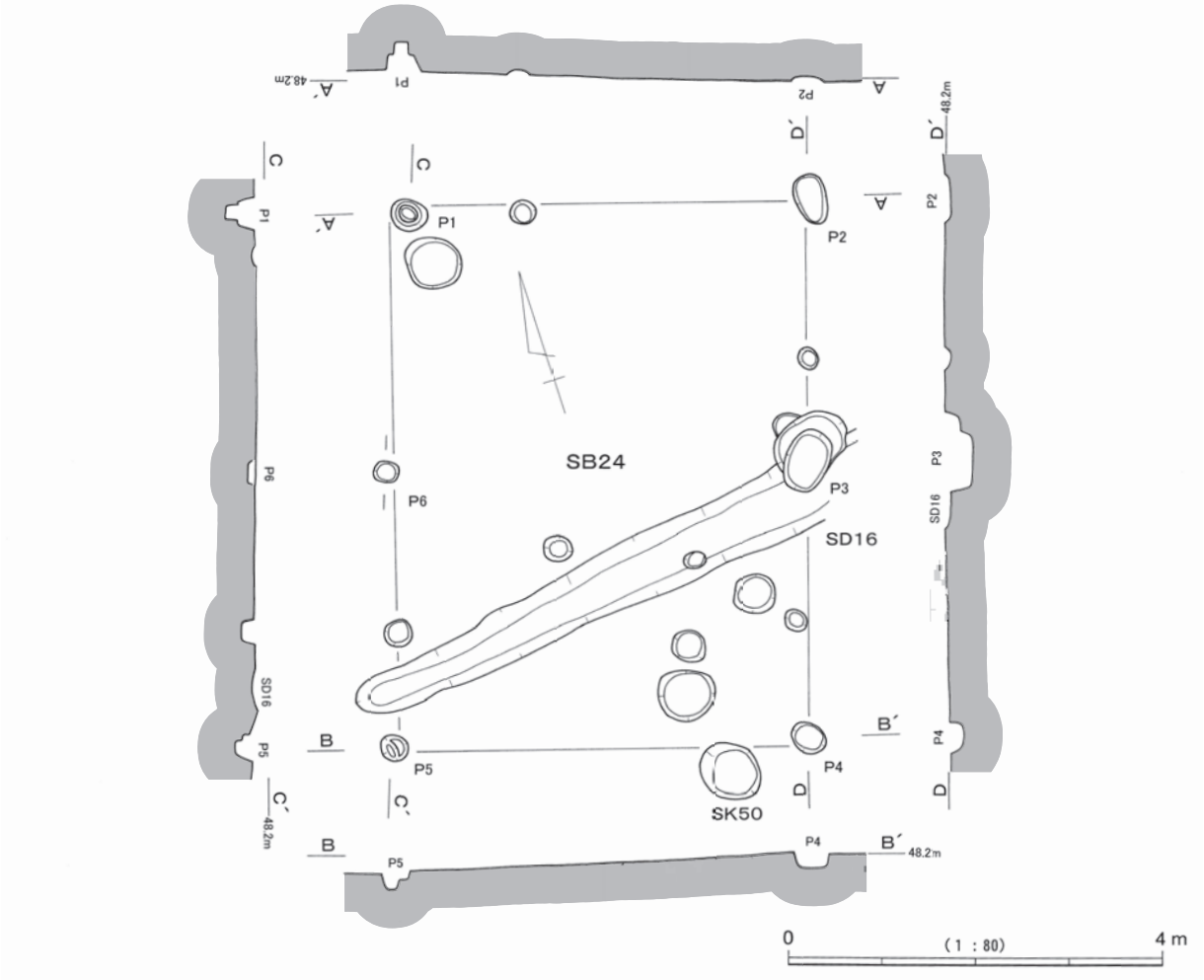
出土遺物　SB19からは土師器小片と想定する破片が出土したのみである。図化できなかった。

時期　消極的な理由であるが、SB19は中世以降に下る遺物が出土していないことから、古墳時代終末期～平安時代の可能性が高い。

（８）24号掘立柱建物（SB24，第37図，第９表）

位置　SB24は、２区Ｅ72・73、Ｆ73グリッドに位置する。SB25・SB26と重複関係にあるが、SB25・SB26より先に建設された可能性が高い。

特徴　SB24は１×２間、約4.4×5.8mの南北に長い建物（P１～P６で構成）で、主軸をN-17°-Eに



第37図　SB24　実測図

向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.3である。梁と桁は斜交する。桁は柱筋が通らない。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.8m、3.0mで、東側で2.8m、3.0mであり、梁の北側で4.4m、南側で4.4mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.6m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できない。木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ５には柱の痕跡が確認でき、約15～20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB24は建物の構造からみるとやや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB24からは須恵器小片、土師器小片などが出土したのみで、図化できない。

時期　SB24は、消極的な理由であるが、須恵器・土師器以降に降る遺物が出土していないことから、古墳時代後期～平安時代に位置づけられる可能性が高い。

（９）28号掘立柱建物（SB28，第38図，第９表）

位置　SB28は２区Ｅ72グリッドに位置する。SB27と重複関係にあるが、SB27よりは遡る可能性が高い。

特徴　SB28は２×２間、約3.6×3.8mのほぼ正方形に近い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-39°-Eに向け、棟の方向は明確ではない。柱筋は各辺ともにややずれている。梁間に対する桁行の割合

はほぼ１：１である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、北西側で、北側から1.6m、2.0mで、東側で1.8m、2.0mであり、北側で1.6m、2.0mである。身舎柱は北西側－南東側でほぼ正対する位置に配置されているが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.3m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、柱穴の形状から丸太が使用されたと想定できる。

SB28は、建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB28からは、須恵器片が出土しているが図化できない。

時期　SB28は、消極的な理由であるが、須恵器より新しい遺物が出土していないことから、古墳時代後期～奈良時代に帰属する可能性が高い。

（10）31号掘立柱建物（SB31，第38図，第９表）

位置　SB31は３区東側Ｃ72・Ｄ72グリッドに位置する。SB30と重複関係にあり、SB30よりは古い可能性が高い。

特徴　SB31は２×２間、約3.9×4.1mのほぼ正方形に近い建物（Ｐ１～Ｐ８で構成）で、主軸をN-62°-Eに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。梁と桁は直交する。柱筋は桁、梁ともにややずれている。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.2m、1.5mで、東側で2.3m、1.6mであり、梁の北側で西側から2.0m、2.0m、南側で1.8m、2.3mである。身舎柱は対称位置に確認できるが、南側の柱（Ｐ６）が中心からずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.7m、深さ0.1～0.3mでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB31は柱筋が通らない部分があることから、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB31からは灰釉陶器片などが出土したが、小片のため図化できない。

時期　SB31は消極的な理由であるが、灰釉陶器よりも新しい遺物が出土していないことから、平安時代に位置づけられる可能性が高い。

（11）34号掘立柱建物（SB34，第33・39図，第９・14表，図版36）

位置　SB34は、２・３区Ｃ72・73、Ｄ72・73グリッドに位置する。SB35・36と重複関係にあるが、SB36よりは古い可能性が高く、SB35との前後関係は不明である。

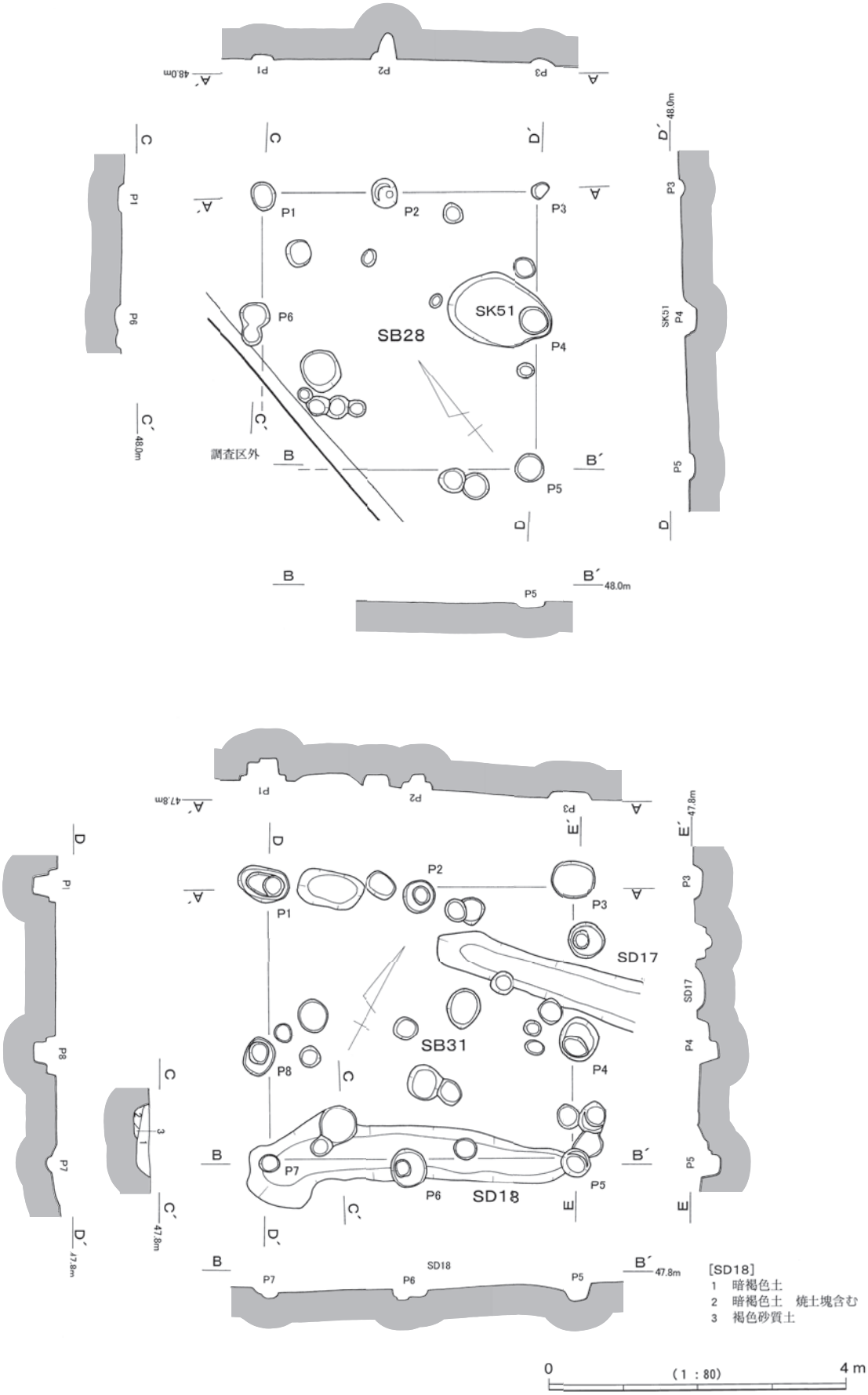
特徴　SB34は１×２間、約4.0×3.8mのほぼ正方形に近い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-13°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。梁と桁は斜交する。桁の柱筋はややずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.0m、1.8mで、南側で1.8m、1.8mであり、梁の西側で3.8m、東側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.05～0.3mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ２には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB34は、建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB34からは土師器片が出土したのみである。うち甕１点（第33図77）を図示した。

土師器甕（77）は遠江形のく字形口縁甕の口縁部片で、口縁部は逆ハ字形に向かって開き、口縁端部



第38図　SB28・SB31・SD18　実測図

は丸く仕上げられる。

時期　SB34は、消極的な理由であるが、土師器以外の遺物が出土していないことから、古墳時代後期～平安時代に位置づけられる可能性がある。土師器の口縁部のみでは時期は決定しがたいため、上記の一時期に帰属すると考えたい。

（12）35号掘立柱建物（SB35，第39図，第９表）

位置　SB35は、３区東側Ｃ72グリッドに位置する。SB34・36と重複関係にあるが、SB36よりは古く、SB34との前後関係は不明である。

特徴　SB35は２×２間、約3.2×3.4m（推定）のほぼ正方形に近い建物（Ｐ７～P12で構成）で、主軸をN-73°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。梁と桁はやや斜交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.6m、1.6mで、南側は不明である。梁は西側で北側から1.8m、1.4m、東側側で1.6m、1.6m（推定）である。梁の身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.6m、深さ0.2～0.3mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、P12には柱の痕跡が確認でき、約20cmの丸太が使用されたと想定できる。

SB35は建物の構造からみると、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB35からは土師器片などが出土しているが、小片のため図化できない。

時期　SB35は、消極的な理由であるが、中世以降の遺物が出土していないことから、古墳時代後期～平安時代の一時期に帰属する可能性が高い。

（13）36号掘立柱建物（SB36，第33・40図，第９・14表，図版36）

位置　SB36は３区東側Ｃ72・73グリッドに位置する。SB34・SB35と重複関係にあり、両者よりも新しい可能性が高い。

特徴　SB36は２×４間、約4.2×7.2mの東西に長い建物（Ｐ１～Ｐ９で構成）で、主軸をN-85°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.7である。梁と桁は斜交する。柱筋は桁、梁ともにずれている。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.7m前後、1.9m前後、1.9m、1.7mで、南側で1.7m、不明であり、梁の西側で北側から2.0m、2.0m、東側で2.0m、2.2m（推定）である。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な隅丸方形、円形で、一辺（直径）0.6～1.0m、深さ0.1～0.3mで一定していない。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB36は柱筋が通らないことから、規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB36からは、須恵器のほか、土師器片、灰釉陶器片が出土した。須恵器杯蓋（あるいは杯身，78）を図示したが、土師器・灰釉陶器は小片のため図化できない。

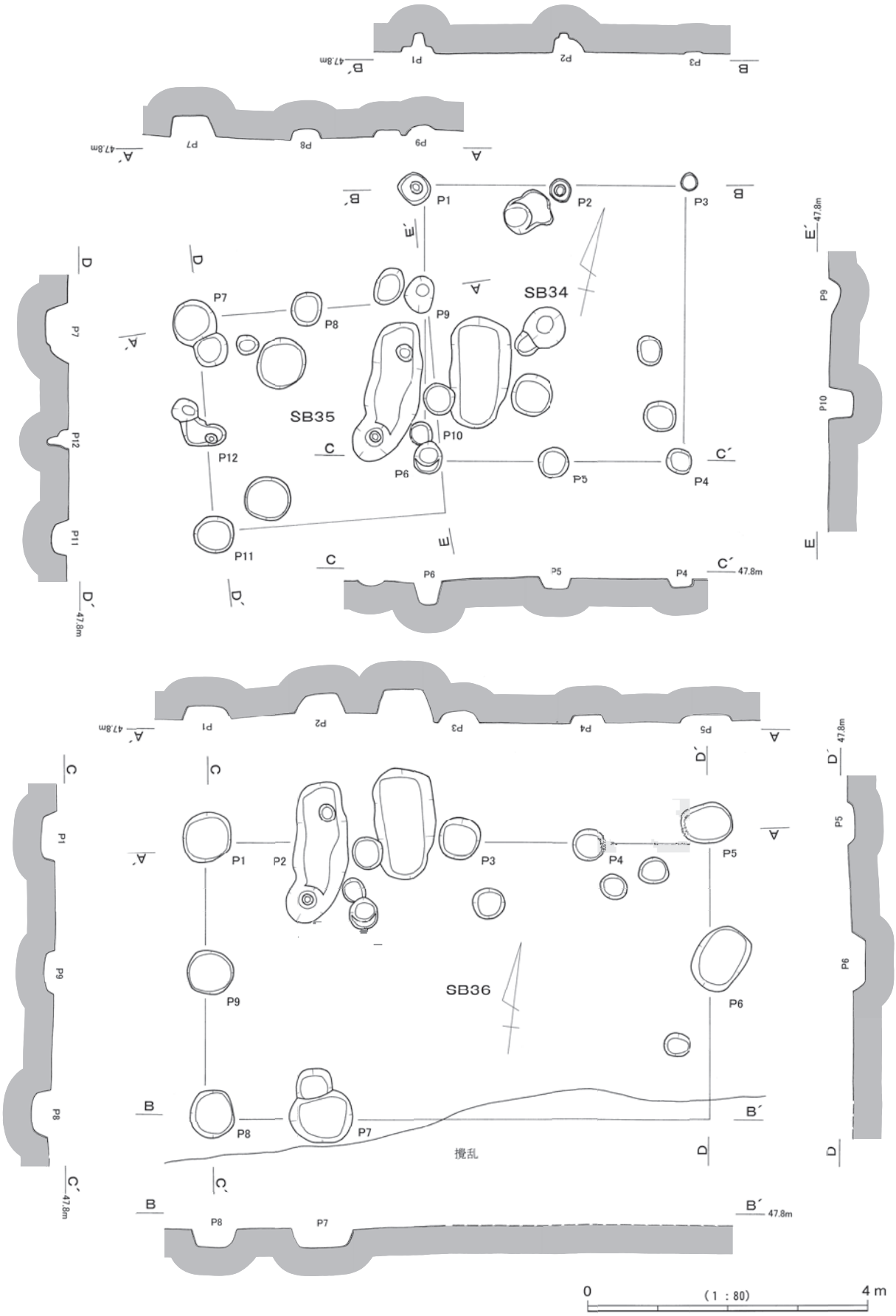
須恵器杯蓋（78）は天井部片で、古墳時代終末期頃に位置づけられようか。湖西産須恵器である。

なお、第３節で上述したように弥生土器を図示した（第25図52）。

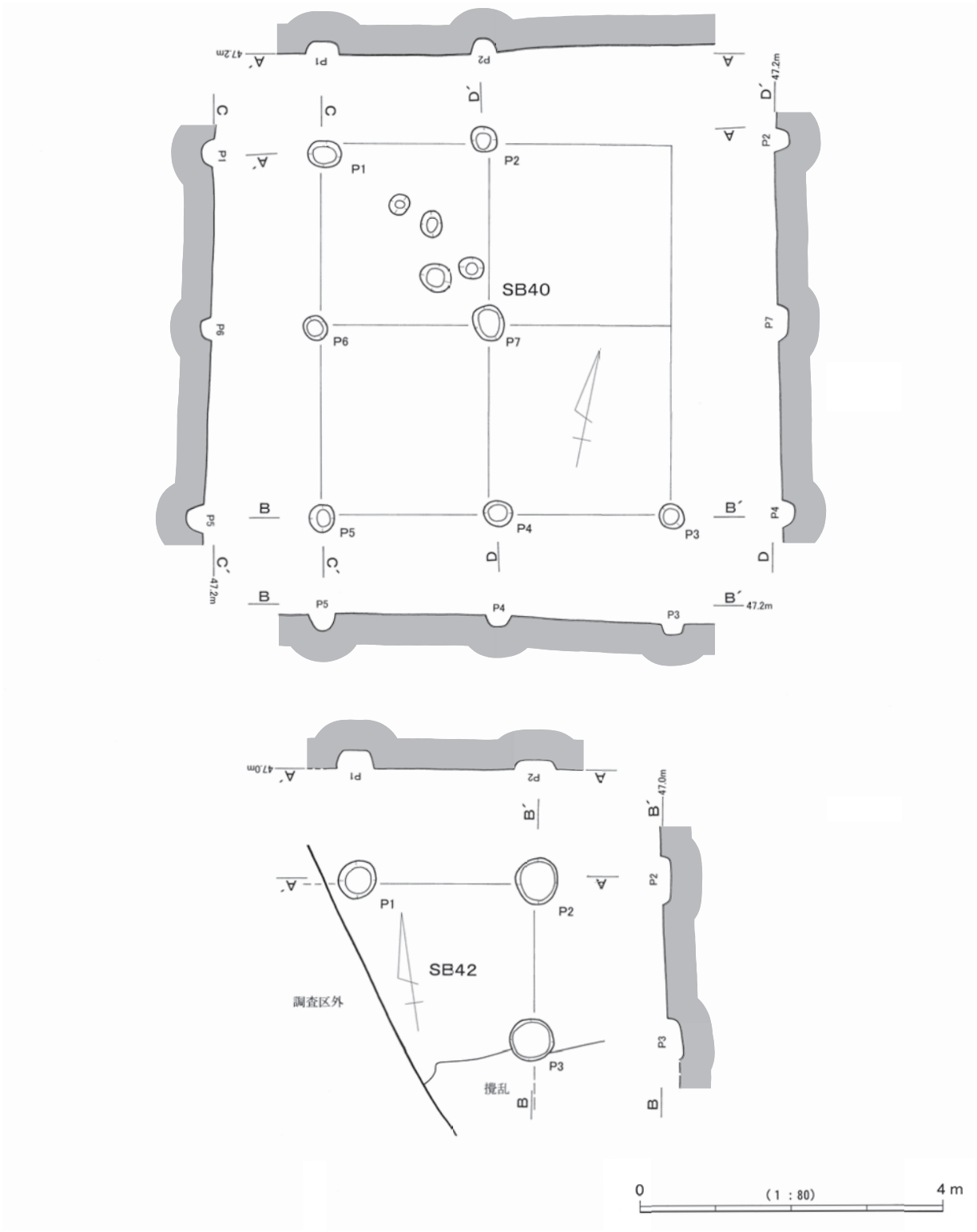
時期　SB36は出土した灰釉陶器から、平安時代以降に位置づけることができるが、中世以降の遺物が含まれないため、やや消極的な理由であるが、平安時代に位置づけられようか。

（14）40号掘立柱建物（SB40，第40図，第９表）

位置　SB40は３区東側Ｂ71グリッドに位置する。



第39図　SB34～36　実測図



第40図　SB40・42　実測図

特徴　SB40は２×２間、約4.6×4.8mのほぼ正方形に近い総柱建物（Ｐ１～Ｐ７で構成）で、主軸をN-11°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性がある。梁、桁ともに柱筋はとおらず、梁と桁は斜交する。梁間に対する桁行の割合はほぼ１：１である。柱間の距離は、梁の北側で、西側から2.2m、2.6m（推定）で、中央で2.3m、2.4m（推定）、南側で2.3m、2.3mであり、桁の西側で北側から2.4m、2.5m、東側は不明である。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.15～0.2mとほぼ一定している。やや大型の柱穴（Ｐ７）は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、柱穴の形状から判断すると丸太が使用されたと想定できる。

SB40は建物の構造からすると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB40からは灰釉陶器片などが出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　SB40は、灰釉陶器片が出土していることから、平安時代以降に位置づけることができるが、それ以降の遺物が出土していないことから、やや消極的な理由であるが、平安時代に帰属する可能性が高い。

（15）42号掘立柱建物（SB42，第40図，第９表）

位置　SB42は３区東側A71・Ｂ71グリッドに位置する。

特徴　SB42は１×１間以上、約2.2×2.3m以上の建物（Ｐ１～Ｐ３で構成）で、主軸をN-９°-Eに向ける。棟の方向は不明である。梁間に対する桁行の割合も不明である。梁と桁はほぼ直交する。柱間の距離は、北側で2.3m、東側で2.2mである。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.5～0.6m、深さ0.1～0.2mでほぼ一定している。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

SB42は、掘方の大きさが一定であること、深さもほぼ同一であることから、やや規格性の高い建物といえようか。

出土遺物　SB42からは須恵器・土師器片が出土したが、小片のため図化できない。

時期　SB42は出土した須恵器から古墳時代後期以降に位置づけられるが、やや消極的な理由であるものの、中世に帰属する遺物が出土していないことから、古墳時代後期～平安時代に帰属する可能性が高い。

（16）44号掘立柱建物（SB44，第41図，第９表）

位置　SB44は３区西側、Ａ69・－Ａ69グリッドに位置する。SB45と切合関係にあり、SB44-Ｐ６とSB45-P12の切合関係から判断して、SB45よりも新しい可能性が高い。

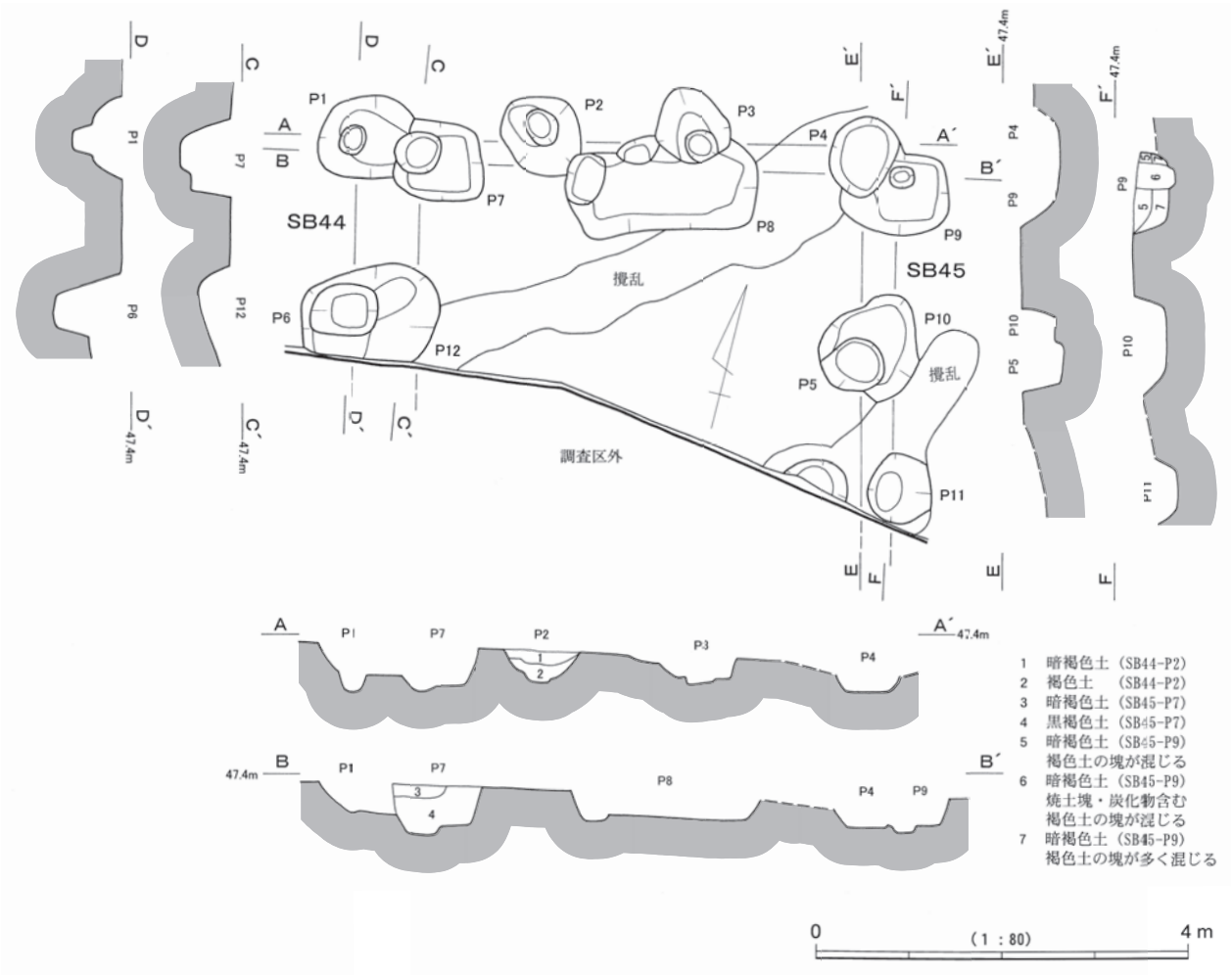
特徴　SBは１×３間以上、約2.3×5.5m以上の東西に長いと想定される建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、大部分が調査区外に位置する。主軸をN-76°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は不明である。梁と桁はほぼ直交する。桁の柱筋はややずれる。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.0m、1.7m、1.8mであり、梁の西側で2.0～2.3m、東側で2.3mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認でき、ほぼ正対していた可能性が高い。

柱穴はやや不整形な方形で、一辺は0.8～1.2m、深さ0.4～0.6mで深い位置まで根入れが行われている。大型の柱穴は柱が抜き取られた可能性がある。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１～Ｐ３には柱の痕跡が確認でき、約20～30cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

建物の構造からすると、規格性の高い建物であった可能性が高い。

出土遺物　SB44からの出土遺物は灰釉陶器片などがあるが、小片のため図示していない。

時期　SB44は灰釉陶器が出土しており、平安時代以降に位置づけられる。中世以降に位置づけられる可能性も残る。やや消極的な理由であるが、SB44からは中世以降に位置づけられる遺物が出土していないことから、平安時代に位置づけられようか。



第41図　SB44・45　実測図

（17）45号掘立柱建物（SB45，第33・41図，第９・14表，図版36）

位置　SB45は３区西側Ａ69・－Ａ69グリッドに位置する。SB44と切合関係にあり、SB44よりも古い可能性が高い。

特徴　SB45は２×３間以上、約3.8×5.2m以上の東西に長いと想定される建物（Ｐ７～P12で構成）で、主軸をN-77°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4(以下）である。梁と桁は直交する。柱筋はほぼ一直線であった可能性が高い。柱間の距離は、桁の北側で、西側から1.8m、1.6m（前後）、1.8m（前後）で、梁の西側で2.0m（前後）、東側で北側から2.0m（前後）、1.8m（前後）である。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な方形で、一辺は1.0～1.1m（前後）、深さ0.3～0.5mで一定していない。Ｐ７～P12はSB44の建設にあたり大きく破壊された可能性が高い。柱穴内には根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ９には柱の痕跡が確認でき、25cmほどの角材が使用されたと想定できる。

SB45は柱穴の破壊が著しいが、方形の掘り方を有すること、梁と桁が直交することなどから、規格性の高い建物であった可能性が高い。

出土遺物　SB45からは須恵器片、灰釉陶器が出土しており、須恵器有台杯１点（79)、長頸壺？片１点（80）を図示した。

79は須恵器有台杯の底部片である。口縁部は底部からやや外反しながら立ち上がる可能性が高い。遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期に位置づけられる可能性が高く、古墳時代終末期後半（７世紀後半）～８世紀代に帰

属する可能性が高い。80は壺瓶類の肩部から頸部にかけての破片であり、長頸壺の可能性が高い。時期は特定できない。２点ともに湖西産の可能性が高い。

なお、第３節で上述したように、弥生土器が出土している（第25図53）。

時期　SB45から出土した灰釉陶器から、平安時代以降に位置づけられる。やや消極的な理由であるが、SB45からは中世以降に位置づけられる遺物が出土していないことから、平安時代に位置づけられようか。

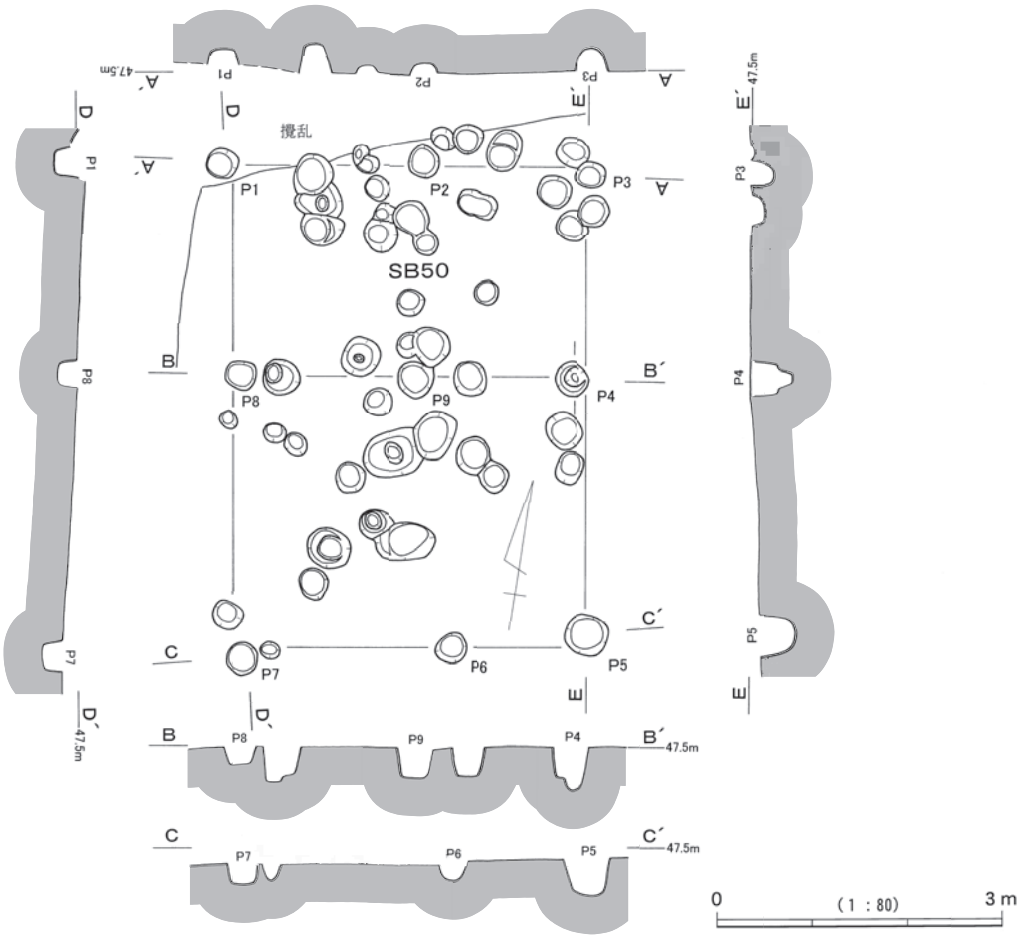
（18）50号掘立柱建物（SB50，第42図，第９表）

位置　SB50は１区Ｃ76・77グリッドに位置する。

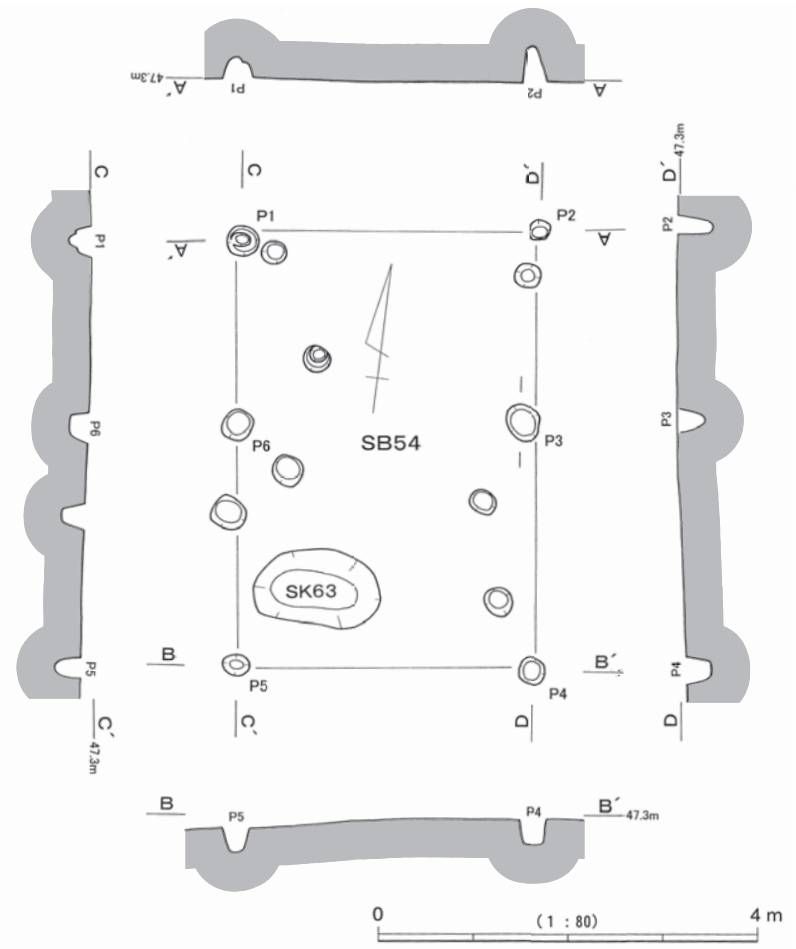
特徴　SB50は２×２間、約3.8×5.2mの南北に長い建物（Ｐ１～Ｐ９で構成）で、主軸をN-９°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.2m、3.0mで、東側で2.2m、2.8mであり、梁の北側で西側から2.1m、1.7m、南側で2.2m、1.4mである。身舎柱は桁についてほぼ対称位置に確認できるが、梁側は大きくずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.1～0.4mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ４には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB50は、建物の構造からみると、やや規格性の低い建物といえる。



第42図　SB50　実測図



第43図　SB54　実測図

出土遺物　SB50からは灰釉陶器などが出土しているが、小片のため図示できない。

時期　SB50は出土した灰釉陶器から、平安時代以降に位置づけることができる。消極的な理由であるが、中世以降の遺物が出土していないことから、平安時代に帰属する可能性が高いか。

（19）54号掘立柱建物（SB54，第43図，第９表，図版23）

位置　SB54は１区Ｂ77・Ｃ77グリッドに位置する。

特徴　SB54は１×２間、約3.2×4.6ｍの南北に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-９°-Wに向け、棟はほぼ南北に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.4である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の西側で、北側から2.0m、2.6mで、東側で2.0m、2.6mであり、梁の北側で3.2m、南側で3.1mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。桁の柱筋はややずれている。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.2～0.4m、深さ0.2～0.4mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１には柱の痕跡が確認でき、15cmほどの丸太が使用されたと想定できる。

SB54は、建物の構造からみると規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB54からは灰釉陶器が出土しているが、小片のため図示できない。

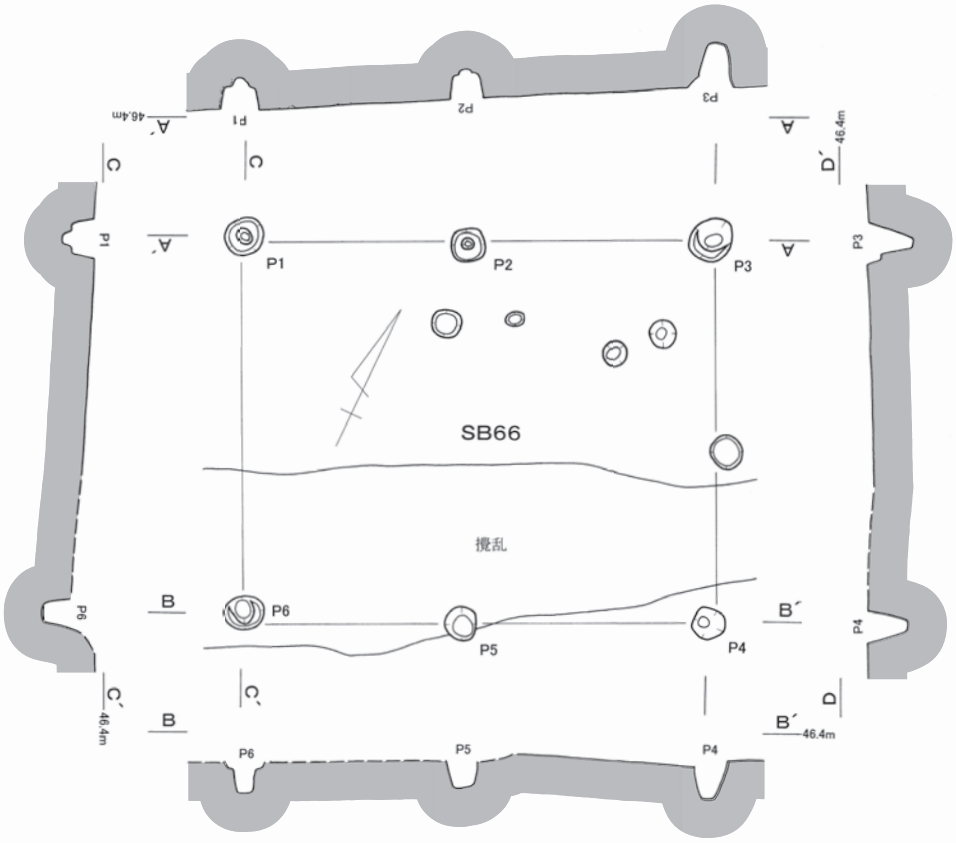
時期　SB54からは灰釉陶器が出土していることから、平安時代以降に位置づけることができる。消極的ではあるが、中世以降の遺物が出土していないことから、平安時代に位置づけられようか。

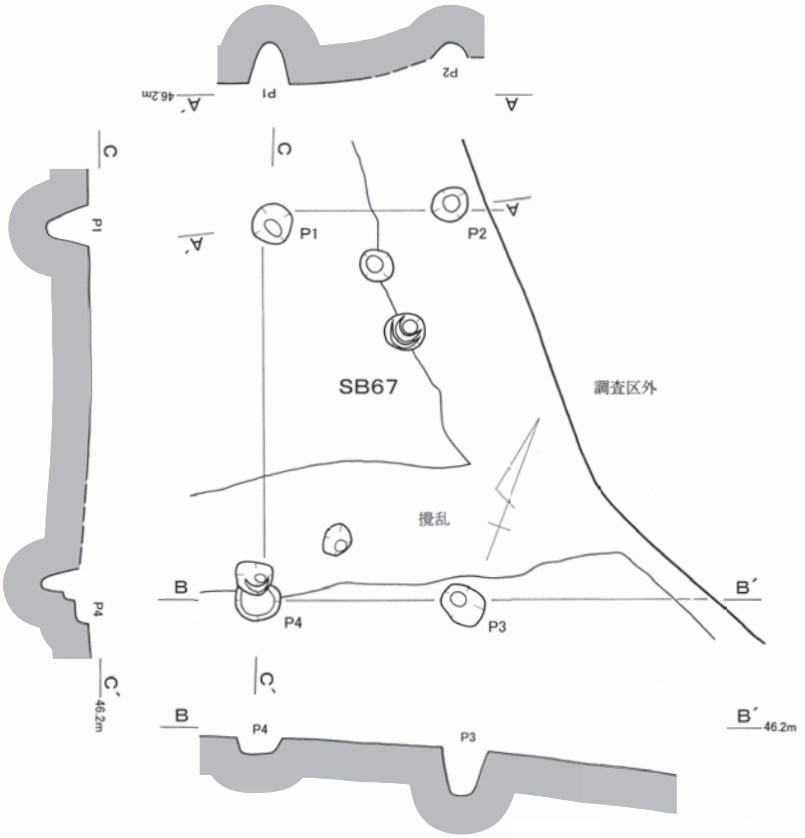
（20）66号掘立柱建物（SB66，第44図，第９表，図版13）

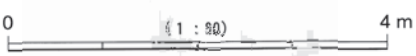
位置　SB66は、１区Ａ81・－Ａ81グリッドに位置する。

特徴　SB66は１×２間、約4.0×5.0ｍの東西に長い建物（Ｐ１～Ｐ６で構成）で、主軸をN-64°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は１：1.3である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の北側で、西側から2.4m、2.6mで、南側で2.4m、2.6mであり、梁の西側で4.0m、東側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.3～0.5m、深さ0.3～0.4mでほぼ一定している。根固め石は確認できず、木柱は残存していないが、Ｐ１・Ｐ２には柱の痕跡が確認でき、20cmほどの丸太が使用され







第44図　SB66・67　実測図

たと想定できる。

SB66は建物の構造からみると、やや規格性の高い建物といえる。

出土遺物　SB66は土師器が出土しているが、小片のため図化できない。

時期　SB66は土師器が出土していることから、古墳時代終末期～平安時代に位置づけられる。

（21）67号掘立柱建物（SB67，第44図，第９表）

位置　SB67は、Ａ81・82、－Ａ81・82グリッドに位置する。

特徴　SB67は１×１間以上、約4.0×2.2m以上の東西に長いと想定する建物（Ｐ１～Ｐ４で構成）で、主軸をN-70°-Eに向け、棟はほぼ東西に向けていた可能性が高い。梁間に対する桁行の割合は２：１以上である。梁と桁は斜交する。柱間の距離は、桁の北側で2.0m、南側で2.2mであり、梁の西側で4.0mである。身舎柱はほぼ対称位置に確認できるが、ややずれている。柱筋はずれる。

柱穴はやや不整形な円形で、直径は0.4～0.5m、深さ0.2～0.5mで一定していない。根固め石は確認できず、木柱は残存していない。

建物の構造からみると、SB67は規格性の低い建物といえる。

出土遺物　SB67からは灰釉陶器などが出土しているが、小片のため図示できない。

時期　SB67から出土した灰釉陶器から平安時代（以降）に位置づけることができる。

４　土坑

（１）SK26（第45・47図，第10・14表，図版15・36）

SK26は調査区北西端の２区Ｉ69グリッドに位置する。SK27と切合関係にあるが、SK27の覆土がSK26の覆土上に載っていることからSK26→SK27の順に掘削されたことがわかる。

SK26は中央が窄まる撥形のような、不整形な長方形の土坑である。断面は中央が一段深く掘り込まれており、二段の土坑（逆凸形）である。土層の堆積状況をみると、最初に緩やかに５層が堆積し、その後丘陵に近い北側から土砂が流れ込んだような状況を示している。全長3.6m、最大幅1.65m、深さ0.6mである。

出土遺物には土師器底部（壺か，91）、須恵器高杯（92）、灰釉陶器段皿（93）がある。

須恵器高杯（92）は碗形の杯部を持つ高杯で、口縁部は湾曲しながら立ち上がった後、口縁端部で外反させるものである。湖西産で、遠江Ⅳ期前半～後半（７世紀代）に位置づけられる可能性が高い。灰釉陶器段皿（93）は底部から外方へほぼ水平に伸びた後で段を付けて外反させるものである。清ヶ谷産の可能性が高い。土師器底部（91）は壺の底部の可能性があるものの、器種は明確ではない。底面の磨滅が著しいが、木葉のような痕跡の一部（沈線）が確認できる。

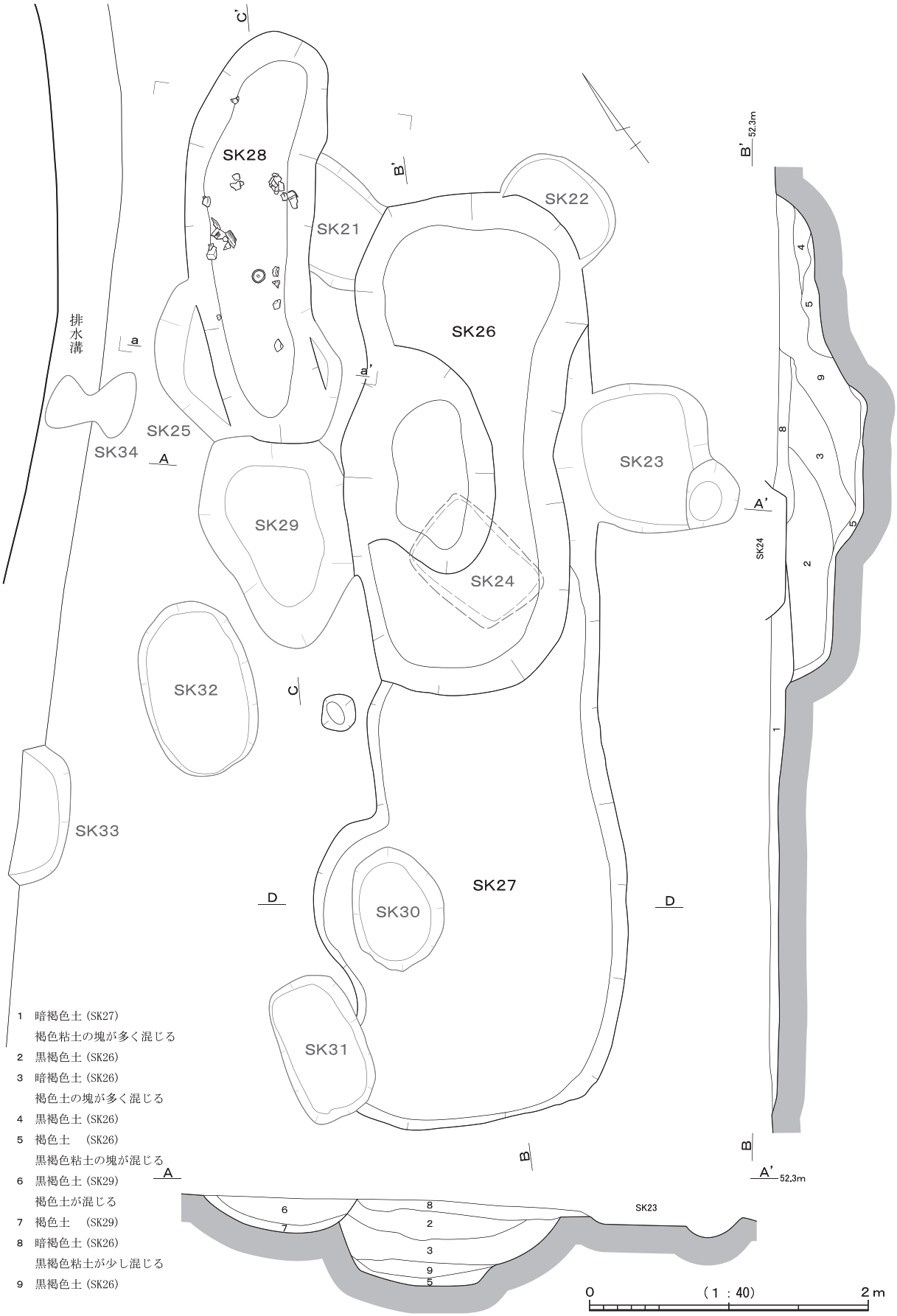
SK26は、灰釉陶器が出土していることから、平安時代以降に位置づけられるが、段皿が清ヶ谷Ⅲ期、10世紀に位置づけられる可能性が高いことから、10世紀頃の土坑の可能性がある。

（２）SK27（第45・46図，第10表）

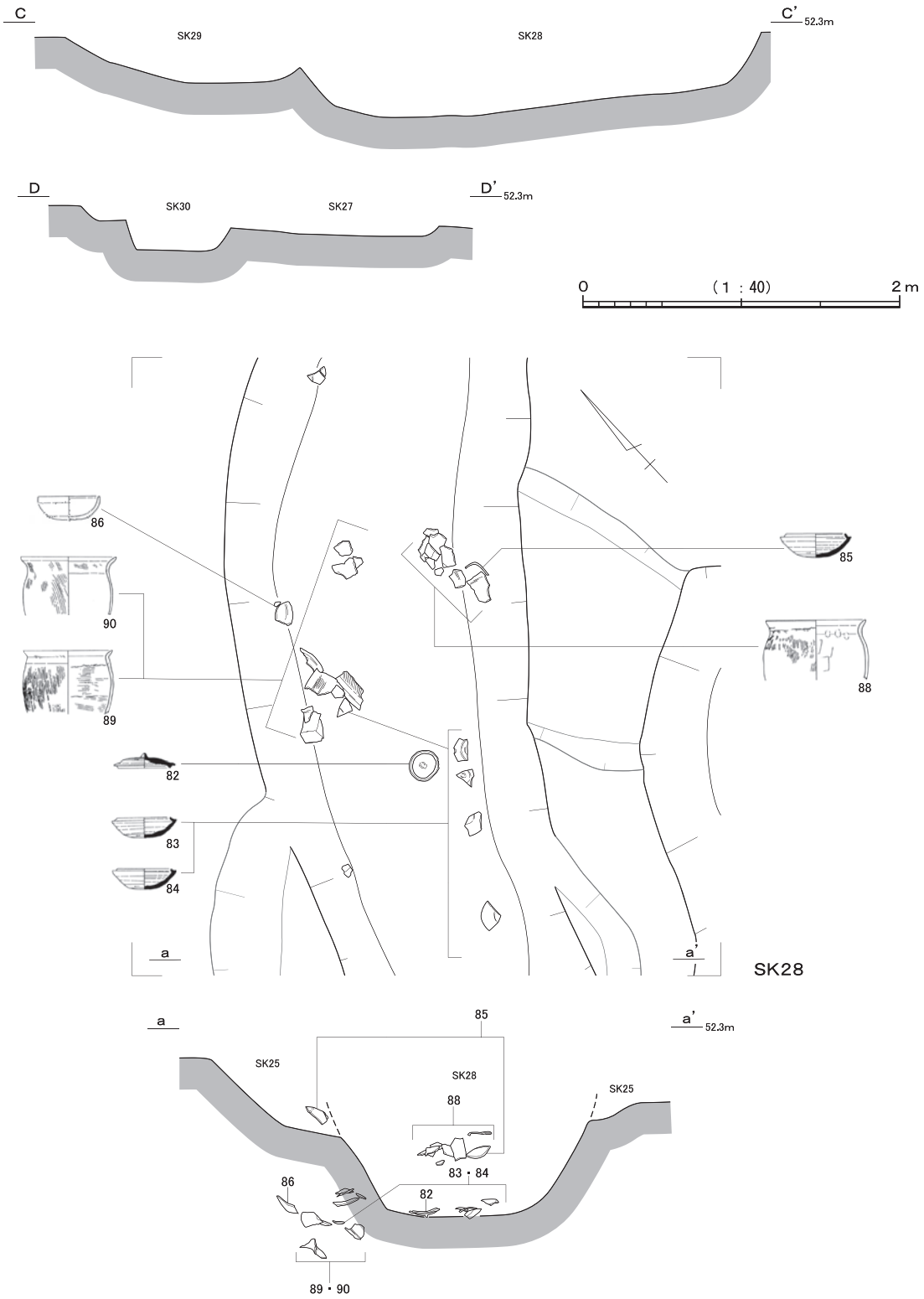
SK27は調査区北西端の２区Ｉ69グリッドに位置する。SK26を破壊して、掘削されている。

SK27はSK26同様不整形な長方形の土坑であるが、断面は皿状である。全長4.0m以上、最大幅1.9m、深さ0.1mである。

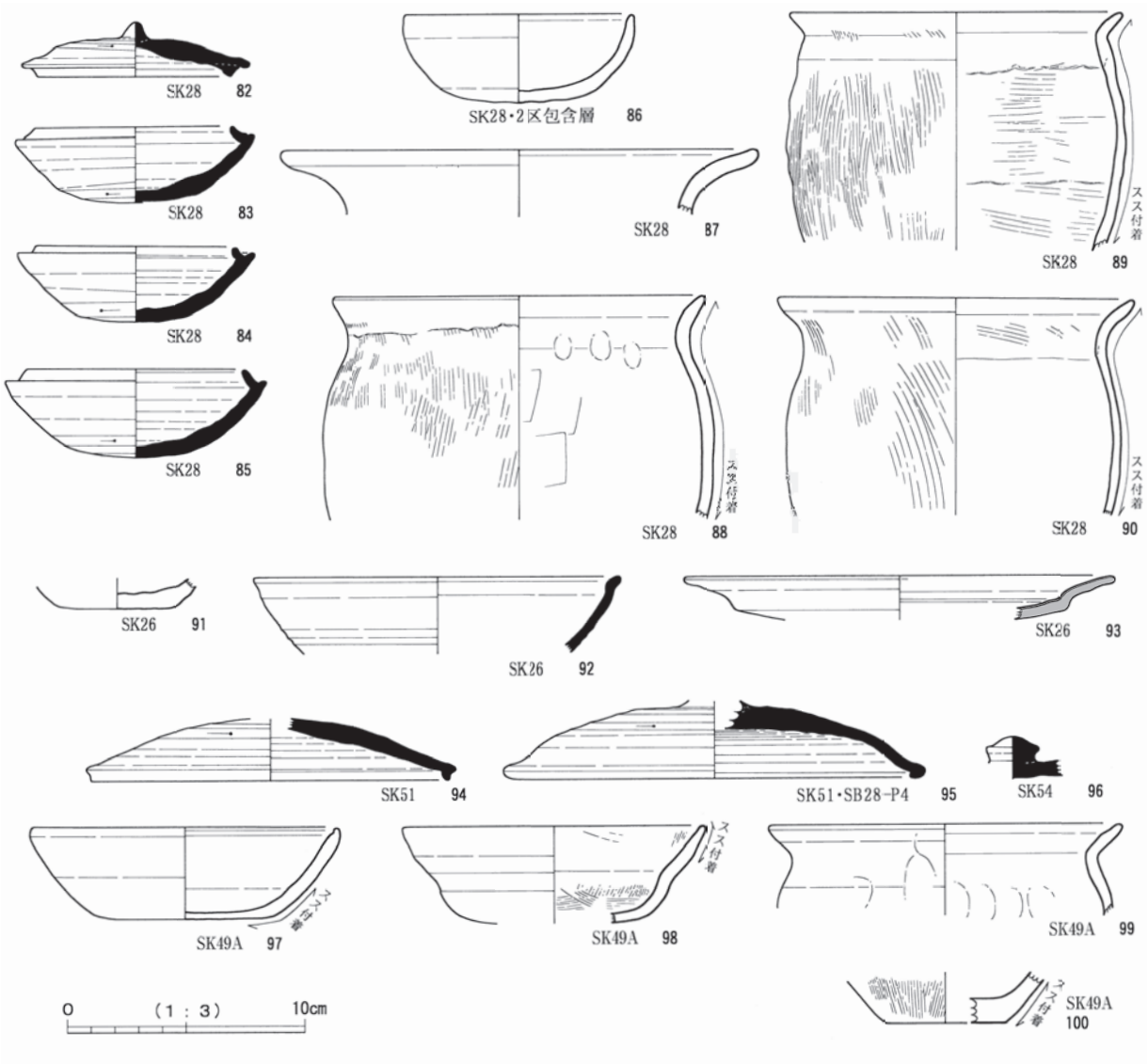
出土遺物は灰釉陶器であるが小片のため図示できない。平安時代以降に帰属する土坑である。



第45図　SK26～28　実測図①



第46図　SK26～28　実測図②



第47図　土坑出土遺物実測図①（SK26・SK28・SK49A・SK51・SK54）

（３）SK28（第45～47図，第10・14表，巻頭図版９・10，図版14・15・37・38）

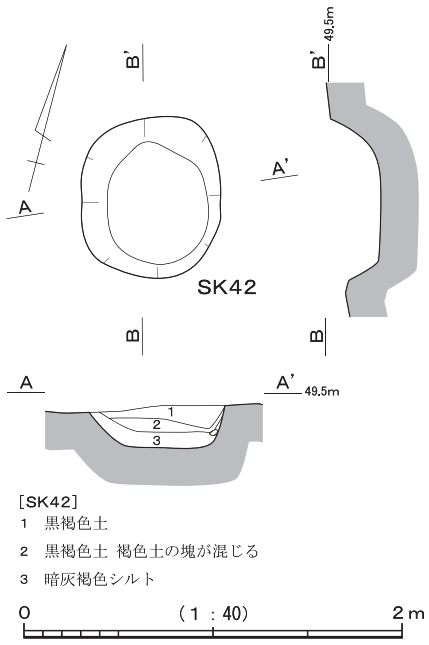
SK28はSK26の北側、２区Ｉ69グリッドに位置する。SK21・25・29などの中世墓に破壊されているため、これより古いことは確実である。

SK28は、細長い楕円形の平面で、断面は逆台形に近いＵ字形を呈する。全長3.0m、幅1.0m、深さ0.4mである。

遺物は床面直上や、やや床面から浮いた位置で土師器杯（86）、甕（88～90）、須恵器返蓋（82）・杯身（83～85）が出土した。この他、土師器甕口縁部（87）が出土した。

須恵器返蓋（82）は、返りが口縁部よりも下に垂下するもので、摘みは乳頭状である。天井部が水平に近いことから無台杯に伴う可能性も排除できないが長頸壺の蓋の可能性が高い。杯身（83～85）は短いたちあがりをもつもので、84が最も新しく位置づけられる。

土師器杯（86）は半球形の杯であり、口縁端部は丸く仕上げられる。甕（88～90）は口縁部がく字形に短く立ち上がるく字形口縁甕である。外面には縦方向のハケ調整、内面の下部は斜め方向のハケ調整、上部はハケ調整や板ケズリ調整を施している。３点ともに外面にススが付着しており、煮焚きに使用されていたものであることがわかる。甕（87）は口縁部が大きく開く遠江型の甕である。



第48図　SK42　実測図

須恵器４点は遠江Ⅳ期前半、７世紀前半～中頃に位置づけられるものであり、土師器も同時期で齟齬はないことから、SK28は古墳時代終末期前半（飛鳥時代，７世紀前半～中頃）に帰属する可能性が高い。なお、SK28の性格については不明である。

（４）SK42（第48図，第10表）

SK42は、２区H70グリッドに位置する。

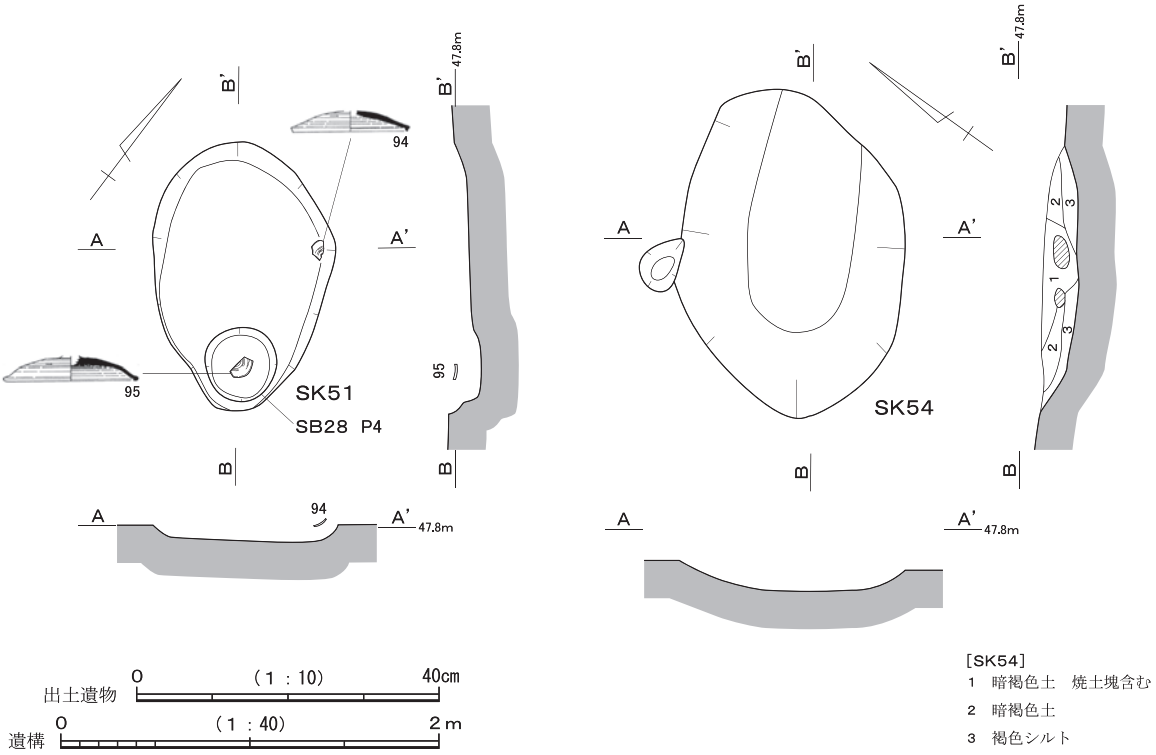
SK42の平面は隅丸方形で、断面は逆台形である。南北0.85m、東西0.75m、深さ0.25mである。出土遺物は須恵器・土師器があるが、小片のため図示できない。古墳時代終末期以降の土坑である。

（５）SK51（第47・49図，第10・14表，図版36）

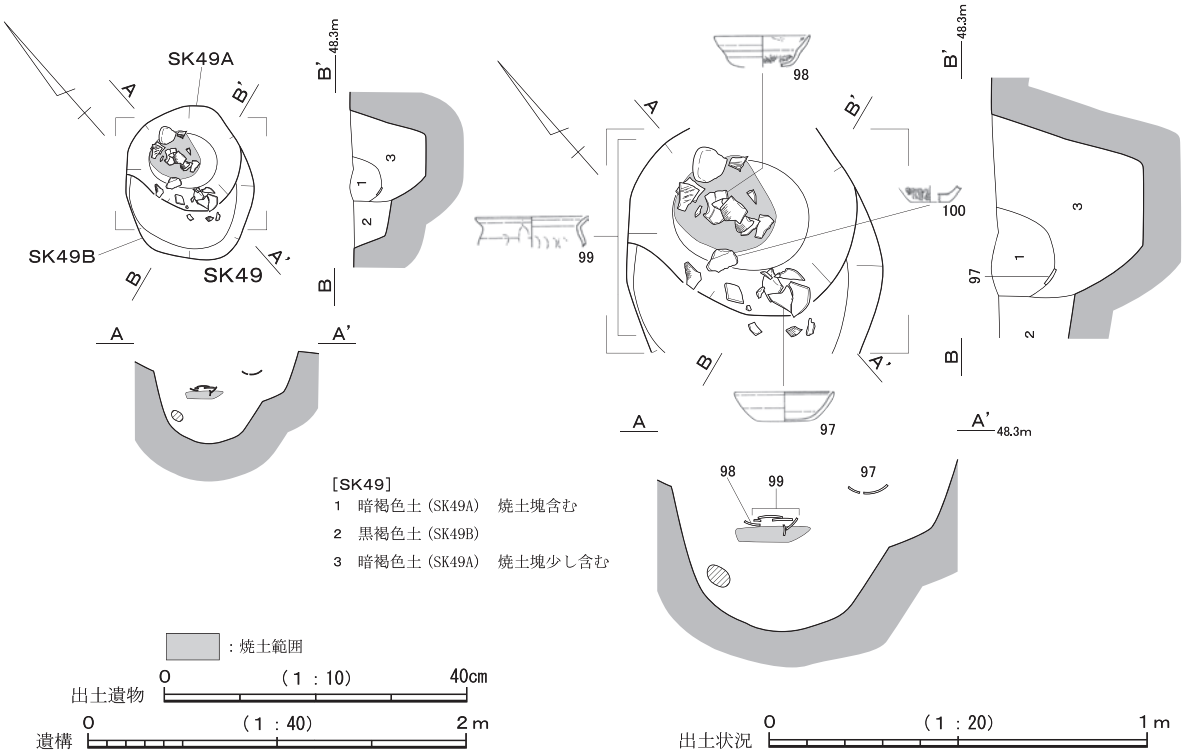
SK51は２区E72グリッドに位置する。

SK51の平面形はやや不整形な楕円形で、断面は皿状である。南東隅角が小穴状に深くなっている。長軸1.45m、短軸0.95m、深さ（最深部）0.15mである。出土遺物は須恵器摘蓋（94・95）である。須恵器摘蓋２点はいずれも摘み部分を欠損しているが、扁平な擬宝珠摘みが取り付けられたものと推測でき、天井部からハ字形に直線的に下がり、口縁端部を一旦内側に折り返した後で外反させるもの（94）と、丸みをもってハ字形に下がり、口縁端部を内側に折り返すもの（95）がある。２点ともに湖西産の可能性が高い。

須恵器はいずれも小片であり、混入した可能性もあるが、遠江Ⅴ期前半頃に位置づけられる可能性が



第49図　SK51・54　実測図



第50図　SK49　実測図

高いことから、SK51は奈良時代前葉に帰属する土坑の可能性が高い。

（６）SK54（第47・49図，第10・14表）

SK54は３区西側Ｃ70グリッドに位置する。

SK54は、東側が既に破壊されており、本来はもう少し長かった可能性が高い。平面形はやや不整形な楕円形で、断面は皿状である。上層に焼土を含む。遺構の性格については不明である。長軸1.75m以上、短軸1.2m、深さ0.2mである。

出土遺物は、須恵器摘蓋片（96）がある。擬宝珠形の摘みであり、遠江Ⅴ期前半に位置づけられる可能性が高い。湖西産である可能性が高い。

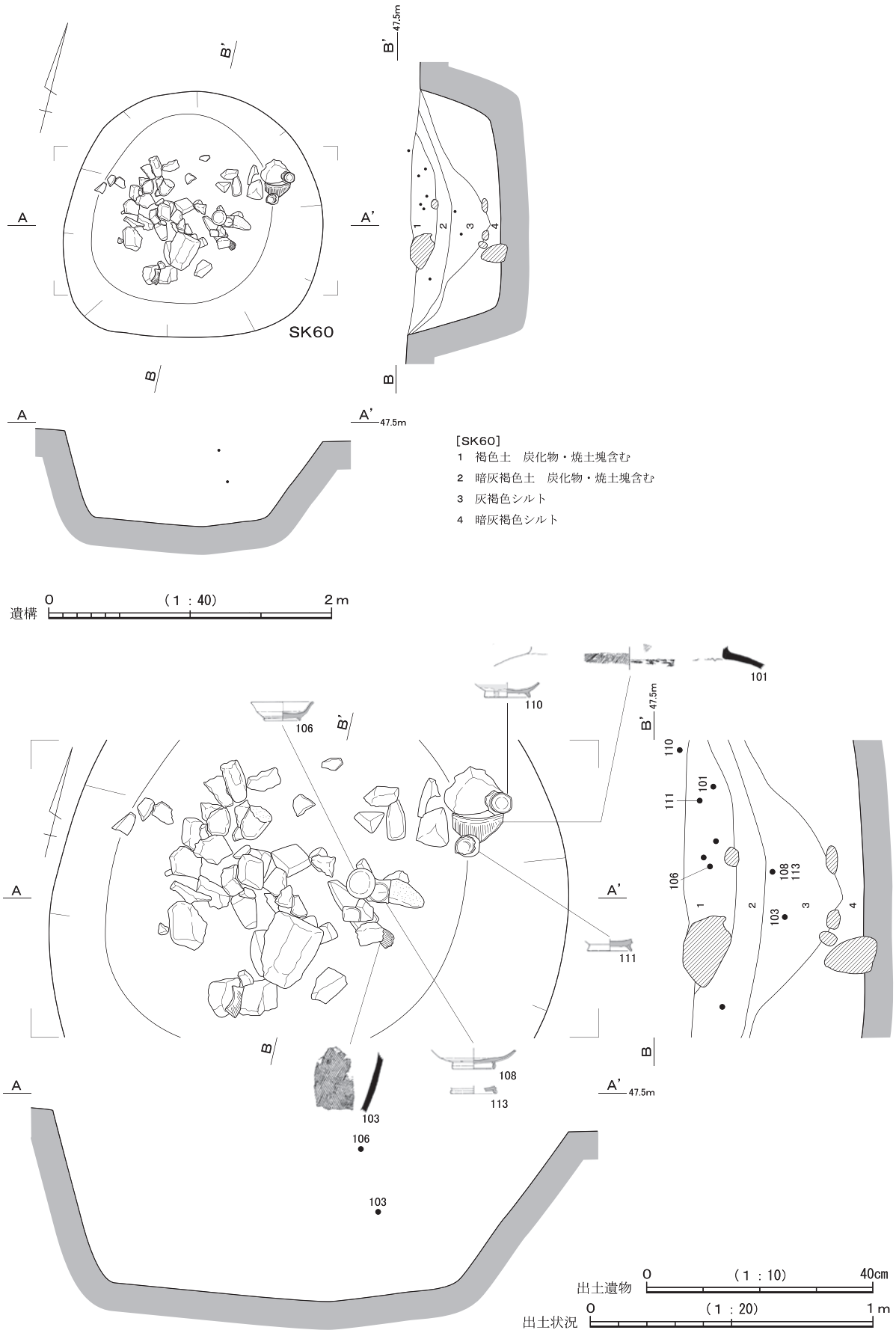
SK54は出土した遺物から奈良時代前半以降に位置づけられる。

（７）SK49（第47・50図，第10・14表，巻頭図版９，図版14・36）

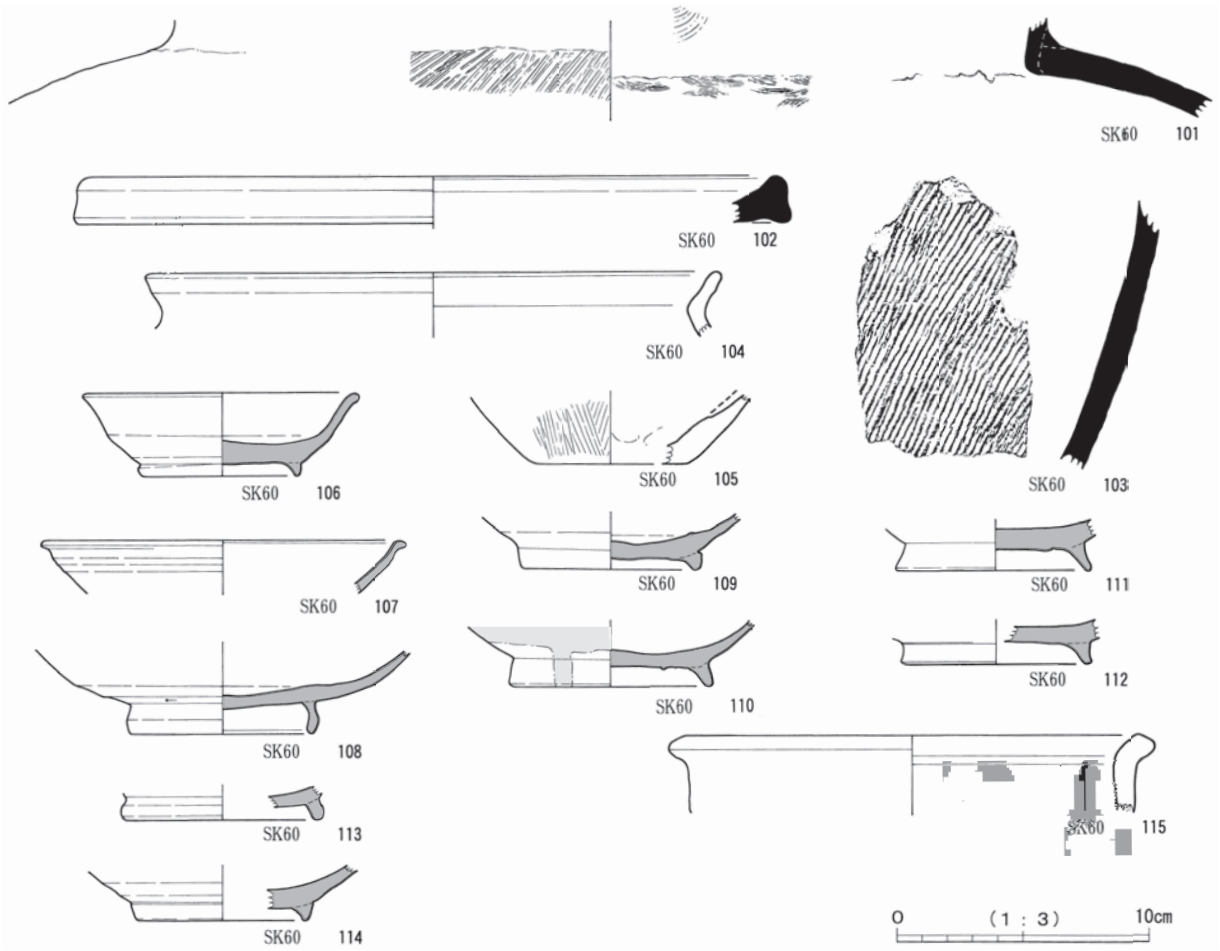
SK49は、２区Ｆ73グリッドに位置する。

SK49は二つの土坑（１・３層が堆積した土坑と、２層が堆積した土坑）が重複している可能性が高い。二つの土坑の重複とした場合、後者が前者に破壊されている可能性が高い。

前者（SK49A）は、やや不整形な円形で、断面は逆台形である。直径0.6m、深さ0.4mである。堆積した土砂には焼土塊が含まれており、何らかの火を使うような行為をした土坑か、あるいは本来この位置に竪穴建物が所在し、床面まで破壊されたが、貯蔵穴のみ残存した可能性がある。前者からは上層から土師器杯（97・98）・甕（99・100）が出土した。土師器杯（97）は箱形の杯身で、平底の底部から逆ハ字形に立ち上がり、口縁部内面には明瞭な沈線を巡らせる。外面には一部ススが付着している。98は口縁部の途中に段が付く有段の杯身であるが、内面はハケ調整の後、丁寧なナデ調整によってハケの痕跡を消している。有段部分は外側を強くなでることにより段を形成している。外面の一部にススが付着



第51図　SK60　実測図



第52図　土坑出土遺物実測図②（SK60）

している。胎土は精良で97と類似することから同時期の杯と想定するが、古墳時代前半の古式土師器の小型丸底鉢にも類似することから古式土師器の可能性がある。甕（99）は中形の甕と想定できるもので、口縁部はく字形の単純口縁で、内面には指頭圧痕が残る。100は平底甕の底部であり、外面にはハケ調整が行われている。外面にはススが付着している。

土師器杯（97）はその形態から平安時代前半（灰釉陶器K14～K90併行期ごろ，鈴木敏1998）に位置づけられる可能性が高いことから、土坑の時期も平安時代前半以降の可能性が高い。

後者（SK49B）は、やや不整形な楕円形の土坑で断面は逆台形であった可能性が高い。規模は、長軸0.65m以上、短軸0.65m、深さ0.2mである。出土遺物はない。

（８）SK60（第51・52図，第10・14表，巻頭図版11，図版14・38・39）

SK60は、調査区南西隅、３区西側Ａ68・－Ａ68グリッドに位置する。

SK60の平面形はやや不整形な円形で、断面は逆台形を呈する。大きさは、南北1.75m、東西1.85m、深さ0.65mである。土層の堆積状況から見ると、自然に埋まったようなレンズ状堆積を示しているが、雨水などでは流れない人頭大の礫等もあることから、人為的に埋められた可能性がある。下部でも礫が出土しているが、この土坑の用途については明確ではない。

出土遺物は３層より上位から灰釉陶器（106・108・113など）や、須恵器（101・103）などが出土した。須恵器甕（101）は肩から頸部にかけての破片で、外面には頸部と肩部の接合部までタタキ調整を施した後、頸部の接合時のナデ調整によりタタキ痕が消されている。内面は細かい同心円の当て具痕をナデ

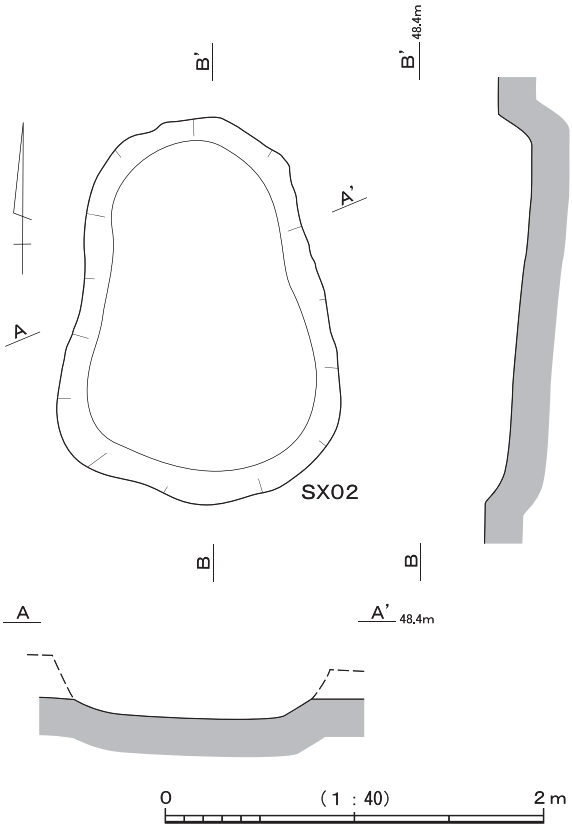
消している。甕の口縁部の破片(102)は、口縁部を外側に折り返し、被圧させるものである。甕破片(103)は胴部破片であり、外面にはタタキが施され、内面の当て具痕はきれいにナデ消されている。101～103については湖西産の可能性が高いが、森町森山窯産の可能性もある。

土師器甕（104）は、く字形の単純口縁の甕である。105は甕底部の破片で外面にはハケ調整が行われている。平底である可能性が高い。

灰釉陶器は碗が出土している。碗（106）は完形品である。見込みからゆったりと立ち上がった後、口縁部を外反させるものである。底部は三角高台で、糸切痕は雑にナデ消されている。釉薬は漬け掛けである。碗（107）は口縁部の破片であり、口縁端部を急激に外反させて引き出すものである。碗（108）はつぶれて三日月高台のように見えるが、やや高い爪形高台である。碗(109)は三角高台である。碗(110・111）はやや高い爪形高台である。碗（112）はやや高い爪形高台の可能性がある。碗（113・114）は三角高台である。白灰色の胎土である。

産地については、106～112が青灰色の胎土であることから清ヶ谷産で、113・114が白灰色系の胎土であることから宮口窯産である可能性が高い。

それぞれの時期は、松井編年で、107は清ヶ谷Ⅲ-２期（10世紀中頃)、108・109は清ヶ谷Ⅳ-１期（10世紀後半)、106・110・111は清ヶ谷Ⅳ-２期（11世紀前半)、113は宮口Ⅲ-１期（10世紀前半)、114は宮口Ⅲ-２期（10世紀中頃）に位置づけられる（松井1989)。



第53図　SX02　実測図

清郷甕（鍋，115）は、ほぼ直立する胴部から急激に外反させ、外側に引き出して、口縁部を三角形に造るものである。永井宏幸氏による「清郷型鍋」Ｃ３類に比定でき、10世紀前半頃に位置づけられる（永井1996)。

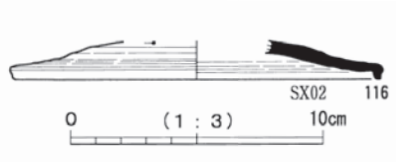
したがって、最も新しいのは清ヶ谷産灰釉陶器の106・110・111であることから、土坑が埋められた（埋まった）のは平安時代後期（11世紀中頃）以降と考えられ、土坑が長い間機能していないと仮定すれば、基本的には平安時代後期に帰属する土坑である可能性が高い。

５　性格不明遺構

（１）SX02（第53・54図，第13・14表）

SX02は、２区Ｆ74・Ｇ74グリッドに位置する。

SX02の平面形は瓢形であり、全長2.05m、最大幅1.5m、深さ0.2mである。内部からは須恵器摘蓋（116）が出土した。116は摘み部分を欠損している。口縁部は天井から水平に近い状態でハ字形に開き、口縁部は折り曲げられ、ほぼ垂直に垂下する。遠江Ⅴ期後半頃、８世紀後半頃に位置づけられる。湖西産須恵器である。SX02の帰属時期は、奈良時代後半以降である。



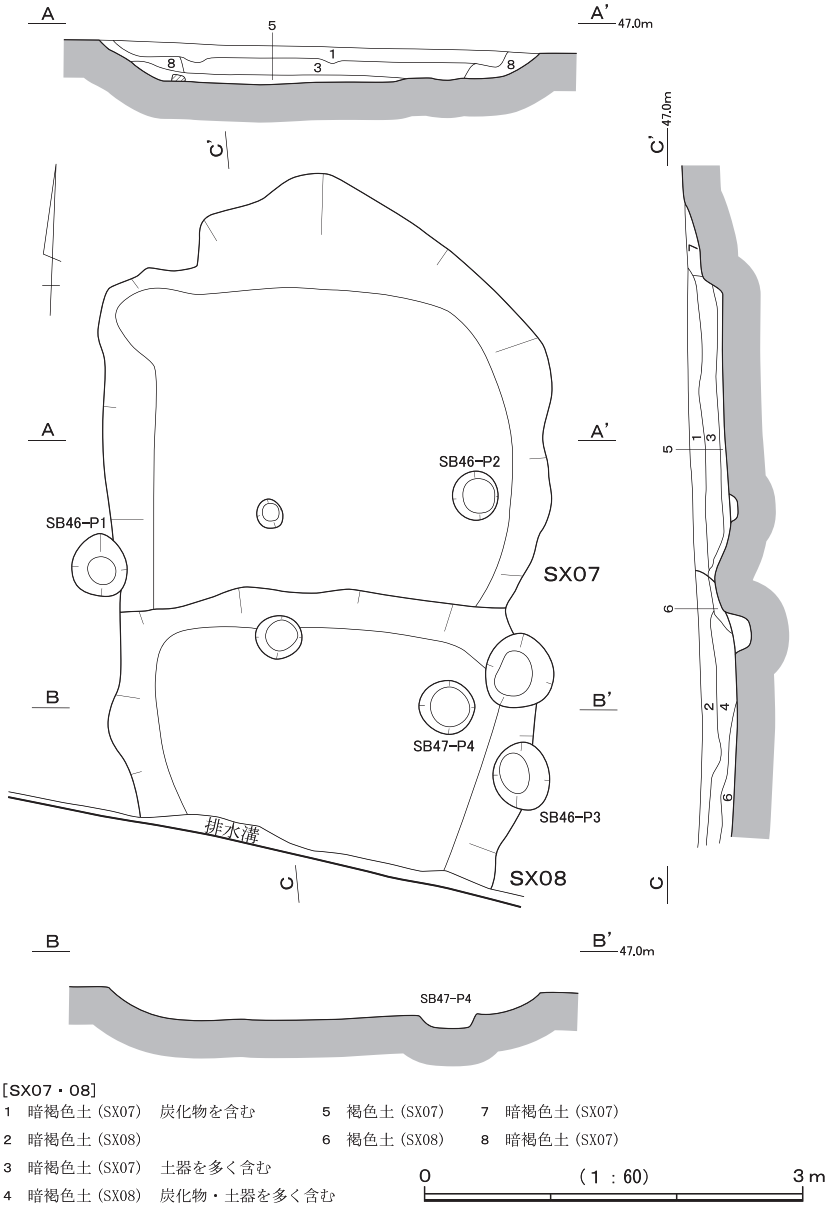
第54図　SX02出土遺物実測図

（２）SX07（第55・56図，第13・14表，巻頭図版９，図版15・41・42）

SX07は調査区南西隅、３区西側Ａ70・－Ａ70グリッドに位置する。

SX08と重複関係にあり、土層（C-C′断面）を観察すると、SX08がSX07を切り込んでいることが判明することから、SX07→SX08の順であることがわかる。

特徴　SX07は南側をSX08に破壊されており不明確であるが、北側の７層部分は遺構が埋まる過程で崩落した部分と判断すれば、正方形に近い平面形であった可能性が高い。断面は逆台形あるいはやや深い皿状である。現状で南北3.3ｍ、東西3.5ｍ、深さ0.3ｍである。



第55図　SX07・08　実測図

出土遺物　内部からは多量の須恵器、土師器が出土した。須恵器では、摘蓋、有台杯、無台杯、箱形杯、短頸壺、長頸壺、壺、甕、鉢（？）、コップ状杯がある。土師器では、蓋、杯、盤、甕がある。

須恵器摘蓋は、器高がやや高く、口縁部を垂直に折り返すもの（117・120）と、器高が低く口縁部を垂直に折り曲げるもの（118）、器高がやや低く、口縁部を肥厚させる三角形につくるもの（119）がある。

碗形杯身（121）は幅の広い平底で、丸みをもって立ち上がり、口縁部はやや外反させるものである。有台杯（124）は高台から底部にかけての破片であり、底部は高台よりも垂下しないものである。底部にヘラ記号「－」が刻まれている。箱形杯（126）は幅の広い平底である可能性がある。口縁部は逆ハ字形に立ち上がる。このほか杯の口縁部片の可能性が高い136～138、無台杯の可能性が高い123・128、盤（皿）の可能性のある127、有台杯あるいは有台盤（皿）の可能性がある125がある。122は小型杯あるいは碗、143のようなコップ形土器の口縁部の可能性がある。

143はコップ形土器の底部片である可能性が高く、底部は平底で、体部は底部からＬ字形に屈曲して立ち上がる。度量衡（計量）枡に用いられた可能性がある。

130は肩の張る長頸壺片である。外面には自然釉が付着している。131は壺の口縁部片で、ハ字形に開

いた後、口縁部を三角形に造り出し、外形する面を持つ。内外面に自然釉が付着しており、長頸壺の可能性が高い。129は短頸壺であり、丸みをもった撫で肩で、口縁部は短く垂直に立ち上がる。135は水注（あるいは平瓶）の口縁部片の可能性が高い。口縁部は逆ハ字形に立ち上がるが、短い。口縁端部は強くなでられ、内面は凹線状に窪んでいる。

甕は口径から判断して大中小の３種類がある。132は大型で、口縁部は逆ハ字形に立ち上がり、中位に稜線を造り出し、口縁端部は内側に向かって引き上げる。中型の133は逆ハ字形に立ち上がり、中位に132ほど明瞭ではないが、稜線を造り出し、口縁端部は上に向かって引き出されている。小型の134は、逆ハ字形に立ち上がり、口縁端部は方形に成形されている。

140～142は壺瓶類あるいは鉢の底部片である。140は鉢の底部であろうか。144は台付長頸壺の底部片の可能性が高い。

139は須恵器としては特異な器形であるが、大型の鉢の可能性がある。口縁部は逆ハ字形に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。

須恵器はいずれも湖西産の可能性が高い。

土師器杯蓋（145）は、擬宝珠形の摘蓋である。赤彩が施されていた可能性が高いが、表面が磨滅しており、不明確である。杯（146）は碗形の杯で、内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。内面は黒色に発色しており、内黒土器であった可能性が高い。盤（皿，147）は平底で、内湾しながら立ち上がる。147は内外面ともに赤彩されていた可能性があるが、内面は赤彩が確認できるが、外面は磨滅しており、不明確である。甕（148～152）は、く字形で短く立ち上がる口縁のもの（149）、く字形でやや口縁部が高く立ち上がるもの（150）、コ字形で口縁部が逆ハ字形に立ち上がるもの（151・152）、コ字形で口縁部がほぼ水平に近く、口縁端部を丸く収めるもの（148）がある。

時期と遺構の性格　須恵器は摘蓋がほぼ水平に近いものであること、口縁部がほとんど垂下しないもの（119）、箱形杯（126）が存在することから、遠江Ⅴ期後半、８世紀末頃に位置づけることができる。土師器盤（147）、杯（146）も須恵器の時期と矛盾しない。

したがって、SX07は奈良時代末～平安時代初頭に帰属する可能性が高い。

出土遺物は完形に近いものがなく、破片が多いことから、廃棄土坑の可能性がある。また、当該時期の可能性が高いSB44・45に近接することから、それらの建物との関係があった可能性があり、注目できる。

（３）SX08（第55・57図，第13・14表，巻頭図版９，図版15・39・40）

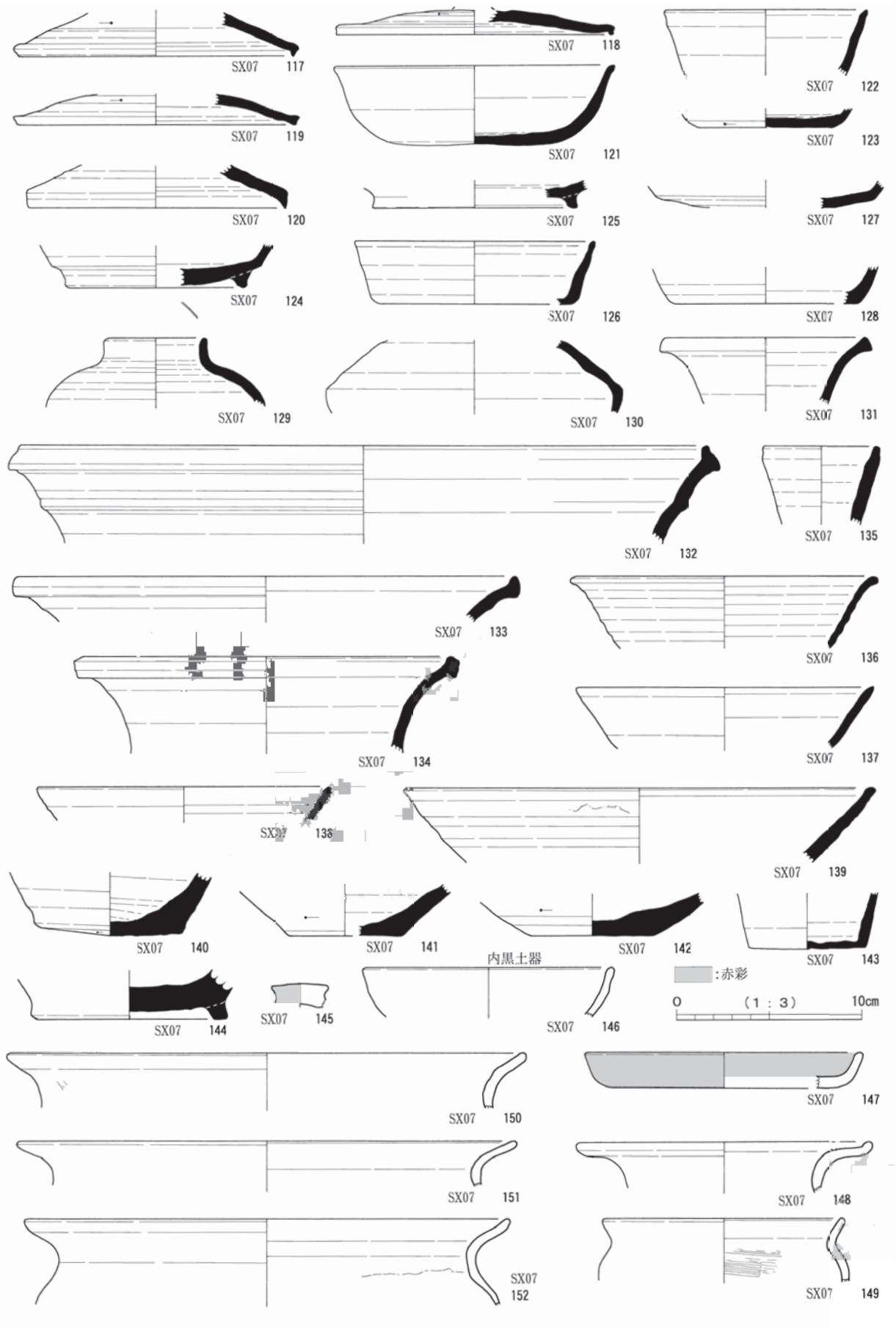
SX08は、調査区南西隅、３区西側Ａ70・－Ａ70グリッドに位置する。上述したようにSX07と重複関係にあり、土層の切合関係からSX08がSX07を掘り込んでいることは明らかであり、SX07→SX08の順であることが判明する。

特徴　SX08はSX07とほぼ同様の形状を示しているが、南側の幅が狭い台形を呈している。東西3.35m、南北2.3m以上、深さ0.3mである。

遺物は主に炭化物とともに４層から出土し、須恵器・土師器・灰釉陶器がある。

出土遺物　出土遺物には須恵器摘蓋、箱形杯、広口壺、長頸壺、碗形杯、脚部（高杯の可能性が高い）、水注？、甕、土師器杯、甕、灰釉陶器碗がある。

須恵器摘蓋（153・154）は、両者ともに天井部を欠損している。153は天井部から直線的に開き、口縁部を折り曲げ、さらに口縁端部を強く外反させる。154はやや丸みをもって開き、口縁端部は垂直に垂下し、端部は丸く仕上げられる。箱形杯（155～157）は器高から２種類がある。155はやや深い形態のもので、底部は平底、口縁部はほぼ直立する。156は平底の底部から、逆ハ字形に立ち上がり、口縁



第56図　SX07出土遺物実測図

端部はさらにやや外反させ、丸く仕上げられる。底面には「一」のヘラ記号が刻まれている。157は平底の底部片である。

160は碗形杯あるいは碗形の杯部をもつ高杯の可能性がある。丸みをもって立ち上がり、口縁端部をやや外反させるものである。161は脚端部片で、160が高杯であった場合は、その脚部の可能性がある。ハ字形に垂下し、口縁端部は垂直に折り曲げられ、端部は三角形に近い。162は長頸壺の頸部から口縁部の破片である。頸部からやや外反しながら立ち上がった後、口縁部をＬ字形に折り返し（貼り付け）ている。頸部中位よりやや上に二条の凹線が施される。内外面には自然釉が付着しており、蓋付きではなかったことが判明する。

広口壺（159）は、逆ハ字形に開く口縁部で、口縁端部は急激に外反させ、ほぼ水平に近い状態で、口縁端部は三角形に造られ、外面はほぼ垂直である。163は口径の小さい瓶類の口縁部片で、水注の可能性が高い。口縁部は逆ハ字形に立ち上がり、口縁端部は上外方に引き出される。甕片（164）は胴下部の破片で、外面はタタキ調整を行った後で、破片の下位をヘラ削りしている。内面は同心円当て具痕を横方向に撫でることで磨り消している。

須恵器はいずれも湖西産の可能性が高い。

土師器杯（165）は、内湾しながら立ち上がる口縁部で、口縁部直下を強く撫でて、口縁端部を外反させるものである。赤彩が施された可能性があるが、内外面ともに磨滅が著しく、不明確である。166は坏類の底部かあるいは甕の底部破片である。内面は底部と胴部の接合時の指頭圧痕が確認できる。外面にはハケ調整の痕跡は確認できない。167～176は甕の口縁部片である。遠江型の平底甕の可能性が高いが、一部は大型台付甕の口縁部の可能性もある。170がく字形の口縁部で、口縁部がハ字形に広がるものである以外は、コ字形の口縁部で、口縁部は外上方に立ち上がるもの（171）、水平に近いもの（167～169,172～176）がある。

灰釉陶器碗（158）は、底部の破片である。高台は三角高台で、底部は糸切痕をナデ消している。胎土の特徴から、清ヶ谷産で、松井編年で清ヶ谷Ⅲ-２期に位置づけられる（松井1989）。

時期と遺構の性格　須恵器は箱形杯の形態的特徴から、遠江Ｖ期後半～Ⅵ期古段階に位置づけられる可能性が高く、それ以外の器種もおおむね齟齬はない。土師器は時期を特定することは困難であるが、須恵器の時期と矛盾するものではない。

SX08は灰釉陶器の出土により10世紀前半まで降る可能性を否定できないが、小穴などで破壊されていることから、それがSX08に直接伴わないとすれば、摘蓋、箱形杯は、遠江Ｖ期後半～Ⅵ期前半に位置づけられる。それが正しければ、８世紀末～９世紀前半頃の遺構である可能性がある。

SX08から出土した遺物は破片が多いことから、祭祀に伴うものとは考えにくく、廃棄土坑の可能性が高い。また、SX07同様、この時期に位置づけられる可能性が高い、SB44・45に近接することから、何らかの有機的な関係があったと想定できる。

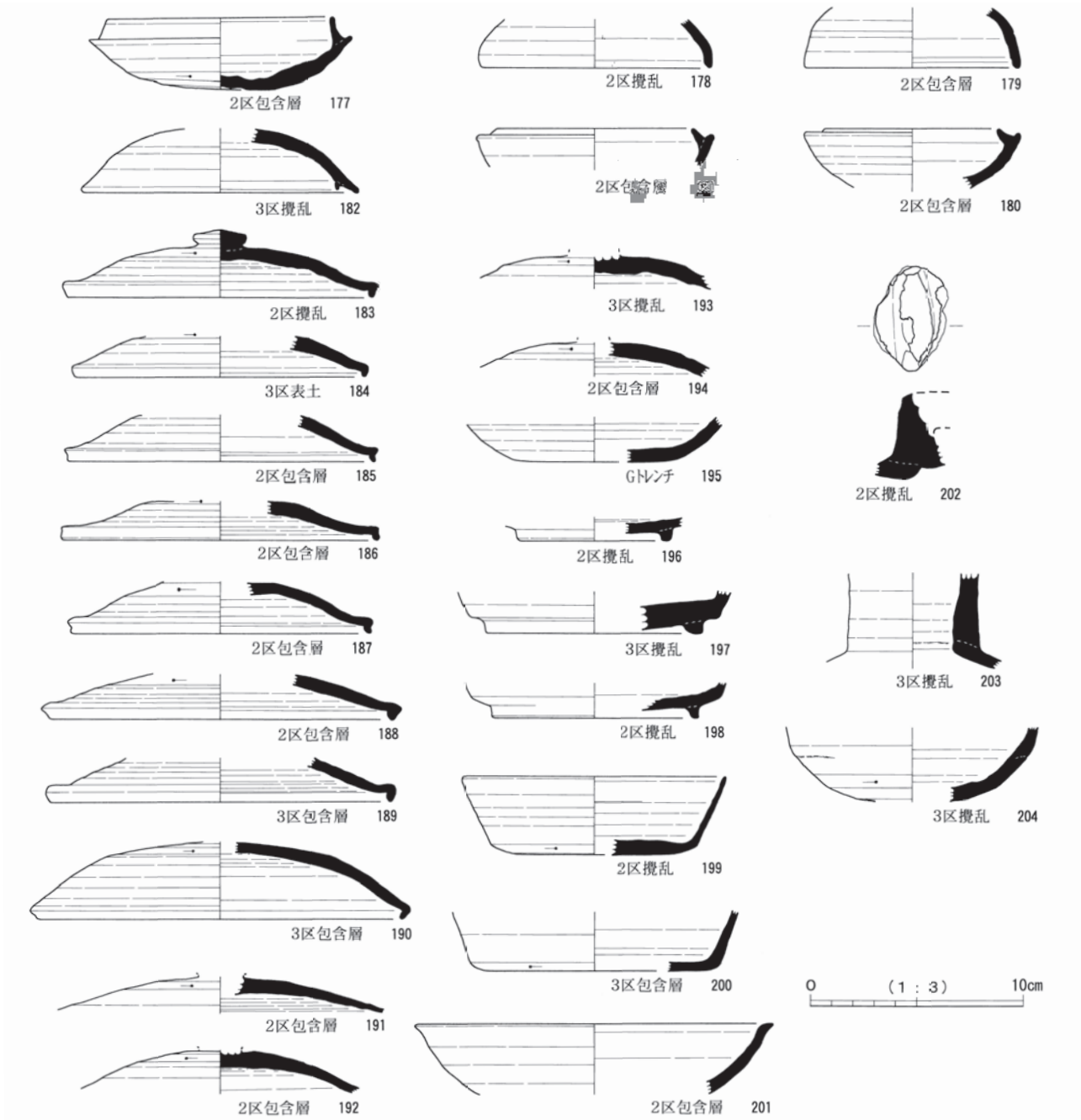
６　遺構外出土遺物

古墳時代後期から平安時代までの遺構外の出土遺物には、須恵器、緑釉陶器、土師器、灰釉陶器がある。以下、須恵器、緑釉陶器、土師器、灰釉陶器の順に報告する。

（１）須恵器（第58・59図，第14表，巻頭図版９，図版42・43）

須恵器では、杯蓋・杯身（杯Ｈ・杯Ｈ蓋）、返蓋、摘蓋、有台杯、箱形杯、平瓶・水注、壺瓶類底部、長頸壺、短頸壺、甕がある。

第57図　SX08出土遺物実測図

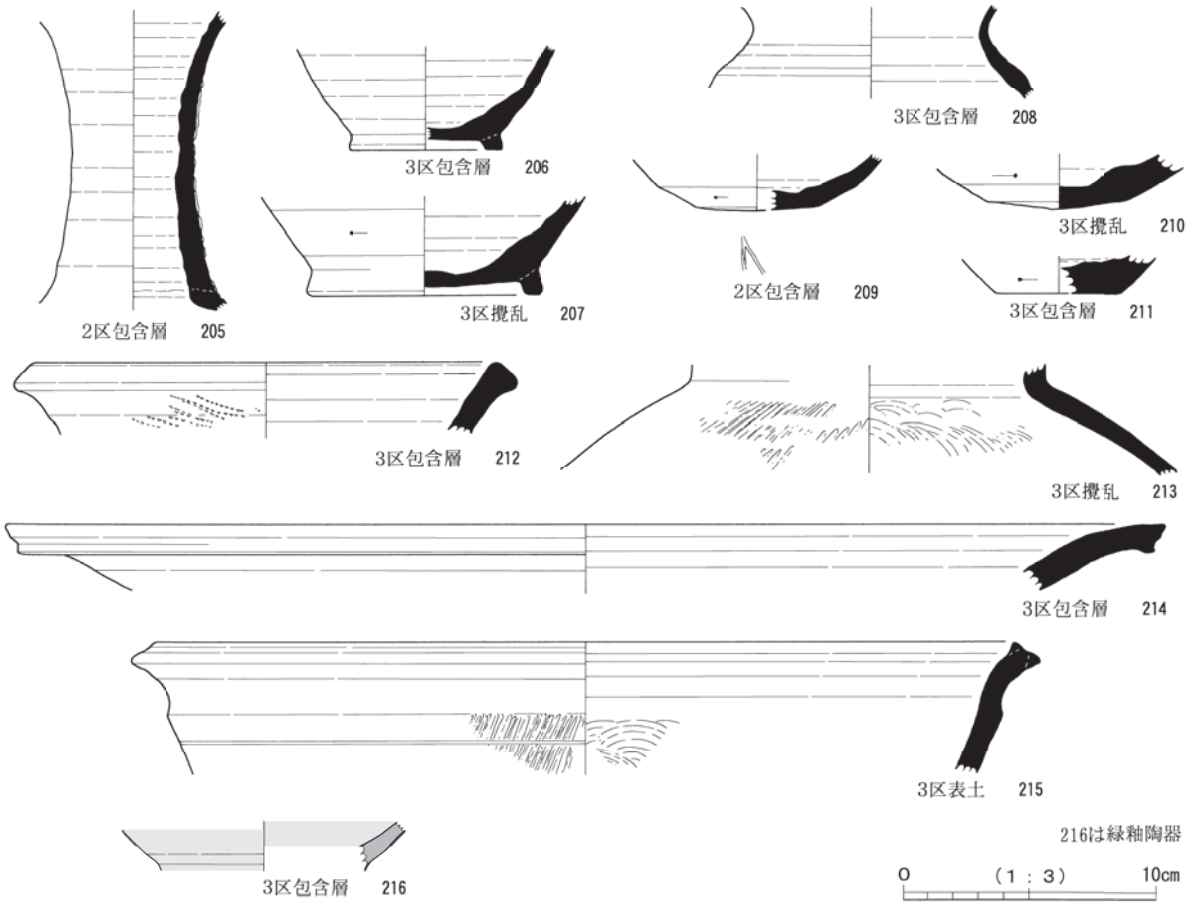


第58図　遺構外出土須恵器実測図①

杯蓋・杯身（杯Ｈ蓋・杯Ｈ）　177は、当該期で最も遡る杯身で、口縁部は短く立ち上がり、口径は10.6cmである。遠江Ⅲ期後葉（TK209型式併行期，鈴木敏2001・2004）に位置づけることができる。文殊堂１・３号墳、天王ヶ谷44号横穴墓と同時期の遺物であり、それらと同時期に集落が形成された可能性がある。

178・179は杯蓋（杯Ｈ蓋）である。半球形の天井部で、口縁部と天井部の境には凹線や稜線は確認できない。180・181は杯身（杯Ｈ）で、立ち上がりは短く内傾して立ち上がる。178～181は、遠江Ⅳ期前半でも比較的新しい時期に位置づけることができる。この時期は、天王ヶ谷横穴墓群、宇藤横穴墓群が最も築造数が多い時期であり、集落と横穴墓の関係が注目できる時期である。

このほか、壺瓶類の底部破片か、杯Ｈの底部破片の可能性がある底部片（209）がある。底部にはＶ字形に交差するようにヘラ記号が刻まれているが、底部の半分以上が欠損しており、本来の記号につい



第59図　遺構外出土須恵器実測図②および緑釉陶器実測図

ては不明である。「×」であろうか。

返蓋（・無台杯）　182は返蓋であり、天井部は欠損している。口縁部は丸みをもって垂下し、返りは口縁部より内側で納まる。遠江Ⅳ期後半、７世紀後半に位置づけられる。195は無台杯の可能性のある破片であるが、箱形杯と同時期の碗形杯の可能性もある。

摘蓋　183～194は摘蓋であり、191～194は摘み、口縁部とも欠損しており、詳細は不明である。

183はほぼ完形に復原できる。擬宝珠形の摘みで、天井部はやや丸みをもって伸び、口縁端部はＬ字形に垂下する。184・188・189が同様の口縁部である。185～187は口縁部を垂直に折り曲げるが、口縁端部をさらに外反させるものである。190は丸みをもって垂下し、口縁端部は内側に向かって折り曲げるものである。190の器高がやや高いことから若干古い可能性があるものの、遠江Ｖ期前半～後半の中に収まる。

有台杯　196～198は有台杯である。197が高台と同じ高さまで底部が突出する可能性があるが、196・198は、底部はほぼ水平である。遠江Ｖ期前半～後半に位置づけることができる。

箱形杯　199・200は箱形杯である。199は水平の底部に、やや外傾しながら直立する。200も199と同様である。遠江Ｖ期後半に位置づけることができる。

高杯　201は無蓋の碗形高杯である。口縁部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は急激に外反させ、外側に引き出される。内面には自然釉が付着している。遠江Ⅳ期～Ｖ期前半頃に位置づけることができる。

平瓶・水注　202は平瓶か水注の把手の破片である。上下左右ともに面取りが行われている。把手が

取り付けられた部分に風船技法による胴部を製作した時の擬口縁部分を塞いだ痕跡が確認できる。奈良時代の水注の可能性が高い。

壺瓶類　204は底部片であるが、杯身にしては厚手であることから、瓶類の底部片である可能性が高い。外面には回転ヘラ削り調整が２回以上行われている。平瓶や坩などの底部の可能性が高い。

210・211は壺瓶類の底部片である。台は取り付けられていない。器種については不明である。

長頸壺　203は平瓶あるいは水注あるいは長頸壺の頸部片である。頸部が太く、厚手であること、頸部と胴部の接合方法から長頸壺の可能性が高い。外面には自然釉が付着し、内面にもその痕跡が確認できることから、蓋はなかったと推断できる。205は長頸壺の頸部片で、頸部は細長く直立気味に立ち上がり、中位から急激に外反する。外面には自然釉が付着しているが、釉が発泡しており、過度の焼成を受けたことが判明する。内面にも釉薬が付着しており、蓋はなかったことが判明する。

206・207ともに台付長頸壺の台部の可能性が高い。底部径が小さいことから、206は肩が張り、稜線をもち、その肩部に胴部最大径をもち、底部まで窄まる形態の胴部である可能性が高い。底部はヘラ削りが行われている。207は高台が206よりもやや広いものの同様の形態であった可能性が高い。２者ともに内面底部に自然釉が付着しており、蓋付ではなかったことが判明する。

短頸壺　208は短頸壺の可能性が高い。球胴の胴部で、口縁部はややく字形に短く立ち上がるものであった可能性が高い。

甕　212～215は甕である。212は口縁部片で、口縁端部は外側に向かって引き出され三角形を呈する。頸部外面には、連続した櫛刺突文が施されている。213は壺の可能性のある肩部から頸部にかけての破片である。外面には平行タタキ調整、内面は同心円の当て具痕をナデ消した痕跡が確認できる。

214は大きく外反しながら立ち上がる口縁部で、口縁部外面には鋭い稜線を造り出し、段をつけている。古墳時代中期後半頃まで遡る可能性がある。

215は直立に近い状態で立ち上がる口縁部片で、鉢の可能性も残る。外面下部にはタタキ痕、その内側には同心円当て具痕をナデ消した痕跡が確認できる。この部分が胴部だと判断すれば、タタキが施されない部分が頸部～口縁部の破片となる。頸部～口縁部はタタキがある部分から内側に屈曲させた後逆ハ字形に開き、口縁端部は外側に向かって引き出され、三角形を呈する。口唇部には水平な面をもつ。

湖西産である場合には鉢である可能性が高く、甕である場合は北垣遺跡に近接する森山古窯群産（森山窯産）である可能性が高い。この想定が正しければ、７～８世紀代の年代を与えることができる可能性が高い。

なお、須恵器は、196・214・215以外は、湖西産の可能性が高い。196は猿投産の可能性がある。

須恵器からみた北垣遺跡　北垣遺跡出土須恵器は、奈良時代（８世紀代，遠江Ⅴ期）を中心に、遠江Ⅲ期後葉（６世紀末）～Ⅵ期（９世紀前半）・黒笹90号窯式期（９世紀後半）まで継続する。遠江Ⅲ期後葉～Ⅳ期代は量的には少ないものの、間違いなく人為が及んでおり、６世紀末～９世紀後半まで継続的に集落であった可能性が高い。

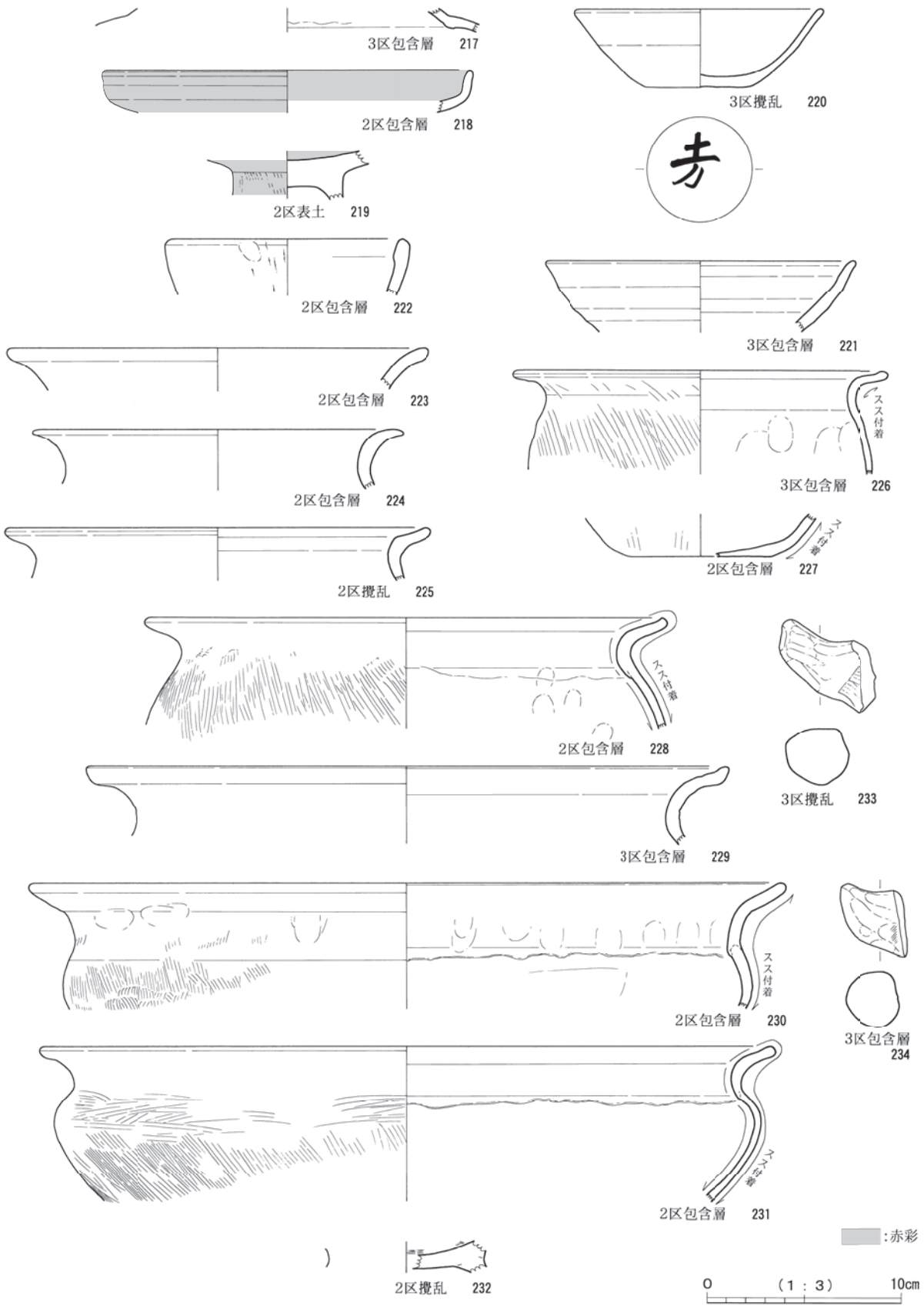
（２）緑釉陶器（第59図，第14表，巻頭図版９・13，図版42）

遺構外から、緑釉陶器が１点（216）出土した。

216は碗の体部から底部にかけての破片である。小片であり形態の詳細は不明である。やや赤みがかった黄褐色の土師器のような胎土に緑釉が塗布されている。猿投産の可能性が高い。時期は不明である。

（３）土師器（第60図，第14表，巻頭図版９，図版42・44）

土師器には、蓋、盤、脚付盤、杯、甕、甑、製塩土器の可能性がある土器がある。



第60図　遺構外出土土師器実測図

蓋　217は杯蓋の可能性が高い。天井部からハ字形に垂下し、途中で屈曲させ、さらに外反させるものである。須恵器の遠江Ｖ期後半に並行する時期に位置づけられる（鈴木敏1998）。

杯　220は底部に糸切痕の残る杯である。平底の底部から外上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げられる。内外面ともによく撫でられ、器表面は滑らかである。底部には墨書が確認できる「十万」の可能性が高いが、「十」の縦線が下の「万」とついてしまっているため別文字の可能性がある。底部径が口径に比して小さいことから遠江Ｖ期後半以降に、おおむね遠江Ⅵ期（K14併行期）頃に位置づけられる可能性が高い。221は同じく杯片であり、220とほぼ同形態、同時期であった可能性が高い。220・221ともに赤彩は確認できず、施されなかった可能性が低い。

盤（皿）　218は盤の口縁部片である。口縁部はほぼ直立して短く立ち上がる。内外面ともに赤彩されている。遠江Ｖ期後半に併行する時期に位置づけられる。

脚付盤　219は脚付盤の脚基部片である。基部径はやや太い。外面にはハケ調整の痕跡が残る。盤部内外面および脚部外面に赤彩されている。遠江Ｖ期後半に並行する時期に位置づけられる可能性が高い。

製塩土器の可能性のある土器　222は他の土師器と胎土が全く異なり、地元の製品ではないことが判明する。口径は12.6cmと小さい。残存部位は小さな杯状であるが、下部の形態は不明確である。外面の調整はやや雑であり、粘土紐を伸ばした時の皺が残る。粘土紐を積み上げて手づくね成形している。類似する器種としては鉢があるが、胎土が異なっている。これ以外の可能性として製塩土器の可能性がある。

甕　223～231は甕の破片で、232は大型台付甕の台基部片である。

223～229は遠江型の長胴甕の可能性が高いが、中には230・231のように鍋に近く、胴部が短く胴下部が急激に窄まる形態であった可能性がある。223～226・228・229はいずれもコ字形の頸部で、口縁部が水平に近い状態で開くもの（225・226・228・229）、外上方に向かい立ち上がるもの（223・224）がある。

230・231は胴部まで残存する個体で、長胴甕ではなく、鍋状の半球形に近い胴部をもつ平底の甕である可能性が高い。頸部の形状はコ字形で、やや外上方に向かって口縁部が立ち上がる。胴部は頸部直下で肩部となり、底から底部に向かって急激に窄まる形状であった可能性が高い。胴部外面（肩部以下）には縦方向のハケ調整、肩部から頸部までが230は縦方向のハケ調整、231は横方向のハケ調整で、230・231ともに口縁部はナデ調整が行われている。

232は大型台付甕の基部片である。内面底部にハケ調整が確認できる。

時期を特定することは難しいが、230・231の甕は遠江Ｖ期後半（８世紀後半）以降に位置づけられる。これ以外のものは時期を特定することは難しい

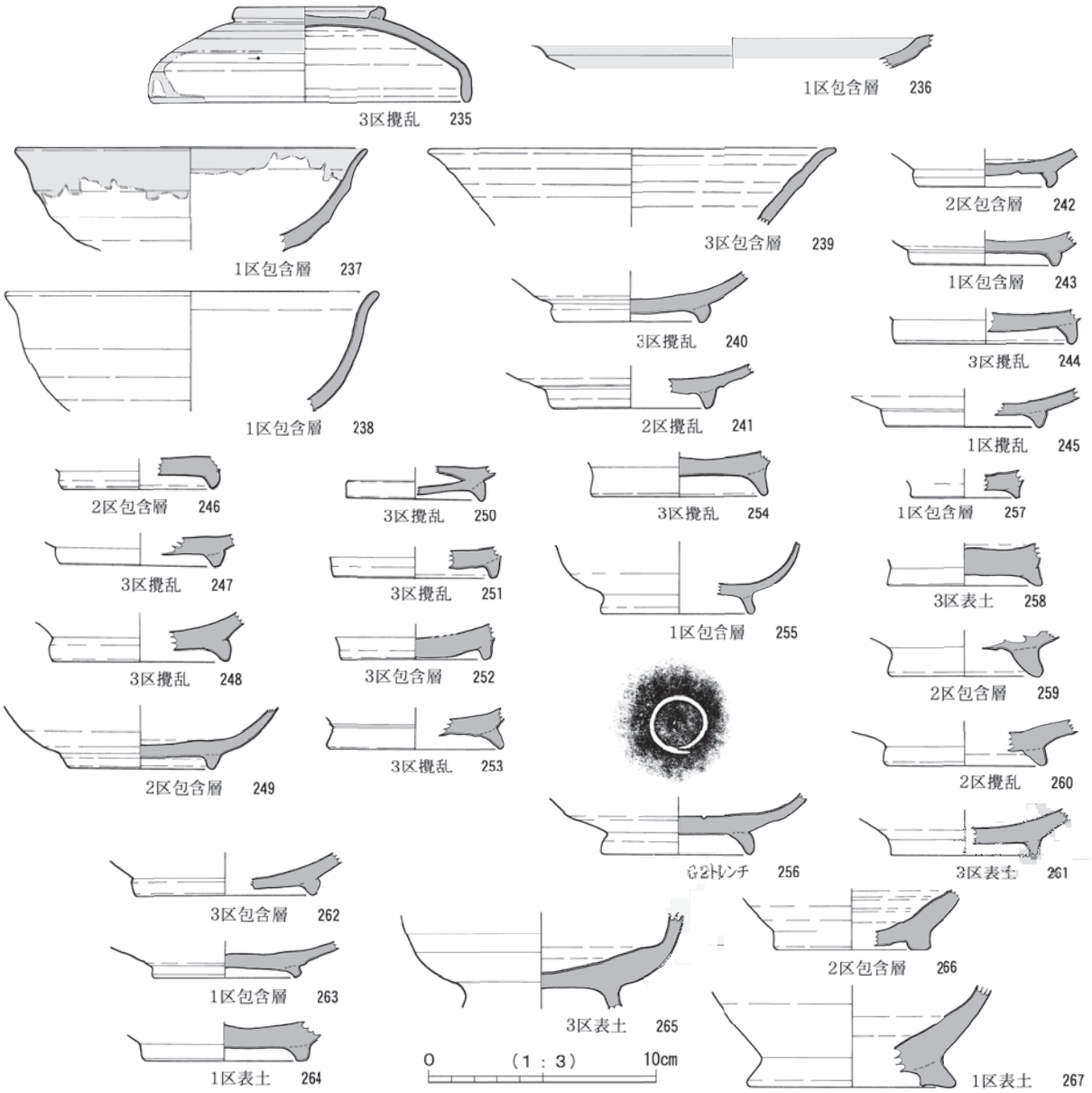
甑　233・234は甑の把手である。角形の把手で、角先はＬ字形には屈曲せず、緩やかに上方に屈曲するのみである。時期を特定することは難しい。

（４）灰釉陶器（第61図，第14表，巻頭図版11，図版45・46）

灰釉陶器（註２）は蓋、段皿、碗、壺が出土した。

蓋　235は蓋の可能性が高いものである。摘みは貼り付けの環状摘みで、内傾する段を有する。天井部は逆碗形に垂下し、口縁部はほぼ直立する。天井部は、口縁部の屈曲部分までヘラ削り調整を行っている。灰釉が天井部から屈曲部分あたりまで塗布されている。ハケ塗り、漬け掛けの判断は難しいが、天井部付近のみであることからハケ塗りの可能性が高い。口縁端部には別の土器が付着しており、重ねて焼成されたことがわかる。類似する器種が確認しにくいが、広口壺の蓋などが想定できる。

胎土の特徴から清ヶ谷産の可能性が高く、ヘラ削りの範囲が広いことなどから松井編年清ヶ谷Ⅲ-１期（10世紀前半）以前の可能性が高い（松井1989）。



第61図　遺構外出土灰釉陶器実測図

段皿　236は段皿の段部分の破片である。外面は段部分までヘラ削りが行われている。内外面ともにハケ塗りである。黒笹（K）14～黒笹（K）90号窯式期に位置づけられる（齊藤1989）。

碗　碗は胎土の特徴から、清ヶ谷産（237～260）と宮口産（262～264）があり、261は清ヶ谷産の可能性を排除できないが、胎土がセピア色を呈することから、後述する265と同様の産地（森山窯産）の可能性がある。

碗は完形品に復原できる個体がなく、口縁部片と底部片が多い。237・238は見込みからゆったりと立ち上がる碗で、口縁部を緩やかに外反させる。一方、239は見込みから直線的に立ち上がり、口縁部を外側に引き出すものである。形態は異なるが、237～239は松井編年清ヶ谷Ⅳ-２期（11世紀前半～中頃）に位置づけることができる。

底部片（240～245）は、三角高台に近い、低い三日月高台である。清ヶ谷Ⅲ-１期（10世紀前半）に位置づけられる。246～249は三角高台であり、清ヶ谷Ⅲ-２期（10世紀中頃）に位置づけられる。250～252は低い三角高台であり、清ヶ谷Ⅳ-１期（11世紀前半）に位置づけられる。253～256は爪形高台で、

高台が高い。253～255が清ヶ谷Ⅳ-２期、256が清ヶ谷Ⅳ-３期に位置づけられる。256は清ヶ谷産灰釉陶器Ⅳ期に特徴的な内面見込み部分に円形のヘラ記号が描かれている。257～260は低い爪形高台あるいは山茶碗のような厚手の高台であり、257・259・260が清ヶ谷Ⅳ-４期、258が灰釉陶器清ヶ谷Ⅳ-４期～東遠江系山茶碗Ⅰ期（松井1989）に位置づけられる。

261は碗の底部片であり、257の形態と類似することから、清ヶ谷Ⅳ-４期（11世紀後半）とほぼ同時期に位置づけられる。

なお、247は内面に重ね焼きの痕跡が残るが、２箇所に重ねられていた高台に底部が付着しており、２度焼成されたものであることがわかる。やや不良品が流通していたといえる。また、252は見込み部分まで自然釉が付着していることから、重ね焼きの最上部の個体であった可能性が高い。

碗？　265は高台付碗の可能性が高いものであり、灰釉陶器の可能性が高いが、山茶碗の可能性も残る。体部はゆったりとして丸みをもって立ち上がる胴部で、高台は爪形に近く、高い。底部の糸切痕はナデ消されるが、ヘラ削りが施されたかどうかは判断できない。

産地については、猿投窯、二川窯、宮口窯、清ヶ谷窯の胎土とは異なり、暗赤褐色の胎土で白色の砂粒を含むことから、北垣遺跡に近接する森町西金谷窯（いわゆる森山窯，森町史編さん委1998）などの製品の可能性が高い。高台は爪形高台に近いことから、松井編年清ヶ谷Ⅳ期以降に併行する可能性が高く、胎土が厚手であることから灰釉陶器の最終段階か山茶碗の初出段階頃、11世紀後半～末ごろに位置づけられるか。

壺（長頸壺）　長頸壺の胴部から底部片と推測する土器片２点（266・267）がある。266は低い角高台に近い形状、267はハ字形に垂下するやや扁平な台形状である。両者ともに胎土の特徴から清ヶ谷産の可能性が高く、松井編年清ヶ谷Ⅳ期頃の製品の可能性が高い（松井1989）。

灰釉陶器からみた北垣遺跡　灰釉陶器は、K14・K90窯式期の個体は多くはないが、全く存在しないというわけではないことから、集落としては、折戸（O）53号窯式期（O53期）以降の松井編年清ヶ谷Ⅲ期以降、松井編年宮口Ⅲ期以降（10・11世紀）まで継続していた可能性が高い。

なお、灰釉陶器段階では、清ヶ谷Ⅳ期段階に天王ヶ谷横穴墓群の再利用が行われており、それらとの関連が注目される時期となる。比較対象となる遺物が少ないことから、詳細な検討は難しいが、集落と墓との関係が想定できる遺跡として注目しておくべきである。

第５節　中　　世

１　中世の概要

中世以降については、掘立柱建物、土坑、溝状遺構、井戸などを確認したが、掘立柱建物などは時期を特定することが困難であるため、時期を確定できる遺構については、中世では中世墓、土坑、近世では近世墓、井戸などとして報告するが、それ以外は掘立柱建物、土坑、溝（溝状遺構）として「第６節近世以降」で一括して報告することとする。

２　中世墓

（１）中世墓の位置（第62・69図）

中世墓は主に調査区北側～西側にかけて位置しており、丘陵平坦面の北西隅に墓を造営する意識が働いていたと推測する。第６章で後述するように一石五輪塔や宝篋印塔も－SE01の部材として再利用されたものを除く－この２区北部で出土しており、石塔はこれらの中世墓の供養塔であった蓋然性が高い。

なお、中世墓の分布は調査区最北端部分（２区北端，第62図）と、そこから南西に20mほど離れた位置（２区北西側，第69図）に集中する傾向があり、造営集団や時期が異なっていた可能性もある。

（２）SK02（第62～64図，第10・18表，図版16・49～51）

位置　SK02は調査区北端、２区Ｌ72グリッドに位置する。

特徴　SK02は長方形の土壙の南北に小礫が詰められた小穴が伴うものである。小穴まで含めた全長は1.35mである。中央は長方形で、断面は逆台形である。南北約1.0m、幅0.7m、深さ0.2mである。長辺をほぼ南北に向ける。小穴は、北側で南北0.45m、幅0.3m、深さ0.05mで、５cm前後の小礫が充填されている。南側の小穴は直径0.2mで、深さ約0.05mであり、５cm未満の小礫が充填されている。内部には焼土・炭化物ともには確認できないことから土葬であった可能性が高い。

なお、土壙の規模から判断して、伸展葬は不可能であることから、正座してお辞儀をした状態を寝かせた（横倒しした）ような状態で埋葬した（以下，横臥屈葬）可能性が高い。

遺物出土状況と出土遺物　SK02は方形土壙の最北部底面から銅銭３点が重なった状態で出土した。床面直上で出土したことから、銅銭は３枚であった可能性が高い。

銅銭は、「開元通寶」（283，初鋳621年）、「洪武通寶」（284，初鋳1368年）、「開？□通寶」（285，「開元通寶」の可能性が高い）の３枚で、283（・285）が唐銭、284が明銭である。銭種が異なることから撰銭の意識はなかった可能性が高い。

時期　SK02からは銅銭しか出土しておらず、時期を特定するのは難しいが、他の中世墓が中世後期（戦国時代）であることを考慮すれば、同時期に位置づけられる可能性が高い。

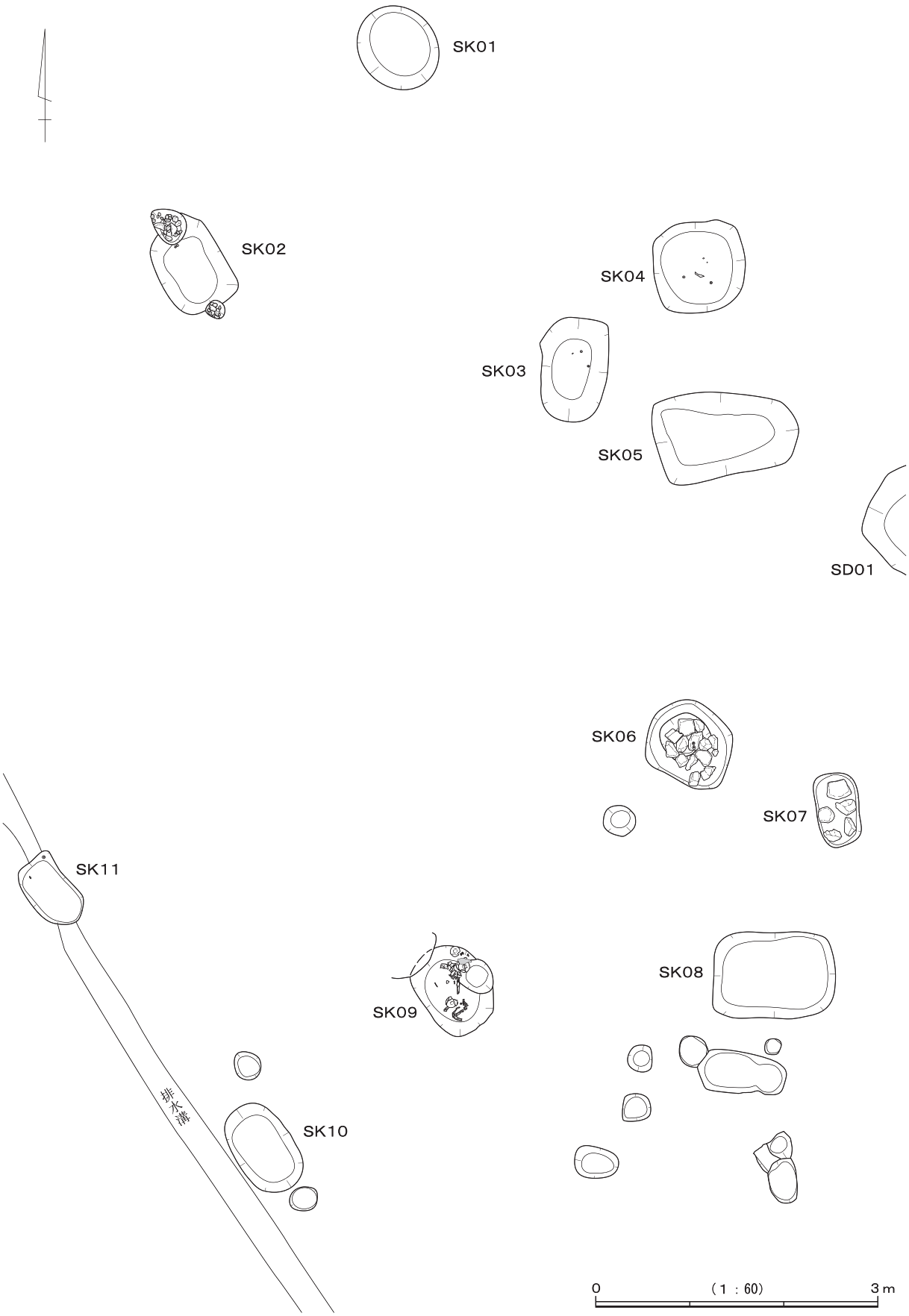
（３）SK03（第62～64図，第10・14・18表，図版17・49～51）

位置　SK03は、調査区北端、２区Ｌ72グリッド、SK02から東に約３mに位置する

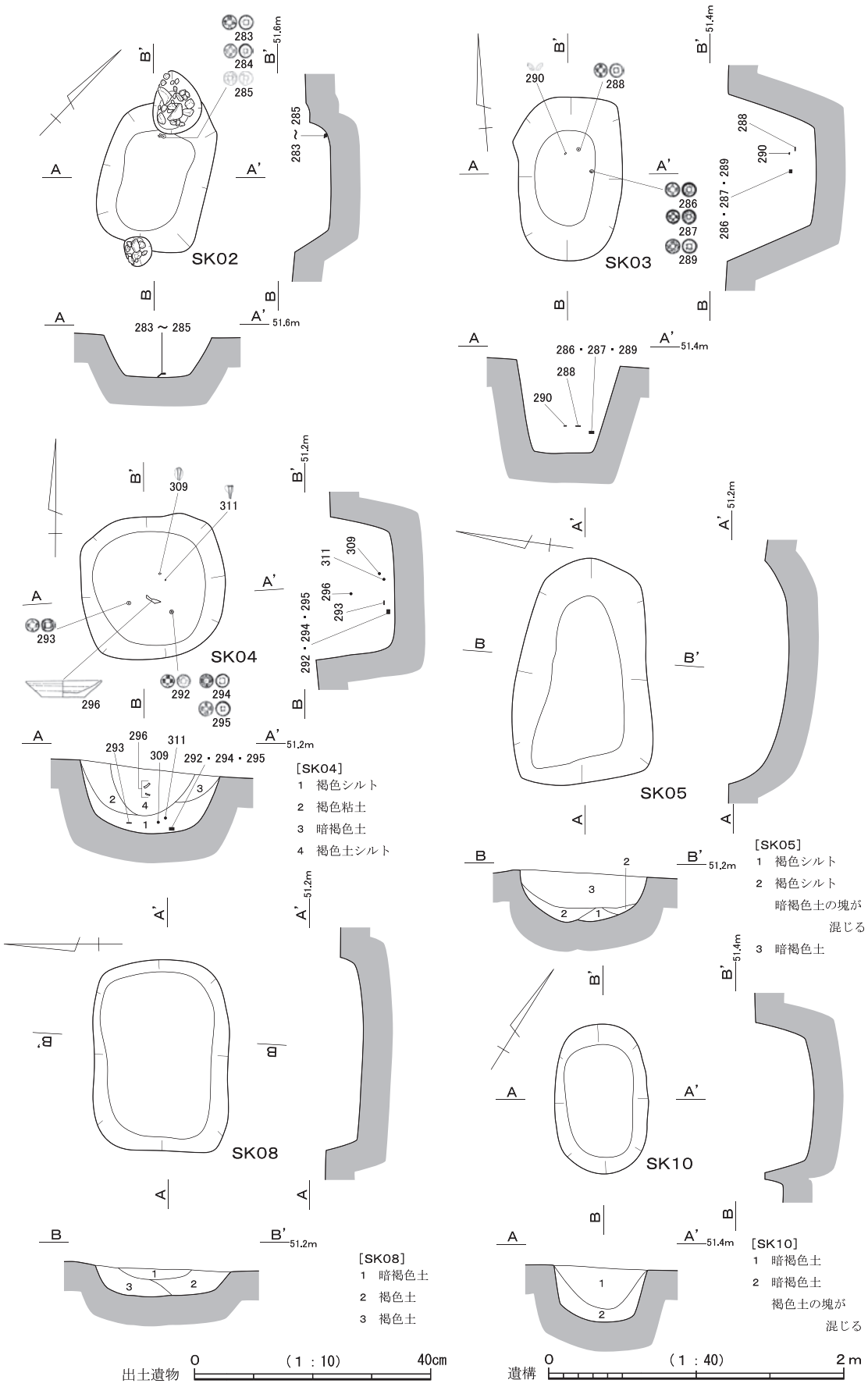
特徴　SK03はやや不整形な隅丸長方形で、断面は逆台形である。南北約1.1m、東西約0.7m、深さ0.6mである。長辺をほぼ南北に向ける。

なお、内部からは焼土・炭化物ともに確認できないことから土葬の可能性が高い。また、伸展葬は不可能であることから、横臥屈葬である可能性が高い。

遺物出土状況と出土遺物　SK03からは床面より約10～20cm上位から、銅銭５枚が出土した。１枚単



第62図　中世墓　分布図①（２区北側集中箇所）



第63図　中世墓　実測図①

独（290と288）と３枚重ね（286・287・289）の状態で出土した。

「元豊通寶」（286，初鋳1078年）、「紹聖元寶」？（287，初鋳1094年）、「政和通寶」？（289，初鋳1111年）で、残りの２点はＸ線写真でも鋳潰れあるいは錆のため不明（288）、少片のため不明（290）である。文字の判読できる３点については、いずれも宋銭である。

この他覆土から、灰釉陶器碗１点（291）が出土した。混入品の可能性が高い。三角高台に近い、三日月高台である。胎土は白灰色を呈することから、宮口窯産で、松井編年宮口Ⅲ-２期に位置づけられる。

時期　SK03は出土した灰釉陶器、銅銭からは時期を特定することは難しい。土器が出土した中世墓が中世後期（戦国時代）に位置づけられることから、その時期に帰属する可能性が高い。

（４）SK04（第62・63・65図，第10・14・16・18表，巻頭図版13，図版17・46・47）

位置　SK04は調査区北端、２区Ｌ72グリッドに位置し、0.7m南西にSK03、0.9m南にSK05が位置する。

特徴　SK04の平面は隅丸方形で、断面は箱形である。東西両辺はほぼ南北方向を向ける。東西、南北ともに約0.95m、深さ約0.45mである。内部からは焼土や炭化物は確認できないことから、土葬の可能性が高い。また、伸展葬は不可能であることから、横臥屈葬であった可能性が高い。

後述するように土壙内部からは釘が出土しており、釘付式木棺に納めて埋葬された可能性が高い。残念ながら小さな釘は出土状況図を作図する前に取り上げられてしまっていたため、釘の配置については不明である。

遺物出土状況と出土遺物　SK04からは、床面直上で銅銭３枚（292・294・295）、それよりやや浮いた状態で、銅銭１枚（293）が出土し、銅銭とほぼ同一の高さ・土層から鉄釘（298～315）が出土した。

かわらけ（296・297）は土壙内に落ち込んだ土砂内（４層）から出土した。かわらけはSK04に伴う可能性が高いことから、棺の上部におかれていた可能性と、４層が後世の掘り込みで、その掘り込みによって上に巻きあげられた可能性がある。

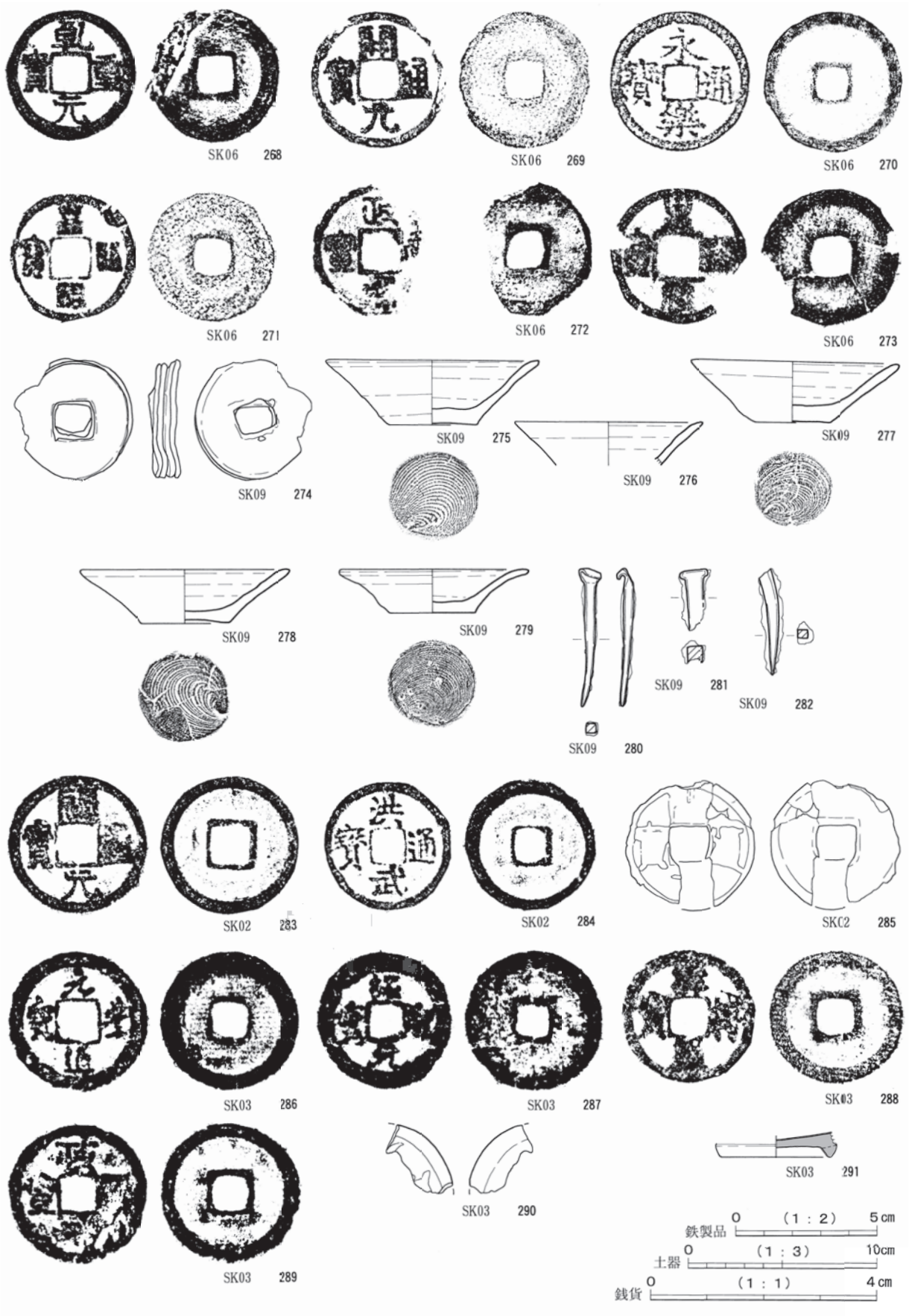
銅銭は４枚であり、「開元通寶」（292，初鋳621年）、「元豊通寶」（293，初鋳1078年）、「元祐通寶」か「元符通寶」（294，前者の場合初鋳1086年，後者の場合初鋳1098年）、「宣徳通寶」（295，初鋳1426年）であり、292が唐銭、293・294が宋銭、295が明銭である。銭種が異なることから撰銭の意識はなかった可能性が高い。

かわらけ（296・297）はロクロ成形かわらけであり、平底の底部から外上方に向かって直線的に立ち上がる。口径12.5cm前後、器高2.5cm前後であり、口径と比較して器高が低い。松井一明氏によるかわらけ編年で、16世紀前半頃（戦国時代前半）に位置づけられる（松井1993・2005）。

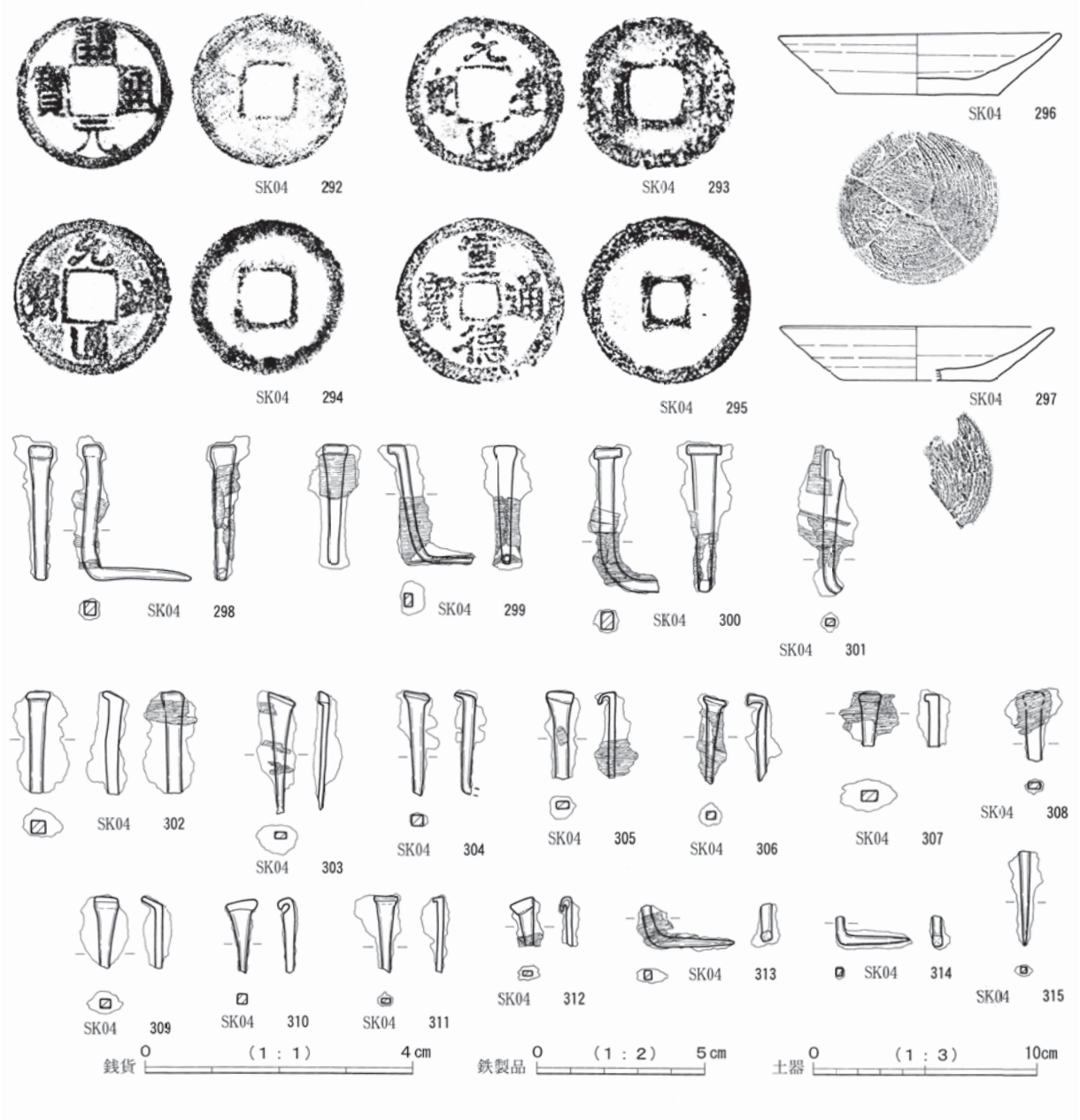
鉄釘（298～315）は頭部で数えて15本（298～312）である。頭部の大きさはほぼ同じであるが、身部の幅や形態から、身部が太いもの（298～302）、身部が細いもの（303～315）に区分することができる。頭部はいずれもＴ字形に叩き伸ばした後、Ｌ字形に折り曲げるものである。身部は、長さの半分程でＬ字形に折り曲げられる形状を示す。一部の釘に木棺の木材が残存するが木目はすべて釘身に直交する。また、Ｌ字形に折り曲げられた個体の釘先側には木質が確認できないため、釘は木棺を接合するため打ち込まれた後、内側に突き出した部分を折り曲げたと想定できる。釘に残る木棺の木材は最大で3.5cmであることから、板の厚さが3.5cmであった可能性があるものの、それよりも薄い可能性がある。この場合は複数を留めた部分である可能性がある。この場合１枚の板の厚さは1.5cm程度となろう。

釘の長さは完存する298で、復原した全長で約7.0cmであり、身部が太いものは頭部幅0.7～1.0cm、身部幅0.5～0.7cm、身部が細いものは頭部幅0.7～0.8cm、身部幅４～６mmである。

時期　SK04は、かわらけが出土していることから、16世紀前半頃に位置づけることができる。



第64図　中世墓出土遺物実測図①



第65図　中世墓出土遺物実測図②

（５）SK05（第62・63図，第10表，図版17）

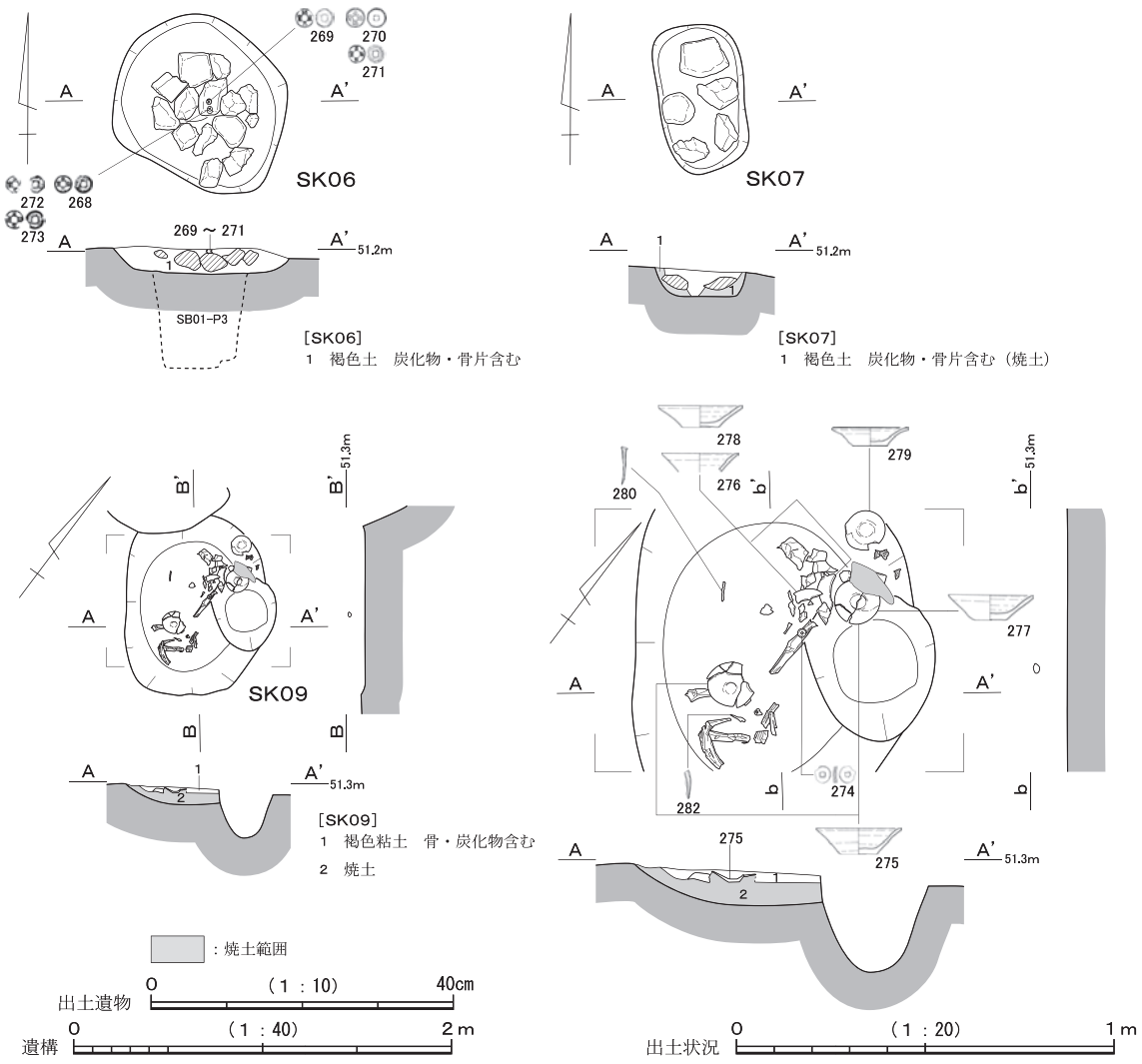
位置　SK05は、調査区北端、２区Ｌ72グリッドに位置する。北側0.9mにSK04がある。

特徴　SK05は後述するように出土遺物がないが、掘削された場所が中世墓と同一であること、平面形態や規模が中世墓と類似することから、中世墓と判断した。

SK05は、やや不整形な隅丸長方形の平面形であり、断面はU字形である。主軸を東西に向ける。東西1.5m、南北0.95m、深さ0.35mである。内部には焼土や炭化物が確認できないことから、土葬であった可能性が高い。土葬であった場合には大人の伸展葬は難しいことから、横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK05からの出土遺物はない。

時期　SK05は出土遺物がないことから、時期を特定することは難しいが、中世墓であるとの仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）に位置づけられる可能性が高い。



第66図　中世墓　実測図②

（６）SK06（第62・64・66図，第10・18表，巻頭図版８，図版16・49～51）

位置　SK06は、調査区北端、２区Ｋ72グリッドに位置する。東南東約1.0ｍにSK07、南側約1.5ｍにSK08、南西約2.8ｍにSK09、北約2.4ｍにSK05が位置する。

特徴　SK06は、土壙内部に集石された中世墓である。平面形はやや不整形な隅丸方形であり、断面は逆台形である。東西約0.9ｍ、南北約0.85ｍ、深さ約0.15ｍである。長軸は西北西－東南東に向けるが、東西を意識していたか、南北を意識していたかは明確ではない。土壙の中心に５～15cmの河原石（角ばったものもある）を15石ほど使って１面の石敷を造り、その上に炭化物や銅銭とともに人骨を納めた可能性が高い。炭化物が骨片とともに出土しているが、焼土は確認できず、後述する銅銭は被熱していないことから、火葬骨を納めたかどうかは明確ではない。ただし、石敷を設けている点や炭化物が出土していることから判断して、火葬骨を納めた可能性が高い。

なお、土壙（石材）下部に破線で示した部分については、SK06より以前に形成されていた掘立柱建物の柱穴（SB01-Ｐ３）と判断したが、SK06の下部構造の可能性もある。

出土遺物　SK06からは石敷の中央付近から石材に接して銅銭が３枚ずつ重なった状態で６枚出土した。正しく六道銭である。重なった状態は、269～271の３枚（Ａ）と、268・272・273の３枚（Ｂ）である。Ｂは268の裏面と272の裏面が錆着した状態であった。いずれも被熱したような状況にはない。

銅銭は、Ａが「開元通寶」(269，初鋳621年)、「永樂通寶」(270，初鋳1408年)、「嘉祐通寶」？（271，初鋳1056年)、Ｂが「乾元通寶」(268，初鋳758年)、「政和通寶」(272，初鋳1111年)、「皇宋通寶」(273，初鋳1038年）である。268・269が唐銭、271～273が宋銭、270が明銭である。６枚ともに銭種が異なることから、撰銭の意識はなかったと想定する。

時期　SK06は、時期を特定できる遺物が出土していないことから特定することは難しいが、他の中世墓が中世後期（戦国時代）に位置づけられることから、その時期に帰属する可能性が高い。

（７）SK07（第62・66図，第10表，巻頭図版８，図版16）

位置　SK07は、調査区北端、２区Ｋ72グリッドに位置する。西北西約1.0ｍにSK06、南側約0.9ｍにSK08が位置する。

特徴　SK07の平面形は、隅丸長方形であり、断面は逆台形あるいはＵ字形である。長軸をほぼ南北に向ける。南北約0.8m、東西約0.45m、深さ約0.15mである。床面・壁面は被熱して赤化しており、床面から炭化物・焼土とともに骨片が出土したことから荼毘墓（火葬墓）であることが判明する。この土砂（１層）の上から、SK06で使用された礫よりも大型の礫（20～25cmの河原石）が出土した。人骨や炭化物との関係が不明確であり、SK06のようにこの礫の上に人骨があった可能性も残る。

出土遺物　SK07からの出土遺物はない。

時期　SK07は出土遺物がないことから、時期を特定することは難しいが、他の中世墓同様、中世後期（戦国時代）に位置づけられる可能性が高い。

（８）SK08（第62・63図，第10表，図版17）

位置　SK08は、調査区北端、２区Ｋ72グリッドに位置する。北側0.9ｍにSK07、約1.5ｍにSK06が位置する。

特徴　SK08の平面形は隅丸長方形であり、断面は逆台形である。長軸をほぼ東西に向ける。東西約1.3m、南北約0.9m、深さ約0.2mである。内部からは焼土や炭化物は出土しておらず、中世墓であるとの仮定が正しければ、SK08は大人の伸展葬は難しいことから、横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK08からの出土遺物はない。

時期　SK08は出土遺物がないことから時期を特定することは難しいが、中世墓との仮定が正しければ、他の中世墓同様、中世後期（戦国時代）に位置づけられる可能性が高い。

（９）SK09（第62・64・66図，第10・14・16・18表，巻頭図版８・13，図版16・47・48）

位置　SK09は、調査区北端、２区Ｋ72グリッドに位置する。東側約2.3ｍにSK08、北東約2.8ｍにSK06、南西約2.0ｍにSK10、西北西約3.5ｍにSK11が位置する。他の中世墓からはやや距離があり、単独で位置しているといえようか。

特徴　SK09の平面形はやや不整形な隅丸長方形であり、断面皿状である。長軸はほぼ南北に向ける。南北約1.0m前後、東西約0.75m前後、深さ0.1mである。底面と壁面は被熱して赤化している（２層)。この焼土の上位から炭化物とともに人骨が出土した。これらの状況から判断して、荼毘墓（火葬墓）であることが判明する。

遺物出土状況と出土遺物　SK09からは人骨とともに銅銭、かわらけ、鉄釘が出土した。人骨は土壙の南側と中央部で長骨が出土したが、非常に脆く取り上げおよび人骨鑑定をすることができなかった。鉄釘は掘方の中央で１点（280）と南側の人骨付近で１点（282)、覆土中から１点（281）が出土した。また、掘方中央の人骨上から、銅銭４枚（274）が被熱して溶解し癒着した状態で出土した。このほか

銅銭が被熱して溶解し小銅塊となったもの３点（図版47-４）が出土した。かわらけは４点（276～279）が北東隅角から出土した。また、この位置と掘方中央付近から出土した破片が接合したかわらけ１点（275）が出土した。かわらけは２次焼成を受けている可能性が高く、銅銭同様火葬（荼毘）にあたっては棺内に納められていた可能性が高い。

銅銭（274）は被熱により歪んでいる。Ｘ線撮影の結果、「元」と想定する文字が辛うじて判読できるが表面の劣化等により、銭種は不明である。少なくとも４枚は癒着している。このほか図化していない銅銭が溶解した小銅塊３点（図版47-４）があり、銅銭１～２枚分と想定できる。したがって、銅銭は５～６枚納められていた可能性が高い。

かわらけは、５点（275～279）出土した。いずれもロクロ成形のかわらけで、底部には糸切痕が残る。いずれも底部から外上方に向かってやや外反しながら直線的に延びる口縁部である。底部径に比して口径が大きく、器高も低い。やや大型の275・277・278と小型の276・279に区分できる。なお、上述したように２次焼成を受けている可能性が高い。

鉄釘（280～282）は頭部で数えて２点である。２点では木棺は釘留することは困難であることから、SK04同様本来は10本以上であった可能性が高い。280は頭部をＴ字形に叩き伸ばした後、Ｌ字形に折り曲げるものであり、SK04出土の釘と同様の特徴を有する。釘身は断面方形で、釘頭から釘先に向かって直線的に伸びる。全長約5.0cm、頭部幅８mm、釘身幅４mmである。281はＴ字形の頭部であるが、本来は280のようにＬ字形に折り曲げていた部分が欠損して、Ｔ字形に見えるだけの可能性が高い。頭部幅約1.0cmで、釘身は断面方形で、幅６mmである。282は釘先片で、281と同一個体であった可能性がある。SK04でも釘の太さに違いがあったように280と281・282は太さが異なることから、SK09の木棺も部位による釘の使い分けがあった可能性がある。

時期　SK09は、出土したかわらけが、口径が大きいわりに器高が低い等の特徴から、松井編年により16世紀後半、中世後期（戦国時代後期）に位置づけられる可能性が高い。

（10）SK10（第62・63図，第10表，図版17）

位置　SK10は、調査区北端、２区Ｋ72グリッドに位置する。北東約2.0mにSK09、北西約2.6mにSK11が位置する。他の中世墓とはやや離れている。

特徴　平面・断面形態と規模が中世墓と類似することから、遺物は出土していないものの中世墓と判断した。SK10の平面形は隅丸長方形であり、断面は逆台形を呈する。長軸はほぼ南北を向ける。南北約1.0m、東西約0.65m、深さ約0.35mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できないことから、中世墓であった場合には土葬で横臥屈葬であった可能性が高い。

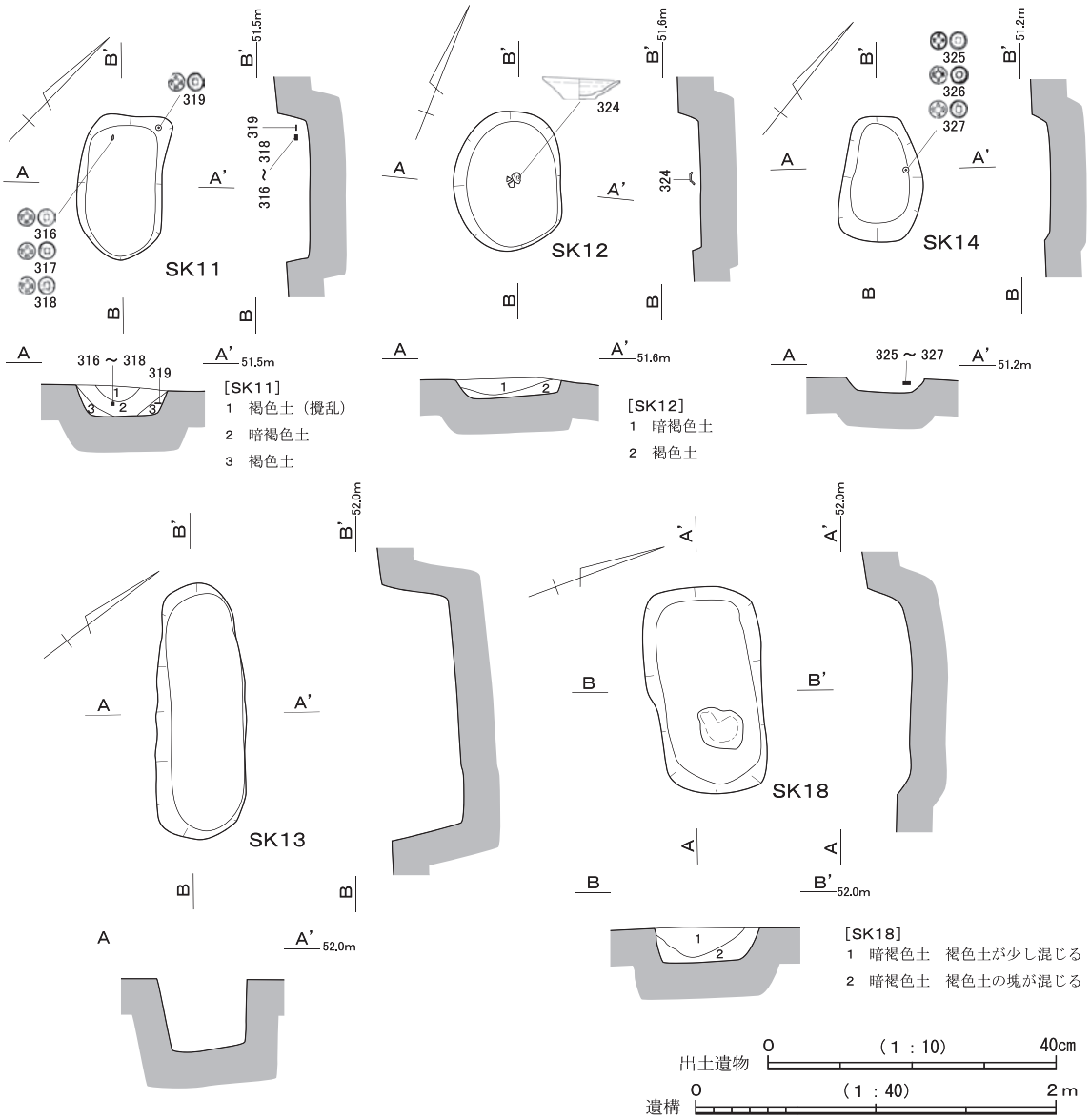
出土遺物　SK10からの出土遺物はない。

時期　SK10が中世墓であるとの仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（11）SK11（第62・67・68図，第10・18表，図版18・49～51）

位置　SK11は、調査区北端、２区Ｋ71グリッドに位置する。南東約2.6mにSK10、南西約3.5mにSK12が位置する。

特徴　SK11の平面形は、やや不整形な隅丸方形であり、断面は箱形に近い逆台形である。主軸はやや西側に向けるが、ほぼ南北方向にとる。南北約0.8m、東西約0.5m、深さ約0.15mである。内部には炭化物、焼土ともに確認できないことから、土葬であった可能性が高い。土葬であった場合には、伸展葬は不可能であり、横臥屈葬であった可能性が高い。



第67図　中世墓　実測図③

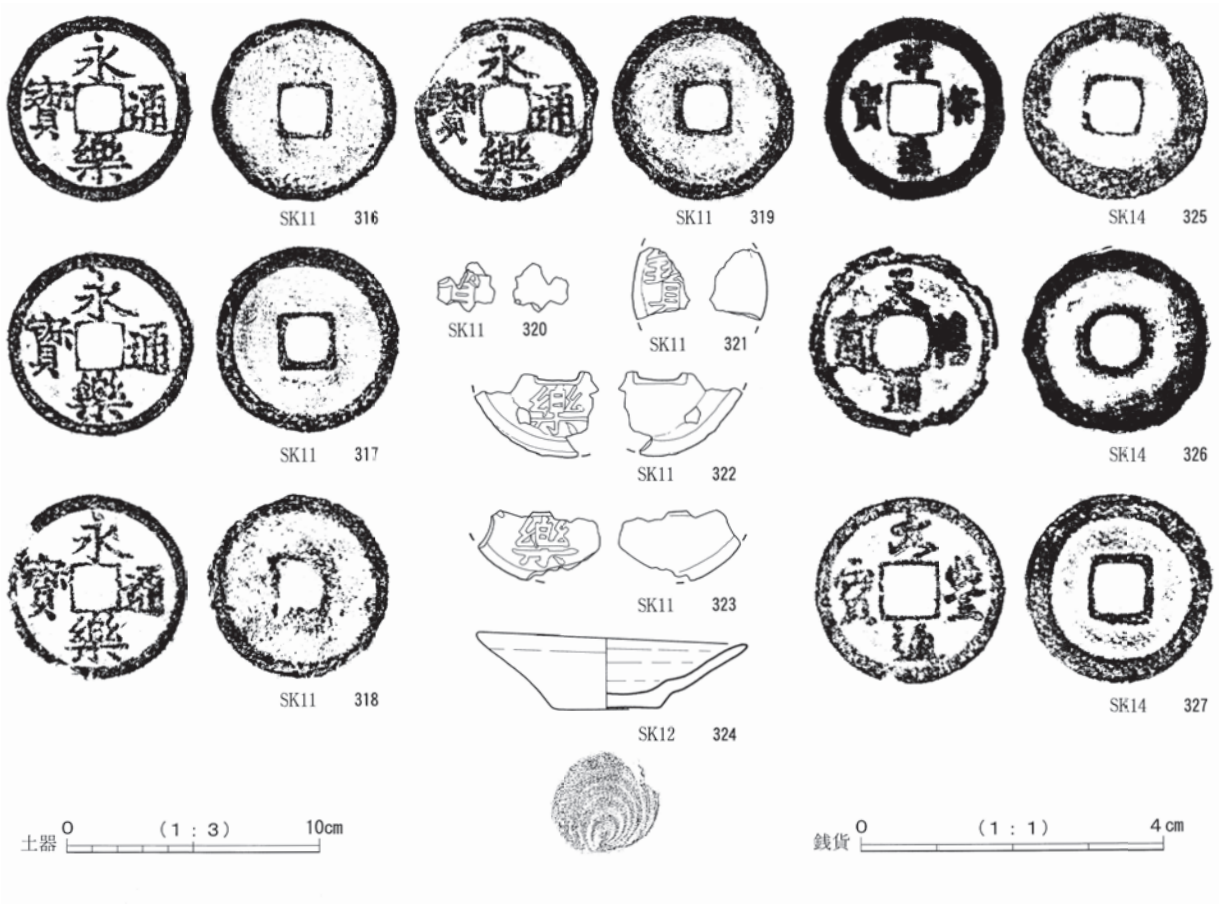
遺物出土状況と出土遺物　SK11からは銅銭が北東隅角から１枚（319）、北西隅角から３枚（316～318）が重なった状態で出土した。また、覆土中から破壊された状態で銅銭の破片４点（320～323）が出土した。破片の４点のうち２点に「樂」が確認できることから２枚分と判断できる。したがって、SK11には合計６枚が納められていたことになる。

銅銭６枚分（316～323）は、すべて「永樂通寶」（初鋳1408年）、明銭である。したがって、SK11の造営者は「永樂通寶」を選ぶ、撰銭を行った可能性が高い。

時期　SK11は時期を特定できる遺物が出土していないことから、時期を特定することは困難であるが、他の中世墓を参考にすれば、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（12）SK12（第67・68図，第10・14表，図版17・48）

位置　SK12は、調査区北端、２区K71グリッドに位置する。北西約3.5mにSK11、西に約4.0mにSK13、南西に約9.0mにSK14が位置する。他の中世墓は近接せず、単独で営まれた可能性がある。



第68図　中世墓出土遺物実測図③

特徴　SK12の平面形態はやや不整形な楕円形で、断面は逆台形である。長軸をほぼ南北に向ける。南北約0.8m、東西約0.6m、深さ約0.1mである。内部からは炭化物・焼土ともに確認できないことから、中世墓であった場合には土葬で、横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK12からは掘方の中央で、かわらけ１点（324）が出土した。

かわらけ（324）はロクロ成形かわらけであり、底部には糸切痕が残存する。底部から外上方へ直線的に延びる口縁部で、底径に比して口径が大きい。口径の割に器高が低い。

時期　SK12は出土したかわらけが松井編年で16世紀後半に位置づけられることから、この時期に帰属する可能性が高い。

（13）SK13（第67図，第10表，図版18）

位置　SK13は調査区北端、２区Ｋ71グリッドに位置する。東側4.0mにSK12、南側約7.5mにSK14が位置する。

特徴　SK13は、遺物が出土していないものの中世墓の形状や規模と類似することから、中世墓と判断した。

SK13の平面形はやや不整形な隅丸長方形、断面は箱形に近い逆台形であり、長軸は北西に向ける。長辺約1.45m、短辺約0.5m、深さ約0.4mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できないことから、中世墓であった場合には、土葬で横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK13からの出土遺物はない。

時期　SK13からは出土遺物がないことから時期を特定することは困難であるが、中世墓であるとの

仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（14）SK14（第67・68図，第10・18表，図版18・49～51）

位置　SK14は調査区北端、２区Ｊ71グリッドに位置する。北側約7.5mにSK13、北東約9.0mにSK12が位置する。他の中世墓からはやや離れており、単独で営まれた可能性が高い。

特徴　SK14の平面形態はやや不整形な隅丸長方形であり、断面は逆台形である。主軸はやや西に傾くが、ほぼ南北に向ける。南北約0.7m、東西0.3～0.45m、深さ約0.1mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できないことから、土葬で、横臥屈葬であった可能性が高い。

なお、北垣遺跡の中世墓の中では最も規模の小さい墓の一つであり、土葬であった場合には小柄な大人か子供を埋葬した可能性が高い。

出土遺物　SK14からは銅銭３枚（325～327）が重なった状態で中央東よりから出土した。

銅銭は、「祥符通寶」（325，初鋳1008年）、「天祐通寶」？（326，初鋳1086年）、「元豊通寶」（327，初鋳1078年）である。いずれも宋銭である。銭種が異なることから撰銭の意識はない。

時期　SK14からは時期を特定できる遺物が出土していないが、他の中世墓を参考に、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（15）SK18（第67図，第10表，図版18）

位置　SK18は、調査区北端、２区Ｊ70グリッドに位置する。SK14からは約12.0m西南西に位置し、SK22からは東北東約6.0mに位置する。単独で営まれたと想定できる。

特徴　SK18は平面・断面の特徴と規模が中世墓に類似することから、中世墓と判断した。

SK18の平面形は隅丸長方形であり、断面は逆台形である。長軸を東西に向ける。東西約1.15m、南北約0.65m、深さ約0.2mである。内部には20～25cmの角ばった河原石が確認できるが、底面から10cm以上で確認したことから、上部に載せられていたものが落ち込んだ可能性が高い。

内部からは炭化物・焼土ともに確認できないことから、土葬で、規模からみれば横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK18からの出土遺物はない。

時期　SK18の時期を特定することは困難であるが、中世墓とした仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（16）SK21（第69～71図，第10・18表，巻頭図版８，図版18・49～51）

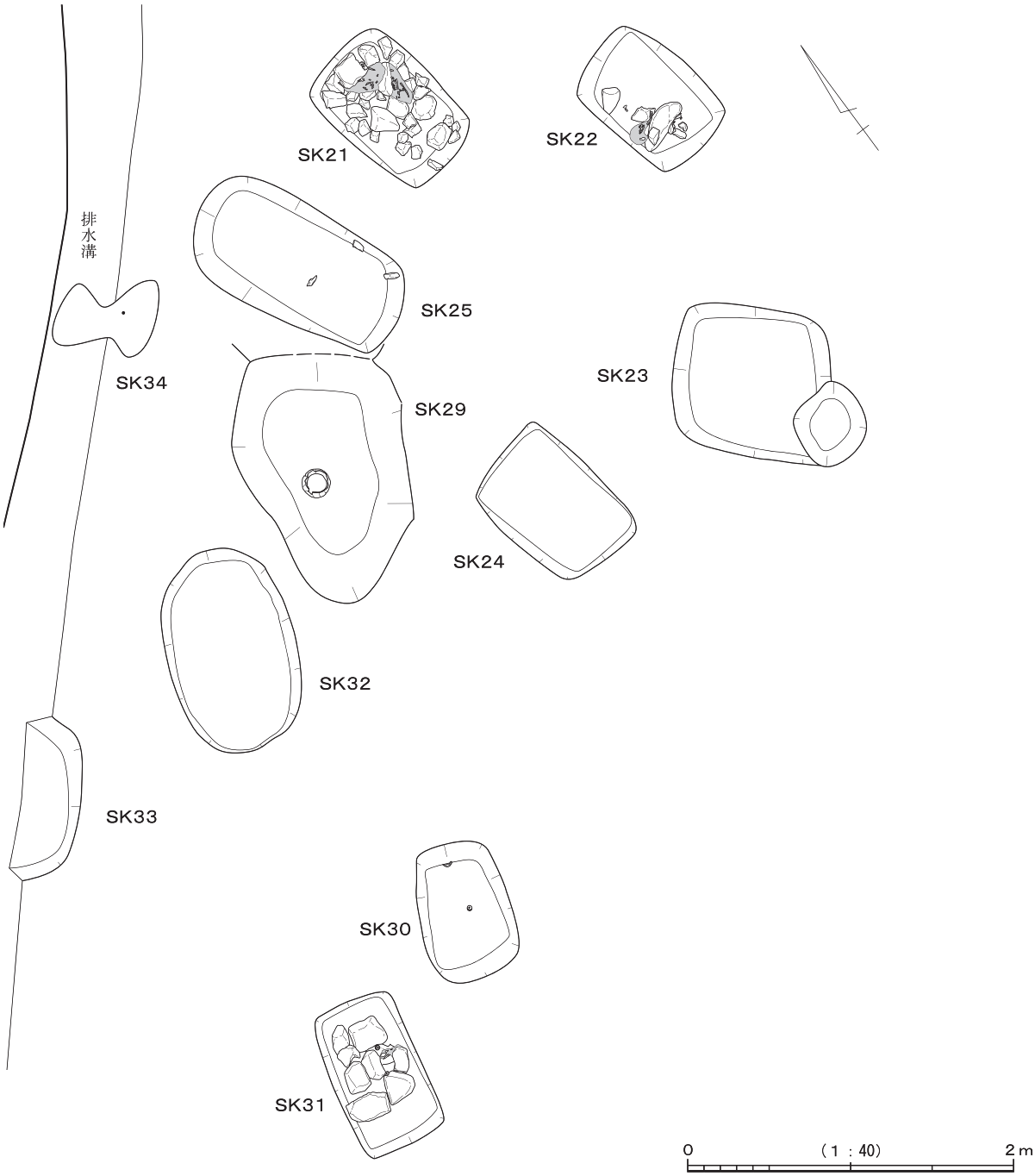
位置　SK21は、上述したようにSK02～SK11などからはやや離れ、SK22～25など中世墓が集中する場所に位置することから、SK02などとは造営集団や時期が異なっていた可能性がある。

SK21は、調査区北端、やや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。南東0.6mにSK22、南西0.4mにSK25、南約1.7mにSK23が位置する。

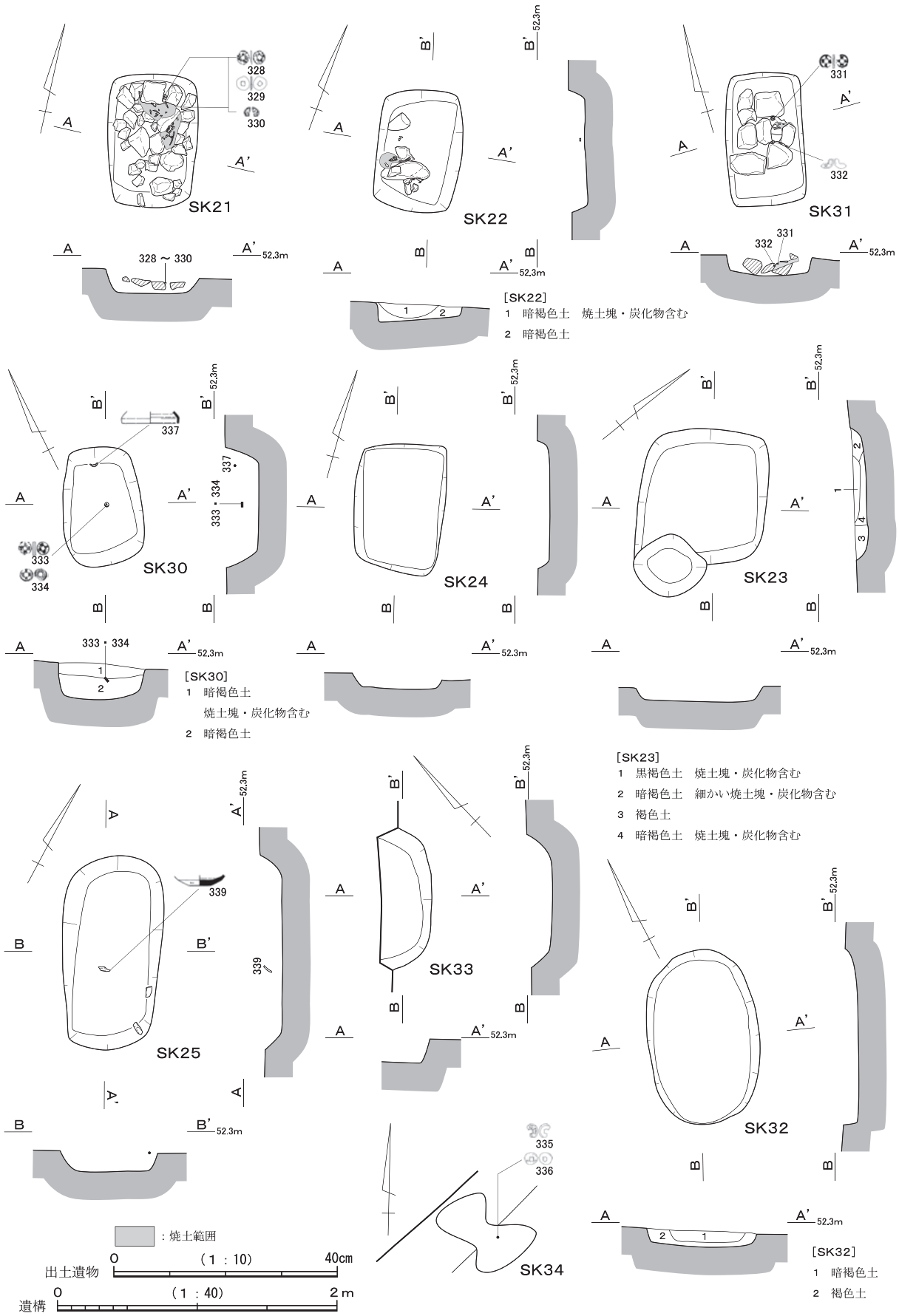
特徴　SK21の平面は長方形で、断面は逆台形である。長辺をほぼ南北に向ける。南北約0.95m、東西0.65mで、深さ約0.15mである。底面上に５～20cmほどの角ばった礫を敷き、その上に炭化物・焼土とともに人骨が出土したことから、荼毘墓（火葬墓）であることが判明する。

出土遺物　SK21から石敷上で人骨や焼土・炭化物に交じって、銅銭５枚（328～330）以上が出土した。被熱を受けてやや変形している。火葬する際には人骨とともに納められていた可能性が高い。

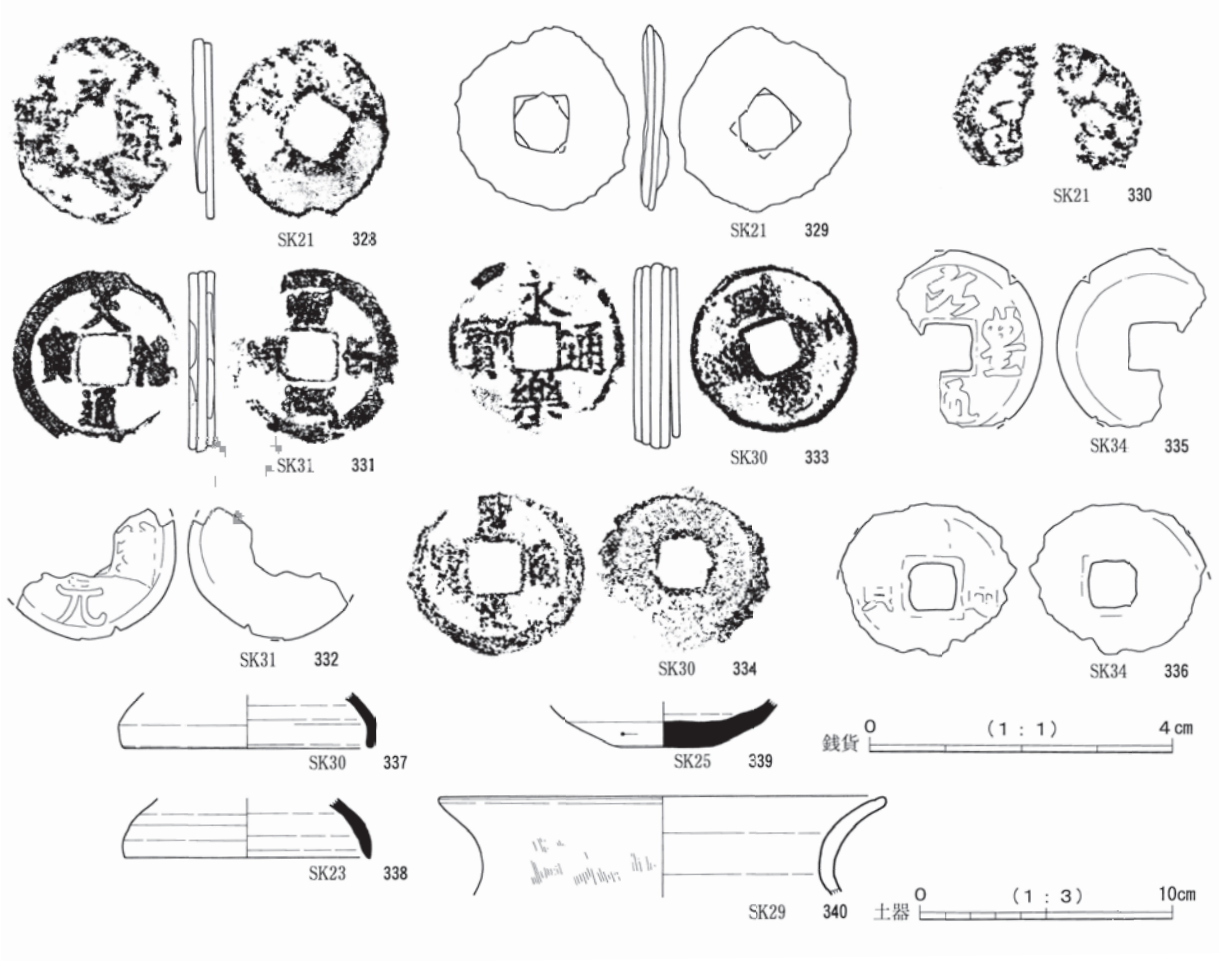
銅銭は、328が２枚付着しており、第71図328の左側が「永樂通寶」（初鋳1408年）、右側は不明、329は２枚以上が癒着しており、両側とも不明、330は破片となっており不明である。



第69図　中世墓　分布図②（２区北西側集中箇所）



第70図　中世墓　実測図④



第71図　中世墓出土遺物実測図④

時期　SK21は時期を特定することは難しいが、他の中世墓を参考に中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（17）SK22（第69・70図，第10表，図版19）

位置　SK22は、調査区北端よりやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。北西0.6mにSK21、南西約0.8mにSK23が位置する。

特徴　SK23の平面形は長方形であり、断面は逆台形である。長辺を南北に向ける。南北約0.9m、東西約0.6m、深さ約0.15mである。内部には５～30cmの礫が確認できることから、SK21・31同様石敷が全体的に行われていた可能性が高い。石敷上で、焼土と炭化物とともに人骨が出土した。

出土遺物　SK22からの出土遺物は、銅粒12点であり、荼毘墓（火葬墓）であることを考慮すればSK09のように銅銭が溶解したものと推断できる。したがって、銅銭が副葬されていたことになるが、枚数や銭種等は不明である。

なお、出土した人骨については鑑定を行っているが、火葬骨であることは判明しているが、性別や死亡年齢については明らかにすることができなかった（第５章第２節参照）。

時期　SK22は帰属時期の判明する遺物がなく時期を特定することが困難であるが、他の中世墓を参考に中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（18）SK23（第69～71図，第10・14表，図版19）

位置　SK23は、調査区北端よりやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。北東約0.8mにSK22、西約0.5mにSK24が位置する。

特徴　SK23の平面形はやや不整形な正方形で、南側隅角を小穴で破壊されている。断面は逆台形である。主軸は北西－南東に向ける。南北（B-B′方向）約1.0m、東西（A-A′方向）約0.9m、深さ約0.1mである。床面・壁面は被熱を受け赤化している。内部からは焼土・炭化物が出土しており、SK23が荼毘墓（火葬墓）であることが判明する。

出土遺物　SK23に直接伴う出土遺物はない。覆土中からは須恵器（338）が出土した。

338は須恵器杯蓋である。半球形の杯蓋で、口径が9.5cm前後と小さいことから、遠江Ⅳ期前半（でも新しい時期）～Ⅳ期後半に位置づけることができる。色調や胎土の特徴から湖西産の可能性が高い。

時期　SK23は直接伴う遺物がなく、時期を特定できないが、他の中世墓を参考に中世後期（戦国時代）、16世紀代に営まれたと想定しておきたい。

（19）SK24（第69・70図，第10表，図版19）

位置　SK24は調査区北端よりやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。東約0.5mにSK23、北約1.0mにSK25が位置する。

特徴　SK24は人骨や銅銭などが出土していないが、中世墓と形態的特徴や規模が類似すること、中世墓が営まれた場所に位置することなどから判断して、中世墓の可能性が高い。

SK24の平面形は、長方形であり、断面は逆台形である。長辺を南北に向ける。南北約0.95m、東西約0.65m、深さ約0.1mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認されていないが、深さが約0.1m以下と浅いことから、上部が失われてしまい、それらが確認されなかった可能性もあるため、火葬墓ではなかったとは断定できない。

出土遺物　SK24からの出土遺物はない。

時期　SK24からは出土遺物がなく、時期を特定することは難しいが、中世墓であるとの仮定が正しければ、他の中世墓を参考に、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（20）SK25（第69～71図，第10・14表，図版19）

位置　SK25は調査区北端よりやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。南約1.0mにSK24、西側に接するようにSK29が位置する。

特徴　SK25内部からは須恵器しか出土していないが、周辺の中世墓と形態・規模ともに類似することから中世墓と判断した。

SK25の平面形は隅丸長方形であり、断面は逆台形である。長辺をほぼ南北に向ける。南北約1.4m、東西約0.7m、深さ約0.15mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できない。中世墓であるとの仮定が正しければ、土葬で、横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK25からの出土遺物は須恵器杯身（あるいは杯蓋，339）である。床面からやや浮いた位置から破片で出土しており、流入した可能性が高い。底部の大きさからすると低いたちあがりをもつ杯身（杯H）で、遠江Ⅳ期前半を前後する時期に位置づけることができる可能性が高い。湖西産の可能性が高い。

時期　SK25は時期を特定することができないが、中世墓との判断が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（21）SK30（第69～71図，第10・14・18表，図版19・49～51）

位置　SK30は調査区北端よりやや西側、２区Ⅰ69グリッドに位置する。北約1.2mにSK32、南西約0.3mにSK31、北東約1.8mにSK24がある。SK21～25の中世墓とはやや離れた位置にある。

特徴　SK30の平面形は長方形であり、断面は逆台形である。長辺はやや東側に傾くが、ほぼ南北に向ける。南北約0.85m、東西約0.55m、深さ約0.25mである。内部からは焼土・炭化物が確認されており、荼毘墓（火葬墓）であることが判明する。ただし、焼土・炭化物が確認された層と底面との間にそれらが含まれない層（２層）があることから、別の場所で火葬したものを持ち込んだ可能性がある。

出土遺物　SK30からは銅銭６枚（333・334）が重なった状態で掘方のほぼ中央から、炭化物・焼土とともに出土した。このほか掘方北側の底面から15cmほど高い位置から須恵器（337）が出土した。

銅銭は、333が５枚錆着しており、334は１枚である。333は図左側が「永樂通寶」（初鋳1408年）、右側が「天□通寶」である。内側の３枚は銭種不明である。334は「聖宗元寶」（初鋳1101年）である。「永樂通寶」は明銭、「聖宋元寶」は宋銭である。被熱されたかどうかについては不明である。

SK30に直接伴わない須恵器杯蓋（337）が出土した。半球形の杯蓋で、天井部と口縁部は口縁部をやや内側に屈曲させることで境を示している。口径は10cm前後であり、遠江Ⅳ期前半に位置づけることができる。湖西産の可能性が高い。近在する竪穴建物などに伴うものが流入した可能性が高い。

時期　SK30は時期を特定することは困難であるが、他の中世墓を参考に、中世後期、16世紀代に位置づけておきたい。

（22）SK31（第69～71図，第10・18表，巻頭図版８，図版19・49～51）

位置　SK31は、調査区北端よりやや西側、２区Ⅰ69グリッドに位置する。東約0.3mにSK30、北側約1.6mにSK32が位置する。

特徴　SK31の平面形は長方形であり、断面形は箱形に近い逆台形である。長辺をほぼ南北に向ける。南北約0.95m、東西約0.55m、深さ約0.1mである。掘方内部には15～30cmの石材を敷き並べており、その上から僅かであるが炭化物や焼土が出土した。石敷上まで削り取られているため、ほとんどの炭化物・焼土は失われたものと想定できる。この焼土の存在から荼毘墓（火葬墓）であったことが判明する。

出土遺物　SK31からは石敷直上から焼土と炭化物に交じって銅銭３枚（331）とその南20cmのところで１枚（332）が出土した。

331は３枚が錆着しており、図左側が「天祐通寶」？（初鋳1086年）、右側が「皇宋通寶」（初鋳1038年）、中央は不明である。332は、「□元通寶」（「開元通寶」の可能性が高いか？）である。被熱されたかどうかについては明らかではない。銭種からは撰銭の意識は確認できない。

時期　SK31は時期を特定することが難しいが、他の中世墓を参考に、中世後期（戦国時代）、16世紀代に帰属する可能性が高い。

（23）SK32（第69・70図，第10表，図版19）

位置　SK32は、調査区北端よりやや西側、２区Ⅰ69グリッドに位置する。南約1.6mにSK31、東0.2mにSK29、西約0.7mにSK33が位置する。

特徴　SK32は出土遺物がなく、焼土なども確認されていないが、形態・規模が中世墓と類似することから中世墓と判断した。

SK32の平面形は隅丸方形あるいは楕円形であり、断面はU字形に近い逆台形である。長軸をやや東側に向けるがほぼ南北にとる。南北約1.25m、東西約0.8m、深さ約0.1mである。内部からは炭化物・焼土ともに出土していない。中世墓であるとの仮定が正しければ、土葬で、横臥屈葬であった可能性が

高い。

出土遺物　SK32からは出土遺物はない。

時期　SK32は出土遺物がないことから時期を特定できないが、中世墓であるとの仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（24）SK33（第69・70図，第10表）

位置　SK33は調査区北端のやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置し、西側が調査区外である。東約0.7ｍにSK32、南東1.8～2.1ｍにSK30・SK31が位置する。

特徴　SK33は、平面・断面形態および規模が中世墓と類似することから、中世墓と判断した。

SK33の平面形は、隅丸長方形あるいは楕円形である可能性が高く、断面はＵ字形に近い逆台形である。長辺はやや東に傾くが、主軸はほぼ南北に向ける。南北1.0ｍ前後、東西0.35ｍ以上、深さ約0.15ｍである。内部から焼土や炭化物は出土していない。したがって、中世墓との仮定が正しければ、土葬で、横臥屈葬であった可能性が高い。

出土遺物　SK33からの出土遺物はない。

時期　SK33は遺物が出土していないことから時期を特定することは困難であるが、中世墓であるとの仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（25）SK34（第69～71図，第10・18表，図版49～51）

位置　SK34は、調査区北端からやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。東約0.3ｍにSK25、南約0.6ｍにSK29が位置する。

特徴　SK34は調査区際で確認されたもので銅銭の位置と炭化物・焼土の範囲のみ記録されるだけであるため、中世墓の最下部が若干残存しただけであった可能性が高い。

現状で炭化物と焼土が残存する範囲は瓢形であり、残存長約0.6ｍ、幅約0.5ｍである。SK21やSK22のような石敷は確認できない。

出土遺物　SK34からは残存部分のほぼ中央で炭化物と焼土に交じり銅銭２枚（335・336）が重なった状態で出土した。

銅銭は、「元豊通寶」（335，初鋳1078年）、不明（336）である。335は宋銭である。

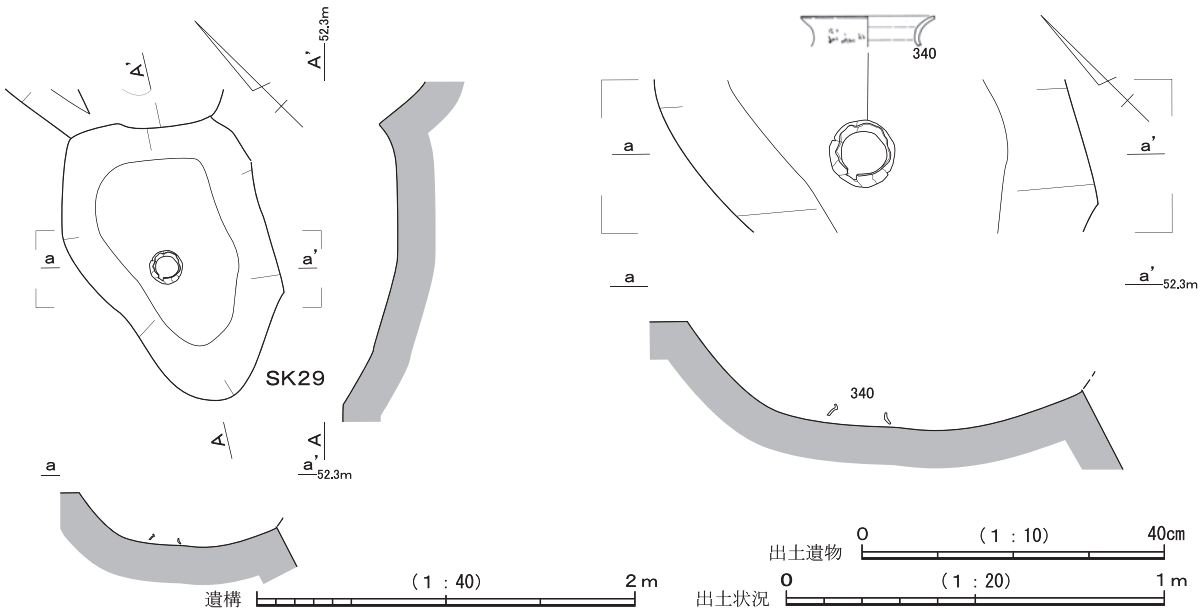
時期　SK34は、時期を特定することは難しいが、他の中世墓を参考にして、中世後期（戦国時代）、16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

（26）SK29（第69・71・72図，第10・14表，巻頭図版９，図版15・48）

位置　SK29は、調査区北端からやや西側、２区Ｉ69グリッドに位置する。北側に接するようにSK25が、北西約0.6ｍにSK34、南東約0.2ｍにSK32が位置する。

特徴　SK29は不整形な土壙であるが、場所的には中世墓が多数存在する位置にあること、SK25に一部破壊されていること、内部が攪乱された可能性があることなどから判断して、中世墓の可能性を想定したため、ここで報告する。なお、当遺構はSK28やSK26等を破壊しており、その一部をSK29として掘削してしまっている可能性があり、そのため遺構の形状が不整形となっている可能性も報告しておきたい。

SK29は不整形な土壙で、断面はＵ字形である。南北約1.6ｍ、東西約1.1ｍ、深さ約0.25ｍである。内部からは焼土・炭化物ともに出土していない。墓であるとすれば火葬墓ではなく、土葬墓であった可能性が高い。



第72図　中世墓　実測図⑤

出土遺物　SK29からは、底面に接するように口縁部を下に向けた土師器甕１点の口縁部（340）が出土した。

土師器甕（340）は、頸部～口縁部片で、頸部はコ字形で、口縁部は外上方に向かって立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。古墳時代終末期～平安時代前期頃に位置づけられる（鈴木敏1998）。上述したようにSK29はSK26・28を破壊している可能性が高いことから、340はそれらに伴う遺物である可能性が高い。

時期　SK29は、中世墓であるとの仮定が正しければ、中世後期（戦国時代）、16世紀代に、出土した土師器甕がこの遺構の時期を示すとすれば、奈良時代～平安時代に位置づけられる可能性がある。

（27）調査区北側出土の人骨について

次章（第５章）第２節で人骨鑑定の報告を行うが、中世墓が確認された２区北側（この範囲にはSK02～SK34までが含まれる）からは、人骨の砕片が多数採取されている。鑑定の結果、これらの人骨には、火葬と非火葬骨（火化されていない骨）があり、これまで報告してきた火葬墓と土葬墓が混在する中世墓の様相と合致している。

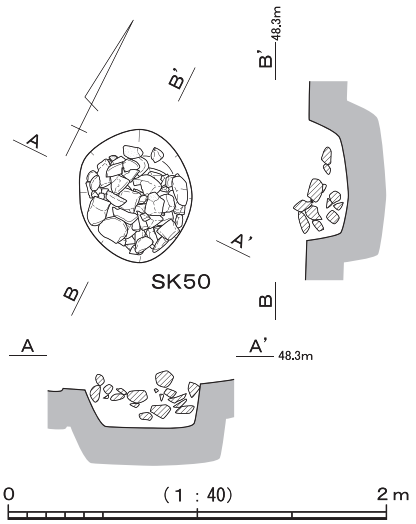
火葬墓と土葬墓の違いを明らかにすることは難しいが、同一箇所に混在していることを明記しておきたい。

（28）SK50（第73図，第10表，巻頭図版８，図版16）

位置　SK50は、上述したSK02～SK34とは大きく離れ、調査区の中央、２区Ｅ73グリッドに位置する。中世墓との想定が正しければ、単独で立地した可能性がある。

特徴　SK50は中世墓の集中箇所からは離れているが、中世の集石墓の形態と類似することから中世墓と判断した。

SK50の平面形はやや不整形な円形で、断面は箱形に近い逆台形である。内部には５～15cmほどの河原石を全体的に入れ込



第73図　中世墓　実測図⑥

んでいる。南北約0.65m、東西約0.6m、深さ約0.2mである。内部からは焼土・炭化物ともに確認できないが、規模が小さいことや、上部が失われていることから確定できないが、SK21・31のように集石が行われていることから判断して、中世墓（土葬墓）であった可能性が高い。

出土遺物　SK50からの出土遺物はない。

時期　SK50は時期を特定することは難しい。16世紀代に帰属する可能性が高い中世墓群が調査区北側に位置することから、それらとは時期が前後する可能性が高い。中世墓であった場合には、中世後期（戦国時代）、15～16世紀代に位置づけられる可能性が高い。

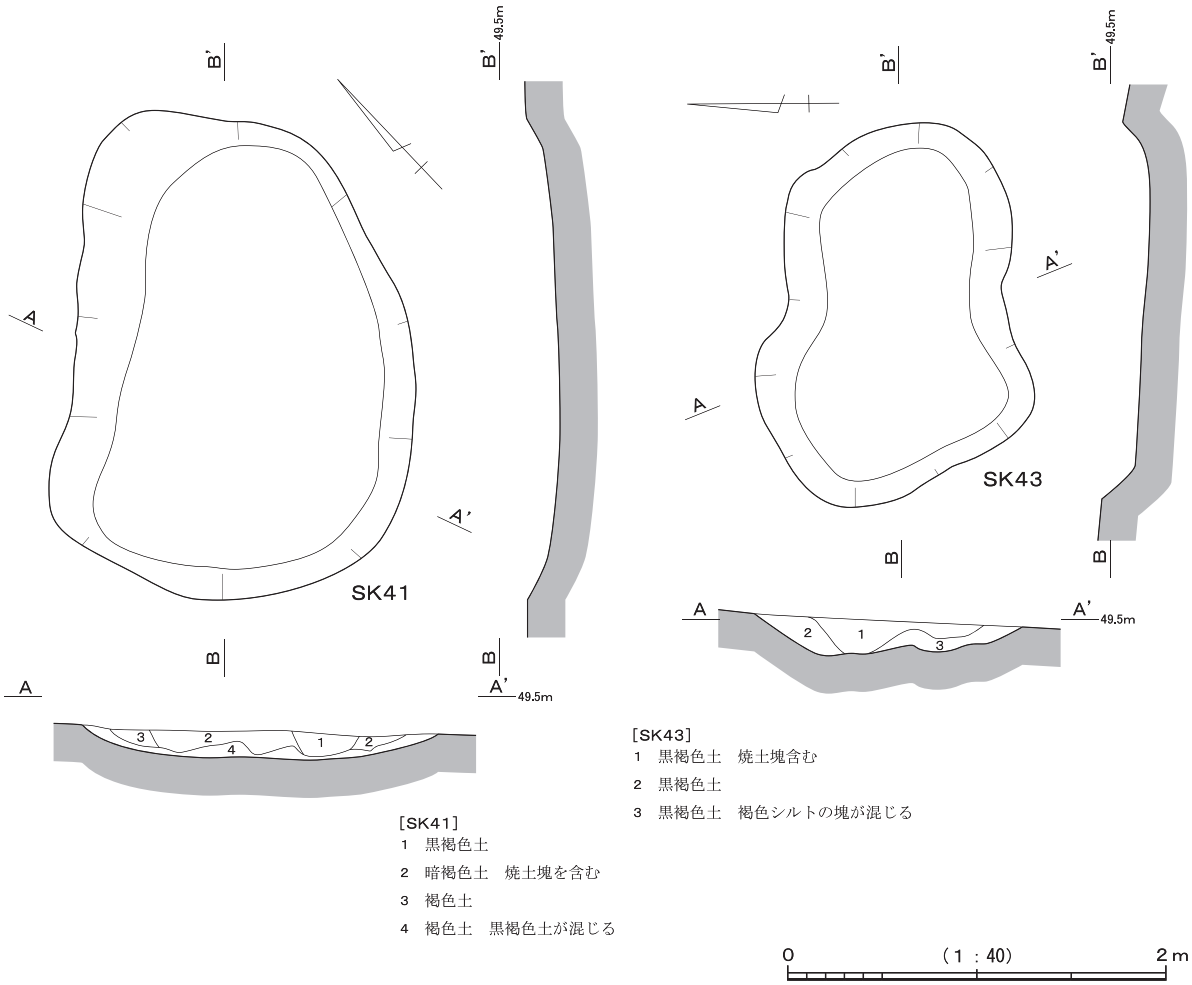
3　土坑

ここでは、中世に位置づけることができる可能性が高い土坑について報告する。

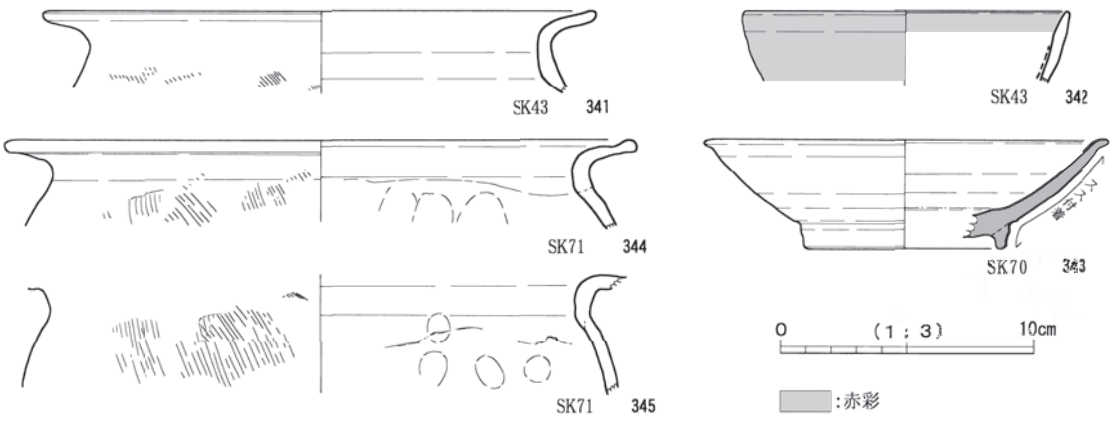
（１）SK41（第74図，第10表）

SK41は、２区G70・H70グリッドに位置する。

SK41の平面形は、不整形な隅丸長方形あるいは楕円形で、断面は皿状である。長辺約2.55m、短辺約1.9m、深さ約0.15mである。内部からは焼土塊（２層内）が出土しており、本遺構あるいは周囲で火が用いられた作業が行われた可能性が高い。後述するように北垣遺跡では鉄滓が出土しており、それと関連する小鍛冶が行われた遺構などの可能性がある。土師質土器（内耳鍋）、かわらけが出土しているが、小片のため図化できない。



第74図　中世土坑　実測図①



第75図　中世土坑出土遺物実測図

SK41の時期は、土師質土器（内耳鍋）、かわらけが出土している一方、近世の陶磁器は出土していないことから、中世後期に位置づけられる可能性が高い。

（２）SK43（第74・75図，第10・14表，図版48）

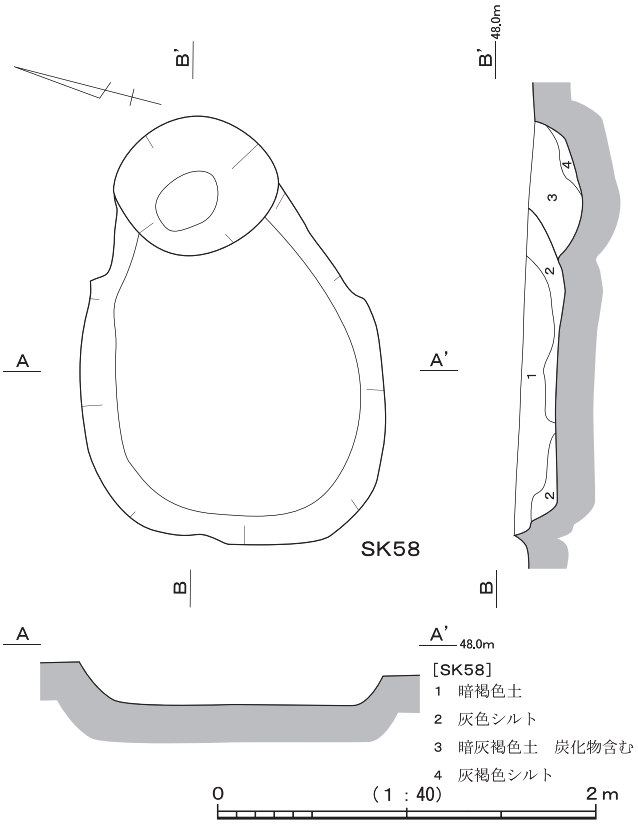
SK43は、２区H70・71グリッド、SK41の北東約5.0mに位置する。

SK43の平面形態は瓢形であり、断面は皿状である。長軸を東西に向けている。東西約2.05m、南北約1.5m、深さ約0.2mである。不整形な遺構となっているのは、切合関係にある二つの土坑を一つとして掘削してしまった可能性もある。その場合は、A–A′部分から西側に長方形の土坑があり、それを東西に長い土坑（１層で構成）が破壊したとも想定できる。

内部には焼土塊が含まれ、周囲から鉄滓が出土しており、それに関連する遺構の可能性もある。小鍛冶に伴う可能性があり、その場合は近世にまで降る可能性がある。

出土遺物にはかわらけ、土師器、須恵器がある。土師器甕（341）は、コ字形の頸部で、口縁部はほぼ水平に近く、口縁端部は上に向かってやや引き出され丸められている。杯（342）は半球形の杯である可能性が高い。内外面ともに赤彩されている。二次焼成を受けている。

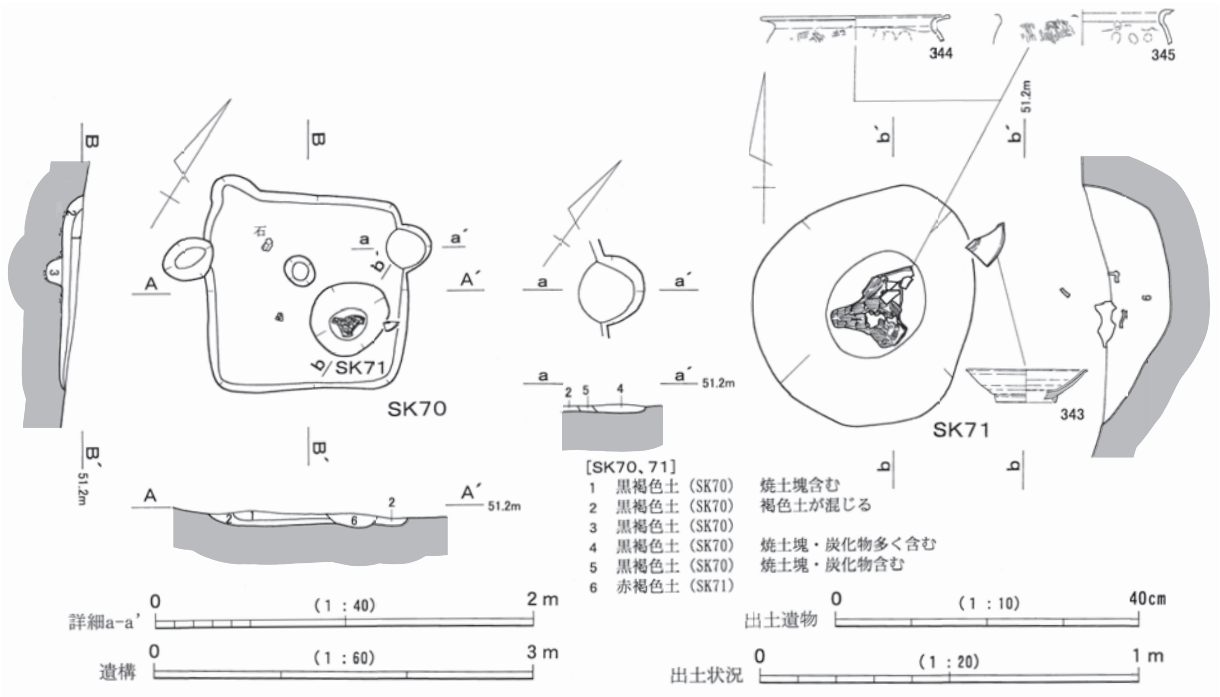
出土遺物は土師器甕（341）、杯（342）を図示したが、この他にかわらけ小片が含まれており、中世まで降る可能性が高い。上記の２つの土坑であったとする仮定が正しければ、古い方の土坑は奈良時代～平安時代以前、新しい土坑は中世以降である可能性がある。当然、元々瓢形の土坑であった場合には、中世以降に位置づけることができる。



第76図　中世土坑　実測図②

（３）SK58（第76図，第10表）

SK58は、３区西側、B69グリッドに位置



第77図　中世土坑　実測図③

する。

SK58は不整形な楕円形平面の土坑であり、東側に深い部分（３・４層部分）があることから、２つの土坑であった可能性が高い。古い方（３・４層，SK58A）は円形の土坑で、新しい方（１・２層，SK58B）は不整形な楕円形である。前者（SK58A）は南北約0.85m、東西約0.7m、深さ約0.3mである。炭化物を含む層位が確認できる。後者（SK58B）は東西1.75m前後、南北約1.6m、深さ約0.2mである。

出土遺物はいずれも小片のため図示できないが、かわらけ、灰釉陶器などが出土している。したがって、SK58の時期は少なくとも中世後期（15～16世紀）以降である可能性が高い。

（４）SK70（第75・77図，第10・14表，巻頭図版11，図版27・28・48）

SK70は、２区Ｊ70・71グリッドに位置する。SK70はSK71と切合関係にあり、SK71がSK70を掘り込んでいることから、SK70の方が古い。

SK70はほぼ正方形の土坑で、断面はＵ字形である。一辺約1.6mであり、深さは約0.2mである。北東隅角付近に焼土と炭化物を含む張り出し部分が確認できる。発掘調査中は竈の可能性を考慮して調査を行ったものの、掘方が1.6m四方と竪穴建物としては小さすぎることから竈ではないと判断した。

内部には焼土塊が含まれる層（１層）があり、焼土や炭化物を伴う張り出し部分（４・５層）があること、この周囲には中世墓が多数確認されていることからすれば、荼毘（火葬）跡の可能性がある。

内部からは、図示した灰釉陶器（343）のほか、かわらけ小片などが出土しており、かわらけが出土していることからSK70の時期は中世後期以降である可能性が高い。

灰釉陶器（343）は碗である。高台は三角高台で、底部は糸切痕がナデ消されている。口縁端部は見込みから外上方に直線的に延びた後、口縁部を屈曲させ外側へ引き出す。白灰入りの胎土であることから宮口産と想定でき、松井編年宮口Ⅲ-２期（10世紀中頃）に位置づけられる可能性が高い。

（５）SK71（第75・77図，第10・14表，図版48）

SK71は、２区Ｊ70・71グリッドに位置する。SK70を掘り込んでいる。

SK71は、やや不整形な円形の土坑で、断面はＵ字形を呈する。南北約0.65m、東西約0.6mである。内部にはやや被熱したと思われる赤褐色土と炭化物が確認できることから、何らかの火を使う行為（作業）と関連する土坑である可能性が高い。

出土遺物には、土師器などがあるが、SK70を破壊しているため、時期はSK70（中世後期）よりも新しく、中世後期以降に位置づけられる可能性が高い。

出土した土師器は、甕（344・345）である。コ字形の頸部で、口縁部は水平に近い。344は口縁端部内側を上方にやや引き出し、丸めている。

４　性格不明遺構

中世に位置づけられる可能性が高い性格不明遺構を２基報告する。

（１）SX05（第78・79図，第13・14表）

SX05は、３区西側、Ｂ69グリッドに位置する。東側をSD27、西側をSD26に破壊されている。

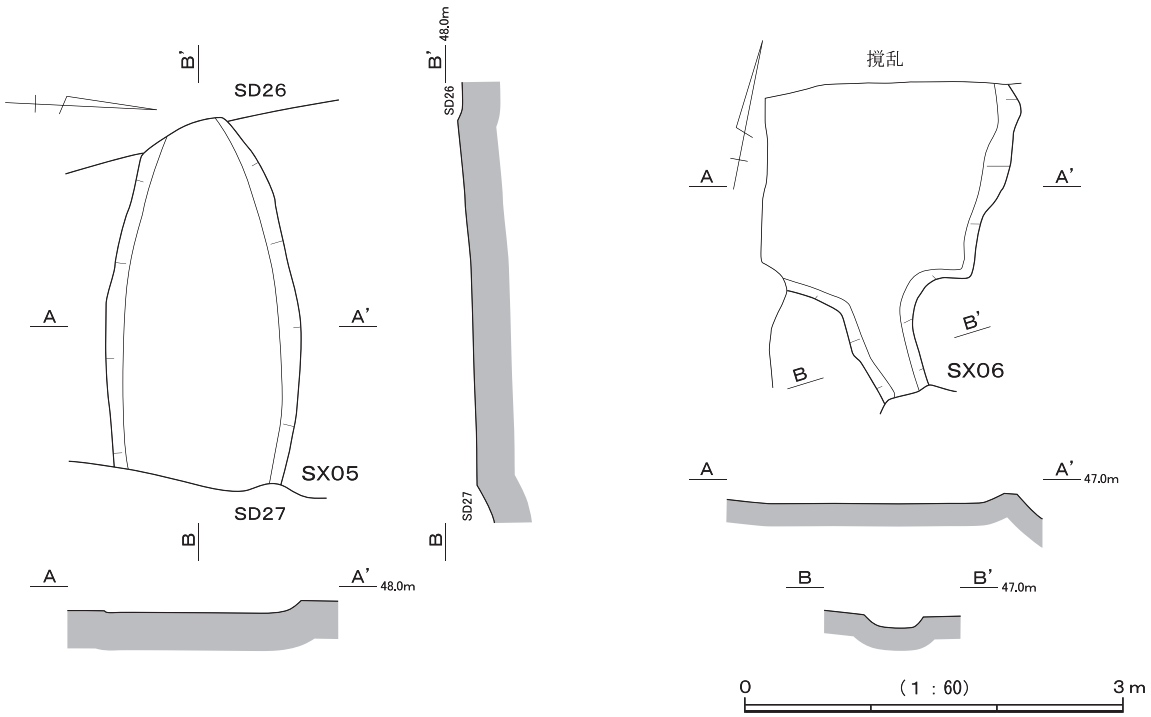
SX05は、東西に長い楕円形の平面であった可能性が高く、断面は皿状である。東西2.95m以上、南北約1.55m、深さ約0.1mである。

SX05からは、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗片が出土しており、灰釉陶器のみ図示した（346）。灰釉陶器は碗で、高台は低い三角高台である。胎土の特徴から、清ヶ谷産で、松井編年清ヶ谷Ⅳ-１期に位置づけることができる。

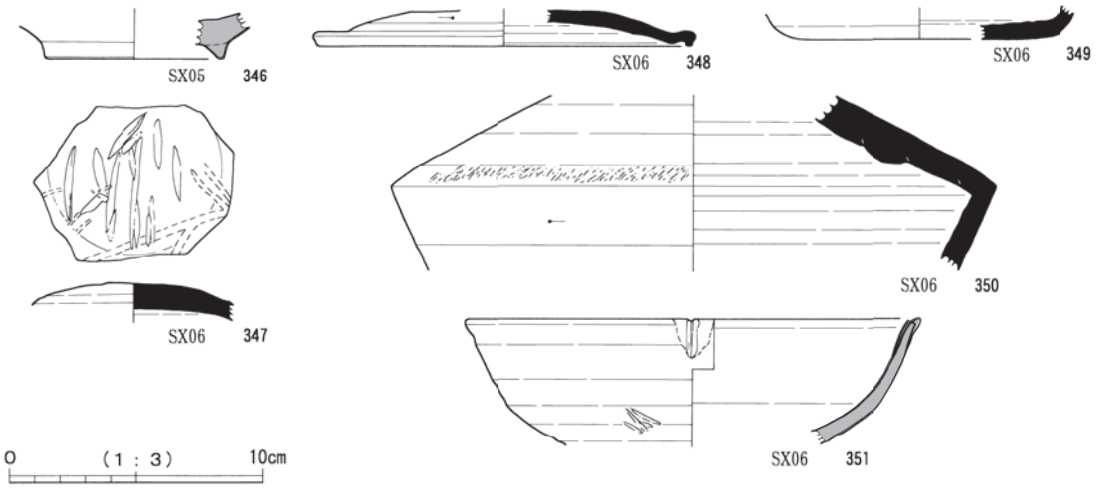
SX05の時期は、図示していないが山茶碗小片が出土しており、中世前半、12世紀以降に位置づけられる可能性が高い。

（２）SX06（第78・79図，第13・14表，図版52）

SX06は、３区西側、Ａ70グリッドに位置する。SX07を溝状に延びる部分が破壊している。



第78図　中世性格不明遺構　実測図



第79図　中世性格不明遺構出土遺物実測図

SX06は、北・西側が大きく破壊されており、本来の形状は不明である。正方形の遺構から溝が南側に延びる。南北2.5m以上、東西2.0m以上、深さ約0.1mである。

出土遺物には、かわらけ、灰釉陶器などがあり、このうち須恵器摘蓋（348)、箱形杯（349)、広口壺(350)、杯蓋（あるいは杯身，347）の天井部の可能性が高い、灰釉陶器輪花碗（351）を図示した。

須恵器杯蓋（347）は、半球形の天井部であり、口縁部は欠損している。天井部外面には、粘土から切り離す際のヘラ切りの痕跡かあるいは乾燥する時においた植物などの痕跡が残る。また、火襷の痕跡が残る。摘蓋（348）は器高が低く、天井部は口縁部とほぼ水平で、口縁部は天井部から屈曲させた後、垂直に垂下するものである。断面がセピア色であり、湖西産ではない可能性がある。箱形杯（349）は平底で､外上方に直線的に立ち上がっていた可能性が高い。湖西産須恵器の可能性が高い。広口壺(350)は、肩部から胴部までの破片で、肩部は鋭くＬ字形に屈曲し、胴下部は直線的に窄まる。胴部外面は胴下部から肩部までヘラ削りが行われている。肩部上面には、櫛刺突が行われている。内面は焼き膨れが確認できることからやや過度の焼成を受けた個体であることが判明する。断面セピア色であり、348と同様の特徴を示すことから、同一の産地である可能性が高い。湖西産ではない可能性がある。灰釉陶器輪花碗（351）は碗形の体部で、口縁端部はやや外反する。体部外面にヘラなどが当たったような痕跡があるが、特別な調整やヘラ記号ではない可能性が高い。口縁部には外側から棒状工具あるいはヘラ状工具の側面を使って、外側から内側に向かって２回押しつけることで、輪花を表現している。胎土の特徴から清ヶ谷産で、松井編年清ヶ谷Ⅳ-１期（11世紀前半）に位置づけられる。

SX06の時期は、図示していないかわらけから中世後期以降に位置づけられる可能性が高い。しかし、SX06は方形部分と、南側に延びる溝状部分の２つの遺構を、切合関係の見分けがつかず同一の遺構として掘削してしまった可能性がある。方形の遺構である場合には、出土遺物で実測できるような破片が須恵器と灰釉陶器であること、SX07・08に近接し、同様の形態であることなどから、同じような性格をもった遺構であった可能性がある。

5　遺構外出土の遺物

遺構外出土の中世に帰属する遺物としては、貿易陶磁、山茶碗、渥美、瀬戸美濃、常滑、かわらけがある（註３）。以下、おおむね種類ごとに報告する。

（１）土器・陶磁器

ア　山茶碗（第80～82図，第14表，巻頭図版11，図版52・53）

山茶碗は完形に復原できる個体はほとんどないが、出土数は非常に多い。

佛具（托）　托あるいは托付碗、器台（第80図参照）などと呼称されるものが１点（352）出土した。稀少遺物のため、第80図に湖西市大知波峠廃寺（湖西市教委1997）で出土したものを掲載した。352は高台の付く小碗の体部に突起を一周巡らせていた個体である可能性が高く、その突起から高台の上部までの破片である可能性が高い。胎土の特徴からは、渥美湖西産である可能性が高く、松井編年（松井1989，以下同じ）山茶碗渥美湖西Ⅰ期に位置づけられる可能性が高い。

山皿（小皿）　山茶碗の破片は多いが、山皿の出土は多くはない。353は平底で、口縁部は外上方へ向かい直線的に伸び、口縁端部を丸く収める。354も同形態であるが、外傾度が強く、さらに口径が小さい。胎土の特徴から渥美湖西産で、353は松井編年渥美湖西Ⅲ-１期（13世紀前半）、354は同じく渥美湖西Ⅲ-２期（13世紀後半）に位置づけられる。

山茶碗　山茶碗の破片数は多いが、完形に復原できる個体はない。底部の破片を中心に図化した。高台の形状や高さ、高台径などの特徴から時期区分が可能である。355・356は東遠江系で、高台が三角高台である可能性が高いことから、松井編年渥美湖西Ⅰ-１期併行期（12世紀前半）に位置づけられる。357～366は渥美湖西産で高台が高く、しっかりとしていることから渥美湖西Ⅰ-１期（12世紀前半）に位置づけることができる。367～373は、高台がやや低くなるが、高台径が大きいことから、渥美湖西Ⅰ-２～Ⅱ期（12世紀中頃～末）に位置づけられる。374～376は湖西産で、口縁部片であるが、器高が高く、口縁部がやや外反することなどの特徴から渥美湖西Ⅱ期に位置づけることができる。377・378は山皿の可能性があるが、無台碗の可能性が高いものである。底部から一旦内側にくびれた後で外上方へ立ち上がるものである。渥美湖西Ⅱ期（12世紀中～後半）に位置づけられる。379～394は渥美湖西産である。379～392は潰れた高台で、Ⅰ～Ⅱ期のものと比較すると底部径が小さくなる傾向にあることから、渥美湖西Ⅲ-１期（13世紀前半）に位置づけられる。393・394は同時期の無台碗（あるいは山皿）の可能性が高い底部片で、底部は平底で、377・378と比較して底部から直線的に外上方への立ち上がる形態であったと推測できる。396・398～407・409も渥美湖西産であり、高台が低く、形骸化しているものが多い。395は器高が低くなり、碗部の深さが浅くなっている。397・408は無台碗の底部片である。396～409は渥美湖西Ⅲ-２期（13世紀後半）に位置づけることができる。なお、396の底部には「ε」を90度時計回りに回転したような墨書が確認できるが、本来は中央が円を描いていた可能性が高い。

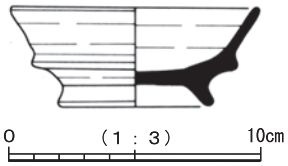
410～415は砂を多く含む胎土で箱形の形状である特徴から尾張産（知多産，常滑産）の山茶碗である。高台は低く、潰れた形状である。中野晴久氏による常滑（知多）６型式（13世紀後半）に位置づけられる可能性が高い（中野1995・2005）。

鉢（片口鉢）　尾張産（知多産，常滑産）の鉢の底部片が出土している（416）。高台は厚く高いものである。時期を特定することが難しいが、おおむね山茶碗に併行する時期である可能性が高い。

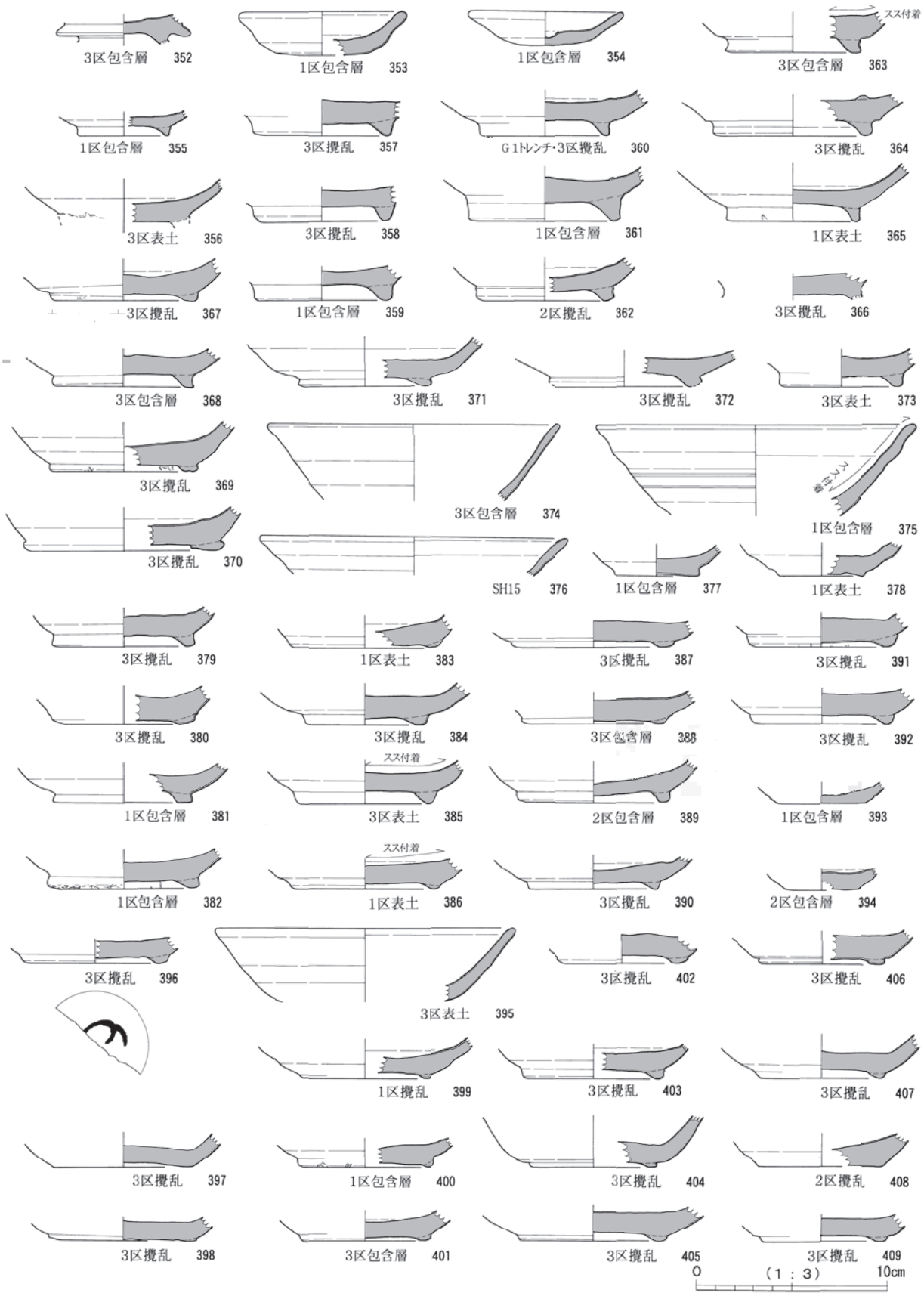
イ　貿易陶磁（第83図，第14表，巻頭図版12，図版54・55）

417～419、421～424は貿易陶磁である。417～419、421・422が青磁、423・424が白磁である。

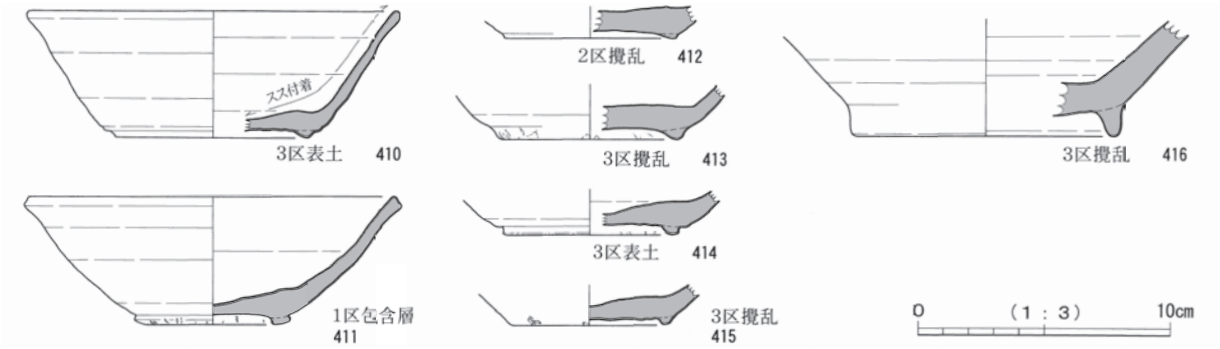
青磁　422は中国龍泉窯産の碗で、内面に劃花文を描くものである。原廣志氏による分類のＡ類（原1999，以下同じ）で、12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる。418・421は中国龍泉窯産の鎬蓮弁文碗で、Ｂ１類（13世紀中葉～14世紀前半）に位置づけることができる。417も中国龍泉窯産で、鎬蓮弁文碗である。外面にヘラ描きで線描蓮弁文を表現する。原分類のＢ４類（15世紀後半）に位置づけることができ



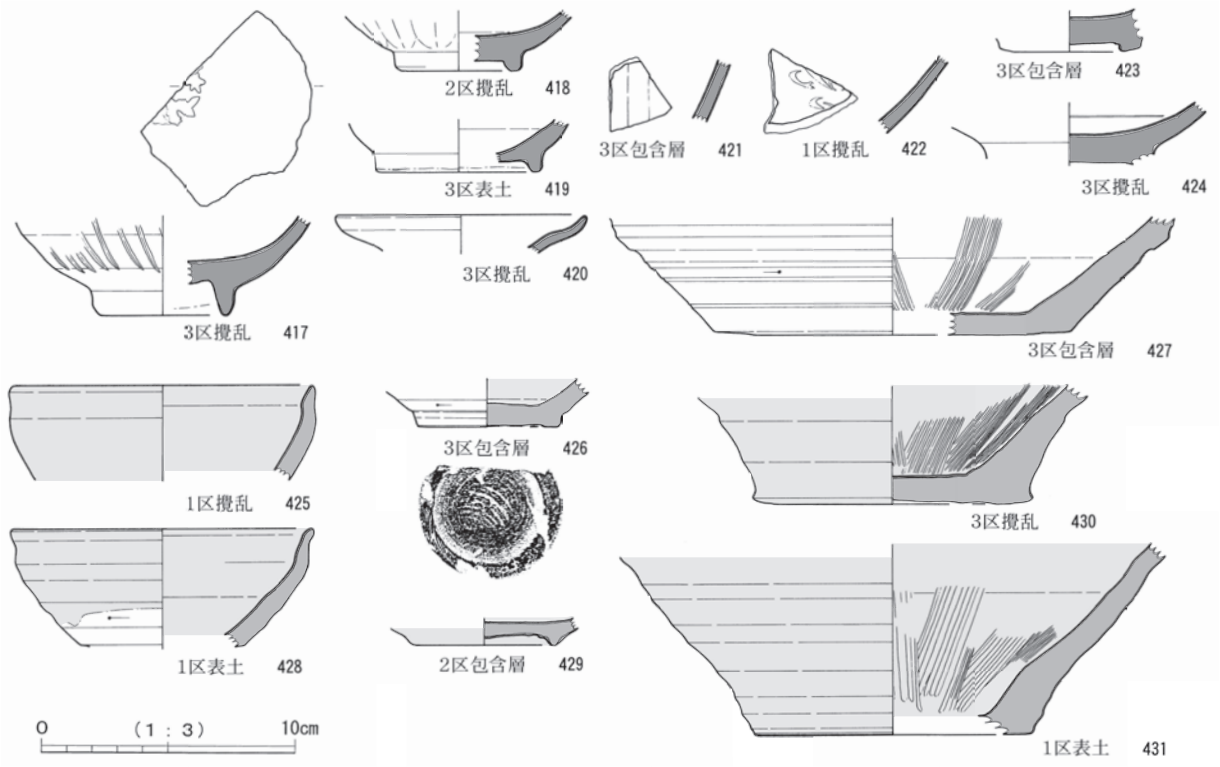
第80図　托参考例（大知波峠廃寺出土）



第81図　遺構外出土山茶碗実測図①



第82図　遺構外出土山茶碗実測図②



第83図　遺構外出土貿易陶磁・古瀬戸・瀬戸美濃ほか実測図

る。419は龍泉窯産の碗であるが、無文である。原分類Ｄ２類（端反碗）かＥ類（直口型碗）で、後者の可能性が高い。その場合は15世紀後半～16世紀前半に位置づけることができる。

白磁　423・424は白磁である。423は白磁碗である。底部には釉薬が施されていない。口縁部が欠損しており、時期を特定することは難しい。424は白磁皿で内面底部付近に一条の沈線を巡らせる。原（原1999）分類白磁ⅡかⅣ類に区分することができ、12世紀代に位置づけられる可能性が高い。

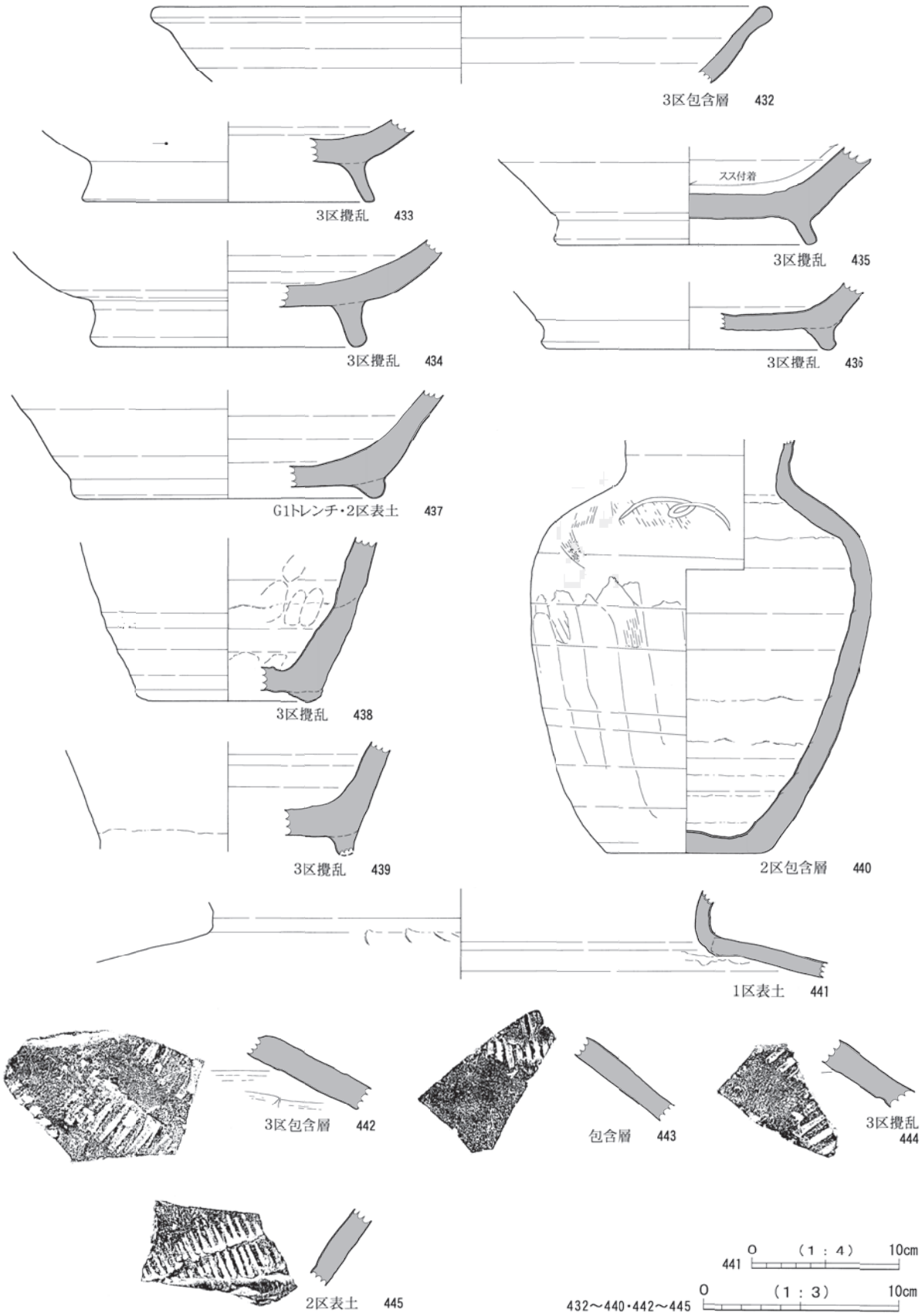
なお、420は青磁であることから、ここに掲載した。貿易陶磁としては類例のない器形であることから、日本産の可能性が高いもので、この場合は、肥前磁器で、19世紀頃のものである可能性が高いか。

ウ　古瀬戸（第83図，第14表，巻頭図版12，図版54）

古瀬戸は、天目茶碗、平碗、四耳壺、擂鉢など小量が出土した。

天目茶碗（425）は藤澤良祐氏による古瀬戸後Ⅱ期、平碗の可能性が高い碗（426）は同じく古瀬戸後Ⅲ期に位置づけられる。擂鉢（427）は同じく古瀬戸後Ⅳ期新～大窯１期に位置づけられる（藤澤1991・1995a・1995b・2005）。

なお、四耳壺については小片のため図化していない。



第84図　遺構外出土渥美実測図

エ　瀬戸美濃（大窯期，第83図，第14表，巻頭図版12，図版54）

大窯期の瀬戸美濃では、擂鉢を中心に、天目茶碗、丸皿が出土した。破片数も少ない。

天目茶碗（428）は藤澤良祐氏（藤澤1995a・2005）の瀬戸美濃大窯編年４期後半（16世紀末～17世紀初頭）、丸皿（429）は大窯１～２期（15世紀末～16世紀中頃）、擂鉢（430）は、大窯３か４期（16世紀後半～17世紀初頭）に位置づけられる。この他擂鉢の破片は20片強であり、多いとは言えない。

オ　初山（第83図，第14表，巻頭図版12，図版54）

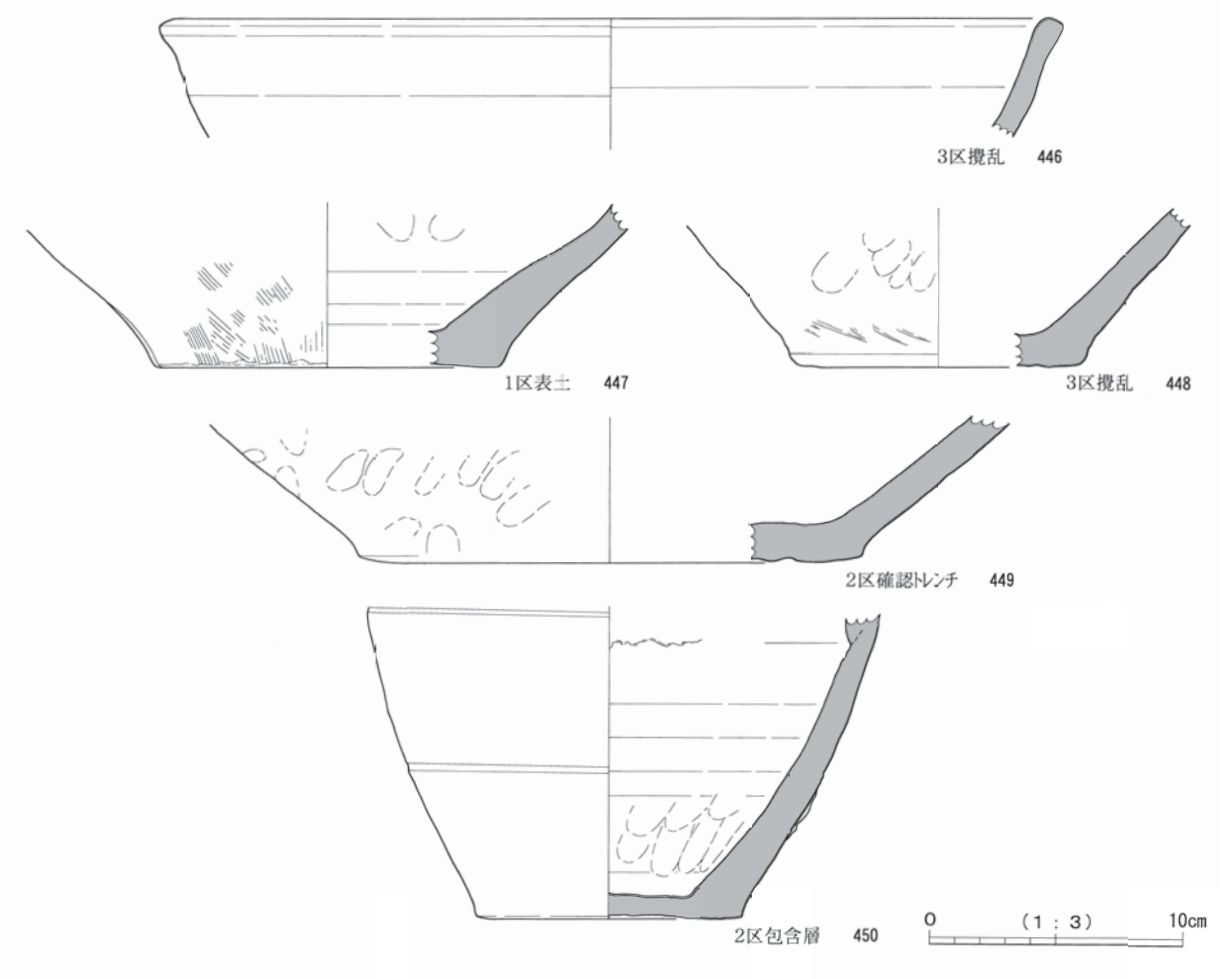
初山は、擂鉢（431）が出土した。これ以外に破片が確認できず、流通量は非常に少なかった可能性が高い。藤澤編年瀬戸美濃大窯３期後半（16世紀後半）併行期に位置づけられる（藤澤2005）。

カ　渥美（第84図，第14表，巻頭図版12，図版55・56）

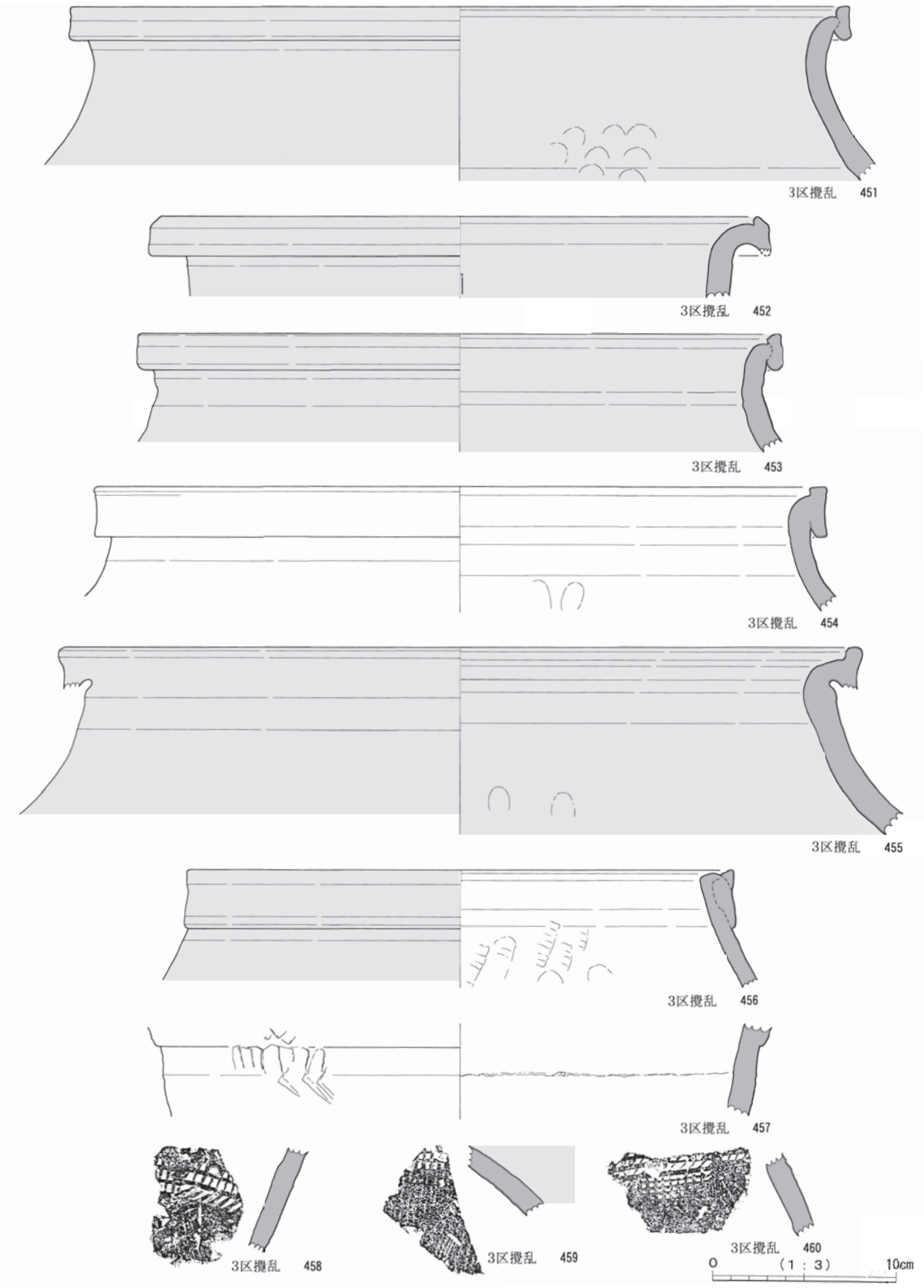
山茶碗と並行する時期に位置づけられる渥美は、鉢・片口鉢、壺、甕がある。

鉢・片口鉢（432～437）は高台がハ字形のもので、高いもの（433・434）と、やや低いもの（435・436）がある。437も鉢と想定するが、高台が低い。口縁部（432）は直線的に外上方へ伸び、口縁直下を強く撫でることでやや窪ませ、口縁端部を丸く収めるものである。いずれも12世紀前半～中頃に位置づけられる可能性が高い（中野1995）。

壺は３点（438～440）図示した。440は口縁部を欠損するが、頸部以下は残存する。底部は平底で、外上方に立ち上がった後、急激に内傾し、肩部をつくり、頸部は直線的に立ち上がる。肩部には、山茶碗底部（396）に書かれた墨書と同様に記号が線刻される。形態的特徴から12世紀後半に位置づけられる可能性が高い。438・439は形態的にみると壺の可能性が高いが、渥美では高台付の壺は少ないようで



第85図　遺構外出土常滑実測図①



第86図　遺構外出土常滑実測図②

あり、鉢の可能性も残る。時期を特定することは難しい。

甕は胴部の破片が多く出土している。タタキがあるもののいくつかを図示する（442～445）とともに、肩部から胴部の破片を図示した。肩は頸部から水平に近い状態で開いている。おおむね12世紀後半頃に位置づけられる可能性が高い（中野1995）。

キ　常滑（第85・86図，第14表，巻頭図版12，図版55～57）

常滑は、甕の破片がやや多く（コンテナ１箱）出土しているが、口縁部の数からすると個体数はそれほど多くなかった可能性が高い。甕のほか、鉢と壺がある。

鉢は１点（446）図示した。口縁部は外上方に向かってやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は外形する面をもつ。時期を特定するのは難しく、12世紀中頃～13世紀中頃に位置づけられる可能性が高い（中野1995）。常滑としたが、渥美窯産の可能性もある。

甕は、底部片（447～449）、口縁部片（451～456）、胴部片（457～460）を図示した。底部は平底で、外上方へ逆ハ字形に立ち上がるもので、外面はヘラ削り調整などが行われている。口縁部片は、口縁部がN字状のものであり、外側の小尾上部部分が小さいもの（451～453）と、広いもの（454・455）がある。いずれもが中野編年常滑６a型式（中野2005）を前後する時期（13世紀後半）に位置づけられる可能性が高い。456は口縁部を折り返して帯状にしたものである。中野編年常滑10型式（15世紀後半～16世紀初頭）に位置づけられる可能性が高い（中野2005）。457は頸部片である。458～460は帯状に巡らされた押印文が施されている。

壺（450）は平底で、胴部はやや外上方へ向かって立ち上がるもので、沈線が一条ずつ２本施されている。この沈線の特徴から、常滑３型式（12世紀後半）を前後する時期に位置づけられる可能性が高い（中野2005）。

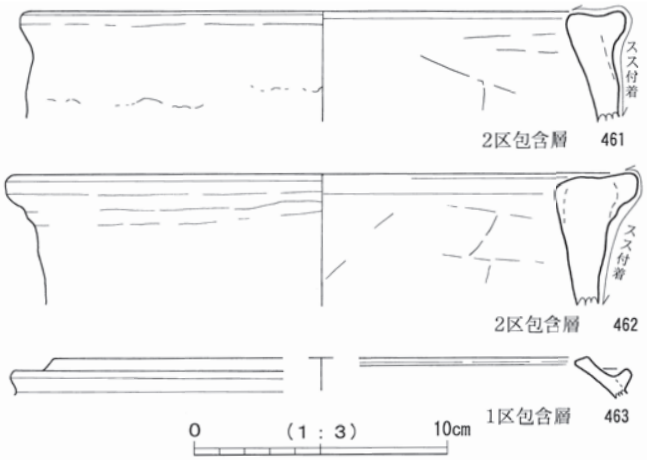
ク　土師質甕・鍋（第87図，第14表，図版58）

土師質鍋では、清郷甕、内耳鍋（羽釜）が出土している。

清郷甕　本来は前章で記載すべきものであるが、当初中世の鍋と考え配置し、報告書作成にあたり再度確認したところ、平安時代後期の清郷甕であることが判明したため、ここで記載する。

461は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を外側に向かって折り返し、口唇部には浅い窪み（凹線）をつくり段状にしている。462は直立して立ち上がり、口縁端部をＬ字形に折り返している。このような形態的特徴から、灰釉陶器東山72（H-72）号窯式併行期（10世紀中頃）ごろに位置づけることができる。

内耳鍋（鍔付内耳鍋，羽釜）　羽釜（463）は１点図示した。内湾形の羽釜で、口縁部は内傾する面をもつ。口縁部小片のため時期を特定することは困難であるが、14～15世紀ごろに位置づけられる可能性が高い。

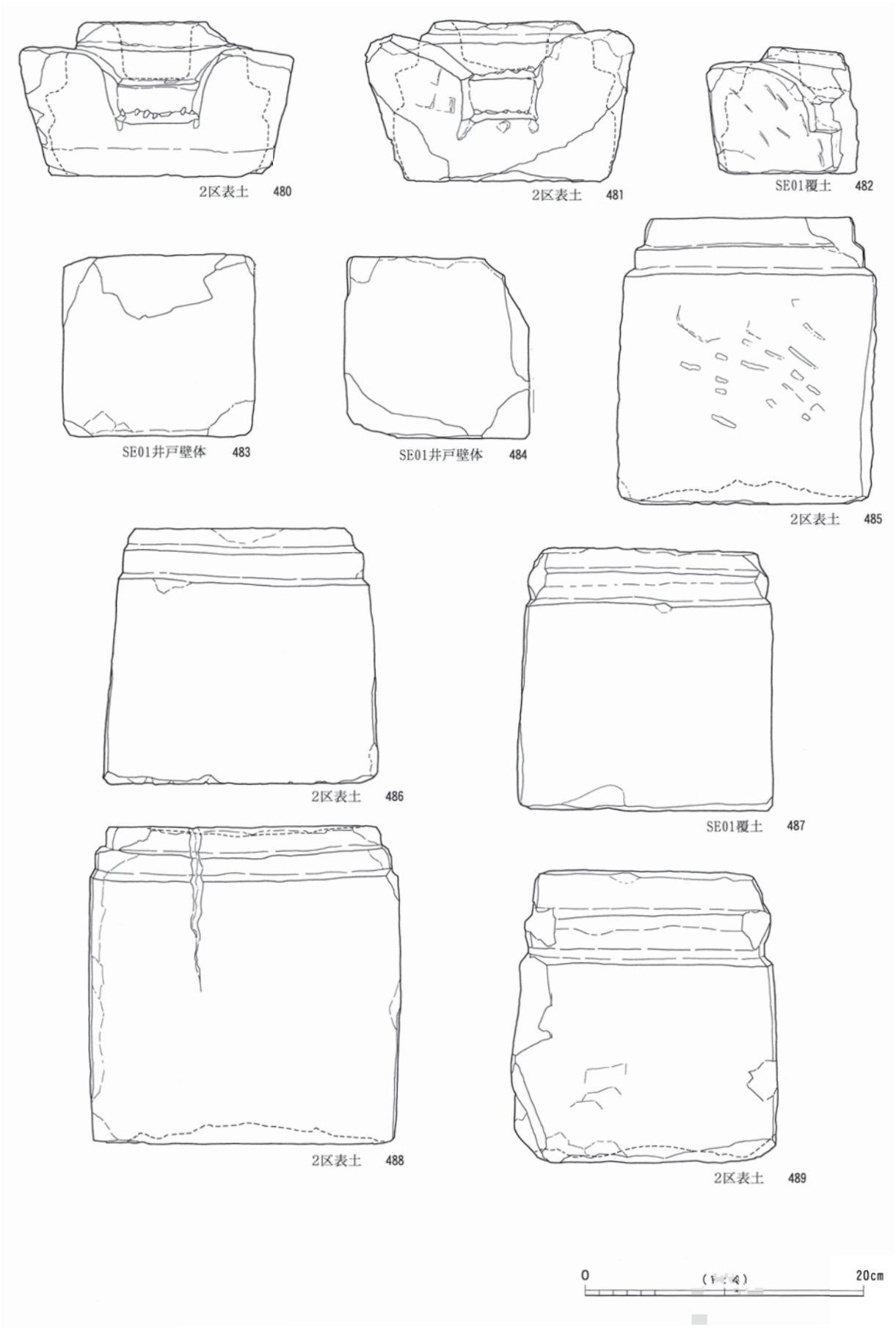


第87図　遺構外出土土師質甕・鍋実測図

（２）五輪塔・宝篋印塔（第88～90図，第19表，巻頭図版14，図版59～62）

五輪塔・宝篋印塔は、黄褐色を呈する砂岩で製作されており、森町周辺で採取される森（天宮）砂岩である可能性が高い。いずれも原位置を留めておらず、井戸などに利用されていることから、江戸時代以降の再利用に伴って、移動・破壊されたものと推測できる。

第88図　遺構外出土石塔実測図①



第89図　遺構外出土石塔実測図②

一石五輪塔　五輪塔は一石五輪塔（464～479）が出土した。完形に近いものは２点（464・465）のみで、それ以外は欠損している。

五輪塔は、細長い直方体の石材を加工して「空・風・火・水・地」輪を造り出すものであり、森町で確認される多くの一石五輪塔と同様の造りを示している（足立2008）。

ほぼ同じような作りであるが、464～466のように各段の境をやや深く掘り込み各構成部位を明瞭に表現するものと、467・476・475のように掘り込みが浅くなるものが確認できる。前者は16世紀前半、後者は16世紀中頃～後半に位置づけられる可能性が高い。なかでも466が「火」の屋根部分が高いこと、彫込みが深いことから、最も遡る可能性がある。森町域で一石五輪塔が多用される（足立2008）16世紀代に位置づけられることから、森町域の一石五輪塔使用の歴史的脈絡の中で造営されたことが明らかである。

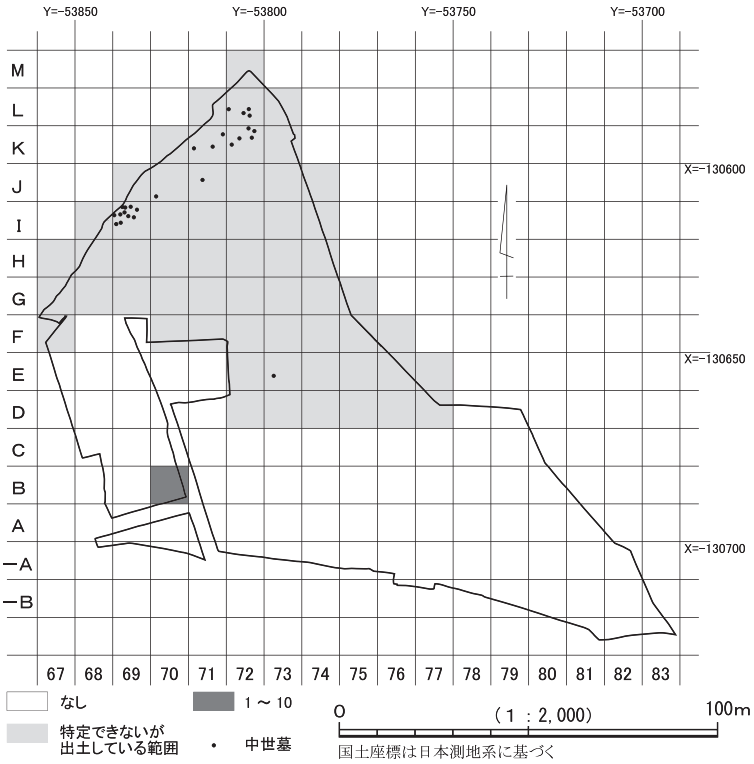
464・465はほぼ完形品で、464は全長33.4cm以上、幅13.8cm、465は全長29.9cm以上、幅12.2mで、464・465は全長最大幅に対する全長の割合は約１：2.4、と１：2.5であり、ほぼ同一であり、同一規格に基づいて切り出された石材を加工していた可能性が高いことがわかる。466は水輪の一部と地輪を欠損、火輪以下が欠損しているもの（467）、風・火輪が残存するもの（468・472）、火・水・地輪が残存するもの（470・474～476）、水・地輪が残存するもの（469・471・473）、地輪のみ残存するもの（477～479）である。

宝篋印塔　宝篋印塔（480～489）は、すべて部位の破片であり、完形品にはならない。屋蓋、塔身、基台のみが出土しており、相輪、反花座は出土していない。

480～482が屋蓋（笠）である。軒上は３段で、最上段は無文で、隅飾りとの境界はあいまいである。各段の段差も少ない。隅飾りの比率が大きく、隅飾間は狭い。隅飾りは素文である。軒下は段ではなく斜めに加工して表現するもの（480）と軒下が失われたもの（481・482）がある。上部には臍穴が抉られている。表面には加工の際の工具痕が残存する。483・484が塔身である。ほぼ正方体に加工されている。485～489が基台（基礎）である。いずれも２段で、段は低く、各段の差は少なく、不明瞭になる部分もみられる。

宝篋印塔については、掛川市峯遺跡、菊川市三光寺跡裏（桃崎2000）などで出土した宝篋印塔の形状と類似しており、16世紀後半を前後する時期に位置づけられる可能性が高い。なかでも485は出土した基礎の中では各段の差が明瞭に削り出されていることから、16世紀前半まで遡る可能性がある。

五輪塔・宝篋印塔と中世墓　第６章にて詳述するが、おおむね石塔の出土位置と中世墓の位置が一致しており、さらに時期的にも16世紀代に位置づけられることから、一石五輪塔や宝篋印塔は本来中世墓に伴う供養塔であった可能性が極めて高い。



第90図　中世墓と石塔出土遺物の関係